玉名市文化財調査報告 第 45 集

# 木 船 西 遺 跡 Ⅱ

一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2020
玉名市教育委員会

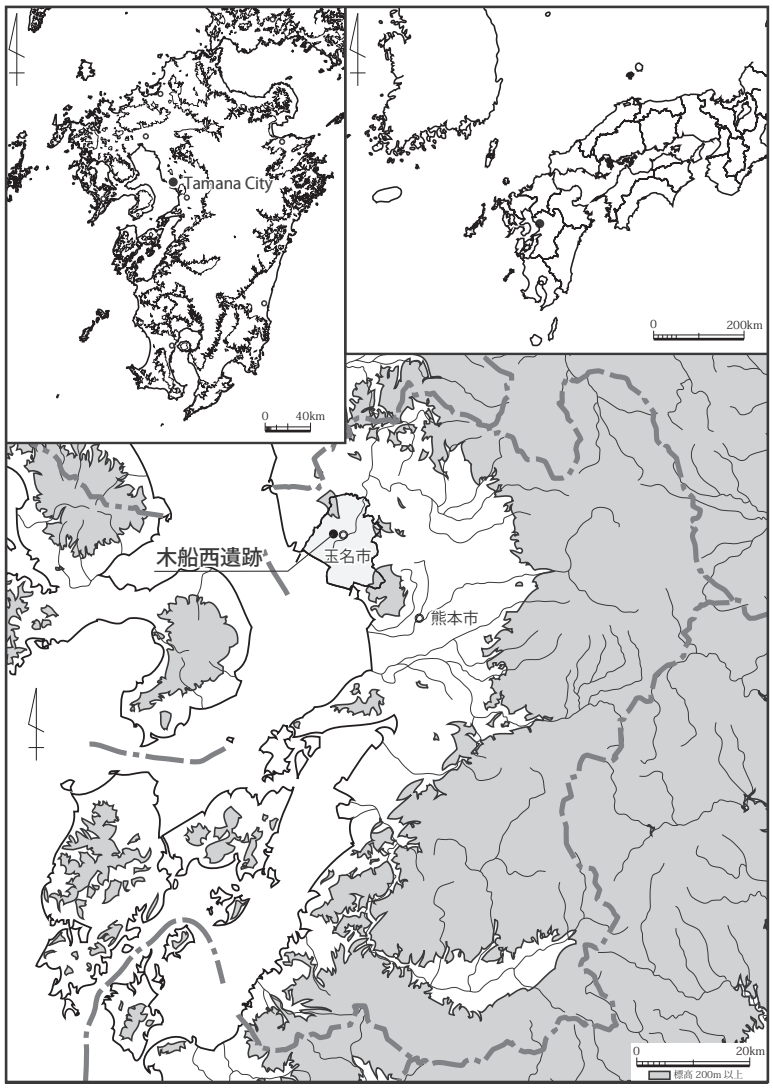
木船西遺跡Ⅱ

玉名市文化財調査報告 四十五集 二〇二〇
玉名市教育委員会

玉名市文化財調査報告　第 45 集

# 木船西遺跡 Ⅱ

## 一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査




令和２（2020）年２月
玉 名 市 教 育 委 員 会

# 刊行のことば

玉名市は、旧石器時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、豊富な文化財が所在する地域です。九州新幹線の開業後、県北部における政治経済産業・教育文化・観光の中心都市としてさらなる発展を続けています。

このような中、玉名市教育委員会では、さまざまな開発事業との調整を図り、発掘調査等の円滑な遂行に努めております。公共及び民間のさまざまな事業に対応するため、常に玉名市内に所在する文化財の状況把握に取り組み、文化財行政の改善・充実に努力しているところであります。また、その成果の公開・活用を通じて、広く教育・文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、市道岱明玉名線道路改良工事に伴い、玉名市教育委員会が平成 29 年度に実施した、木船西遺跡Ⅳ区の発掘調査報告書です。

本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、また、学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査、報告書作成にあたって各方面で多くの方々にご指導、ご助力を賜ったことに厚くお礼申し上げます。

令和２年２月２８日

玉名市教育委員会
教育長　池田　誠一

# 例　言

1. 本書は、熊本県玉名市岱明町野口・下前原に所在する木船西遺跡Ⅳ区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴い玉名市建設部建設課からの受託事業として玉名市教育委員会教育部文化課が実施した。
3. 発掘調査は、宇田員将、古森政次が担当した。
4. 発掘調査前の基準点・水準点測量は株式会社 有明測量開発社 に業務委託した。
5. 空中写真撮影は、九州航空株式会社に業務委託した。
6. 発掘調査時の実測図作成は、現場作業員の協力のもと宇田、古森が行った。
7. 発掘調査時の写真撮影は、宇田が行った。
8. 遺物の整理及び報告書作成作業は、平成 30 年度・平成 31 年度に実施した
9. 遺物実測は菊池直樹、古森政次、尾崎延枝、五野冨美子、佃　智子、福島和江が行った。
10. 遺構図の製図は、宇田、古森、菊池が行った。
11. 遺物実測図の製図は宇田、古森、菊池が行った。
12. 遺物の写真撮影は宇田が行った。
13. 挿図に使用している座標値は、世界測地系の第 2 座標系に基づいており、方位は座標北を示す。
14. 土層及び遺物の色調は、「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社発行）に基づいている。
15. 本書の執筆は、宇田（第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅴ章）古森（第Ⅳ章第 1 節、附編）菊池（第Ⅱ章、第Ⅳ章 第 2 節）が行い、編集は、宇田が行った。
16. 出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。

# 凡　例

1. 遺跡の略号は、木船西（KBN）とした。
2. 現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。
   【遺構実測図】1/20
   【遺物出土状況図】1/10 又は 1/20
3. 出土遺物の実測は、1/1 で作成した。
4. 本書掲載の際の縮尺は図内のスケールで示している。写真図版に関してはおおよその縮尺を下記の通り合わせて掲載している。土器は約 1/2、瓦は約 1/3（図版 35 はほぼ実寸）、石器は約 3/4（図版 45 は約 1/2）
5. 本書に記している座標値は、平面直角座標系Ⅱを基準とした数値であり、方位北は座標北を示す。
6. 本書に記している遺構記号 SD は溝、SK は土坑を意味する。

# 本文目次

刊行のことば
本文目次・挿図目次・表目次・写真目次
第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の組織…… 2
第Ⅱ章　遺跡の概要
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 4
第Ⅲ章　調査の方法
　第１節　調査の方法…… 10
　第２節　整理作業の方法…… 10
第Ⅳ章　調査の成果
　第１節　遺跡の周辺環境の変遷…… 11
　第２節　遺構と遺物…… 22
第Ⅴ章　調査の総括
　第１節　はじめに…… 66
　第２節　弥生時代の木船西遺跡…… 66
　第３節　中近世の木船西遺跡…… 68
附編　木船西遺跡第Ⅳ区出土の弥生時代石器群について…… 72
遺物観察表
写真図版・報告書抄録・奥付

# 挿図目次


第１図　周辺主要遺跡位置図 (S=1/10000)… 8
第２図　土層図作成位置図…… 13
第３図　調査区西壁土層図（土層図 A･B) … 15
第４図　調査区西壁土層図（土層図 C･D) … 16
第５図　調査区西壁土層図（土層図 E)…… 17
第６図　調査区西壁土層図（土層図 F)…… 18
第７図　調査区東壁土層図…… 19
第８図　調査区南壁土層図…… 20
第９図　遺構配置図…… 23
第 10 図　SD01 実測図（S=1/40) …… 24
第 11 図　SD01 出土遺物実測図 …… 24
第 12 図　SK08 実測図（S=1/40) …… 25
第 13 図　SK08 出土遺物実測図 …… 26
第 14 図　SK11 実測図（S=1/40) …… 27
第 15 図　SK11 出土遺物実測図１ …… 27
第 16 図　SK11 出土遺物実測図２…… 28
第 17 図　SK26 実測図（S=1/40) …… 29
第 18 図　SK26 出土遺物実測図 …… 30
第 19 図　SD27 実測図（S=1/40) …… 31
第 20 図　SD27 出土遺物実測図１ …… 32
第 21 図　SD27 出土遺物実測図２ …… 33
第 22 図　SD27 出土遺物実測図３ …… 34
第 23 図　SD27 出土遺物実測図４ …… 35
第 24 図　SD27 出土遺物実測図５ …… 36
第 25 図　SD27 出土遺物実測図６ …… 37
第 26 図　SD27 出土遺物実測図７ …… 38
第 27 図　SD27 出土遺物実測図８ …… 39
第 28 図　SD27 出土遺物実測図９ …… 40
第 29 図　SD27 出土遺物実測図 10…… 41
第 30 図　SK29 実測図（S=1/40) …… 42
第 31 図　SK29 出土遺物実測図１ …… 43
第 32 図　SK29 出土遺物実測図２ …… 44
第 33 図　SK29 出土遺物実測図３ …… 45
第 34 図　SK29 出土遺物実測図４ …… 46
第 35 図　SK29 出土遺物実測図５ …… 47
第 36 図　SK29 出土遺物実測図６ …… 48
第 37 図　SK29 出土遺物実測図７ …… 49
第 38 図　E8 トレンチ出土遺物実測図１ …… 50
第 39 図　E8 トレンチ出土遺物実測図２ …… 51
第 40 図　E8 トレンチ出土遺物実測図３ …… 52
第 41 図　E8 トレンチ出土遺物実測図４ …… 53
第 42 図　調査区北側道路状
遺構周辺平面図（S=1/120) …… 54
第 43 図　道路状遺構土層断面図（S=1/40) … 55
第 44 図　SD32 土層断面図（S=1/40) …… 55
第 45 図　SD10･SD32 出土遺物実測図 …… 55
第 46 図　SK12 出土遺物実測図１ …… 56
第 47 図　SK12 出土遺物実測図２ …… 57
第 48 図　SK33 実測図（S=1/40）…… 58
第 49 図　E8 炭化物層出土遺物実測図１ …… 59
第 50 図　E8 炭化物層出土遺物実測図２ …… 60
第 51 図　E8 炭化物層出土遺物実測図３ …… 61
第 52 図　E8 炭化物層下面出土遺物実測図 … 62
第 53 図　E8･E9 包含層出土遺物実測図…… 63
第 54 図　包含層出土遺物実測図…… 64
第 55 図　SK34･SK35 馬骨出土状況実測図 … 65
第 56 図　木船西遺跡弥生時代後期遺構配置図 67
第 57 図　木船西遺跡 SD32 流路と溜池復元図 69

# 図版目次


図版 1　木船西遺跡上空からみた有明海と雲仙
木船西遺跡上空からみた玉名市街地と
玉名平野
図版 2　木船西遺跡上空からみた菊池川と金峰山
木船西遺跡上空からみた玉名市街地と
小岱山
図版 3　木船西遺跡Ⅳ区全景
木船西遺跡全景（Ⅰ区～Ⅳ区）
図版 4　SD01 遺物出土状況（東から）
SD01 完掘状況（南東から）
図版 5　SK08 遺物出土状況・土層断面（北東から）
SK08 完掘状況（北から）
図版 6　SK11 土層断面（北から）
SK11 遺物出土状況（南東から）
図版 7　SK11 遺物出土状況　近景（東から）
SK13 土層断面（西から）
図版 8　SK26 土層断面（南東から）
SK26 遺物出土状況（南東から）
図版 9　SK26 完掘状況（南東から）
SD27･SK29 遺物出土状況（南西から）
図版 10　SD27･SK29 遺物出土状況（北東から）
SD27 完掘状況（東から）
図版 11　SK29 遺物出土状況（東から）
SK29 完掘状況（東から）
図版 12　SD32 土層断面（南から）
SD32 完掘状況（北西から）
図版 13　SK29、SD32、SK33 完掘状況（南から）
SK33 完掘状況（東から）
図版 14　石垣検出状況（南東から）
石垣検出状況（南西から）
図版 15　調査区北側道路状遺構検出状況（北西から）
調査区北側道路状
遺構断ち割り断面（北西から）
図版 16　調査区南側粘土抜き取り
土坑完掘状況（北から）
C5･D5･6 グリッド検出
道路状遺構検出状況（南から）
図版 17　SD01 出土遺物
図版 18　SK08 出土遺物
図版 19　SK11 出土遺物 ･SK26 出土遺物 1
図版 20　SK26 出土遺物 2･SD27 出土遺物 1
図版 21　SD27 出土遺物 2
図版 22　SD27 出土遺物 3
図版 23　SD27 出土遺物 4
図版 24　SD27 出土遺物 5
図版 25　SD27 出土遺物 6
図版 26　SD27 出土遺物 7
図版 27　SD27 出土遺物 8
図版 28　SD27 出土遺物 9
図版 29　SD27 出土遺物 10
図版 30　SD27 出土遺物 11
図版 31　SK29 出土遺物 1
図版 32　SK29 出土遺物 2
図版 33　SK29 出土遺物 3
図版 34　SK29 出土遺物 4
図版 35　SK29 出土遺物 5
図版 36　E8 トレンチ 出土遺物 1
図版 37　E8 トレンチ出土遺物 2
図版 38　E8 トレンチ出土遺物 3
図版 39　E8 トレンチ出土遺物 4
E8 炭化物層下出土遺物 1
図版 40　E8 炭化物層下出土遺物 2
図版 41　SD10 出土遺物 ･SD32 出土遺物・
SK12 出土遺物
図版 42　SK12 出土遺物・炭化物層出土遺物 1
図版 43　炭化物層出土遺物 2･ 包含層出土遺物
図版 44　SK11 出土遺物（石器）･SK26 出土遺物（石器）･SD27 出土遺物（石器）1
図版 45　SK29 出土遺物（石器）
図版 46　SD27 出土遺物（石器）1･SK12 出土遺物（石器）・包含層出土遺物（石器）1
図版 47　包含層出土遺物（石器）2
図版 48　木船西遺跡Ⅳ区出土窯焼成関連遺物
SK35 出土馬骨

# 表目次

第１表　木船西遺跡周辺遺跡一覧…… 9
第２表　木船西遺跡Ⅰ・Ⅲ区出土
剥片石器組成表…… 79
第３表　木船西遺跡Ⅳ区土器観察表　…… 80
第４表　木船西遺跡Ⅳ区土製品観察表　…… 85
第５表　木船西遺跡Ⅳ区瓦観察表　…… 86
第６表　木船西遺跡Ⅳ区石器観察表　…… 87

# 第Ⅰ章　調査の概要

## 第１節　調査に至る経緯

【事業計画の概要】

現在、玉名市には国道 501 号と県道長洲玉名線を経て、国道 208 号を南北に結ぶ幹線道路がなく、長洲港、名石浜工業団地、九州新幹線新玉名駅及び九州自動車道菊水インターチェンジ等の主要な交通結節点とのアクセスが容易ではなかった。当該の道路を整備することにより、主要な交通の結節点を結ぶ道路として、また物流及び交流の活性化に寄与するものとして、一級市道岱明玉名線道路改良事業が計画された。

【埋蔵文化財保護部局への照会・調整】

平成 17 年 10 月 21 日、市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて、玉名市土木課、岱明総合支所建設課及び文化課との間で第 1 回目の協議が行われた。協議では、計画路線が周知の埋蔵文化財包蔵地（大原遺跡、木船西遺跡、塚原遺跡）にかかっている事が確認され、今後のスケジュールについて、用地購入後に確認調査を実施することとした。文化課からは、本調査が必要となった場合については、確認調査の結果次第ではあるが、新幹線新玉名駅周辺整備に伴う発掘調査と予定が重なるため、対応が困難であることが説明された。また、一般的な事業の進め方及び調査費用についての説明を行い、今後も双方連絡を取り合いながら、事業を進めていくことを確認した。確認調査については、新幹線新玉名駅周辺整備に伴う埋蔵文化財発掘調査及びそれに伴う整理作業及び報告書作成、並びに市町村合併に伴う市指定文化財の見直し業務等があり、直ちに実施できなかった。その後、平成 20 年度から 21 年度と平成 29 年度に確認調査を実施し、木船西遺跡をⅠ区からⅣ区にわけて本調査を行うこととなった。

【木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区調査】

平成 20 年度から平成 21 年度にわたる確認調査の結果を踏まえ木船西遺跡Ⅰ区（平成 23 年 10 月から平成 24 年 3 月まで）、Ⅱ区（平成 24 年 4 月から 5 月まで）、Ⅲ区（平成 24 年 6 月から 10 月まで）の調査が実施された。木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区では弥生時代中期の竪穴建物跡が 3 基、土坑が 30 基、弥生時代後期の竪穴建物跡 52 基、土坑 1 基、方形溝遺構 1 基、中世の祭祀遺構 1 基、時期不明の竪穴建物跡 2 基、土坑 36 基、溝状遺構 2 基を検出している。遺跡の主体は弥生時代後期であり、遺構は木船西遺跡Ⅰ区に集中している。

弥生時代中期の遺構で特徴的なのは床面直上で石鏃（未製品含む）や剥片が多量に検出された円形竪穴建物Ⅰ区 S68 である。このⅠ区 S68 は出土状況から石器製作の工房として利用されていたと考えられている。

弥生時代後期では 52 基ものベッド状遺構を伴う竪穴建物が重複して検出されている。中でも焼土や炭化材が検出され、焼失竪穴建物と考えられるⅠ区 S65、埋土内から破鏡が出土したⅠ区 S42、同じく埋土内からガラス小玉が出土したⅠ区 S05、S22、S28、S34、S62、Ⅱ区 S09 などが特徴的である。埋土中から出土した破鏡やガラス小玉は竪穴建物を廃絶する際の祭祀の可能性が考えられる。その他にも竪穴建物からは斧、鎌、刀子及びヤリガンナなどの鉄器も多く出土しており、その数は 49 点にのぼる。注目すべきは鉄器に関しては鏃が少なく農工具類が多く出土しているのに対し石器では鏃が多く出土している点である。これは用途によって素材を選別し作成していたと考えられるが、この点に関しては石製農工具から鉄製農工具への移行と考える見方もある。また鉄器類の出土に呼応するように砂岩製の砥石類も一定量出土している。その他、Ⅰ区 S46 からは石製勾玉が出土しており、ガラス小玉や破鏡と同様に当時の交易や技術伝播を考える上で重要な資料となっている。

中世の遺構は、土坑内に土師器皿を置き土師器羽釜を被せた状態で検出されたⅢ区 S15 である。状況から地鎮的な祭祀遺構と考えられるが、S15 周辺には中世期の建物跡などはなく、この遺構の性格に関しては不明となっている。

そのほか、Ⅰ区 S68 と同様に調査区全体の範囲で包含層からも多くの未製品の石器や剥片が出土している。時期は明確ではないが、少なくともⅠ区 S68 の時期である弥生時代中期から継続して石器製作が木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区を含む周辺で行われていたと考えられる。

【木船西遺跡Ⅳ区確認調査（平成 29 年 2 月実施分）】

平成 29 年 2 月に実施された確認調査では北側に 3 本、南側に 4 本の計 7 本のトレンチを設定した。木船西遺跡Ⅲ区に隣接する北側範囲に設定した 1 トレンチでは表土から 0.3m ほど下にコンクリート基礎が埋設され、その直下には石垣も埋没していた。また、コンクリート基礎から更に 1 m下では土坑状の遺構などを検出した。2 トレンチも同様に表土から 0.3m 下でコンクリート基礎、そこから 1 m 下で土坑状の遺構を検出した。遺構時期は出土した遺物から弥生時代中期から後期と考えられた。南側範囲に設定された 5 トレンチでは表土から 0.8m 下で水路状の遺構とその水路を切る状態で土坑状の遺構などが確認された。遺物はほとんど見られず時期は不明であった。以上の結果からこの確認調査範囲では木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区に関連する遺構が埋没している可能性があり、本調査が必要であると判断された。

## 第 2 節　調査の組織

平成 29 年度

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 玉名市教育委員会 | |
| 調査責任 | 教育長 | 池田誠一 |
| 調査総括 | 教育部長 | 戸嵜孝司 |
| | 文化課長 | 竹田宏司 |
| 庶務担当 | 文化財係長 | 田中康雄 |
| | 主査 | 中村安宏 |
| 調査担当 | 技術主任 | 宇田員将 |
| | 埋蔵文化財調査員 | 古森政次 |

発掘作業員

荒木征子　荒木康利　石松智子　今田徳克　大島武士　北島百合子　古藤文彦　志水博子
谷口洋介　谷畑信行　田畑芳郎　徳永周三　徳山尚登　前川直美　南本勝則　三宅和昭
宮崎宏紀　柳田一衛

整理作業員

樫木裕子　北島百合子　前川直美

平成 30 年度

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 玉名市教育委員会 | |
| 調査責任 | 教育長 | 池田誠一 |
| 調査総括 | 教育部長 | 戸嵜孝司 |
| | 文化課長 | 松田智文 |
| 庶務担当 | 文化財係長 | 田中康雄 |
| | 主査 | 中村安宏 |
| 整理担当 | 主査 | 菊池直樹 |

整理作業員

尾崎延枝　五野冨美子　坂﨑郷子　佃　智子　福島和江

平成 31 年度 (2019 年度)

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 玉名市教育委員会 | |
| 調査責任 | 教育長 | 池田誠一 |
| 調査総括 | 教育部長 | 西村則義 |
| | 文化課長 | 松田智文 |
| 庶務担当 | 文化課長補佐 | 田中康雄 |
| | 主査 | 中村安宏 |
| 整理担当 | 主査 | 菊池直樹 |
| | 技術主任 | 宇田員将 |

# 第Ⅱ章　遺跡の概要

## 第１節　地理的環境

玉名市は、熊本県の北部に位置する面積 152 平方キロメートル、人口約６万７千人の地方都市である。市域は熊本県北部を有明海に向かって流れる菊池川下流域を占め、九州最大の内湾である有明海中央部に面している。市域中央部を流れる菊池川は、南に向かって貫流し、その周辺には、菊池川とその支流の繁根木川、木葉川によって形成された玉名平野が広がる。平野の三方を山地・丘陵地等に囲まれ、平野と接する丘陵末端部に多くの集落が形成されている。特に小岱山地・丘陵地及びこれに続く段丘の発達する台地である玉名台地上に市街地が発達している。平野の前縁部は、江戸時代以降から現代にいたる広大な干拓地が広がり、有明海と接している。

玉名平野は菊池川流域の下流部の標高 10m 以下にあって、東西 9km、南北 15km の広がりを持つ沖積平野である。その大部分が水田等の耕作地として利用されている。玉名平野の周辺の台地、丘陵や山地は段丘堆積物、阿蘇Ⅳ火砕流堆積物、新第三紀火山岩、白亜紀の玉名花崗岩類からなる。

玉名平野の北西部は筒ヶ岳（標高 501m）を主峰とする小岱山地・丘陵地及びこれに続く段丘の発達する台地がみられる。また、北部では繁根木川をはさんで小岱山地に面した臼間山地と接している。

小岱山地と臼間山地には、中生代白亜紀の玉名花崗岩が分布するが、両山地は花崗岩が風化することによりなだらかな山容を呈する。この花崗岩体はチタン鉄鉱系の花崗岩であり、その砂鉄は古代から中世にかけてのタタラ製鉄に使用されている。また、花崗岩も古墳の石材や石積用の石材として利用されている。

玉名平野東部は、木葉川を境として北に広がり国見山（標高 383m　山鹿市鹿央町）を主峰とする国見山山地の丘陵及びその南端部に位置する木葉山（標高 286m）と接している。国見山、木葉山一帯は中生代の木葉川変成岩類からなっており、木葉川変成岩類は、主に石英片岩や雲母片岩からなり、一部に石灰岩の分布もみられる。片岩類は小代山地の花崗岩に比べ風化に強いため急峻な山容をなし、弥生時代に石包丁や石戈などの石器に利用されている。

玉名平野南部から南東部にかけては、金峰火山群の熊野岳（二ノ岳　標高 685m）、三ノ岳（標高 681m）を主峰とする金峰山地とこれに続く丘陵地帯に接している。金峰山系の凝灰角礫岩の岩質は、輝石安山岩である（角閃石安山岩）。

この凝灰角礫岩を火砕流堆積物が覆うように堆積している（火砕流堆積物が上位に重なる）。噴出時期は金峰山系が新第三紀鮮新世で、これを覆う火砕流が第四紀である。また、周辺の遺跡では、阿蘇の火砕流の中で最も大規模噴火であった阿蘇Ⅳ火砕流の溶結凝灰岩や金峰山系輝石安山岩（角閃石安山岩）はしばしば石材として使用されている。

玉名平野は山地に囲まれるが、これらの地質構造的背景は北側から東側と南側では大きく異なる。北側から東側にかけては筑肥山地の南縁にあたり、三畳紀からジュラ紀にかけて変成をうけた周防変成岩類やそれに白亜紀に貫入した花崗岩といった基盤岩類が分布し、その周辺に第四紀の段丘が発達する。一方で、南側は新生代後期の金峰山火山に伴う崩壊堆積物や安山岩などが分布しており、溺れ谷が発達する。

菊池川より西側の山地は古い基盤岩類が露出して山塊をなしており、周囲に段丘が発達することから地盤が隆起傾向にあることが窺えるが、一方、南側の山地は基盤岩類は露出しておらず、新しい火山岩類が分布し、段丘は沖積層下に没している上に溺れ谷が発達することから地盤が沈降傾向にあることがわかる。金峰山といったマグマの噴出も地殻の伸延の場であることを示し、重力異常も菊池川の西側と東側で負の異常を示し、地殻が薄く、沈降地帯であることを示す。このように玉名平野は氷期の浸食谷を沖積層が充填しただけでなく、構造的に沈降する堆積盆地としての側面も持ち合わせている。

阿蘇Ⅳ火砕流堆積物は、ほぼ全域に点在してみられるが、南側は沖積層に没している部分も多く、地表における分布は北から東側にかけてであり、主に谷間を充填するように分布する。石材としての利用は北側の菊池川右岸の露出地が主である。

玉名平野は菊池川流域の沖積平野であるが、玉名市高瀬付近に狭窄部をもち、これを境に上流側の谷底平野の自然堤防帯と下流側の三角州平野に二分される。現在の標高は 4.8 ～ 6.0m 程度である。

長岡ほか（1997）は沖積層を層相（堆積層もしくは岩相）により、基底礫層、砂層より構成される下部層、粘土・シルトより構成される中部層、砂層より構成される上部層に分類している。中部層までは海進期の主に海成の堆積物であり、上部層は海退期に形成された三角州の堆積物である。沖積層の研究から明らかにされる玉名平野域の環境変遷は以下の通りである。

縄文海進により高瀬の狭窄部の南側は、最終氷期の開析谷から開放的な浅海へと変化したとみられる。この時に、境川から繁根木あたりの開析谷の出口に浜堤砂州が溺れ谷を塞ぐように形成されている。尾崎貝塚はこの浜堤砂州に立地する。高瀬の狭窄部の北側の谷底平野は湖～低湿地となり、縄文時代後期まで潮汐により海水の影響を受ける水域であったとみられる。マガキなどの干潟の貝類は高瀬の狭窄部より上流側には分布しなかったとみられる。

縄文中期以降、断続的な海退と小規模な海進が繰り返し起こった。縄文中期以降の海退で内湾が潮汐干潟となることにより貝塚が当時の海岸線であった台地周辺に形成された。また、海退期には菊池川デルタが前進し海域の埋め立てが進むだけでなく、有明海に流出した砂礫は潮流により滑石の浜堤砂州の形成を促したとみられる。この砂州は玉名平野にあった海域を閉鎖し、ラグーンを形成したとみられる。滑石の浜堤砂州は大きく２時期に形成されている。岱明沖の沖洲、竈頭洲も有明海の潮流により形成された砂州である。横島島と滑石の浜堤砂州により閉鎖された海域は、縄文晩期から弥生時代にかけての弥生の小海退時に菊池川河道周辺は埋め立てられて潮汐干潟から氾濫原へ変化し、河道から離れた台地縁辺（大野牟田域と尾田川流域）には海跡湖が残された。

弥生の小海退時に形成された埋積浅谷は、縄文晩期から弥生前期の水田がつくられる地形であったが、その後の弥生時代中期以降の小規模な海面上昇により埋められる。柳町遺跡で弥生時代早期の土器が出土している自然流路があるが、これらの自然流路も小海退に伴う埋積浅谷の可能性がある。弥生時代中期、古墳時代、奈良～平安のいわゆる“中世の温暖期”にそれぞれ海水準の上昇があり、低湿な地域ではこれらの影響を受けて地形や環境が変化する。

弥生時代から古代にかけては台地や微高地付近の低地や谷が水田として開拓されたとみられるが、古代から中世にかけては高瀬狭窄部北側の谷底平野の開拓が始まり玉名牟田、梅林牟田に姿を変える。また近世初期にかけてかつての海跡湖周辺の干拓が行われた（大野牟田、尾田牟田）。江戸時代の人口増加に伴い山間部の伐採と開発が拡大するが、土砂流出の増大に伴い有明海へ向って菊池川デルタがさらに前進し、潮汐干潟が有明海側に拡大した。アサリが増えてくるのもこの時期である。この潮汐干潟を近世後期から近代にかけて大規模干拓し、現在の広大な玉名の臨海農業地帯が形成された。

## 第２節　歴史的環境

塚原遺跡周辺には縄文時代から中世にかけての遺跡が濃密に分布しているが、その大半は踏査による分布調査により確認されたものでその内容が明確に把握されているものは少ない。

木船西遺跡周辺は弥生時代の遺跡の集中地帯であり、今回の岱明玉名線に伴う埋蔵文化財調査により大原遺跡、木船西遺跡、塚原遺跡の調査により新たに情報が追加されつつある。以下に周辺の遺跡について時代ごとに記述するとともに歴史的環境について述べる。

本地域に人類の活動の痕跡がみられ始めるのは旧石器時代である。岱明町域の玉名台地は、９万年前に噴出した阿蘇Ⅳ火砕流堆積物を被覆する岱明層から構成される中位段丘である。本地域はAT火山灰層もみられ、旧石器時代の人類の活動を記録している可能性が高い。木船西遺跡北方の南大門遺跡では枝去木型の台形様石器が後世の遺構埋土より出土している。さらにサヌカイト製ナイフ形石器が備中原遺跡から表面採集されている。他にも今泉遺跡、年の神遺跡でそれぞれ、ナイフ形石器が発見されている。現状としては表採、包含層資料であり、今後層序的な調査によって資料が追加されることが望まれる。

縄文時代の遺物としては塚原遺跡周辺の黒色土層や黒褐色土層より縄文時代早期の押型文土器片が少ないながら得られおり、岱明町大野下の目倉尾遺跡からも押型文土器が出土している。また、海底遺跡として知られる長洲町のヒイデン洲遺跡からも押型文土器が多く知られており、押型文土器が隆盛する約8000年前頃の海水面は、現在よりも約15mほど低かったとみられ、菊池川流域は台地とそれを開析する谷からなる地形であったとみられる。菊池川流域は縄文海進が最高潮

となる前期以前にも人が生活する場であったことがうかがえる。

縄文前期には縄文海進により最終氷期の開析谷に海が浸入し、溺れ谷・内湾と化した。海進最高位を記録する約 6000 年前の海水面は、現在よりも３～５ｍほど高かったとみられる。その後、徐々に海退が進み内湾は潮汐干潟と化した。このような環境変化に伴い、台地東端部に尾崎貝塚（第１図 468）、浜田貝塚、庄司貝塚、古閑原貝塚といった貝塚が形成された。これらの貝塚は、縄文中期後半から末の阿高式土器の時期に形成されている。浜田貝塚については調査が無く詳細な時期は不明である。これらの貝塚は組成的には多様な貝類が出土するが、量的な比率をみるとマガキが占有しており、主要な利用貝類はマガキとみられ、その他の貝類は補助的な利用、そして混獲によりもたらされたとみられる。この中でも岱明町の古閑原貝塚では 1948 年の玉名高校考古学部の調査により阿高式土器に伴って炭化米が確認されている。近年、阿高式土器の時期にイネが存在したことを示す事実が確認されてきている。この他に、西松手遺跡（古閑遺跡・包蔵地）から、縄文土器、石器などが出土している。中西土・山下西遺跡では後期・晩期の土器が確認されている。玉名条里跡・下河原地区では、縄文時代の土器が早期から晩期までみられ、境川流域の低地周辺において縄文時代を通して生活拠点が存続していたことを示している。

縄文晩期から弥生時代前期にかけては小海退が起こり、沖積低地が開析され、谷ができた。その後の海進によりこれらの谷は埋積され、埋没浅谷として地層中に記録されている。弥生時代はじめは早期の夜臼式土器と前期の板付式に特徴づけられ、水田稲作の痕跡が明確に確認できる時期である。柳町遺跡からは、水田は確認されていないが板付式と夜臼式土器が自然流路より出土しており、菊池川流域でも稲作が開始された可能性が高い。前期の遺跡としては、県下初の弥生前期貝塚発掘例となった、岱明町山下の中道遺跡がある。県立玉名高校考古学部によって、昭和 27 年に調査が行われた。遺跡は台地縁の畑地内にあり、崖面に貝層が露出していた。貝はカキ殻を中心に獣骨・魚骨などの動物遺存体、土器、石器類などとともに、炭化米が数十粒採取された。玉名条里跡・下河原地区では、弥生前期の土器が確認されており、境川の低地部でも弥生人の活動があったことがわかる。

玉名市域内で弥生遺跡が増大するのは、弥生中期頃からである。熊本県唯一の弥生水田は両迫間日渡遺跡から確認されている。岱明地域における当該期の遺跡としては、年の神貝塚（中期）、年の神西平貝塚（中～後期）などが知られている。年の神遺跡にはゴホウラ製貝輪が出土した支石墓もあり、海上交易の中継地であり、拠点集落であったとみられている。塚原遺跡は岱明町野口塚原に所在し、環濠・円形の大型竪穴建物跡・甕棺墓などが確認されており、木船西遺跡でも弥生中期初頭の住居・土坑が確認されている。東南大門遺跡では、甕棺墓が 42 基確認されており、弥生中期から本格的に集落が展開し始めたことがうかがえる。

弥生時代後期の遺跡としては、塚原遺跡、木船西遺跡、大原遺跡があり、ともに集落として存続しており、豊富な鉄製品に加え、大原遺跡では青銅鏡、玉類などの祭祀に係る遺物の出土もみられ、別地点においては、箱式石棺群や大型の木棺墓も確認されている。岱明地域における拠点集落の様相を見せている。

木船西遺跡の西に隣接する下前原遺跡においては、弥生時代後期の集落跡が確認されており、境川東岸の台地上では高岡原遺跡が知られる。

弥生時代後期の集落は主に台地上に展開していたが、布留式土器を伴う古墳時代前期の集落は柳町遺跡の様に沖積低地部にも展開し始める。一方で、台地上に展開した拠点集落は終焉を迎え、集落の再編がみられる。

岱明地域では古墳時代初頭まで大原遺跡が存続するが、これらの大集落は古墳時代前期を前に途絶する。一方で塚原遺跡１区と山下木佐貫遺跡から布留式土器を伴う古墳時代前期の集落跡が確認されており、台地南縁に集落がつくられていた。東南大門遺跡では周溝墓（主体部木棺墓２基）が知られ、布留式併行期の墳墓であろう。

古墳時代前期後半になると玉名地域においても前方後円墳が構築されるようになる。開田の院塚古墳（滅失）は県北の初期に出現した前方後円墳である。続いて５世紀にかけて玉名台地南縁の海岸部に前方後円墳とされる籐光寺古墳が構築されている。塚原遺跡では石棺系石室を主体部とする円墳が確認されており、５世紀代には古墳構築が盛んになったとみられ古墳時代後期にかけて、弁財天古墳、その他にも塚原古墳、浜田吹上古墳、浜田西原古墳参考地が構築された。こ

れらの多くは発掘調査が行われておらず、その内容は明確でない。なお、平成 28 年度に開発行為に伴い実施した籐光寺古墳における確認調査では、周溝の一部と考えられる溝を確認している。古墳時代後半は、古墳はみられるものの集落跡は現在のところ不明である。境川流域では蓮華遺跡から 6 世紀後半の集落が確認され、境川対岸の高岡原遺跡では 7 世紀前半の住居跡が検出されている。7 世紀後半からは境川東側の玉名台地上に立願寺、郡家、郡倉などが設置され古代前半における拠点となっていく。

岱明地域における古代期の遺物の出土は認められるが、明確な遺構は非常に少ない。白鳳から奈良時代にかけては近隣の四十九遺跡からは須恵器の骨蔵器が出土し、蓮華遺跡からは重弧文軒平瓦が出土している。築地には郡衙に係る遺構が存在した可能性がある。平安時代にかけては、不馬向遺跡の住居跡からは青磁皿等が、籏布遺跡からも青磁碗、土師器などが出土しており、貿易陶磁がもたらされる地域であったとみられる。

岱明地域一帯は、律令制のもと成立した玉名郡の一部にあたるが、11 世紀初頭に玉名郡は東郷と西郷に分割されたと考えられており、その後、さらにいくつかの荘園に再編されることになる。当該地一帯は玉名西郷にあたり、その後、筥崎八幡宮領の「大野別符」となる。

中世期においては、当該地一帯には、多くの城館跡、寺院跡、石造物等が所在するが、これらは当該地の地頭職であった大野氏一族の影響によるものと考えられる。大野氏は「大野別符」を成立させたとされる紀氏の流れを汲む在地勢力とされ、一帯を支配した。一族は玉名台地一帯に居館を築いて居住しており、築地次郎国秀館跡、中土屋敷跡、陣館跡などが知られる。非常時の詰め城として日嶽城が築かれている。

また境川右岸の台地上には真言律宗の寺院である浄光寺があり、九州でも有数の大寺院であり、広大な寺域を誇っていた。蓮華遺跡では青磁碗を副葬した土坑墓や区画溝等も確認され寺域との関連も考えられる。今見堂遺跡でも青磁碗を副葬した土坑墓が知られている。

台地上の塚原遺跡の遺物包含層からは古代以前の遺物に加え 13 世紀の貿易陶磁等の中世前期の遺物も多い。また、13 世紀頃の区画溝遺構が戦前までの農地地割と一致することも多く、13 世紀代に玉名台地上で開拓が広く行われたとみられる。また、塚原遺跡では中世の大溝が 16 世紀後半に廃絶されており、戦国時代にも農地の整理等が行われた可能性がある。

大野氏は、隣接する野原荘（現荒尾市一帯）の地頭職であった小代氏と対立するようになり、16 世紀末に滅亡することとなる。大野氏の滅亡後、龍造寺氏と島津氏との争乱の場となり、多くの寺社等が消失した。一時は九州の大半を切り取った島津氏は豊臣氏の九州征伐により肥後から撤退し、佐々氏、その後、加藤氏が入国し、近世を迎える。

近世を迎えると岱明地域は台地上だけでなく、低湿地、そして三角州頂置部の干潟まで開拓が行われるようになる。広大な農地の整備と共に溜池や用水路、そして低湿地の排水路が整備され、大きく景観が変化したと考えられる。この変化は近代まで継続する。

加藤氏は菊池川下流域の高海面時に潮の影響を受ける低湿地帯を塘によって潮止めし、水路を掘削して排水を行うことにより牟田を乾田化し、広大な農地を生み出した。岱明地域の菊池川右岸の水田地帯は大野牟田と呼ばれ、加藤氏の時代に低湿な土地から広大な農耕地へと生まれ変わった。中世後半から干拓は始まっていたが大きく進めたのは加藤氏であるとみられる。

江戸時代には細川氏が入国する。肥後は手永制がとられ、藩の許可を取って自力で干拓や水路整備等を行っている。江戸時代初期の干拓は低湿地等の干拓で留まっていたが、19 世紀に入ると三角州頂置部の干潟まで開拓が行われるようになり、一気に広大な農地が整備された。そのため用水が不足することとなり、溜池、用水の整備が行われるようになる。岱明地域の干拓は主に手永により四郷開などの干拓が行われ、小岱山山麓の谷に浮田池などの溜池の建設が行われ、加えて、菊池川に井堰を設置して菊池川から取水することにより用水が供給されるようになった。岱明地域の干拓は大正年間まで続く。

明治時代になると大きな変化としては鉄道の敷設があげられる。玉名台地を西に流れ下る行末川流域の谷は活断層に伴う谷地形であり、直線的であるため鉄道敷設に適しており明治 24 年に九州鉄道の路線が敷設された。鉄道の敷設に伴い路線の盛り土そして分断された水路を地下化する暗渠の設置などが路線沿いの各地で行われている。近代にも干拓地の開拓は継続し、大地主が中心となって行っている。

昭和 6 年から始まったアジア・太平洋戦争（15 年戦争）により、軍需に伴う経済成長により各地に軍需工場や軍事施設の整備が進む。玉名地域では大浜地区に陸軍空港が建設され、戦局が悪化し始めると空襲からの鹿児島本線防衛のために高射砲陣地等も構築され、各地に防空壕が掘削される。また、戦争末期の空襲激化に伴い、玉名地域にも航空機部品の疎開工場が展開されるようになる。そのうち、航空機のギア類を製造していた玉名製作所は玉名市街地からその後、岱明町下前原へと移転し、木船西遺跡Ⅳ区にその遺構を残している。

敗戦後はアメリカ合衆国のアジア進出が顕著となり、日本では米軍によるアジア地域における大規模な戦争に伴う特需に起因した高度経済成長が始まり、全国的に大規模な開発事業に伴う土地の造成が行われるようになる。

開発は工業地帯とそのベッドタウンの開発、そして治水のための河川改修、さらに海岸線の改修と港湾整備である。岱明地域はこの流れの中で国によって新産業都市開発地域に指定され、優先的な予算配分により工場の誘致、ベッドタウンの造成などが行われた。これらの開発行為は近世以来の景観を多く変え、現代的な景観をつくりだしたが、中世～近代にかけての土地開発の中でも残された上代の文化財の危機の到来でもあった。工場の誘致に伴い、県北の前期古墳としては最大の院塚古墳が滅失し、鹿児島本線の複線化のためによる土採り工事や団地等の造成などの開発行為により多数の埋蔵文化財が失われることとなった。この中で県内の先達の偉人により発掘調査が行われ、記録の中で残されている。近年では文化財部局により、記録保存により失われる文化財の発掘調査が行われている。

昭和後期から平成にかけて住宅地の開発と道路や新幹線などの交通網の整備へと開発の中心が移り、現代的な都市として玉名市域が整備されていく。特に 208 号玉名バイパスの建設は玉名台地の市街地化を後押しし、九州新幹線整備は、玉名平野の新玉名駅周辺整備の始まりである。これらの開発行為は現在も進行し、現代的な都市景観の創出が行われる中で、中世以来の伝統的な田園景観との調和が求められ、日本遺産の構成文化財として指定されるに至っている。

本調査報告は有明海の湾岸ルートと玉名市市街地とのアクセスルートとしての岱明玉名線建設事業の一環であるが、高度成長期から続いてきた巨大開発とそれに伴う遺跡の記録保存の流れの中の事業である。少子化の中で新たな時代を迎える未来の地域社会において本報告の記録が役立つ時代が訪れることを願う。

参考文献

『熊本県遺跡地図』1998　熊本県教育委員会
『玉名市史 通史篇 上巻・下巻』 2005　玉名市
『岱明町史』2005　岱明町
末永　崇　2002 『今見堂遺跡・平町遺跡・蓮華遺跡』
玉名市文化財調査報告 第 10 集　玉名市教育委員会
兵谷有利ほか　2011『玉名市遺跡地図』玉名市文化財調査報告第 26 集　玉名市教育委員会
門岡　久　1969『明治百年記念　岱明町地方史』 岱明町役場
長岡信治ほか　1997 「有明海南東岸玉名平野の地形発達史と完新世海面変化」
『地理学評論』Ser.A 70 巻 5 号
荒木隆宏　2010 「玉名平野の考古学」『歴史玉名』52 号　玉名歴史研究会
荒木隆宏　2011 「玉名の海と貝塚」『歴史玉名』55 号　玉名歴史研究会

第１図　周辺主要遺跡位置図（S=1/10000）

| 遺跡番号 | 名称 | 種類 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 201 | ニシノヤマキタイセキグン<br>西ノ山北遺跡群 | 包蔵地 | 旧石器・<br>古代～近世 |
| 202 | ニシノヤマイセキグン<br>西ノ山遺跡群 | 包蔵地 | 旧石器・古代 |
| 203 | ニシノヤマコフングン<br>西ノ山古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 204 | ツイジイケノシタイセキ<br>築地池下遺跡 | 包蔵地 | 弥生～中世 |
| 205 | マエハタイセキ<br>前畑遺跡 | 包蔵地 | 弥生・古代 |
| 209 | ウサギマチイセキグン<br>兎町遺跡群 | 包蔵地 | 弥生 |
| 210 | シジュウクコフン<br>四十九古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 211 | ナギノイセキ<br>ナギノ遺跡 | 包蔵地 | 古代 |
| 212 | ツイジヤカタアト<br>築地館跡 | 城館 | 古墳・中世 |
| 213 | コガイセキ<br>古閑遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |
| 214 | エンコウジ<br>円光寺 | 寺社 | 近世・近代 |
| 215 | ナンダイモンイセキグン<br>南大門遺跡群 | 包蔵地 | 弥生・古代・中世 |
| 216 | ナンダイモンゴリントウグン<br>南大門五輪塔群 | 石造物 | 中世 |
| 217 | ツイジオトミヤジンジャ<br>築地乙宮神社 | 寺社 | 近世・近代 |
| 218 | カンパクトウ<br>関白塔 | 石造物 | 中世 |
| 219 | ショウジコセンシュツドチ<br>小路古銭出土地 | 包蔵地 | 近世・近代 |
| 220 | ジョウコウジレンゲインアト<br>浄光寺蓮華院跡 | 寺社 | 中世 |
| 221 | ミョウショウニジアト<br>妙性尼寺跡 | 寺社 | 中世 |
| 223 | ヤマダジンジャモンゼンイセキグン<br>山田神社門前遺跡群 | 包蔵地 | 弥生～古代 |
| 234 | ヤマダサンキッショウジアト<br>山田山吉祥寺跡 | 寺社 | 中世 |
| 239 | カミババコフン<br>上馬場古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 245 | ニシダシセキボ<br>西田支石墓 | 墳墓 | 弥生 |
| 273 | ナカオカワハライセキ<br>中尾川原遺跡 | 生産 | 古代 |
| 422 | ツカハラコフン<br>塚原古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 423 | ニブツアンアト<br>二仏庵跡 | 寺社 | 中世 |
| 427 | シモマエバルニシイセキ<br>下前原西遺跡 | 包蔵地 | 古墳 |
| 428 | ジョウコウジアト<br>浄幸寺跡 | 寺社 | 中世 |
| 429 | トシノカミイセキ<br>年の神遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |
| 430 | ツイジジロウクニヒデヤカタアト<br>築地次郎国秀館跡 | 城館 | 中世 |

| 遺跡番号 | 名称 | 種類 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 431 | マエハラソウインノハカ<br>前原宗因の墓 | 墓 | 中世 |
| 432 | ヒラマチイセキ<br>平町遺跡 | 包蔵地 | 古代 |
| 433 | ジョウコウジナンダイモンアト<br>浄光寺南大門跡 | 寺社 | 古代 |
| 434 | ヒガシナンダイモンイセキ<br>東南大門遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |
| 458 | ヒガシハライセキ<br>東原遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |
| 459 | イマミドウイセキ<br>今見堂遺跡 | 包蔵地 | 中世 |
| 460 | オオハライセキ<br>大原遺跡 | 包蔵地 | 弥生～中世 |
| **461** | **キブネニシイセキ<br>木船西遺跡** | **包蔵地** | **弥生** |
| 462 | キブネイセキ<br>木船遺跡 | 包蔵地 | 古墳 |
| 463 | キブネゴリントウ<br>木船五輪塔 | 石造物 | 中世 |
| 464 | モリサキナオジロウフジワラサダタカノハカ<br>森崎直次郎藤原定孝の墓 | 墓 | 中世 |
| 465 | モリサキイセノカミサダナガノハカ<br>森崎伊勢守貞長の墓 | 墓 | 中世 |
| 466 | キブネヒガシイセキ<br>木船東遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |
| 467 | ホバシラマイボツノヒ<br>檣埋没の碑 | 石造物 | 古代 |
| 468 | オザキカイヅカ<br>尾崎貝塚 | 貝塚 | 縄文 |
| 469 | オザキイセキ<br>尾崎遺跡 | 包蔵地 | 弥生～古墳 |
| 470 | ツカハライセキ<br>塚原遺跡 | 包蔵地 | 弥生 |

※ 周辺主要遺跡位置図と木船西遺跡周辺遺跡地図一覧の遺跡番号は『玉名市文化財報告第 26 集　玉名市遺跡地図』に掲載されているものと合わせている。

第 1 表　木船西遺跡周辺遺跡一覧

# 第Ⅲ章　調査の方法

## 第１節　調査の方法

【発掘区の設定】

発掘区は境界杭から１ｍ内側とした。発掘区面積の合計は約900㎡である。この発掘区全体を覆う範囲で10ｍ間隔のグリッドを設定し、南西隅（X＝－8220, Y＝－43680）から東に向かってＡからＦ、北に向かって１から９までそれれぞれ命名し、その組み合わせでグリッド名とした（B2グリッドなど）。ただし、Ａ列、１行のグリットは予定されていた発掘区から範囲が縮小したため遺構全体図などには反映されていない。なお、挿図に記載している座標値は、平面直角座標系Ⅱを基準とした数値であり、方位北は座標北を示す。

【表土の掘削】

確認調査の結果を参考にして、0.28 ㎥及び0.4 ㎥バックホウによる掘削を行った。掘削で生じた排土については、2t 及び4t ダンプトラックを使用して、発掘調査が完了し、埋め戻しが完了した木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区に設定した排土場に仮置きし、調査終了後にその排土で発掘区の埋め戻しを行った。

【包含層の掘削】

表土の掘削後、移植ゴテを使用して遺物の出土に注意を払いながら包含層の掘削を行った。出土した遺物は、随時、グリッド毎に取り上げた。

【遺構の検出】

包含層の掘削後、三角ホー、移植ゴテを使用して遺構検出面を複数回削り遺構検出を行った。遺構検出時に出土した遺物は随時グリッド毎に取り上げた。その際、包含層掘削時のものと区別するためラベル備考欄に遺構検出時とわかるよう明記した。

【遺構の掘削】

遺構の掘削はプランが明確なものに関しては、埋土観察用のベルトを残し（半裁の場合もある）、随時、埋土観察や写真撮影を行い掘り下げた。プランが明確でない遺構に関してはトレンチを設定し遺構の立ち上がりと埋没状況を確認し、プランを決定した。プランを決定した後はプランが明確な遺構と同様に掘削を行った。出土した遺物については、出土状況に意味がある場合は、そのまま残し、写真撮影及び出土状況の図面を作成した後取り上げたが、それ以外は出土した層位を確認し、ラベルに記入した上で取り上げ、その後、埋土の掘り下げを進めた。

【写真撮影】

通常35㎜モノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用した写真撮影に加えデジタルカメラによる撮影も行った。また重要と思われる遺構に関しては中判カメラ（6×7）でモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用し撮影を行っている。完掘後の空中写真撮影は、外部に委託し６×６サイズにてモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを使用して実機による撮影を行った。

## 第２節　整理作業の方法

【遺物実測】

包含層・遺構内それぞれ、時期的な特徴や遺跡の性格を決める可能性を示す遺物を完形・破片問わず抽出し、接合、石膏で隙間を補完した後、その中から実測するものを選別し、基本的に実寸で実測をおこなった。瓦など器面調整を明瞭にするために、拓本を採ったものもある。

【実測図のトレース】

遺構・遺物実測図はスキャナでデジタル化し、llustrator CC にてデジタルとレースを行った。石器に関しては、ロトリングペン・丸ペンでトレースを行った後でスキャナでデジタル化した。

【写真撮影】

遺物の写真撮影はグレーカード、スケールを入れデジタルカメラで撮影し、RAW データで保存した。保存した RAW データを現像する際、ホワイトバランスやスケールを補正し TIFF データで保存し、図版作成時に photoshop CC にて輪郭を切り取りレイアウトし図版を作成した。

# 第Ⅳ章　調査の成果

## 第 1 節　遺跡の周辺環境の変遷

【周辺の地形と調査区】

調査区は玉名台地上にあり、現在は平坦な土地となっている。これは、鹿児島本線大牟田熊本間の開業（明治 24 年）や現在「有限会社スカラベ九州」社屋のある区画が整地された結果であり、本来の地形とは異なることがわかった。

現在の地形は調査区北側がより高く、南にいくほど低くなるが、調査区の南端付近からはほとんど変わらず、鹿児島本線をまたいでから再び緩やかに低くなっていく。また東西方向では、調査区はほぼ水平であるが、しだいに西から東に緩斜面をなしている。つまり、馬の背の鞍部のような場所にあたる。

このような地形には二つの要因が関係している。ひとつは玉名台地が北から南に緩やかに傾斜していること。いま ひとつは東の境川水系と西の友田川水系からの開析谷が当地で出会おうとしていることである。このため、雨水により遺跡の表層部分が東西から浸食を受ける。その結果周辺より低地化することが想定される。第Ⅳ調査区は、特に西の友田川水系からの浸食が上回っているため、南に向けた斜面上に立地することになる。なお、台地の開析は、玉名台地の基盤となっている岱明層と呼ばれる砂礫粘土層まで及んでいる。

玉名市史によると、岱明層は地質時代第四紀更新世の後半にあたり、約 9 万年前とされる阿蘇火砕流堆積物（Aso-4）の上に堆積した数メートルの砂礫粘土層で、その上部は赤褐色ロームや黒色土が約 50 ～ 100cm 堆積するという。この黒色土の上層が約 1 万年前とされる完新世（沖積層）となっている。以下、詳しい土層堆積の状況を記述する。

【岱明層の堆積状況】

調査区の南北方向の堆積状況は調査区西壁で判断した。第 3 図は調査区南端部にあたる B･C3･4 グリッドの西壁の土層図である。土層図 A の 19 層と土層図 B の 10 層が岱明層である。玉名市史によれば、岱明層は灰黄褐色や黄褐色を見せる粘土層や砂礫層が交じり合った層とされる。土層図南端から約 10mの間、ほぼ水平な堆積状況が続く。この間は灰黄褐色の粘土層となっている。良質の粘土であり、後述するように、粘土採掘の痕跡が発見されている。土層図でも A の 15 ～ 18 層は岱明層と同色系の粘質土層であり、粘土採掘後に周囲の土が粘土と一緒に堆積した層と考えられる。

B4 グリッド土層図 B では岱明層は砂礫層に変わり、標高も次第に高くなる。そして、調査区中央部にあたる第 4 図上の土層図 C の SD01 付近で岱明層の上面は最も高い標高となる。その後、同じく調査区中央部にあたる第 4 図下の土層図 D、調査区東端部にあたる第 5 図の土層図 E･ 第 6 図の土層図 F での岱明層は北に行くにつれて次第に標高を減じ、調査区北端にあたる土層図 F では土層図 A の岱明層とほぼ同じ標高となる。

また、岱明層の東西方向の堆積状況は C･D5 グリッド南壁で判断できる。第 8 図に示した C･D5 グリッド南壁土層図では 33 層が岱明層である。C･D5･6 グリッドに造られた近代の道路状遺構および現代の石垣列によって掘削されてはいるものの、調査区西壁土層図 C で観察された最も標高の高い岱明層から東に向かって緩やかに傾斜し、南壁東端付近では東に向かって標高を高くする傾向が観察できた。

岱明層まで掘削が及んでいる遺構としては、先の道路状遺構や石垣列に加えて、D･E5･6･7･8 グリッドで南北に走る中世・近世の道路状遺構や E7･8･9 で道路状遺構に平行に掘られた同時期の溝（SD32）がある。これらの遺構は岱明層を掘削してはいるものの、本来の地形を改変するような大規模なものではない。それは北に隣接し、2010 年度に調査された木船西遺跡Ⅲ区で確認された岱明層（赤褐色ローム）と調査区中央部の土層図 C の岱明層（赤褐色ローム）との比高差が 50cm ほどであることからもわかる。南北方向と東西方向の岱明層の堆積状況から、今回の第Ⅳ調査区の本来の地形を復元することができそうである。

【岱明層の状況から想定される旧地形】

調査では、調査区全域を岱明層まで掘削し標高を計測した。それらをもとに岱明層上面の傾斜を見ると、C4･5 グリッドの西壁 ( 土層図 B･C) 近くを除き、全体として南方向へ傾斜している。すなわち、友田川水系の開析谷が今回の第Ⅳ調査区の南端で北方向に向きを変えていることが予

想される。したがって、C4･5 グリッドの一部は、友田川水系の開析谷を挟んだ西側の台地になり、第Ⅰ～Ⅲ調査区は東側の台地上に立地していることになる。つまり友田川水系の開析谷と境川水系の開析谷に挟まれて木船西遺跡の本体である第Ⅰ～Ⅲ調査区の住居跡群が存在している。また、今回の第Ⅳ調査区は友田川水系の開析谷の斜面から谷底の部分に当たっている。そして、これら２つの開析谷は、おそらくその谷頭に湧水地点があり、開析が進む原因となったであろう。

【岱明層堆積以後の堆積】

岱明層から現地表面までの堆積層を検討すると、大きく５つの層群に分けることができる。まず、これらのうち４つがわかりやすく理解できる C･D5 グリッド南壁（第８図）で検討する。

客土層群

土層１～３は、花崗岩が風化し、砂土と化した真砂（まさ）土層と黒褐色粘質土の塊が集積する層で、現地表面を形成しており、その中には阿蘇溶結凝灰岩片が混在している。これらの層は整地のため他地域から運ばれた客土と考えられ、有限会社スカラベ九州の社屋がある土地の造成に伴うものであろう。

グライ化層群

土層 19、20 に代表される灰黄褐色や黄灰色をした粘質土で、水分とともに鉄分を大量に沈着している。遠目には青色に見える。一般にはグライ土壌とも呼ばれ、水分が留まった場所に多く見られる土層である。C･D5･6 グリッドの道路状遺構内に顕著にみられることから、道路であるものの、その後水分が集まり、湿地と化したことを示している可能性が高い。

耕作土層群

土層 4、23、24、25、30、31 は褐色から暗褐色をした土層で砂利や石粒を多量に含んでおり、水はけがよい層である。これらの層は通常の耕作土とみられる。なお、24、25 のように固く締まり、水田の床土と思われる層もあり、水田にも利用されたことが考えられる。

岱明層類似層群

岱明層に類似した土層。【西壁での土層堆積】土層図 A 参照。

黒色土層群

土層 32 は黒褐色の粘質土である。下層の岱明層（赤褐色ローム）の石英粒を多く含む。玉名市史によれば、岱明層と上層の沖積層との境界に赤褐色ロームがあり、その上部に黒色土が堆積していることが知られている。C5 グリッドの調査区西壁土層図 C の土層 14 は黒褐色粘質土であり、この黒色土に近いものであろう。土層 32 は西から浸食された土が再堆積した層であり、黒色土が弥生時代の遺跡から土器とともに流され、再堆積したものと考えられる。

【西壁での土層堆積】

西壁は約 80m の長さがあるため、西から東へ A ～ F に分割し、それぞれの土層図を作成した。

土層図 A（B2･3･4 グリッド）

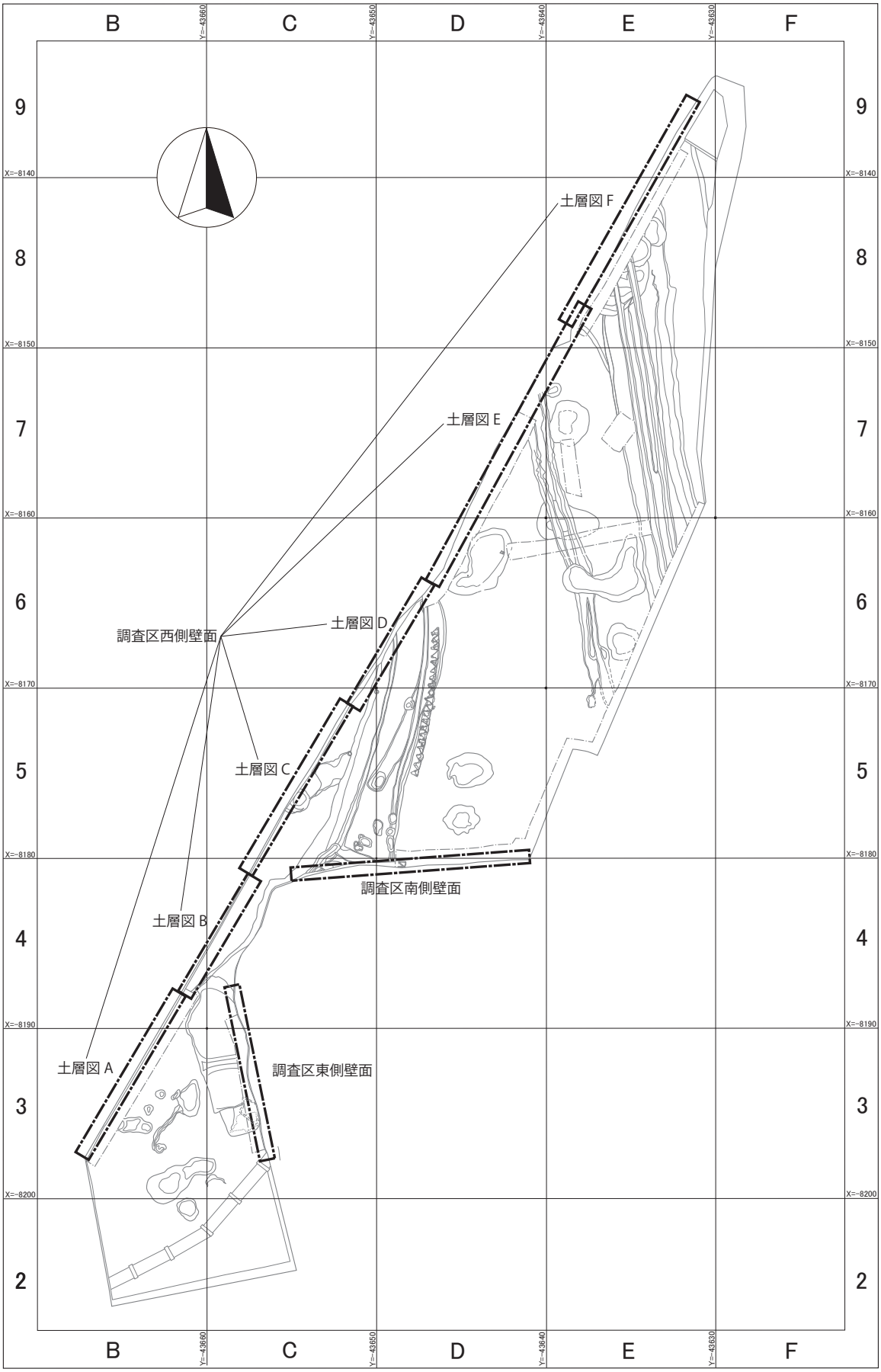
土層１～４および土層 9･10 は客土層群であり、整地層と考えられる。土層 9･10 は黒褐色粘質土を塊で多量に含んでいることから、明らかに整地層と考えてよい。ただ、現在の有限会社スカラベ九州の社屋が立地している土地造成に伴うものではなく、どのような原因かは不明であるが、それ以前に行われた整地と考えられる。

土層５～７と土層 11 ～ 12 はグライ化層群と考えられる。水分が多く灰黄褐色やにぶい黄褐色であり、鉄分が枝状に貫入するのが特徴である。土層５～７は客土層群の土層が堆積する以前の地表面であり、その形状はくぼ地であったことを物語っている。土層 11･12 は、整地層と考えられる土層 9･10 の下層に堆積し、水分が多いことから湿地であったことがわかる。

土層 13 ～ 18 は、この地点のみで観察できる層である。褐色や黄褐色の粘性の強い粘質土層であり、岱明層を人為的に一段掘り下げた部分に堆積している。後述するように、焼成用の粘土を採掘し、そのあとに堆積した粘質土と考えることができる。当然のこととして水分が強く、鉄分が沈着している。このように岱明層に類似した土層を岱明層類似層群としておく。

土層図 B（B2･3･4 グリッド）

土層１～３は客土層群の土層である。客土層群の土層は西側ほど厚く、この地点で薄くなっている。土層４は土層 図 B で唯一のグライ化層群の土層である。土層 5･7 は石粒や砂、土器片などを含む耕作土であり、耕作土層群の土層である。土層５は固く締まっており、水田の床土の




第２図　土層図作成位置図

可能性がある。土層 6･8 は黒褐色粘質土の塊を含んでおり、客土層群の一つと考えられる。土層図 A の土層 9･10 や土層図 B の土層 6、それに土層 8 の整地層は近代の陶磁器を出土している C･D5･6 グリッドで検出された道路状遺構より古いことが判明しており、近世あるいは近代の可能性がある。ただ、出土遺物がほとんど無いため、明確ではない。土層 9 は弥生土器片を含んでおり、弥生時代の遺構の埋土であろう。

土層図 C（B2･3･4 グリッド）

土層 1･2 は客土層群の土層である。土層 3･4 は耕作土層群に属する耕作土である。黒色系の色彩が強く、石粒や砂利とともに粘土粒や土器小片も含んでいる。土層 5･6 は柔らかい黒褐色土で粘土粒を含んでいる。土層 5 では弥生時代の土器小片も見られた。土層 5･6 は、通常遺物包含層と呼ばれる層で、遺跡の上を覆っていることが多い。耕作土のような固さがなく、遺跡からの土器片などを多く含んでいることが特徴である。ただ、これらの層は自然に堆積するものではなく、開発などによる土地の削平に伴うものと考えられる。したがって土層 5･6 は二次堆積土層と考え、黒色土層群の土層とする。

土層 7 ～ 13 は弥生時代の遺構 SD01 が埋まっていく過程で堆積した土層で遺構埋土である。また、土層 16 ～ 18 は、強風により倒された木が地層を巻き込み横転したため、地層が垂直方向に転位したものである。縄文時代の遺跡でよく検出される。土層 15 は明褐色粘質土で、石英粒をかなり含んだ層である。鉄分の沈着が見られることから岱明層が地表に現れ、水分の影響を受けた再堆積層で、岱明層類似層の土層と考えられる。土層 14 は黒褐色粘質土層で岱明層と間には不整合面は存在しない。おそらく玉名市史で指摘された岱明層上位の赤褐色ロームの上部である黒色土の一部と思われる。したがって、土層図 C では、土層 6 が形成される際に大きな開発行為があり、その後、耕作地に変わっていったことが予想される。

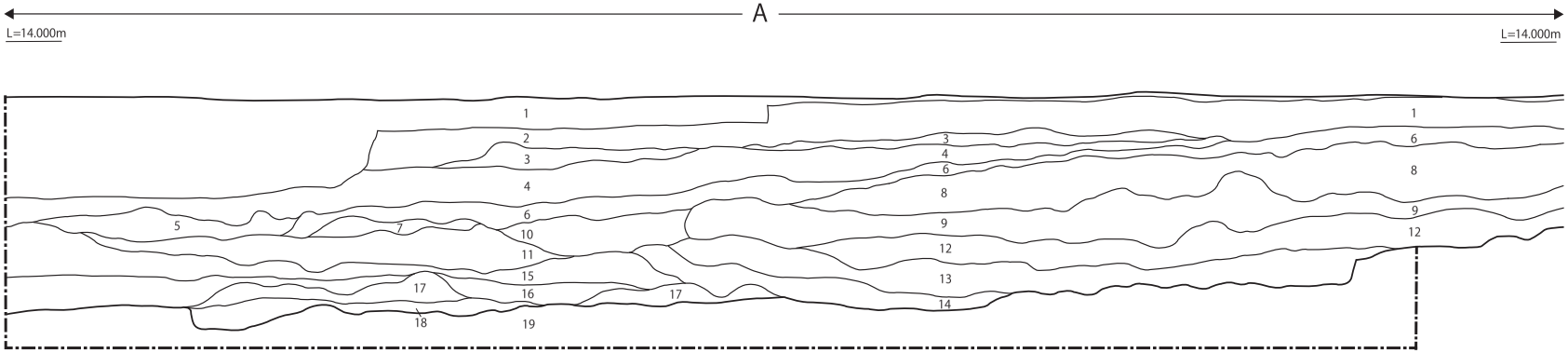
土層図 D（C･D6 グリッド）

土層図 D は、道路状遺構と石垣の土層堆積の様子を表している。道路状遺構は出土遺物から近代と思われる。また、土層観察の結果、石垣は道路状遺構が機能を無くし、埋まっていく過程で道路状遺構に沿い、その東端に築いているようだ。石垣は出土遺物から、おそらく太平洋戦争の後と考えられる。C･D5 グリッド南壁土層図の 5 ～ 13 までが石垣を築いた際の掘方とあと詰めの土層である。これに対応するのが C･D6 グリッド西壁土層図 D の土層 3 ～ 10 でこれらも石垣の掘方とあと詰めの土層である。両者は道路状遺構の東側に沿ってつながっている。つまり、道路状遺構の東側に石垣を築き、上面を畑として利用したようだ。

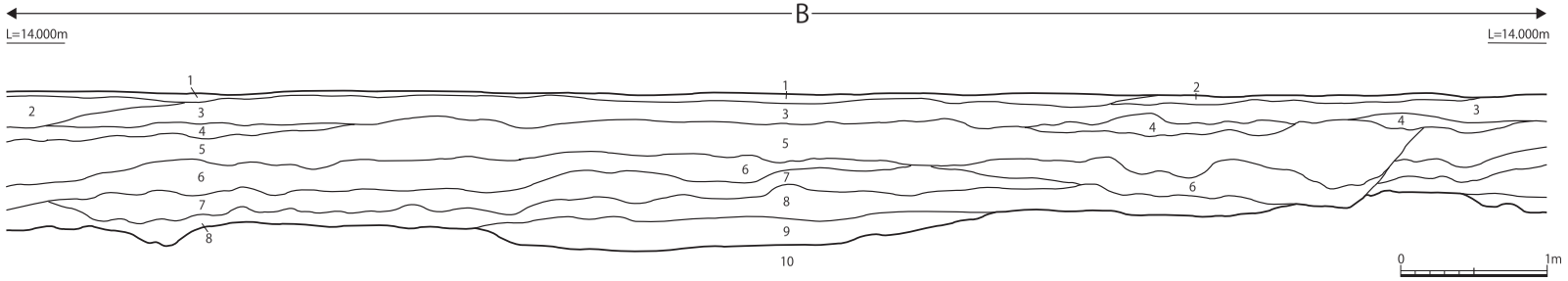
道路状遺構が埋まっていく際の土層は、南壁では土層 14 ～ 21、西壁では土層 11 ～ 17 である。なお、道路状遺構には側溝があり、西壁土層 18 がそれにあたる。

土層図 E（D6･7･8 グリッド）

土層図 E は、近代の道路状遺構の東端に築かれた石垣と E8 グリッド西壁に築かれた石垣の間の土層図である。その中には中世から近世の道路状遺構が存在する。道路状遺構の側溝と考えられる土層 11 及び土層 12 ～ 15 は岱明層から彫り込まれた溝に堆積したものである。したがって道路状遺構は岱明層を道路面としたことが予想される。岱明層は、最も標高の高い C5 グリッド西壁（土層図 C）からしだいに標高を低下させるが、この土層図 E の区間は、ほぼ水平な面となっており、前の予想を裏付けるものであろう。土層 1 ～ 3 は客土層群の土層である。土層 4 ～ 5･7 は鉄分を多量に含んだグライ化層群の土層である。土層 6 は石粒を多く含むことから耕作土層群の土層と思われる。土層 8 ～ 9 は、大量の鉄分が枝状に深く貫入した土層で、下層の岱明層とは明らかに不整合面を形づくっている。鉄分が大量に含まれることから水分の多い環境にあったことは明らかであるが、砂や石粒などがほとんどなく水田としての利用は考えづらい。先述したようにこの地点は中世から近世にかけての道路状遺構が見られ、その道路面は岱明層上面と考えられる。つまり、岱明層まで掘り下げて道路面としているようだ。土層 9 は粘質土であり、道路がその機能を無くした後、水で流され堆積したと考えてよいが、土層 8 はローム質であり、水に流されて堆積した層とは考えづらい。おそらく、土層 8 は整地層と考えられる。層が固く締まっていることから再度道路遺構として利用された可能性もある。この地点にグライ化層群の土層が多く、耕作土層群の土層が少ないのは本来水が集まりやすい地形のためであろう。

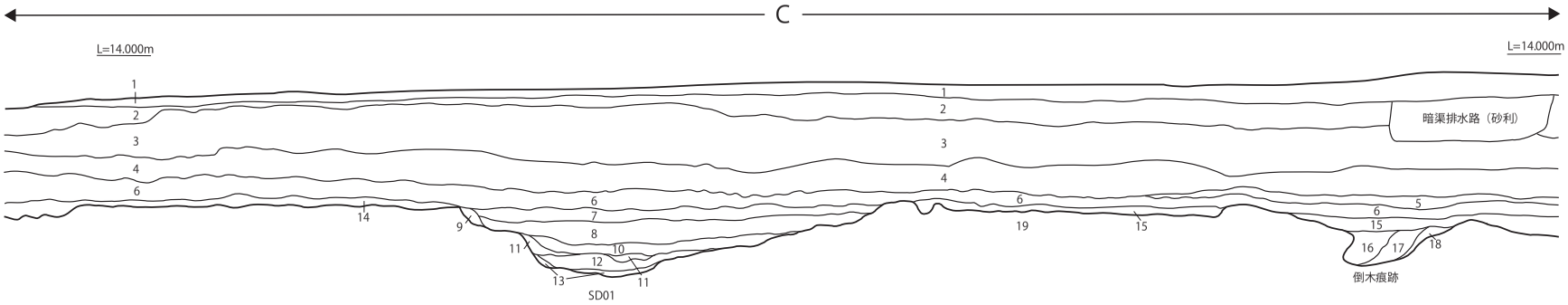



調査区西壁土層図Ａ（Ｂ－２・３・４）
1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ土、パラス混じり
2 暗褐色土 (10YR3/3) 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 拳大ブロックを含む→東壁②に類似
3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 1 ㎜大の石粒を多く含む。→東壁⑤に類似
4 暗褐色土 (10YR3/3) 黒褐色粘質土 (10YR3/2) と明褐色粘質土 (10YR5/6) のブロックが多く入る。→東壁③に類似
5 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) グライ化土壌 ( 鉄分が枝状に入る )
6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 鉄分が枝状に入る
7 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 1~5 ㎜大の石粒を多く含む。鉄分が枝状に入る。
8 暗褐色砂質土 (10YR3/4) 1~8 ㎜大の石粒を多く含む。固く締まる。
9 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 黒褐色粘質土 (10YR3/2) ブロックが見られる。鉄分が枝状に入る。
10 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 黒褐色粘質土 (10YR3/2) ブロックが見られる。
11 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 鉄分が枝状に入る。
12 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 鉄分を斑点状にかなり含む。⑪と同一層か
13 褐色粘質土 (10YR4/4) 鉄分が枝状に入る。
14 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 鉄分が枝状に入る。
15 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 鉄分が枝状に入る。
16 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 大量の鉄分が枝状に入る。固く締まる。
17 灰黄褐色土 (10YR4/2) 鉄分を大量に含む。1~2 ㎜大の白色石粒を多く含む。
18 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 鉄分、1~2 ㎜大の白色石粒、岱明層粘土片を含む。
19 岱明層 ( 粘土 )

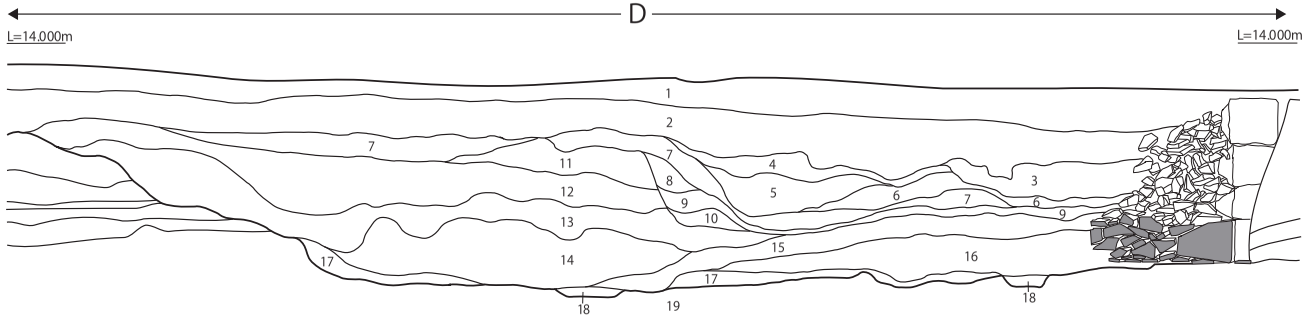



調査区西壁土層図Ｂ（Ｂ－２・３・４）
1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ客土、阿蘇溶結凝灰岩片が混じる。
2 黒褐色粘質土 (10YR3/2) →南壁③層と同一
3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 鉄分、微小な石粒を多く含む。(A) の③層と同一
4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 1~5 ㎜大の石粒を多く含む。固く締まる。
5 暗褐色土 (10YR3/3) 土器小片をわずかに含む。やや固い。
6 暗褐色土 (10YR3/3) ブロック状の黒褐色粘質土 (10YR3/2) を含む。
7 暗褐色土 (10YR3/3) 陶磁器小片を含む。
8 暗褐色土 (10YR3/3) 親指大の黒褐色粘質土 (10YR2/2) や斑点状の岱明層黄褐色粘土を含む。
9 黒色粘質土 (10YR2/1) 2 ㎜大の石粒や弥生土器小片を含む。
10 岱明層

第３図　調査区西壁土層図（土層図Ａ・Ｂ）



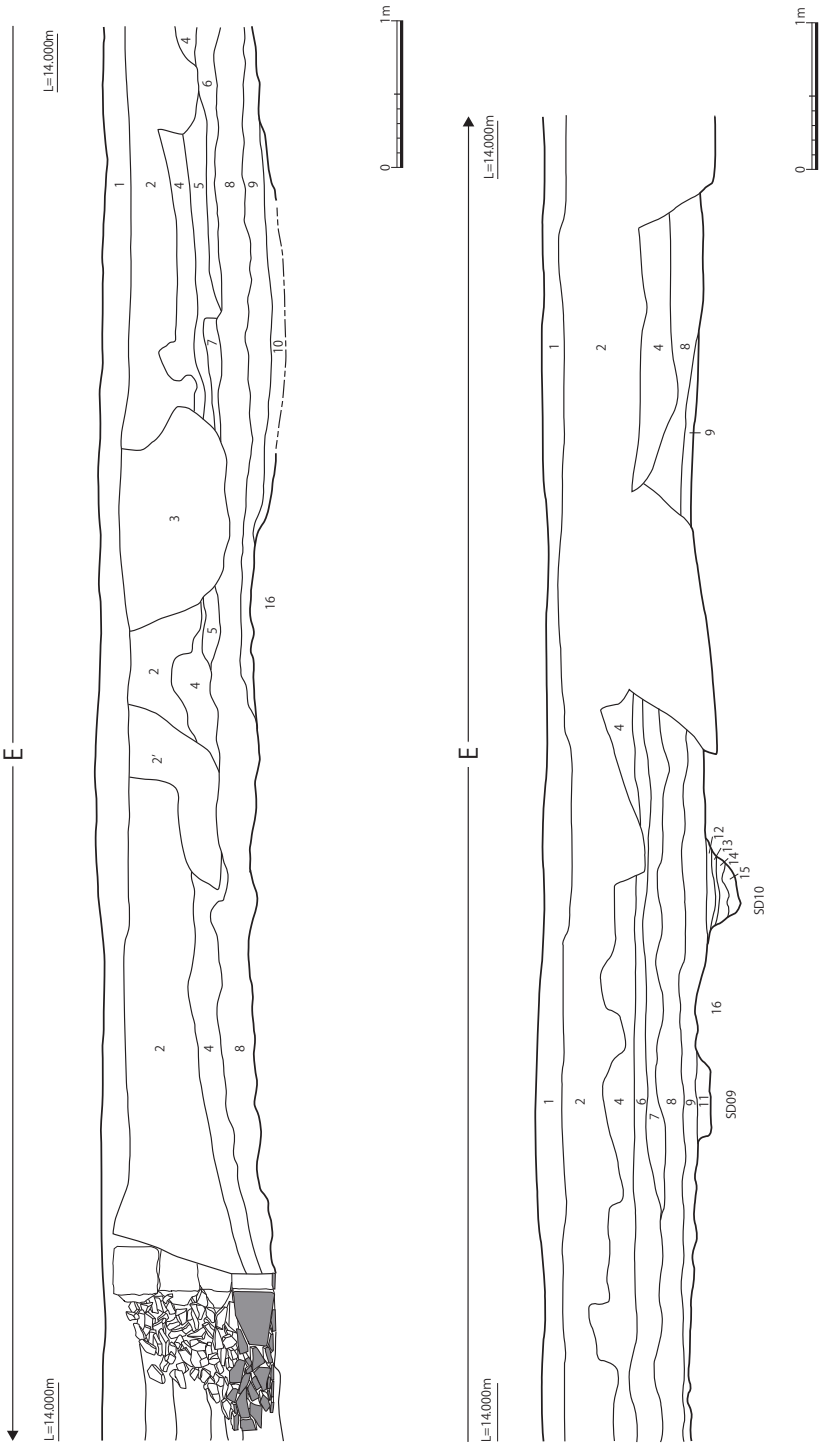

B－2・3・4 調査区西壁土層図 (C)
1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ客土、阿蘇溶結凝灰岩片が混じる。
2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 鉄分や微小な石粒を多く含む。(B) の 3 層と同一。
3 暗褐色土 (10YR3/3) 1~5 ㎜大の石粒、岱明層粘土粒、土器小片を多く含む。
4 黒褐色土 (10YR3/2) 1~5 ㎜大の石粒、岱明層粘土粒、土器小片を含む。上層より柔らかい。
5 黒褐色土 (10YR2/3) 1 ㎜大の岱明層粘土粒を多く含む。
6 黒褐色土 (10YR2/2) 岱明層粘土粒や弥生土器小片をわずかに含む。
7 黒褐色粘質土 (10YR2/3) 弥生土器小片を多く含む。
8 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 1 ㎜以下の微細なガラス片をたくさん含む。
9 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 1 ㎜以下の微細なガラス片をたくさん含む。
10 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 1 ㎜以下の微細なガラス片をたくさん含む。9 層と同一
11 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 1 ㎜以下の微細なガラス片をたくさん含む。
12 褐色粘質土 (10YR4/4) 1 ㎜以下の微細なガラスをたくさん含む。
13 にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 1 ㎜以下の微細なガラスをたくさん含む。
14 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) 岱明層粘土粒を含む。
15 明褐色粘質土 (10YR3/3) 2~5 ㎜大の石粒を含む。鉄分が枝状に入る。
16 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 微細なガラスをたくさん含む。
17 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 微細なガラスをたくさん含む。
18 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 微細なガラスをたくさん含む。
※S11 周辺の岱明層には、姶良カルデラを噴出源とするより黄色が強く微細なガラスを多量に含む火山灰が分布しており、遺構内にも埋土として認められる。



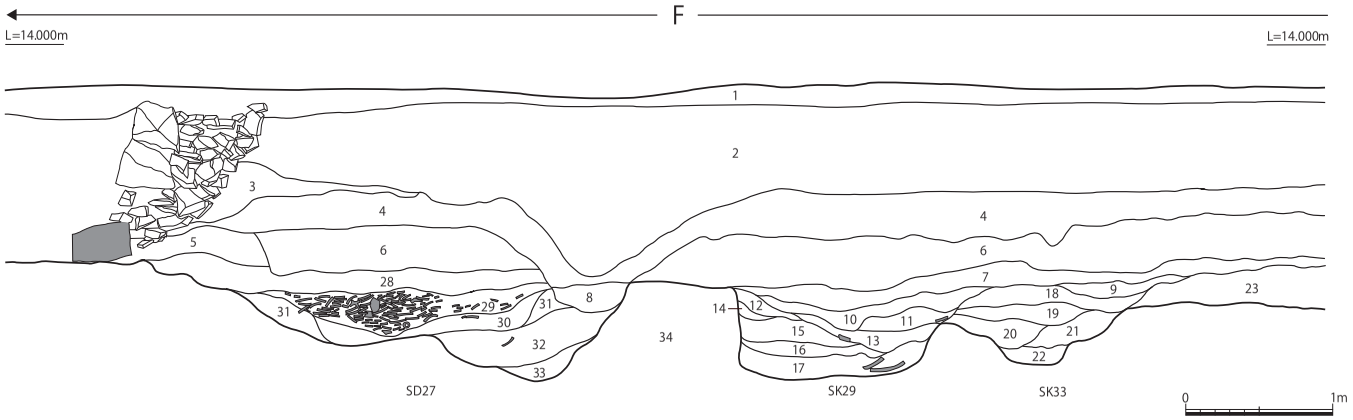

C・D－6 調査区西壁土層図 (D)
1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ客土、阿蘇溶結凝灰岩片が混じる。(C) の 1 層と同一
2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 鉄分や微小な石粒を多く含む。(B) の 3 層と同一。(C) の 2 層と同一
3 暗褐色土 (10YR3/ 4) 3~5 ㎜大の石粒を多く含む。
4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 岱明層粘土粒、小指大の炭化物を含む。
5 褐色土 (10YR4/4) 3~5 ㎜大の石粒、土器小片を含む。
6 暗褐色土 (10YR3/4) こぶし大の黒褐色粘質土 (10YR3/2) がブロック状に混ざる。
7 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 親指大の灰黄褐色土 (10YR4/2) がブロック状に混ざる。
8 暗褐色土 (10YR4/3) 岱明層粘土粒や炭化物がわずかに含まれる。
9 灰黄褐色土 (10YR4/2) 鉄分が枝状に入る。
11 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/2) 柔らかくフカフカ、鉄分が枝状に入る。
12 灰黄褐色土 (10YR4/2) 固く締まっている。鉄分が枝状に入る。
13 暗褐色土 (10YR3/3) 3~5 ㎜大の石粒、土器小片が多量に入る。
14 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 3~5 ㎜大の石粒を含む。
15 暗褐色土 (10YR3/3) 3~5 ㎜大の石粒を含む。
16 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 3~5 ㎜大の石粒をわずかに含む。
17 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 岱明層白色粘土や砂粒を多量に含む。
18 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 側溝埋土
19 岱明層

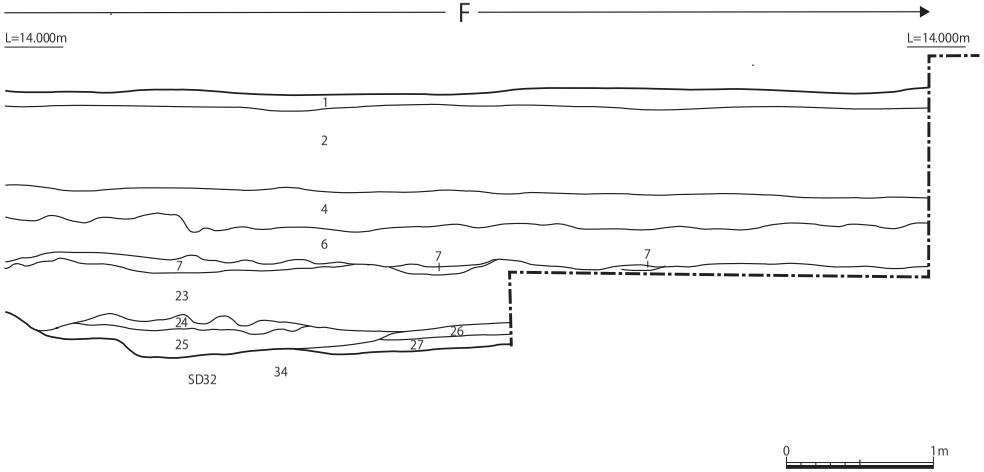
0　1m

第 4 図　調査区西壁土層図（土層図 C・D)



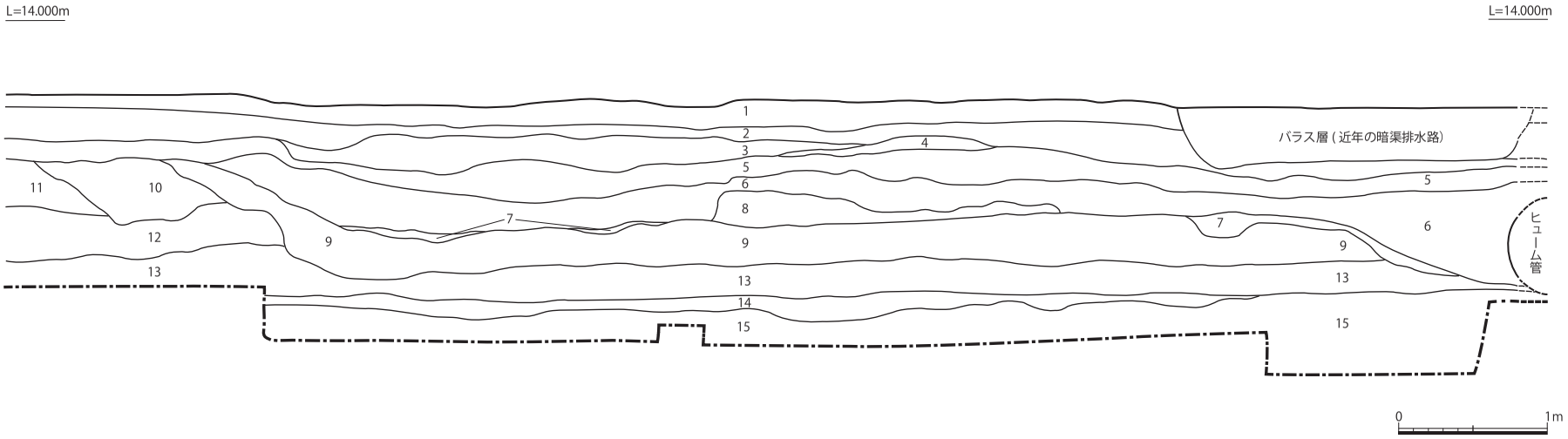

第５図　調査区西壁土層図（土層図 E）



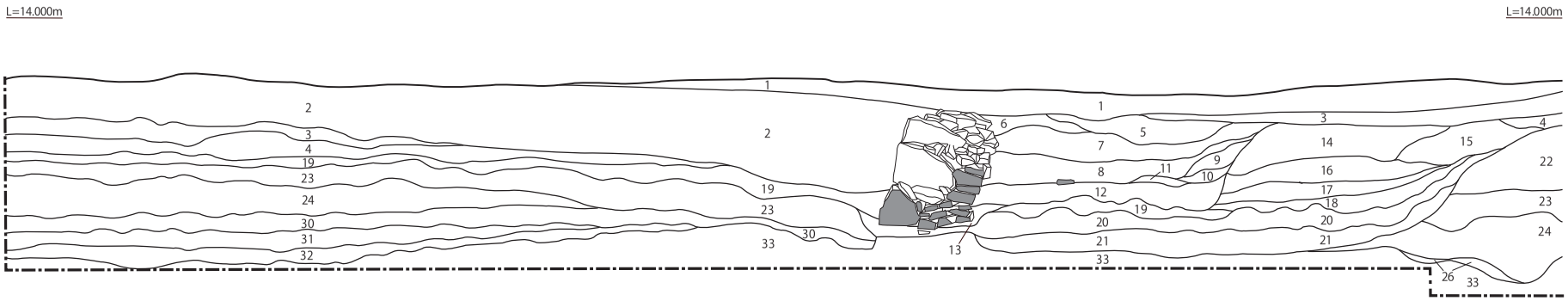

調査区西壁土層図Ｆ　(E－８・９)
1 バラスによる整地層
2 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ客土、阿蘇溶結凝灰岩片が混じる。(E) の２層と同一
3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
4 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 鉄分や微小な石粒を多く含む。(E)4 層と同一。
5 黒褐色土 (2.5YR3/2) 鉄分をかなり含む。固く締まっている。(E)8 層と同一。
6 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 鉄分を枝状に含む。表層部が固結しており、水田の床土と考えられる。
7 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 炭化物を大量に含むため全体として黒褐色に見える。表層が固く締まる。
8 灰黄褐色粘質土 (2.5YR6/2) 枝状の鉄分を大量に含む。
9 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 鉄分をかなり含む。
10 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 炭化物を大量に含むため全体として黒褐色に見える。
11 褐色粘質土 (10YR4/4) 炭化物をかなり含む。瓦片を含む。
12 褐色粘質土 (10YR4/4) 炭化物は含まない。
13 灰黄褐色粘質土褐色粘質土 (10YR3/3) 土器片、瓦片を含む。
14 灰黄褐色土 (10YR3/3) 砂質。
15 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 石英粒をかなり含む。
16 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 粘質が強い。
17 暗褐色粘質土 (10YR4/3) 親指大の岱明層橙色粘土ブロック、瓦片を含む。
18 褐色粘質土 (10YR4/4) 岱明層黄褐色砂質土を大量に含む。硬く締まる。
19 にぶい黄褐色砂質土 暗褐色粘質土 (10YR4/3) 白色石粒をかなり含む。
20 黄褐色砂質土 (10YR5/6) 岱明層砂土ブロックを含む。
21 黄褐色粘質土 (10YR5/6) 粘質が強い。
22 にぶい黄褐色砂土 (10YR5/4) 岱明層黄橙色粘土ブロックをわずかに含む。
23 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 鉄分を枝状に含む。
24 暗褐色砂質土 (10YR3/4) 岱明層黄橙色粘土粒、白色石粒を含む。
25 暗褐色粘土 (10YR3/3) 岱明層粘土粒をわずかに含む。
26 黒褐色粘土 (10YR2/3) 岱明層黄橙色粘土を大量に含む。
27 黒褐色粘土 (10YR2/3)
28 暗褐色粘土 (10YR3/4) 粘質が強い。固く締まる。
29 黒褐色粘土 (10YR2/3) 多量の弥生土器片を含む。
30 にぶい黄褐色粘土 (10YR4/3) 上部に弥生土器片を含む。
31 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 土器は含まない。
32 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 黄褐色砂土をかなり含む。全体として黄味がかる。
33 褐色砂質土 (10YR4/4) 岱明層黄橙色粘土粒を含む。
34 岱明層

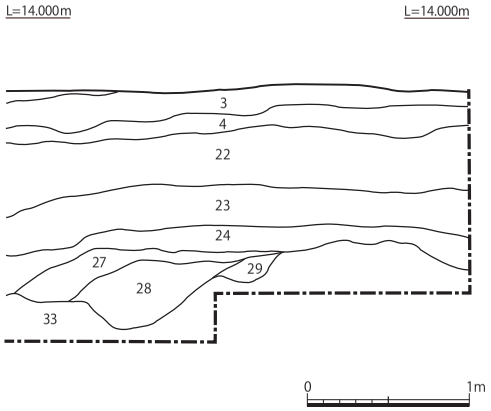
第６図　調査区西壁土層図（土層図Ｆ）




C－３・４調査区東壁土層図
1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ土に阿蘇溶結凝灰岩小片が混じる→南壁１層と同一
2 黒褐色粘質土 (10YR3/2)→南壁３層と同一
3 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 岱明層粘土ブロックが混じる。
4 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
5 褐色砂質土 (10YR4/4) 1~2 ㎜大の砂利を含む。いわゆるグライ化土壌　→南壁４層と同一
6 黒褐色粘質土 (10YR3/2) ２層と同一
7 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 1~5 ㎜大の石粒、炭化物、岱明層粘土粒を含む。　→南壁５層と同一
8 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 1~5 ㎜大の石粒、炭化物、岱明層粘土粒、褐色粘土粒を含む。
9 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 1 ㎜大の石粒を含む。　南壁 18 と同一
10 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 2~8 ㎜大の石粒をかなり含む。11 層より砂質　→南壁 22 層と同一
11 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 2~8 ㎜大の石粒をかなり含む。固く締まる。
12 暗褐色土 (10YR3/3) 1~3 ㎜大の石粒を含む。　→南壁 23 層と同一
13 暗褐色土 (10YR3/4) 1~3 ㎜大の石粒を含む。岱明層粘土粒を含む。　→南壁 24 と同一
14 暗褐色土 (10YR3/3) 1 ㎜大の白色石粒を大量に含む。岱明層粘土ブロックを含む。
15 岱明層 ( 粘土層 )

第７図　調査区東壁土層図




C・D・E－4区南壁土層図

1 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ土に阿蘇溶結凝灰岩小片が混じる
2 明黄褐色砂土 (10YR7/6) 花崗岩風化ﾊﾞｲﾗﾝ土
3 黒褐色粘質土 (10YR7/6)
4 褐色砂質土 (10YR4/4) 1~2 ㎜大の微細な砂利を含む
5 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 1~5 ㎜大の炭化物、石粒、岱明層粘土粒を含む
6 暗褐色土 (10YR3/4) 3~10 ㎜大の石粒、岱明層砂岩片などをかなり含む
7 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 1~3 ㎜大の石粒を含む
8 褐色土 (10YR4/4) 灰黄褐色土 (10YR4/2) や指頭大の石をまばらに含む
9 暗褐色土 (10YR3/3) 土器小片、2~3 ㎜大の石粒、阿蘇溶結凝灰岩片を含む
10 褐色土 (10YR4/4) 土器小片、2~3 ㎜大の石粒、炭化物片を含む
11 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) 阿蘇溶結凝灰岩片を含む
12 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 岱明層粘土片、2~3 ㎜大の石粒を含む
13 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
14 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 2~10 ㎜大の石粒を多く含み、岱明層砂岩片も含む。　層と類似する。
15 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 褐色土 (10YR4/6) が筋状に入る。2~3 ㎜大の石粒、岱明層粘土片を含む
16 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 岱明層の塊 (20~40 ㎜大) が含まれる
17 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 岱明層の塊 (20~40 ㎜大) が含まれる。16 層との境に阿蘇溶結凝灰岩片が横に並ぶ
18 暗褐色粘質土 (10YR3/4) 1 ㎜大の石粒を含む
19 黄灰色粘質土 (2.5YR4/1) 暗赤褐色土 (5YR3/6) を斑点状に含む 。いわゆるグライ土壌。
20 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 2~3 ㎜大の石粒や炭化物を含む。層の下部に幅 1 ㎝大の鉄分が沈着している。いわゆるグライ土壌
21 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
22 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 2~8 ㎜大の石粒をかなり含む。固く締まる。床土か？
23 暗褐色土 (10YR3/4) 1~3 ㎜大の石粒、岱明層粘土片、土器小片を多く含む。
24 暗褐色土 (10YR3/3) 1~3 ㎜大の石粒、土器小片を含む。固く締まる。床土か？
25 暗褐色土 (10YR3/4) 2~5 ㎜大の石粒、土器小片、岱明層粘土片を大量に含む。固く締まる。床土か？
26 暗褐色砂質土 (10YR3/4) 砂がかなり混じる。
27 褐色土 (10YR4/4) やや粘質、2~3 ㎜大の土器小片を含む。
28 暗褐色土 (10YR3/4) やや固い。
29 暗褐色土 (10YR3/4) 岱明層粘土ブロックをたくさん含む。
30 暗褐色粘質土 (10YR3/3)
31 暗褐色土 (10YR3/3) 1 ㎜大の石英粒を大量に含む。
32 黒褐色土 (10YR2/3) 1 ㎜大の石英粒を多く含む。層の下部は 31 層に類似。弥生中期壺口縁部破片出土。
33 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) 岱明層

第８図　調査区南壁土層図

土層図Ｆ（Ｅ８･９グリッド）

土層図Ｆは、石垣と弥生時代の遺構SD27、それに中世から近世にかけての遺構SK29･SK33･SD32の土層が含まれる。土層１～３は整地層であり、客土層群の土層である。土層４は黄褐色系の土層で鉄分や石粒を含むグライ化層群の土層である。土層５は土層図Ｅの土層８と同一の層で、鉄分をかなり含み固く締まっている。この固結部分は土層６の表層部に続いている。土層８は、土層４が粘質化したもので、二つの層は基本的に同一層である。したがって、土層６上面から遺構SD27を破壊して深い溝が掘られ、その後土層８や土層４が堆積したことになる。土層9･18～22はSK33の埋土、土層10～17はSK29の埋土、土層23～27はSD32の埋土、それに土層29～33はSD27の埋土である。これら４つの遺構の新旧関係は、弥生時代のSD27が最も古く、SD32→SK33→SK29と新しくなっている。つまり、SD27が埋まった後、土層23によりSD32がいっきに埋まり、その後SK33が掘りこまれ、埋まったあとにSK29が掘られていることになる。SK29の埋土には多くの瓦片とともに大量の炭化物を含んでいた。特に土層10･11の上層部に炭化物が多く、同じように炭化物を大量に含む土層７と一体化している。SK29･SD32･SK33の上にかぶさるように堆積する土層７は層の厚みは薄いものの、固く硬化している。この特徴は土層28と類似しており、土層５や６との間に不整合面を形づくっている。つまり、土層５や６は客土層群と考えられ、それらの層の直下に固く硬化した土層７と土層28が堆積していることになる。

【調査区東側壁面での土層堆積】

東側壁面土層は、土層図Ａと南側壁面との間にあり、両者の特徴を備えている。土層１～４と土層６～８は整地層であり、客土層群の土層である。土層５はグライ化層群のひとつであるが、本来は耕作土層群の一つと考えられる。土層９～13は石粒や土器片を含んでおり、耕作土層群と考えられる。土層14は岱明層類似層群の一つであり、岱明層である土層15の粘土採掘に伴う土層の可能性が強い。これは土層図Ａの状況とよく似ている。

【西壁の土層堆積から見られる土地利用の変遷】

以上の土層堆積層の検討から当調査区（木船西遺跡Ⅳ区）での土地利用の変遷、つまり開発行為を追ってみたい。

最も古い開発は弥生時代後期にさかのぼる。調査区の北には木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区があり、発掘が調査終わっている。弥生時代後期を中心として竪穴住居跡50基以上の集落が確認されている。したがってⅣ区での住居跡の発見が期待された。しかし、検出されたのはSD27とSD01の溝遺構とSK11、26の土坑であった。SD27は約2m、SD01は約1.5mの幅を持つが、幅のわりには浅い掘り込みである。これは中世から近世にかけて二回目の開発が行われ、土地の削平が行われた結果であった。つまり、溝や土坑の上部が削平され、破壊されたようだ。

二回目の開発行為の跡が中世から近世にかけての道路状遺構やSD32の大きな溝などである。土層図Ｅや土層図Ｆにはこの削平の様子がよく表されている。道路状遺構も大きな溝も削平は岱明層まで及んでいる。溝は岱明層でも砂層まで及んでおり、おそらく湧水が常態化していたものと考えられる。

道路状遺構も岱明層まで削平されているが、粘土層や砂層の状態ではなく、赤褐色土に近い。おそらく岱明層の上部に堆積する赤褐色ローム層と考えられる。道路としては利用可能であろう。この時の削平は土層図Ｃの南端まで認められる。土層図Ｃでは削平が岱明層の上部である黒色土（土層14）までで終わっており、赤褐色ローム層や粘土層、それに砂層までは及んでいない。これはおそらく玉名台地の南への傾斜のためと考えられる。その後、大きな溝（SD32）が埋まり機能しなくなると、SK33の土坑が造られ、さらにSK33が埋まるとSK29の土坑が造られている。この土坑が埋まっていく際に、その上部層は大量の炭化物と瓦片を含んだ土層図Ｆの土層７と一体化して堆積している。土層７はE8グリッド内に広がっており、表層部が硬化している。大量の炭化物と瓦を含んだ土で整地したものと思われる。つまり中世から近世にかけての二回目の開発行為は瓦と強い関連性を持つことを物語っている。この際、調査区南西部での粘土採掘がおこなわれた可能性が高い。

三回目の開発行為は、おそらく暗褐色から黒褐色をした耕作土層群の土層で、黒褐色土の整地層の上に暗褐色から褐色の耕作土が堆積している。耕作土層群の土層は調査区西壁の土層図Ｃを

除いたすべてで見られる。また、ほぼ耕作土層群の土層の上位にあるグライ化層群の土層は水分の多い場所に堆積した耕作土と見ることができる。このころは畑あるいは水田が営まれていたようだ。

四回目の開発行為は近代の道路状遺構である。昭和 23 年建設省地理調査所によって撮影された航空写真には弧状を描く道路状遺構が写されている。この写真では、道路状遺構は切通しの道路ではなく、西側に壁をもつ段落ちの道路になっており、北から弧状に曲がり、西に向かっている。そして、東からの道路と合わさっている。ただ、東からの道路は現在の鹿児島本線の北側に沿った道路ではなく、現在の踏切に南からつながる道路が手前で南西方向に曲がり、鹿児島本線を斜めに横断して弧状の道路と合わさっている。また、写真では中世から近世にかけての道路状遺構や SD32 が地形にその後を残している。

五回目の開発行為は石垣の築造である。近代の道路状遺構がほとんど埋まった段階で道路状遺構の東側側溝に沿いながら南北方向に石垣を築き、その西側を畑地としたようだ。また、E7 グリッドと E8 グリッドの境界付近にも東西に石垣を築いている。おそらく南北と東西の石垣は一連のもので、D･E5･6･7 グリッドは石垣の上面より一段低い畑地として利用されていたようだ。この石垣築造の時期は、先の航空写真にはこの石垣は写っていないため、昭和 23 年以後のことである。また、石垣築造の理由としては、調査区南西部の粘土採掘により、湧水が常態化し周辺が湿地化したためであろう。調査区南西部の土層にグライ化層群の土層が多いことや石垣基底部の土層がグライ化していることもこれらの理由を裏付けているようだ。

六回目の開発行為は、工場用地として現地表面まで整地された工事であり、現在に至っている。真砂土とともに石垣に用いられた凝灰岩が整地層の中にたくさん含まれている。また B･C2･3 グリッドで見られたヒューム管もこの頃に埋設されたものと考えられよう。

## 第 2 節　遺構と遺物

### はじめに

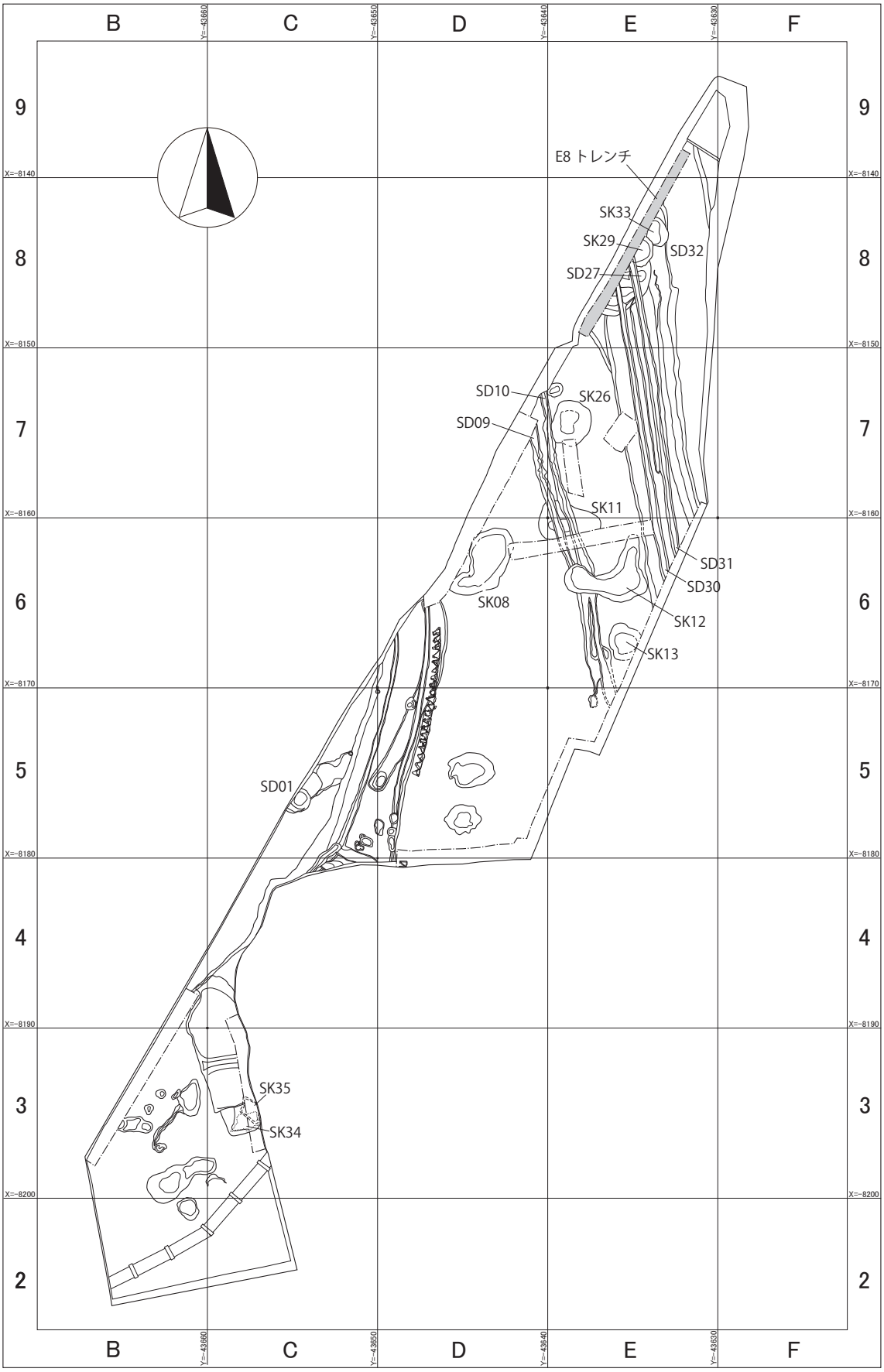
木船西遺跡Ⅳ区では、遺構が 3 箇所（E･F5 ～ 9 グリッド、C･D5･6 グリッド、B･C2 ～ 4 グリッド）に集まっており分けて考える。

E･F5 ～ 9 グリッドの範囲は木船西遺跡Ⅲ区に隣接していることから、木船西遺跡全体を考える上でも重要な範囲である。この範囲は木船西遺跡Ⅳ区の中で遺物の出土が最も多く、遺構密度も今回の調査区の中ではもっとも高い。また遺構の時期も弥生時代から近代・近世までと幅が広く周辺に存在する遺跡や遺跡の土地利用を考える上でも非常に有用なデータを得ることができた。

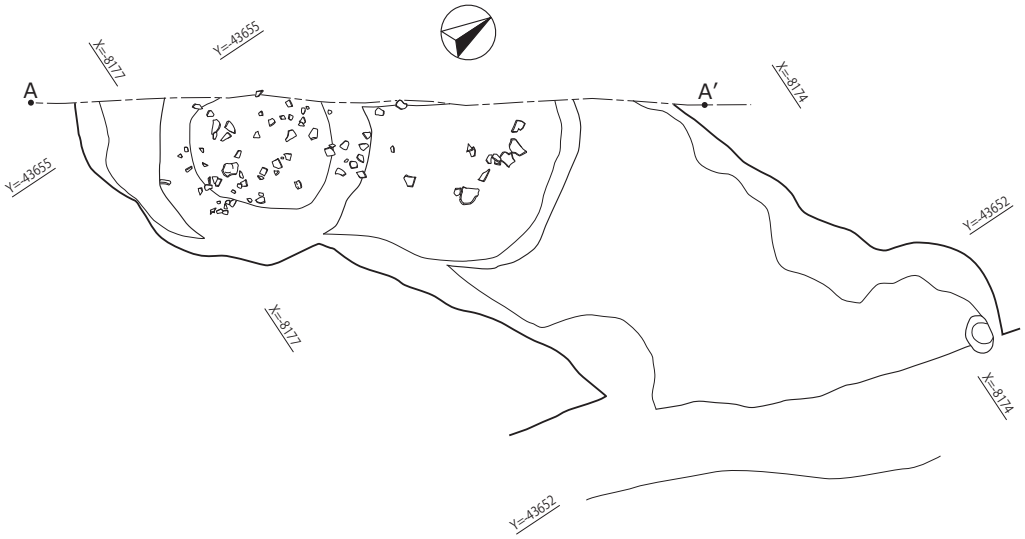
C･D5･6 グリッドは調査区内の中でも他より一段高くなっており、段丘の痕跡とそこから谷まで下る段差を検出することができた。検出された段差の東側では段丘に沿うように築かれた石垣が埋没しており、その石垣の裏込めの土を除去すると 2 条の溝にはさまれた幅約 2m を測る道路状遺構などが検出されている。これは段丘上面で検出された遺構､段丘下 ( 谷) で検出された遺構、そして石垣と様々な時期の土地利用の変遷を考えることができる。これは E･F5 ～ 9 グリッド範囲と同様の状況である。遺構時期も E･F5 ～ 9 グリッドと同様で弥生時代から近現代までとなっている。

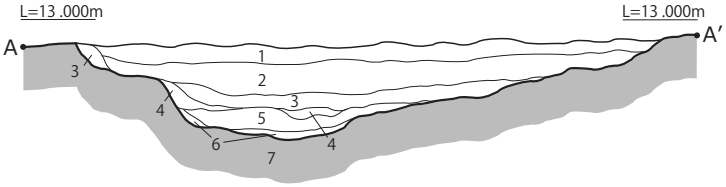
B･C2 ～ 4 グリッドは遺構密度、遺物出土量が他のグリッド範囲と比べ少なくなる。しかし、不整形な土坑の存在や馬骨の出土などの上記で挙げた 2 つの範囲で検出した遺構と違った特徴をもっている。遺構時期は近世以降と考えられるが、不整形土坑は E･F5 ～ 9 グリッドで出土している瓦との関係性（粘土採掘坑など）が考えられる。

第 2 節では遺構の検出状況の傾向をもとに重要と考えられる遺構を抽出し、遺構番号順にまとめている。基本的には調査時の都合上 C･D5･6 グリッド、E･F 5･6 グリッド、B･C2 ～ 4 グリッドの順に遺構番号が付与されているためこの遺構番号順に報告している。E･F 5･6 グリッドの道路状遺構とその周辺遺構に関しては遺構番号順に前後して報告している。


B
C
D
E
F
9
8
7
6
5
4
3
2
E8 トレンチ
SK33
SK29
SD32
SD27
SD10
SK26
SD09
SK11
SD31
SD30
SK08
SK12
SK13
SD01
SK35
SK34

第９図　遺構配置図

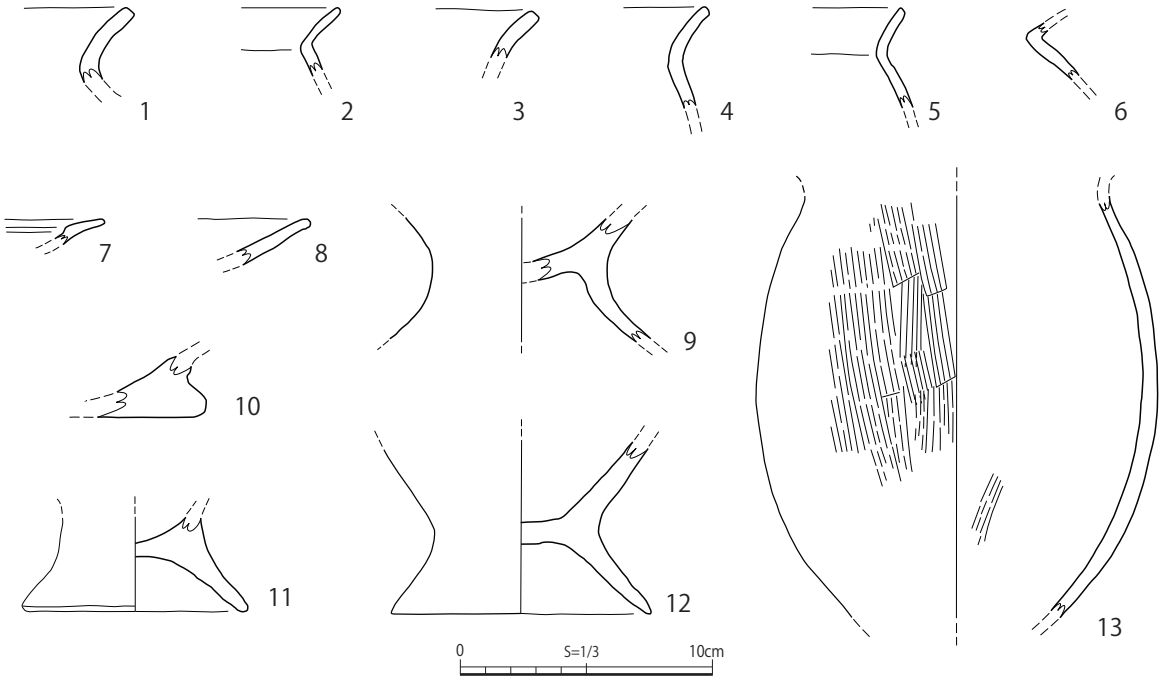



1. 黒褐色粘質土（10YR 2/3）　弥生土器小片を多く含む。
2. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）　1 ㎜以下の微細なガラス片を多く含む。
3. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）　1 ㎜以下の微細なガラス片を多く含む。
4. にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）　1 ㎜以下の微細なガラス片を多く含む
5. 褐色粘質土（10YR 4/4）　1 ㎜以下の微細なガラスを多く含む。
6. にぶい黄褐色粘質土（10YR 5/4）　1 ㎜以下の微細なガラスを多く含む。
7. 岱明層

0　S=1/40　1m

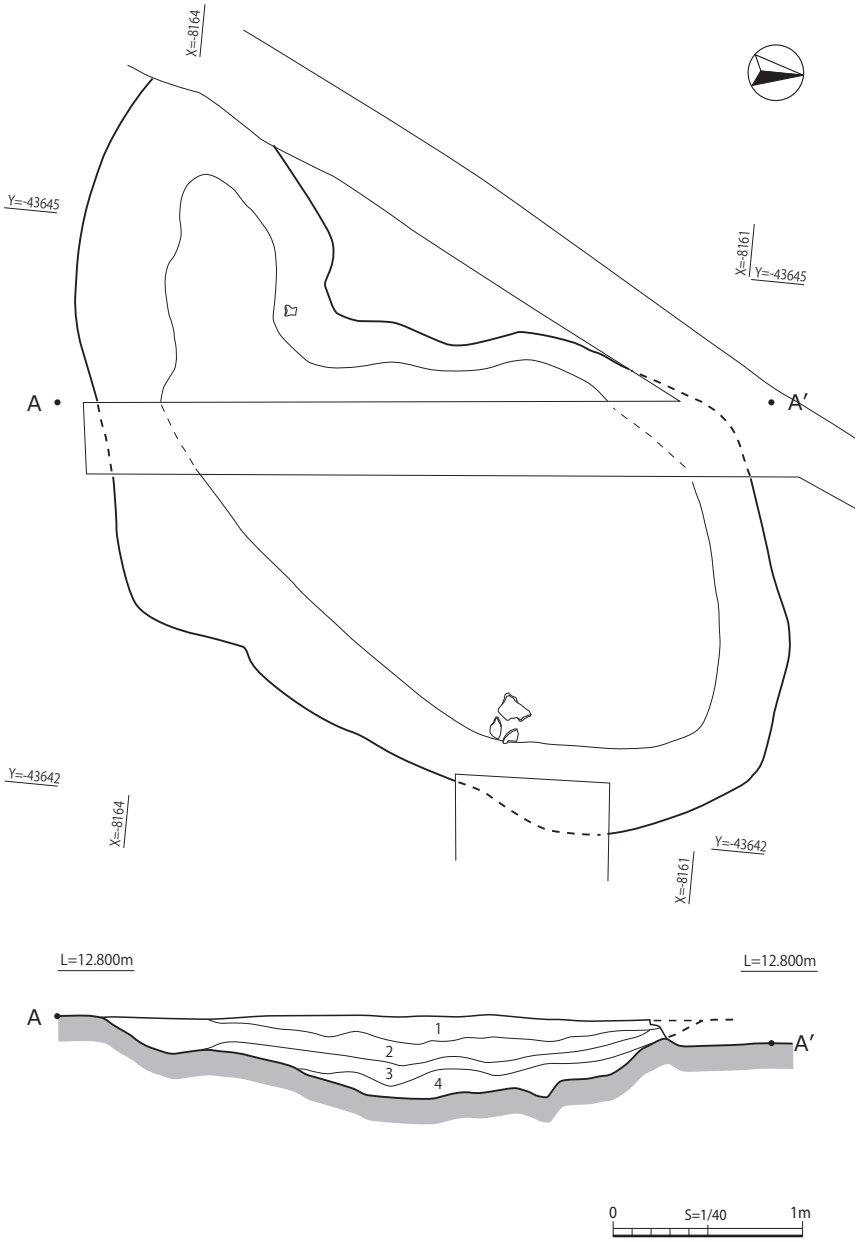
第 10 図　SD01 実測図（S=1/40）




第 11 図　SD01 出土遺物実測図

SD01（第 10 図）

本遺構は調査区の C5 グリッド内に位置し、1 段高くなったテラス上で検出され、北東部の西壁にかかる溝状の遺構である。検出長 5.16m、検出幅 1.5m を測る。長軸は北から東側に 71°振れる。東は近世・近代の道路状遺構の建造時に切られている。南西部は調査区外に延び、正確な遺構形状は不明である。深さは 0.51m を測り、断面形は浅い擂鉢状をなす。南西側は 1 段のテラスがつく。北東側は傾斜角度変わるもののなだらかな斜面になる。西側から東側に向けて遺構底部が徐々に浅くなっており、段差の落ち際で SD01 が収束する可能性も考えられる。SD01 が検出された面は 1945 年撮影の空中写真に見られる地割と一致しているが、調査区西壁土層土層図 C では工場建設時の整地に伴う 1 層・2 層、工場建設以前の耕作地の土の 3 層・4 層、そして遺物包含層である 6 層の順で遺構検出面の上に堆積がみられ、工場が建設される前の耕作地として利用されていた時期か、もしくはそれ以前にすでに削平を受けたと考えることができる。遺構埋土は 6 層から構成され、1 ～ 2 層は黒褐色土、3 層は暗褐色土、4 層はにぶい黄褐色土、5 層は褐色土、6 層はにぶい黄褐色土である。遺物はほとんどが 1 層からの出土で、小片ではあるが弥生時代後期前半の土器が出土している。出土した器種は甕、壺、鉢等である。出土土器は後述する SK26、SD27 と同じ型式であり、廃絶期はこれらの遺構と同時期であるとみられる。

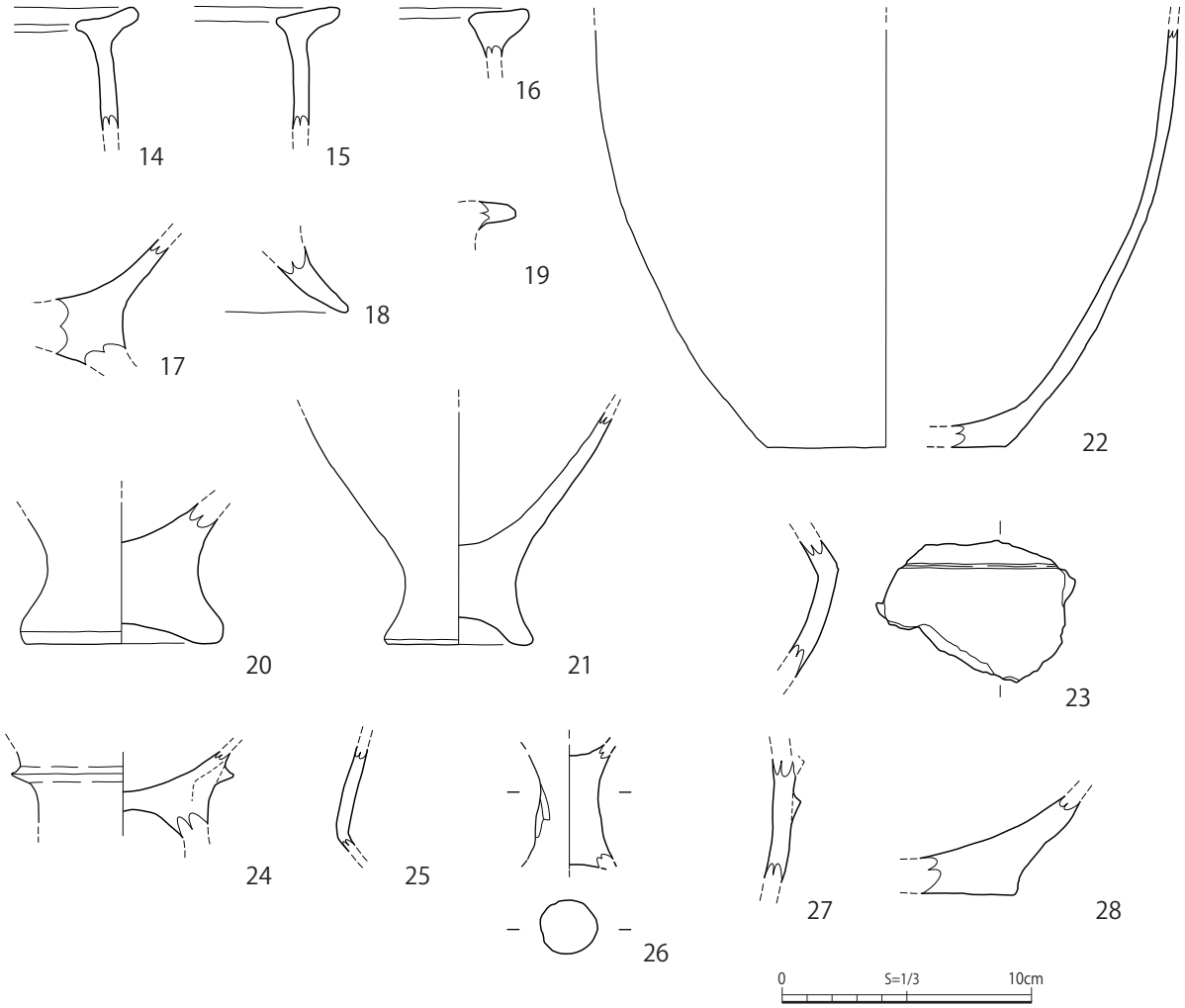



1. 暗褐色砂質土（10YR 3/3）　しまりあり。粘性弱い。粗粒砂を少量含む。土器を含む。
2. 暗オリーブ褐色砂質土（2.5Ý 3/3）　しまりあり。粘性弱い。粗粒砂と黒褐色粘質土ブロックを微量含む
3. 暗褐色砂質土（10YR 3/4）　しまりあり。粘性弱い。粗粒砂を少量含む。
4. 黄褐色砂質土（2.5Y 5/3）　しまりあり。粘性弱い。粗粒砂を少量含む。

第 12 図　SK08 実測図（S=1/40）

SD01 出土遺物（第 11 図）

1 ～ 5 は弥生土器甕の口縁部である。口縁端部はつまみ出す様にナデを施す傾向が見られる。6 は弥生土器壺の頸部である。口縁端部は欠損している。7 は弥生土器高坏の口縁部である。口縁部から体部にかけて浅い段を持つ。8 は弥生土器鉢の口縁部である。口縁端部は若干つまみ出す。9 は弥生土器甕の脚部である。脚接合部分から端部にかけて屈曲がみられ端部は外に広がる。脚接合部の内面は丁寧にナデが施される。よく焼きしまる。10 は弥生土器鉢の底部である。11、12 は弥生土器甕の脚部である。11、12 ともに直線的に脚部が外に伸びる。11 は底部内




第 13 図　SK08 出土遺物実測図

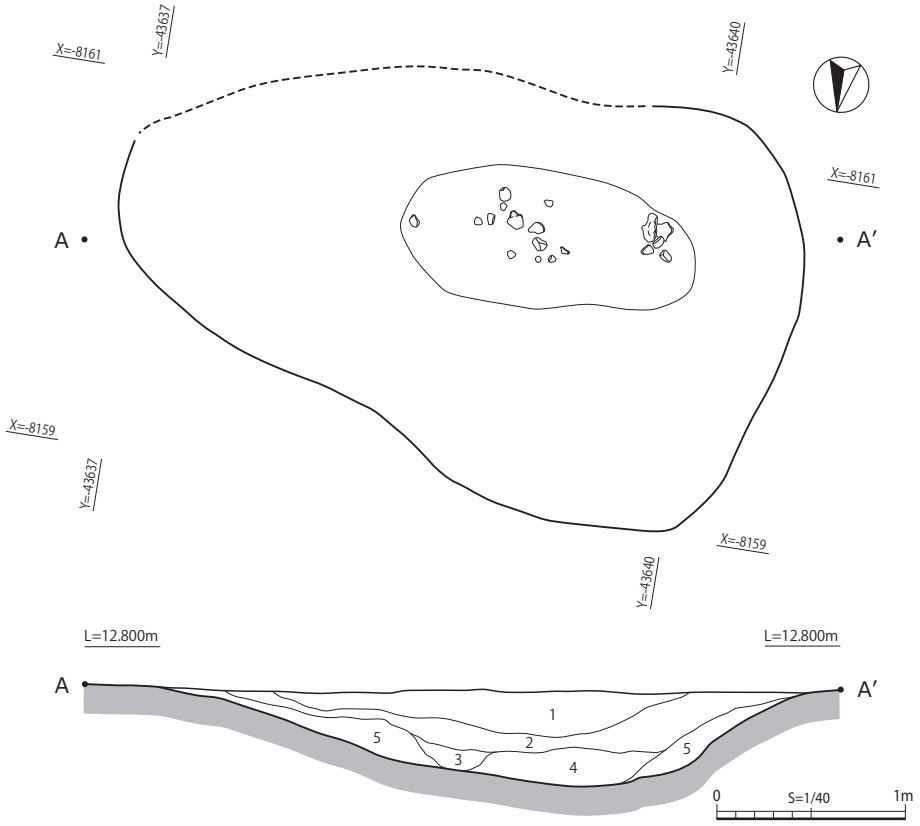
面は上底状になっているのに対し 12 では平らになっている。13 は弥生土器甕の胴部である。頸部から口縁部までと脚部は欠損している。内外面ともにハケメ調整が見られる。

SK08（第 12 図）

調査区の中央部 D6 グリッドの西壁付近に位置するいびつな楕円形の土坑である。長軸 4.8m、幅 3m を測る。長軸は北から東側に 44°振れる。深さは 0.44m を測り、断面形は浅い擂鉢状の断面をなす。遺構埋土は 4 層から構成され、各層ほぼ水平に堆積する。埋土は全体的に砂質の暗褐色、黒褐色土であるが、2 層がややグライ化しており、水が滞留するような遺構であった可能性がある。遺構の埋没は弥生後期中葉以降とみられる。

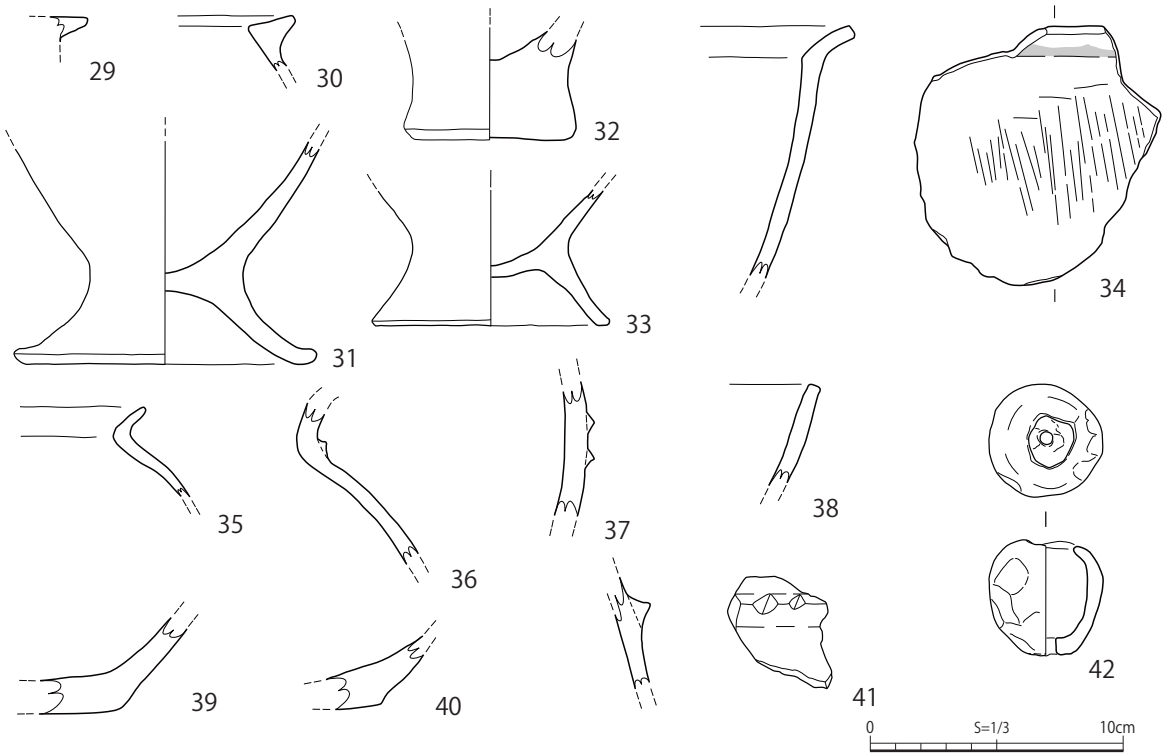
SK08 出土遺物（第 13 図）

遺物は、城ノ越式、黒髪式、後期中葉の土器が見られ、出土遺物の年代幅が広い。城ノ越式は甕、壺が、黒髪式は甕、壺、鉢、高杯、器台などの破片が出土している。また、ミニチュア土器も出土している。14 ～ 16、19 は弥生土器甕の口縁部である。14 ～ 16 は口縁部内側の突出部が見られるが、14 は口縁部内側への突出が顕著であり、強いヨコナデとつまみ出しで成形される。16 は突出部につまみ出すようなヨコナデが見られるものの 14 と比較すると弱く、外側への突出もひかえめとなる。19 は土器本体から剥がれた肥厚部である。17、18、20 ～ 22 は弥生土器甕の脚部である。17、20 は上げ底で肥厚な脚を持つ。18 は低めの脚が外側に広がる。21 は胴下部から脚部まで残存している。脚は上げ底で接地面は平らに成形されている。22 は平底で脚を持たない。底部には黒色の斑紋が見られる。23、27、28 は弥生土器壺である。23 は胴部で屈曲しており屈曲部分には浅い 1 条の沈線が施される。

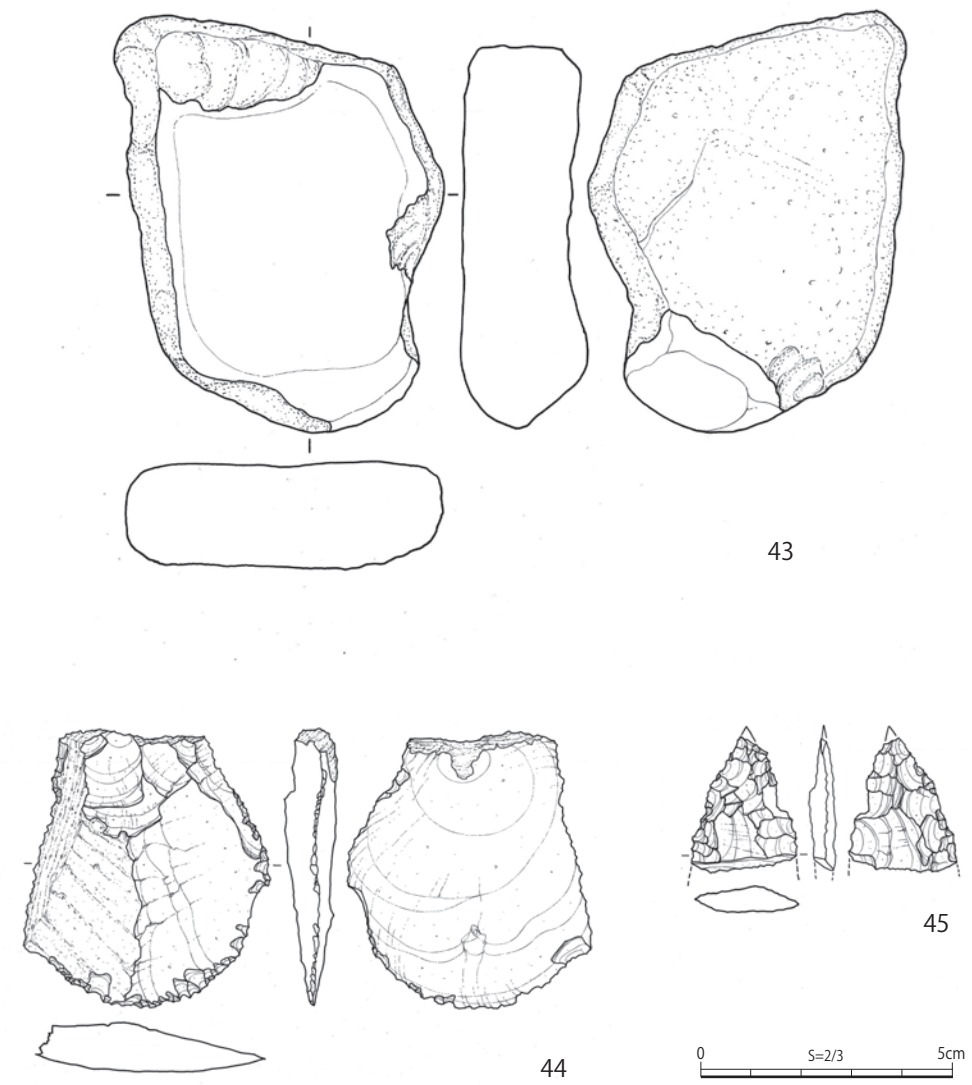



1. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）　しまりあり。粘性あり。粗粒砂、中粒砂少量含む。地山ブロック微量含む。
2. 黒褐色粘土（10YR 3/1）　しまりあり。粘性強い。粗粒砂。中粒砂、地山ブロック微量に含む。
3. 褐灰色砂質土（10YR 4/1）しまりあり。粘性若干あり。細粒砂主体。地山ブロック少量含む。
4. 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）しまりあり。粘性若干あり。炭化物粒多く、中粒砂少量含む。
5. 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）　しまりあり。粘性若干あり。中粒砂少量含む。

第 14 図　SK11 実測図（S=1/40）




第 15 図　SK11 出土遺物実測図 1




第 16 図　SK11 出土遺物実測図 2

27 は胴部に 2 条の突帯を持つが 2 条のうち上部の突帯は剥がれ痕跡のみを残す。28 は壺の底部である。底部には圧痕状の痕跡が見られる。24 は高坏の頸部で、突帯を持つ。胎土に混入物が見られず精緻である。25 は弥生土器長頸壺の頸部である。26 はミニチュア土器である。高坏もしくは器台を意識したものと思われる。

SK11（第 14 図）

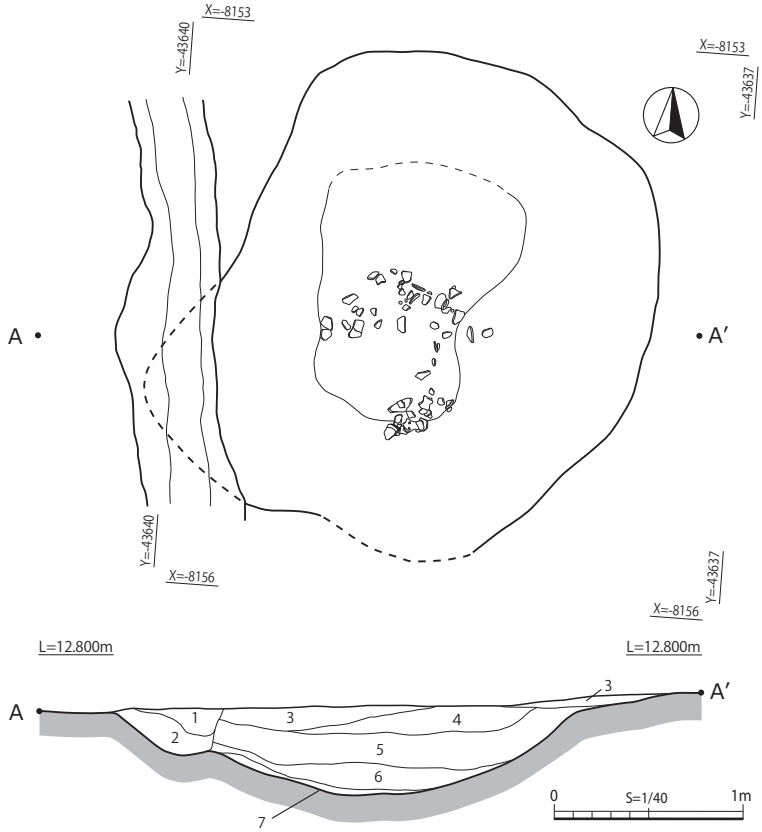
調査区の中央部、D6、D7、E6、E7 グリッドに渡って位置する楕円形の土坑である。長軸 3.6m、短軸 2.3m を測る。長軸は北から西側に 88°振れる。SD09、SD10 を切る。深さは 0.5m を測り、断面形は浅い擂鉢状をなす。遺構埋土は 5 層から構成され、1 層は SD09、SD10 掘削時に撹乱を受けたものである。 1 ～ 2 層が黒褐色土で、3 ～ 5 層が褐灰～灰黄褐色土である。

SK11 出土遺物（第 15 図・第 16 図）

遺物には弥生土器と石器があり、土器は甕、壺が出土している。遺物は最下層からまとまって出土しており、弥生時代中期から後期前葉のものと見られる。29 ～ 34 は弥生土器甕である。29、30 は口縁部で断面三角形の突帯が貼付けられるが 30 は端ぶ部が若干持ち上がる。32 は肥厚した上底状の底部を持つ。31、33 は外側に開く脚をもつ。31 は端部を折り曲げ接地面を作る。33 はまっすぐ斜めに伸びた脚部の端部を接地面に合わせて平坦面を作り出している。34 は口縁

から胴部の一部まで残存している。頸部には煤が付着している。35 ～ 37、39 ～ 41 は弥生土器壺で 35、36 は口縁から頸部にかけて残存。36 は口縁端部は欠損しているが、頸部に一条の断面三角形の突帯が貼付けられる。37 は胴部であり、断面三角形の突帯が 2 条貼付けられる。39、40 は底部である。39 は胎土に長石の混入が目立つ。40 は内面が摩滅し不明瞭であるがハケメ調整の痕跡が若干みられる。41 は刻み目のある断面三角形の突帯が貼付けられる。38 は弥生土器鉢の口縁部で、端部は仕上げに強めのナデを施す。42 は無頸壺を意識したミニチュア土器であり、底部には穿孔がある。

石器は、磨石、石鏃等が出土している。この他に岩片として花崗岩、安山岩等がみられた。43 は角の取れた板状の安山岩転石を用いた磨石である。a 面および b 面左下の突起部の周囲に磨痕が見られる。これらの磨痕は原石の形状を変えるほどのものではない。44 はトレンチ掘削時に出土したものであるが、SK11 を切っているため SK11 のなかに含まれていた可能性があり、ここで報告する。明瞭な節理面に沿って剥がされたサヌカイト製縦長剥片を素材とした削器 ( スクレイパー ) である。a 面 ( 背面 ) 右上から左下にかけての縁辺部に、b 面 ( 腹面 ) 側から打撃された小さな剥離痕が連続してみられる。石材の風化がかなり進んでおり、旧石器の可能性がある。45 は下半部が大きく欠損した打製石鏃である。きめの細かい良質のサヌカイトを用いている。先端からの形状や石器の最大幅がほぼ折れ面近くに想定され、基部にかけて厚みが減じていく傾向にあることから平基式石鏃である可能性が強い。現状での長さが 2.5cm ほどであるから全長は 5cm 近くになりそうだ。




1. 黒褐色土（10YR 3/2）　橙色土塊、白色砂粒含む。固くしまる。粘性ややあり。（SD10 の埋土）
2. 暗褐色粘質土（10YR 3/ 4）　黄色土塊、白色粒子含む。しまりあり、粘性強め（SD10 の埋土）
3. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）　橙色土ブロック、白色粒子、土器片含む。固くしまる。
4. 黒褐色粘質土（10YR 2/3）　白色粒子、土器片含む。固くしまる。粘性強い。
5. にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）　白色粒子、橙色粒子、土器片含む。固くしまる。
6. 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）　黄褐色土塊多く、白色粒子少量含む。土器片も微量含む。
7. にぶい黄褐色土（10YR 5/4）白色粒子微量含む。ややしまる。地山（岱明層）か。

第 17 図　SK26 実測図（S=1/40）

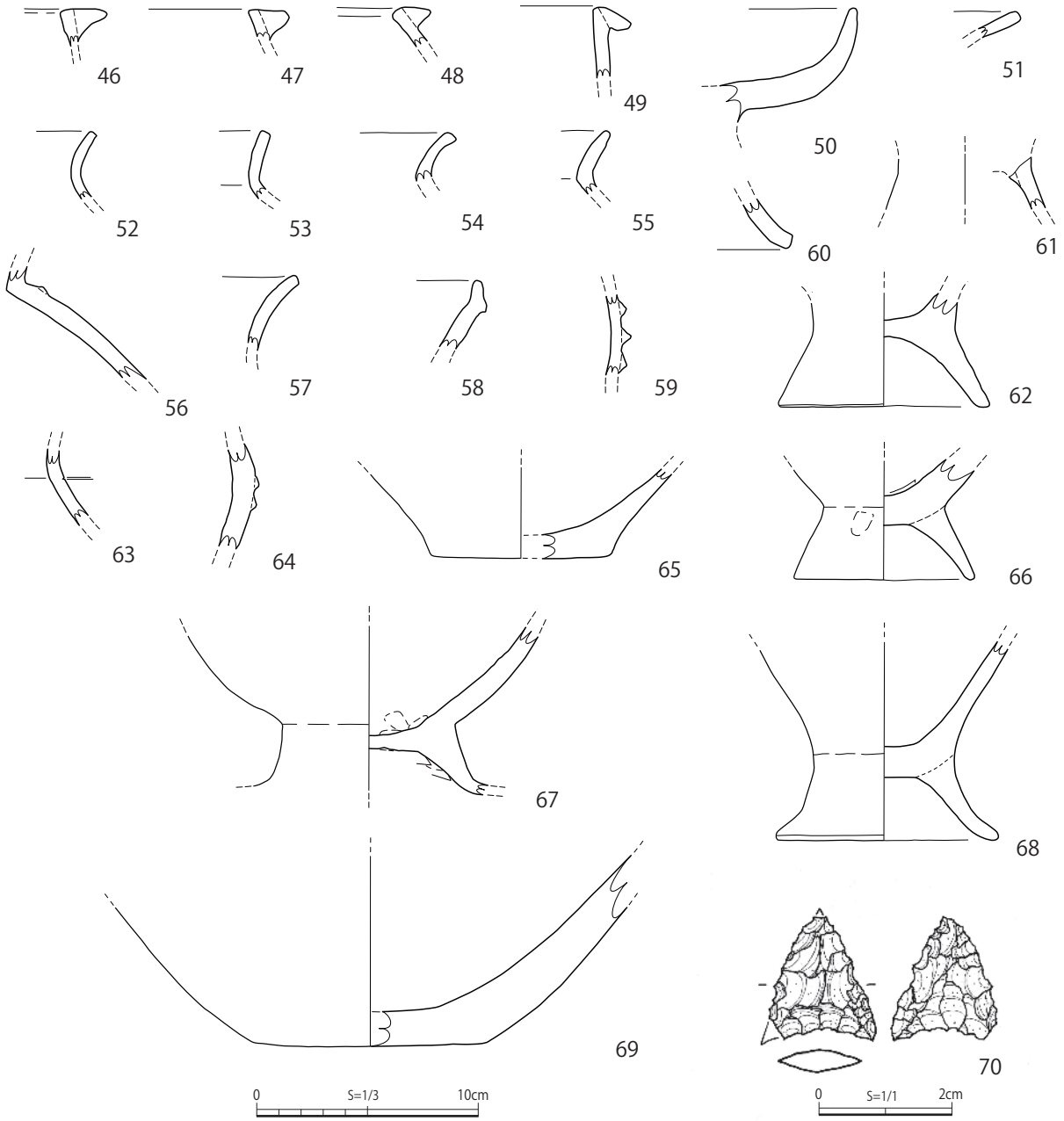
SK26（第 17 図）

調査区北部の E7 グリッドに位置するやや不整楕円形の土坑である。中近世の道路状遺構に切られ、長軸 2.7m、短軸 2.3m を測る。長軸は北から東側に 19°振れる。深さは 0.44m を測り、断面形は浅い擂鉢状をなす。遺構埋土は 5 層から構成され、1、2 層は道路状遺構の側溝である SD10 の埋土、3 ～ 7 層が SK26 の埋土である。7 層は地山の可能性もある。遺物は主に 5 層、6 層から出土している。

SK26 出土遺物（第 18 図）

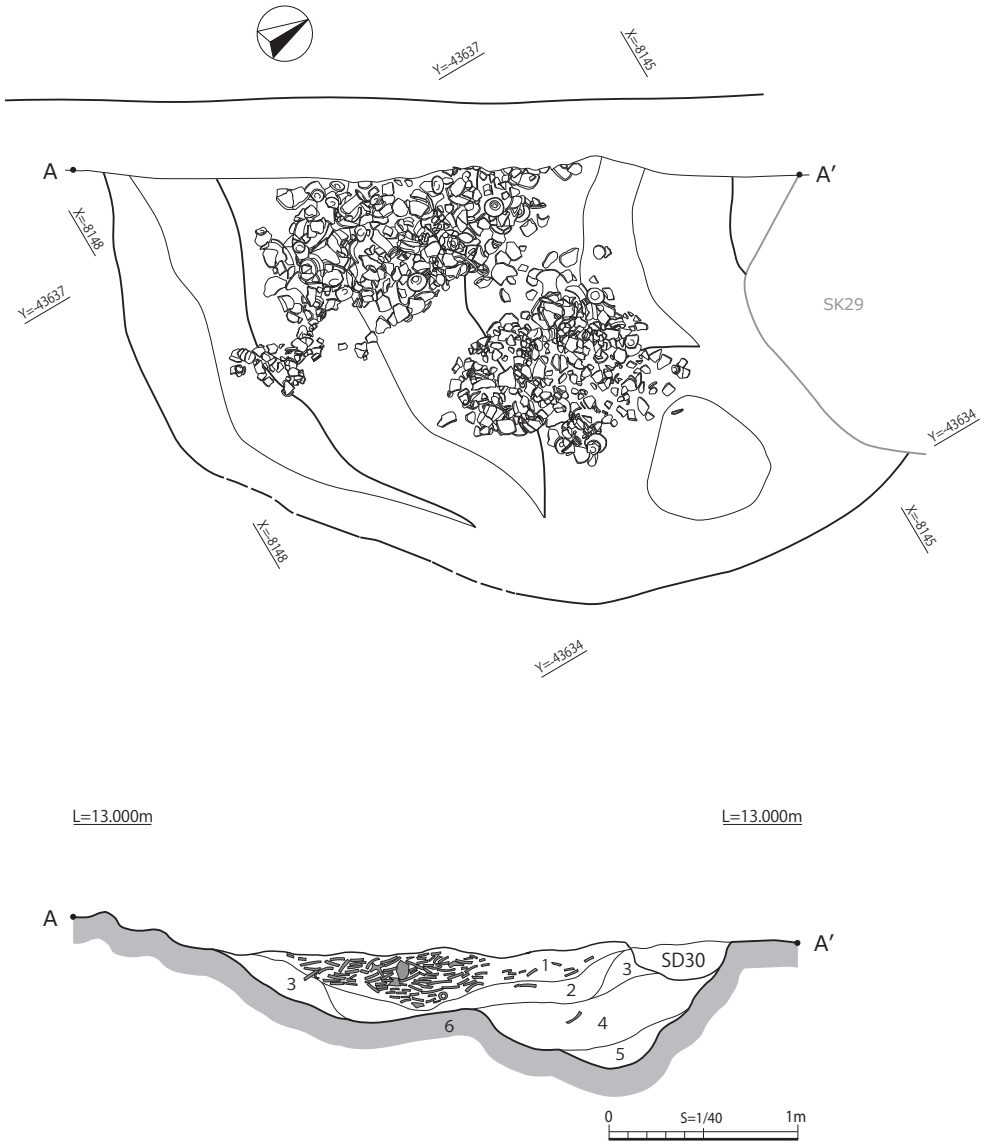
遺物は、弥生土器、石器であり、3、5、6 層から弥生時代後期前半の甕・壺が出土している。これらの土器は津袋 I 段階（高木 1979）に含められるものがほとんどである。SD27 出土した土器と接合する土器がみらる。廃絶は SD27 と同時期であると考えられる。

46 ～ 49、52、53、55 は弥生土器甕の口縁部である。46 ～ 49 は外側に断面三角形の突出部を持つが 46 に関しては比較的強めに外につまみ出される。49 は突帯下面の胴部接合部に沈線状に凹みがめぐる。52、53、55 は口縁端部を「く」の字状に折り曲げる。50、67 は弥生土器脚付




第 18 図　SK26 出土遺物実測図

鉢である。50 の脚部は大半が欠損している。鉢胴部には黒斑が見られる。67 は脚端部を若干折り曲げ接地面を作る。底部内面には複数の指頭圧痕がある。51、60 は弥生土器高坏で、51 は口縁端部、60 は脚端部である。60 の脚端部はヨコナデにより面が形成される。54、57、58 は弥生土器壺の口縁部である。54 は端部が頸部よりも若干厚く、端部の仕上げにヨコナデし、面を形成している。57 も同様な成形を行い、面を持つが端部は丸みを帯びる。58 は断面三角形に肥厚し、仕上げに強いヨコナデを直上方向を意識し行っている。56、59、63、64 は弥生土器壺の胴部である。56 は頸部から胴部が残存し、頸部には断面三角形の突帯が貼付けられる。59 は 3 条の断面三角形の突帯が貼付けられる。64 は 2 条の断面三角形状の突帯が貼付けられる。先 63 は頸部外面に 1 条の沈線がみられる。61、62、66、68 は弥生土器甕の脚部である。62、66 の脚部が真っ直ぐ伸び端部が丸く収まるのに対し、68 は端部を折り曲げ接地面を作っている。65、69 は弥生土器壺の底部である。どちらも底部に黒斑が見られる。65 は底部からの立ち上がり部分にヨコナデがみられ底部と胴部の境界にはっきりとした角がみられるが、69 のその部分は不明瞭な指頭圧痕状のものが見られ、角が鈍い。70 は良質のサヌカイトで作られた凹基三角石鏃である。a 面左下脚部の先端がわずかに欠けているが、ほぼ正三角形に仕げられている。

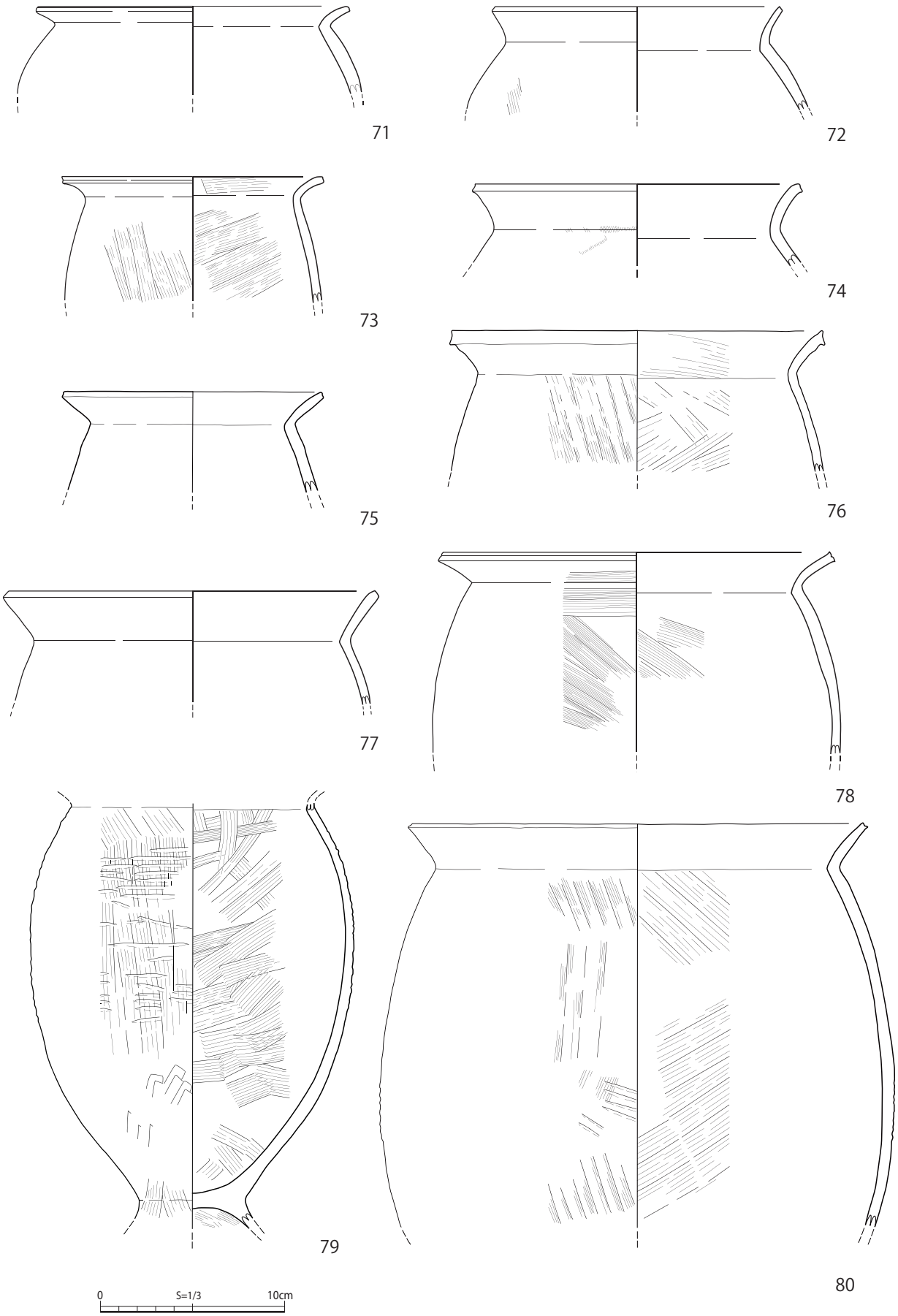



1. 黒褐色粘土 (10YR 2/3) 多量の弥生土器片を含む。
2. にぶい黄褐色粘土 (10YR 4/3) 上部に弥生土器片を含む。
3. にぶい黄褐色砂質土 (10YR 4/3) 土器は含まない。
4. にぶい黄褐色粘質土 (10YR 4/3) 黄褐色砂土をかなり含む。全体として黄味がかる。
5. 褐色砂質土 (10YR 4/4) 岱明層黄橙色粘土粒を含む。
6. 岱明層

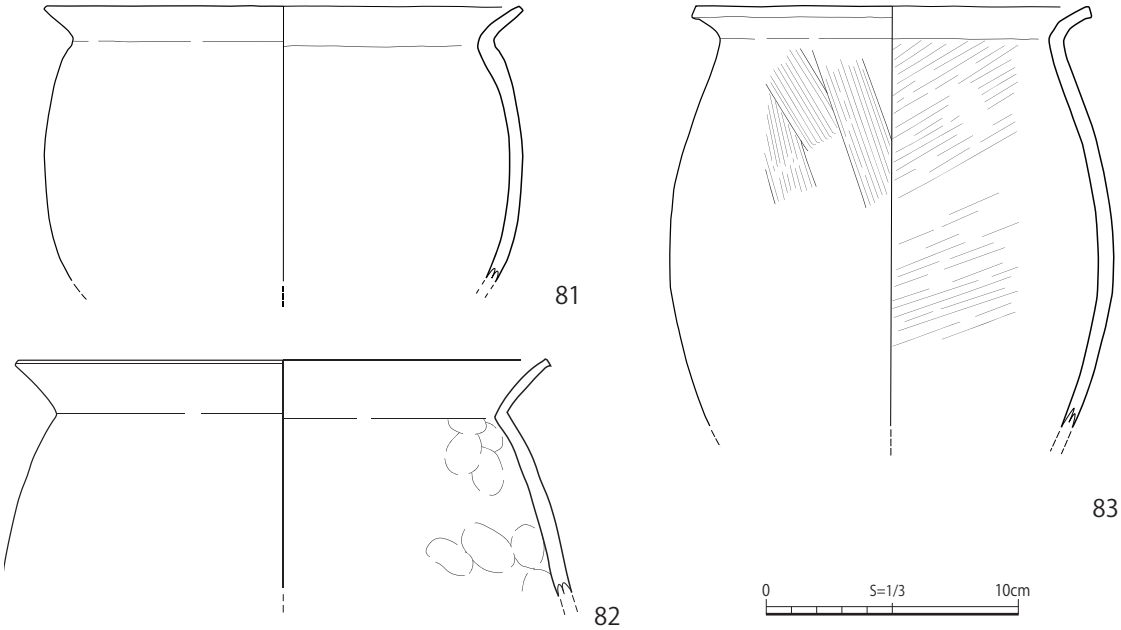
第 19 図　SD27 実測図（S=1/40）

SD27（第 19 図）

調査区北部の E8 グリッドに位置する薬研堀状の溝遺構である。谷地形の立ち上がり付近にあたる東端には深い土坑状の掘り込みがあり、遺構底は一段深く落ちる。西部は調査区外に延び、全体形は不明である。調査区北側道路状遺構、SK29、SD30 に切られる。検出長 4.3m、検出幅 2.5m を測る。溝の延長方向は北から西側に 82°振れる。深さは 0.64 mを測る。遺構埋土は 5 層から構成される。1 層は土器密集層 ( 土器廃棄層 ) であり、黒褐色土である。2 層～ 5 層はにぶい黄褐色土～褐色土であり、4 層に土器（城ノ越式）を含む。東端の土坑状落ち込みは、径 0.7m、深さは 1 m を測り、断面形は井戸状の形状をなす。現状で若干の湧水がみられる。SD27 は平面形状が溝状であり、断面形状が薬研堀状であることから、木船西遺跡Ⅰ～Ⅲ区の集落を囲う環濠の土橋近辺にあたる可能性が高いと言える。また、溝内に土器類の大量廃棄が行われており、その出土状況も環濠の廃絶期によくみられるものである。津袋大塚遺跡の大溝など津袋Ⅰの土器の一括資料がみられる遺跡は弥生後期の環濠を伴う集落であり、環濠内に土器の大量廃棄がみられる。さらに SK26 等のやや離れた土坑から同時期の土器が出土し、本遺構出土土器と複数接合し




第 20 図　SD27 出土遺物実測図 1



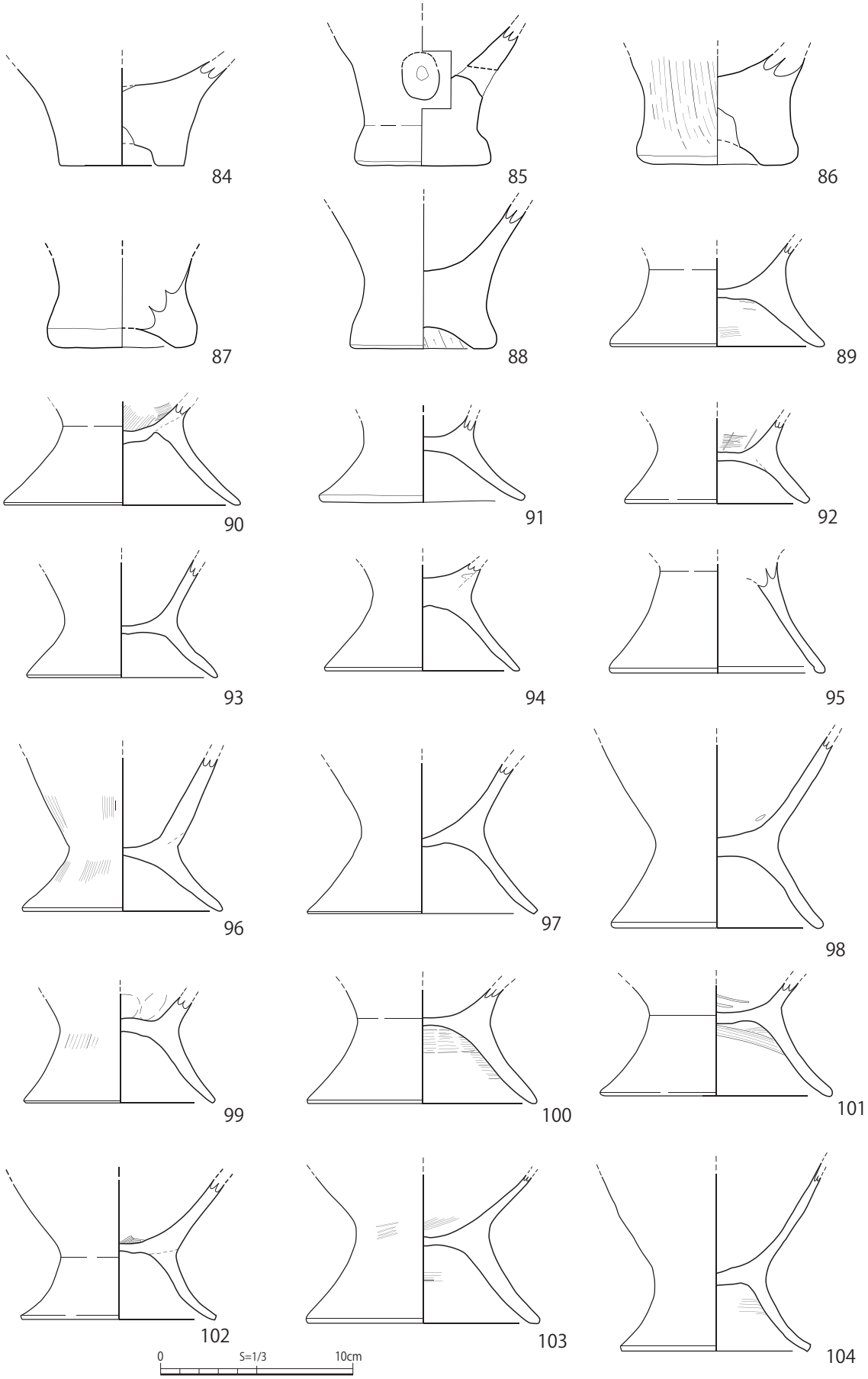

第 21 図　SD27 出土遺物実測図２

ており、同時期の遺構廃絶が単独ではなく有る程度の広がりを持って行われている。

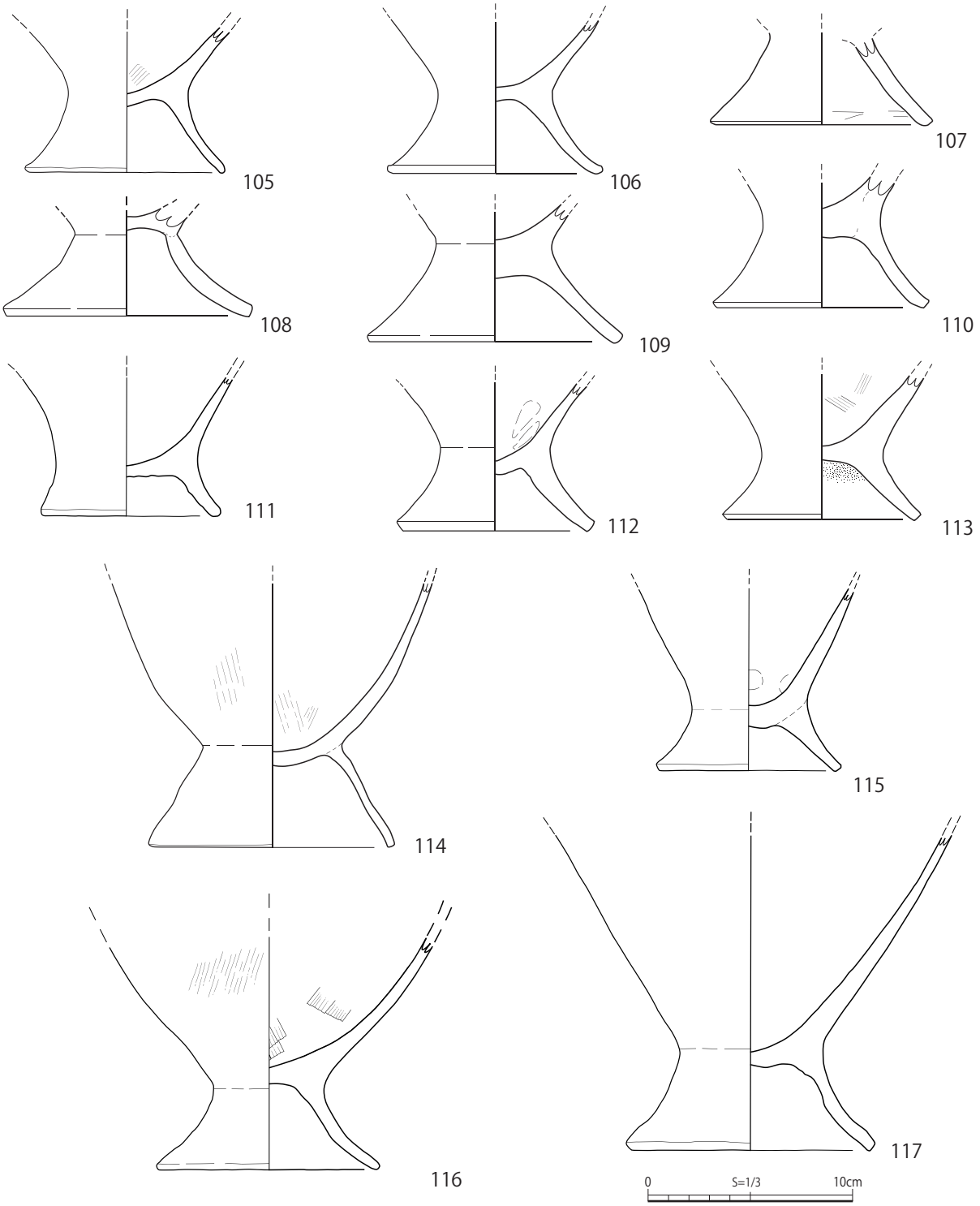
SD27 出土遺物（第 20 図～第 29 図）

遺物には、弥生土器、石器がある。本調査区で最も多くの遺物が出土しており、木船西遺跡Ⅳ区の出土遺物の約７割を占める。そのほとんどは土器であり、石器の比率は低い。１層からは弥生時代後期前半の甕・壺・鉢・高坏・器台が出土している。土器の一括廃棄にともなうものである。器種別にみると、甕がほとんどであり、壺が続き、その他の器種は寡少である。遺物は、接合が悪く、破片が広範囲に散らばっているものと思われる。これらの土器は津袋Ⅰ段階に含められるものがほとんどであるが、津袋Ⅱ段階（高木 1979）要素も一定量含んでおり、両時期にまたがる時期に一括廃棄が行われた可能性がある。4 層からは城ノ越式の土器片が出土するが地山由来の埋土であり、再堆積の可能性がある。

第 20 図～第 23 図は弥生土器甕である。71 ～ 83 は甕口縁から胴部である。（79 は脚の一部まで残存）口縁部は「く」の字状に開く。基本的には口縁部はハケメ調整後にヨコナデ、胴部外面はユビオサエの後、縦方向のハケメ調整、胴部内面は横方向のハケメ調整である。口縁端部は強めのヨコナデにより、面を持つ。中でも 76 は仕上げに強くヨコナデし、明確な面を形成、面下部は若干下方に伸ばし、その面下部の端部もつまみながらヨコナデを行っている。79 は胴部外面にタタキが行われその後にハケメ調整が行われる。84 ～ 117 は甕胴部から脚部まで残存している。84、86 ～ 88 は底部に肥厚した上底状の脚である。85 は上底ではなく、底部に円盤状の粘土を貼付け脚にしている。脚部の貼付け部分よりやや上には焼成後と思われる穿孔が見られる。85 ～ 88 は底部からの立ち上がり部分は丸く仕上げられるが、84 は角が見られる。89 ～ 117 は「ハ」の字状に開く脚である。全体的に表面が磨耗しているが、底部内外面にハケメ調整や指頭圧痕が残るものもある。113 は底部外面に砂粒が付着している。底部を丸底状にしたまま脚を接合する場合とやや平底にした状態で脚を接合する場合が見られる。脚に関しては端部を丸くおさめたものや端部に面を持ち、端部の面が接地面となるものと面が接地面にならないものなど、形状にも個体差が見られる。第 24 図 118 ～ 137 は弥生土器壺である。全体的に磨耗しているため調整などは不明瞭であるがハケメ調整や指頭圧痕が残るものもある。118 は口縁部内面に断面三角形の突帯が貼付けられている。突帯の先端は指でつまむように成形されているため突帯接合部分には指頭圧痕が残る。119 ～ 121 は頸部からの立ち上がりがやや直線的であり、口縁端部に面をもつ。122 は頸部から緩やかな曲線を描きながら立ち上がる。口縁端部には粘土帯を貼付け肥厚させ、粘土帯下の端部は下方につまみ出し成形を行う。123 はやや長めの頸部で立ち上がり直後は直線的に伸び、口縁部は大きく外湾し広がる。口縁端部は仕上げにヨコナデを行い面を形成し

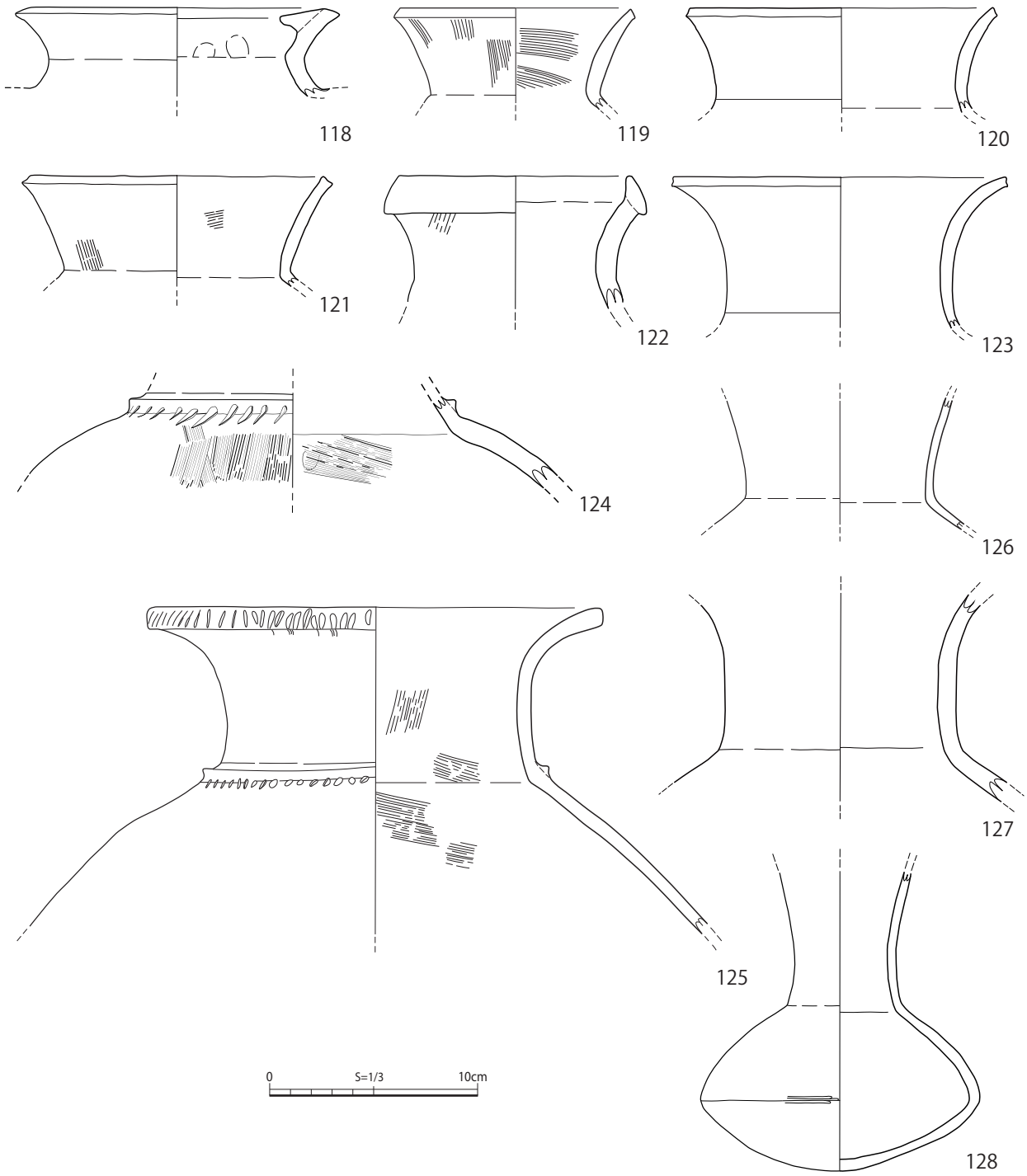



第 22 図　SD27 出土遺物実測図 3



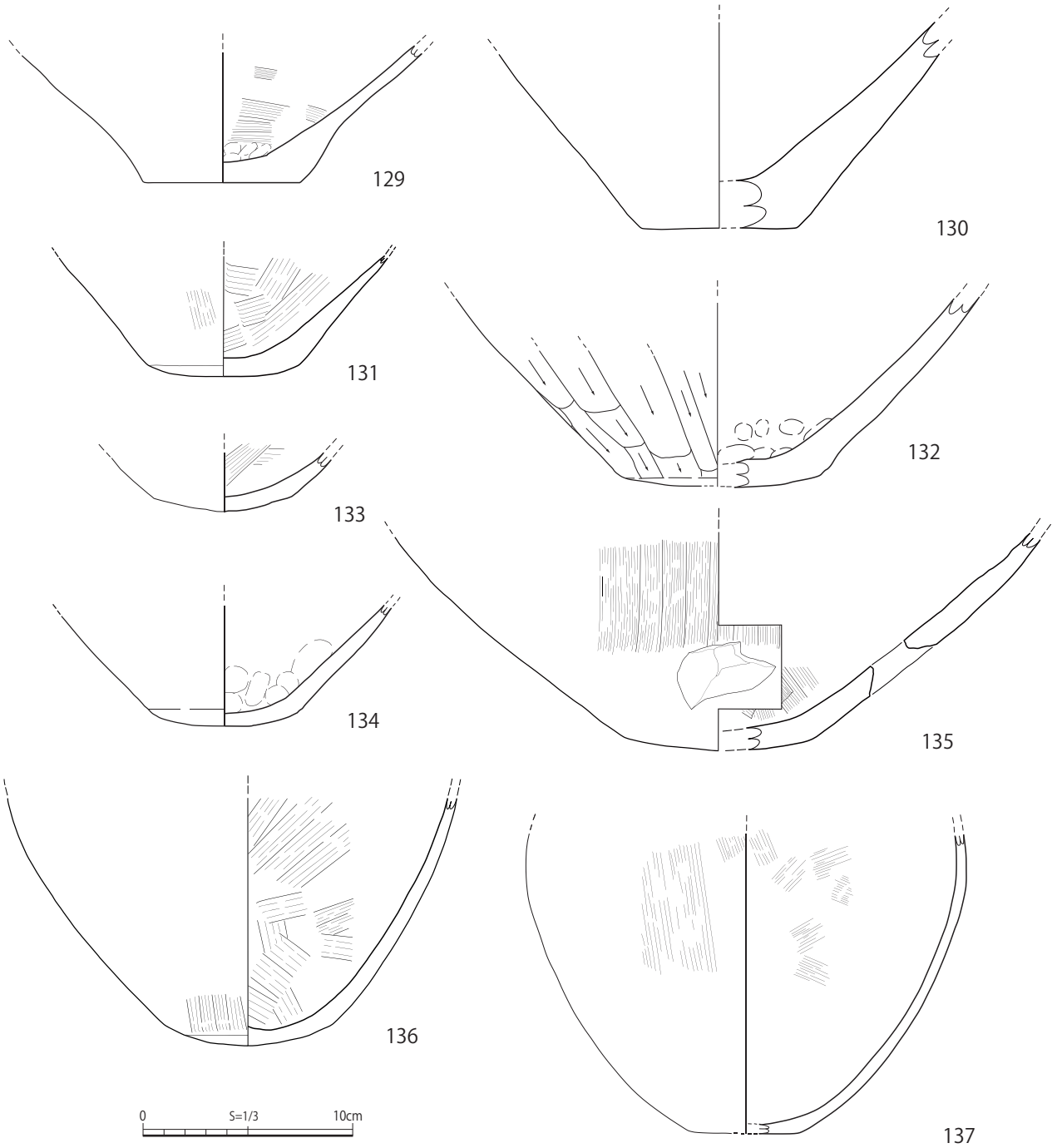

第 23 図　SD27 出土遺物実測図 4

ている。124、125 は頸部に断面三角形の突帯を貼付け突帯の下部に斜め方向から刺突文を施す。125 は口縁部まで残存しており、その口縁端部は面を形成し、刻み目がめぐる。126 ～ 128 は弥生土器長頸壺である。全体は摩滅しており詳細な調整は不明であるが、頸部は縦方向の調整、頸部と胴部接合部付近には横方向の調整が行われていた可能性がある。また 128 は胴部にミガキの痕跡と黒斑が見られた。129 ～ 137 は胴部から底部にかけて残存している壺である。内外面ともにハケメ調整が見られるものが多い。129 は底部と胴部を接合する際のユビオサエを上方向へ行ったため、底部から胴部に至るまでに一旦上方向に立ち上がってから開き始める。底部外面は平滑である。130 は底部外面は平滑であり胴部外面には黒斑が見られる。胴部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。131 ～ 136 は底部外面はやや曲面を呈し、胴部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。



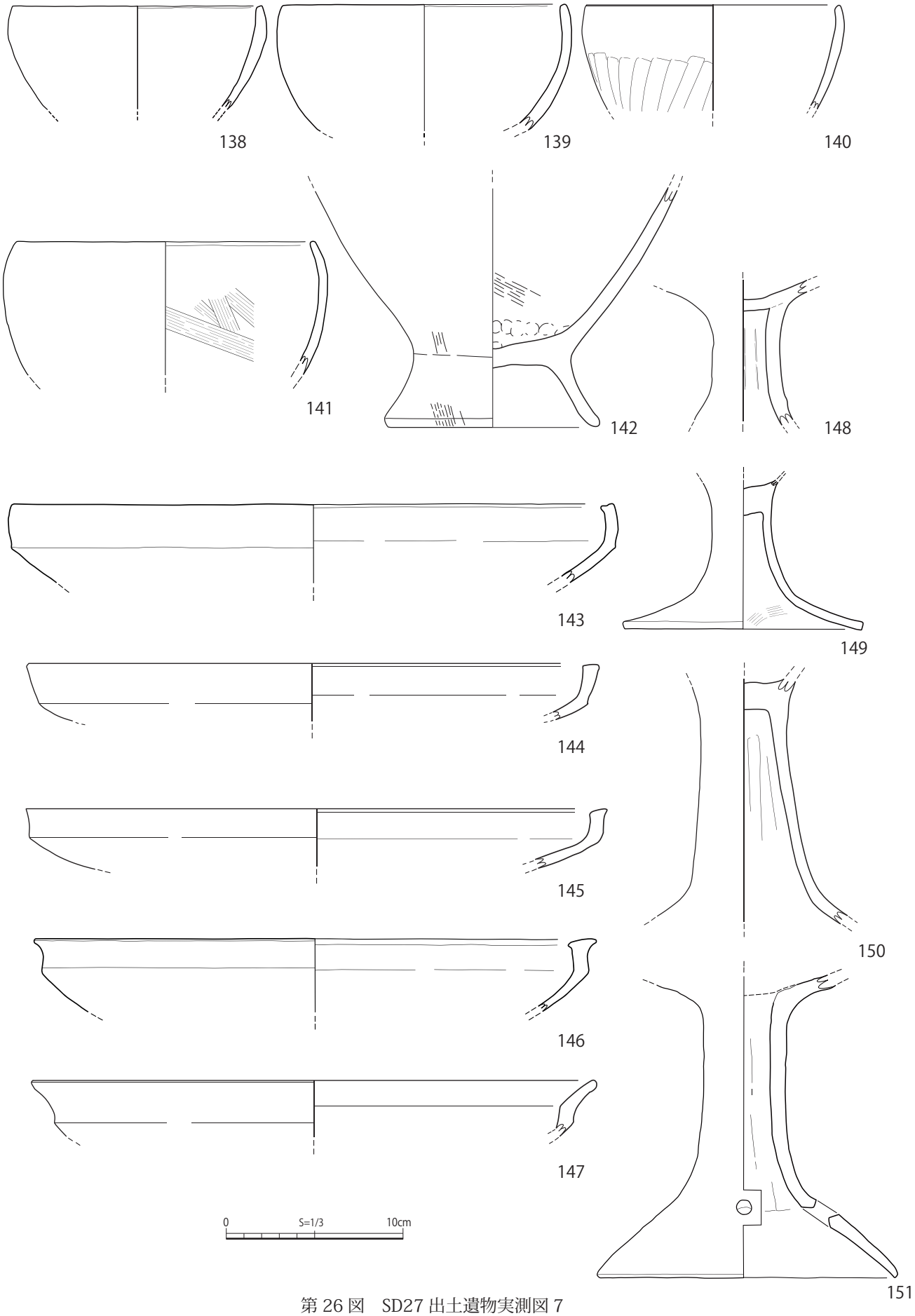

第 24 図　SD27 出土遺物実測図 5

132 は胴部外面に底部接合時の指頭圧痕が若干残る。器面調整の仕上げに縦方向のケズリが施されたため、その際に指頭圧痕は見られなくなったと考えられる。133 は残存する部分全体が黒斑となっている。135 は胴部外面に焼成後の穿孔の痕跡と黒斑が見られる。136 も胴部外面に黒斑が見られる。137 は底部が平滑であり胴部の立ち上がりは緩やかな曲線を描くように立ち上がる。138 ～ 142 は弥生土器鉢である。138 ～ 141 は口縁から胴部が残存している。全体的に磨耗し詳細は不明であるが口縁端部はヨコナデ、胴部外面はナデや縦方向のケズリ、胴部内面には縦方向のナデやハケメ調整の痕跡が見られる。胴部から緩やかに曲線を描き口縁部は内湾し、口縁端部は面を持つ。142 は弥生土器脚付き鉢である。底部内面には脚接合時のものと思われる指頭圧痕が見られる。それに対応する外面の指頭圧痕は丁寧にナデ消される。脚端部は先端が若干折り曲げられ、外に開く。143 ～ 151 は弥生土器高坏で、143 ～ 147 は坏部のみが残存し、149 ～

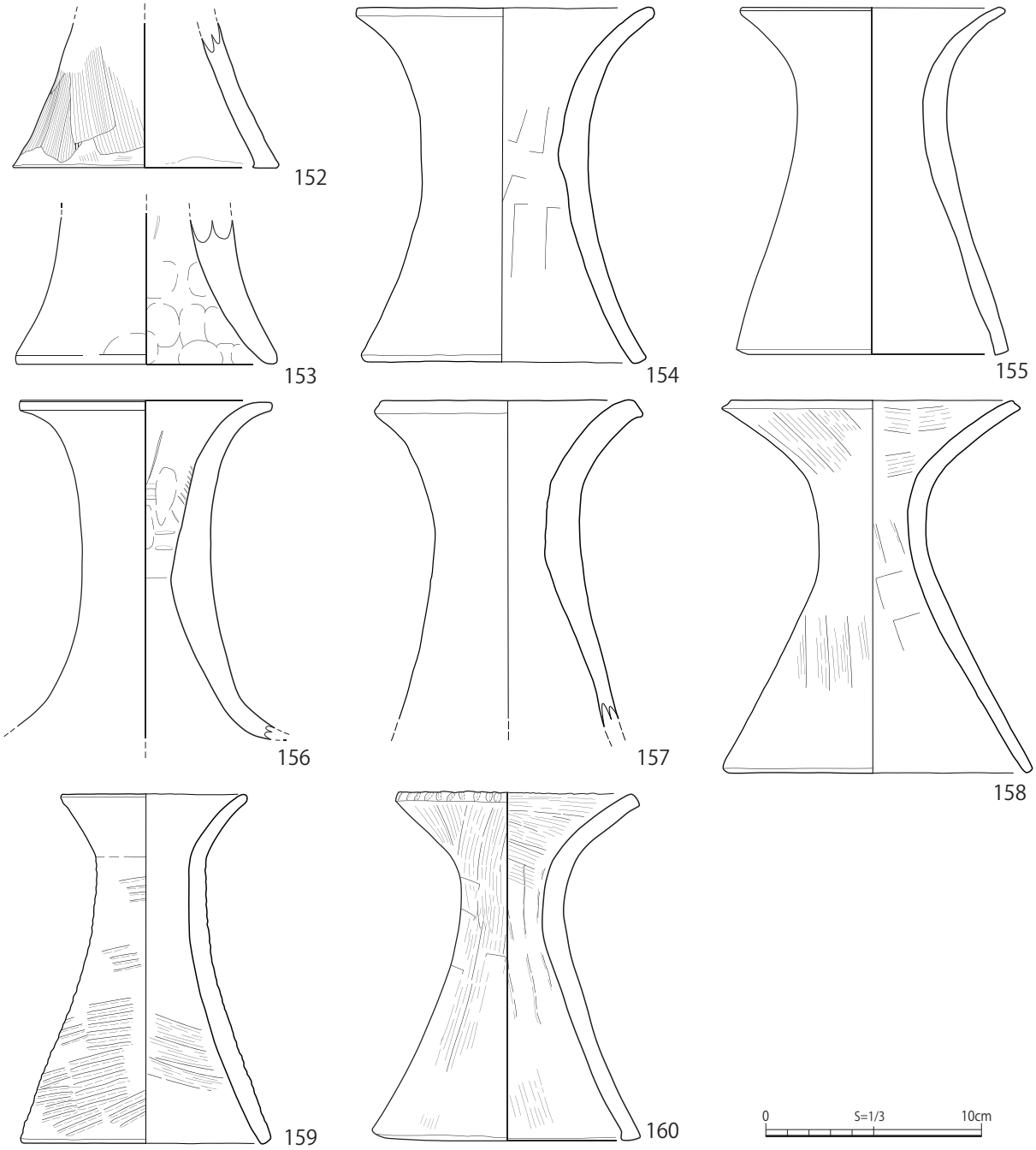



第 25 図　SD27 出土遺物実測図 6

151 は脚部のみ残存している。143 の坏口縁は若干内湾し、端部は仕上げにヨコナデを行い内側に傾斜する面を持つ。144 ～ 146 は 143 と比較して口縁の立ち上がりが短く、端部に見られる面も平坦であるが、145、146 では面の角を内外につまみ出すように仕上げられる。特に 146 ではそれが顕著であり内面には角が突出する。147 は坏口縁手前で一度外方へ折り曲げ、さらに外へ開く。端部は丸くおさまる。148 ～ 150 の高坏の脚部は坏底部にそのまま接合を行う方法をとると思われるのに対し 151 は最後に半球状の粘土を脚上部につめて仕上げる方法をとっている。148、150、151 の脚内面には絞り痕が見られる。148、149 と比較して 150、151 は長脚である。149 と 151 は脚の端部が残るが､脚端部の開きが 149 がくぼむように曲がっているのに対し、151 は緩やかに膨らみながら広がる。また 151 には 2 つの穿孔が見られ、完形であれば 4 つの穿孔があったと思われる。152 ～ 160 は弥生土器器台である。ほぼ完形であるのは 159、160 で他は図上復元にて器形の把握に努めた。上部に関しては 156 が上端部を若干折り曲げているが他の

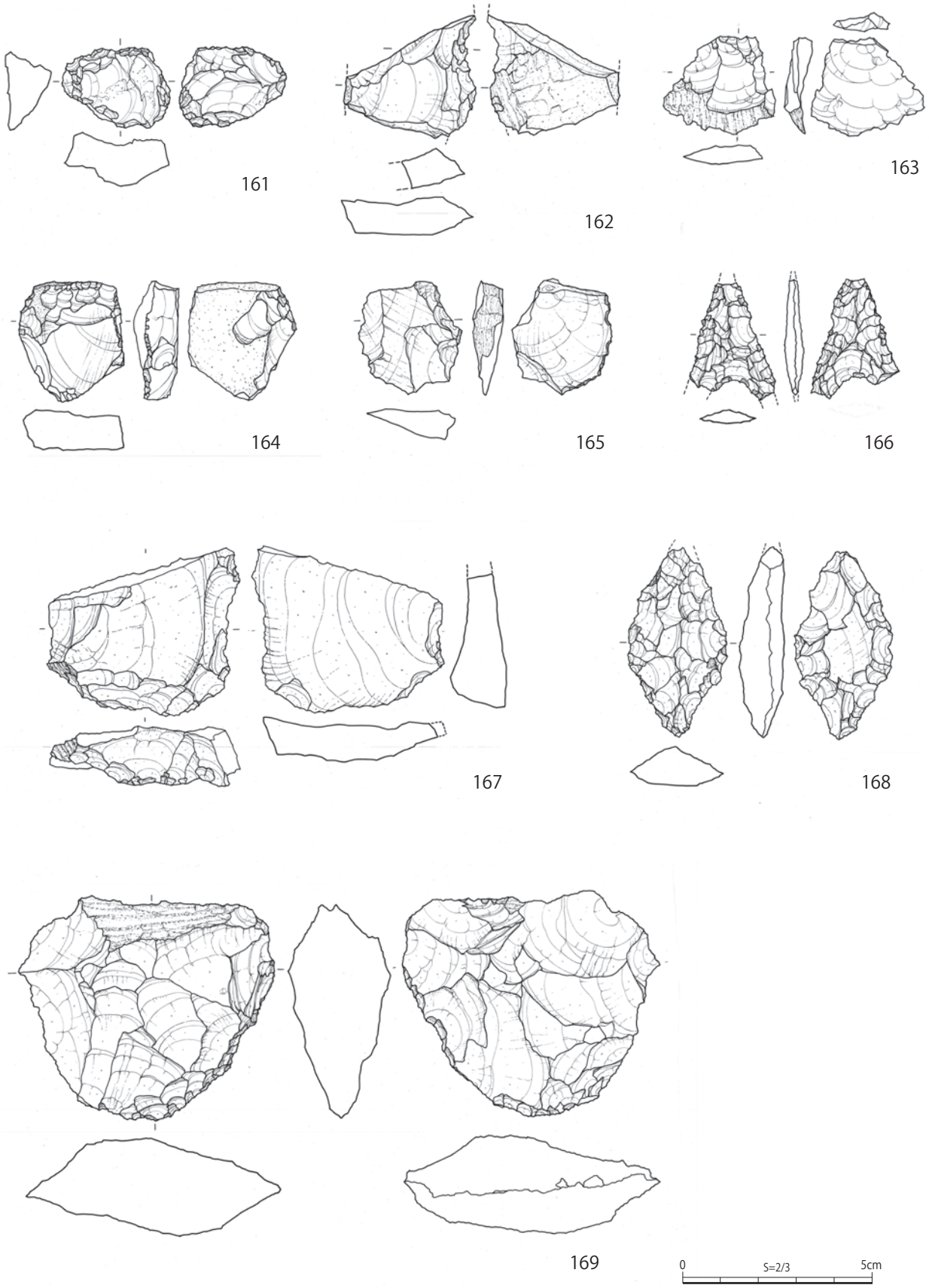



第 26 図　SD27 出土遺物実測図 7

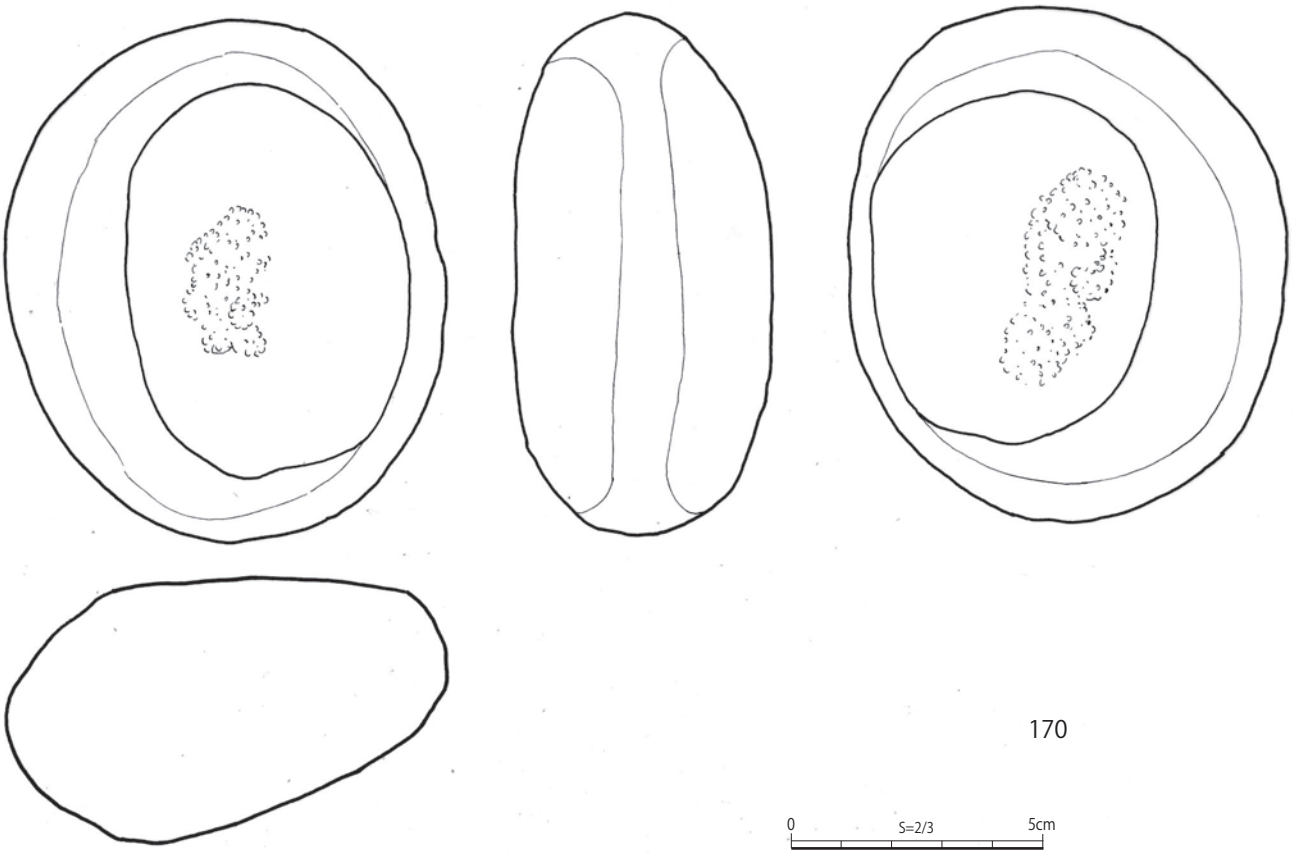



第 27 図　SD27 出土遺物実測図 8

器台はくびれ部から斜め上方に直線的に立ち上がる。下部は 152、155、158、159、160 が下端部を若干内湾させ接地面を平坦としている。153、152 の下部はヨコナデにより接地面を平坦とし、下端部は内側に若干つまみ出される。153、156 は下端部付近で若干外側に折り曲げられ、153 の下端部は丸くおさめられる。158、160 はくびれ部が細く絞り痕が残る。くびれ部の位置は総じて器高に対し上にある。159、160 は上部径に対し下部径が広くなる。159 は外面にタタキ痕が残る。161 は黒曜石製の楔形石器である。斑 ( ふ ) 入りではあるが漆黒で良質の黒曜石である。おそらく西北九州産であろう。a 面上端部および b 面下端部に急角度の細かな剥離が連続し、縁辺が潰れた状態を示している。楔形石器はこのような縁辺の潰れが上下、左右で対応することが多く、a 面左端部と b 面左端下部も対応しているようだ。162 はサヌカイト製の内湾型削器 ( スクレイパー ) である。上部が欠損しているため全体の形状は不明である。刃部は a 面右側辺にある。鋸歯縁状の剥離を連続して施し、内湾するように仕上げている。矢柄などの曲面製作に使用したのかもしれない。163 は斑入りではあるが良質の黒曜石剥片である。70（第 18 図）の石材




第 28 図　SD27 出土遺物実測図 9



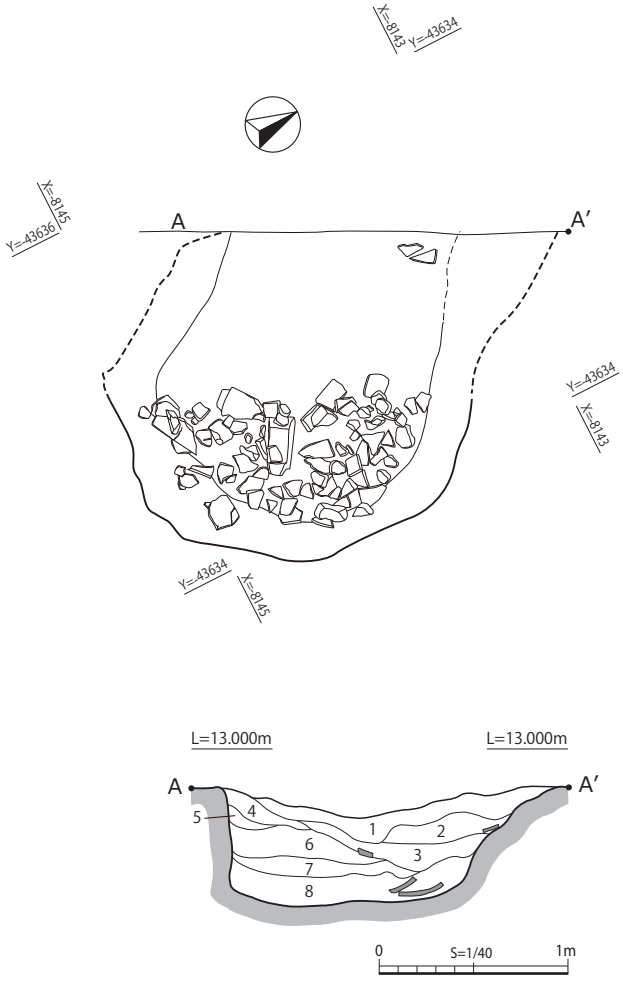

第 29 図　SD27 出土遺物実測図 10

と類似する。当遺跡の標準的な剥片よりは小さいであろう。164 は漆黒の良質な黒曜石を用いた楔形石器である。石材は西北九州産であろう。楔形石器に特有の縁辺部の潰れは、a 面上端部と下端部折れ面に見られる。また、b 面右側辺上部・a 面左側辺上部と a 面右側辺上部も対応するように細かな剥離痕が連続している。なお、a 面左上および b 面には原礫面が残されていることから、板状をした黒曜石の小原礫が素材として利用されたようだ。165 はサヌカイト製の剥片である。a 面中央部には主要剥離面と見なされる平坦な剥離面が観察できる。おそらく、この剥片を剥ぎ取った石核が大型の剥片を素材としたものであったことが推定される。a 面右側辺の細かな剥離痕の連続と対応するように b 面右側辺には細かい刃こぼれ状の剥離が連続しており、楔形石器としての分類も可能である。なお、b 面上部の打面には打撃痕が確認できる。166 はサヌカイト製の凹基三角打製石鏃である。両面とも丁寧な剥離を施している。抉りは深く、脚部はやや外反するように延びるようだ。先端部と両脚部の一部を欠くが、全長を復元すると 4cm を超えるだろう。167 はサヌカイト製の掻器である。a 面下端部から右側辺にかけて急角度の剥離が連続しており、掻器の刃部となっている。上端部が欠損しているため全体の形状は不明である。この石器は 43・300 とともに風化が著しく旧石器の可能性が強い。168 は良質のサヌカイトを用いた有茎菱形石鏃である。全体の剥離痕や整形の状態からみると未成品の可能性が強い。復元全長は 5cm を超え、重量が 11g の大型品である。45 とともに鉄鏃を模倣した製品であろう。B 面中央部に剥片の際の主要剥離面が残されている。剥離方向からすると分厚い横長剥片を素材としたようだ。169 は斑晶の多いサヌカイト製の石核を転用した削器である。両面とも周囲から中心へ向けて剥離を繰り返し、目的とする剥片を生産している。両面に残された剥離痕から見ると、目的とする剥片は 257 と同様に方形に近い剥片であろう。なお、この石核はその後、a 面右側辺から下端部にかけて細かな剥離を施し刃部としている。それらの稜上には潰れが見られ、特に下端部稜上の一部には使用によると見られる著しい磨耗痕が 2 カ所見られる。このような磨耗痕を生じさせる使用については、革製品製作のなめし作業もその一つかもしれない。170 は安山岩製の磨石である。全面にわたって擦られているが、特に a 面と b 面の中央部に平坦な磨面が見られる。また、それらの磨面の中には敲打痕と思われる小さな凹みが集中しており、石皿としての利用もあったようだ。

SK29（第 30 図）

調査区北部の E8 グリッドに位置するややいびつな円形の土坑である。遺構の西側の一部が調査区外になる。炭化物層に覆われ、SD27 と SK33 を切る。検出長軸 1.8m、検出短軸 1.5m を測る。長軸は北から西側に 63°振れる。深さは 0.6m を測り、断面形は箱状をなす。遺構埋土は 8 層から構成される。

埋土は上層から下層に区分できるが、上層埋土は 1 ～ 3 層の 4 層であり、褐色～灰黄褐色土からなる。1、2 層に炭化物を多く含む。遺物は 2 層と 4 層から瓦や土器が出土する。上層埋土は調査区北部を広く覆う炭化物層（西壁 7 層）と同時期の可能性もある。下層埋土は 5 ～ 8 層の 4 層からなる。遺物は、中世瓦や中世土器・貿易陶磁器が出土する。上位を覆う焼土・炭化物層（西壁 7 層）からも同時期の中世瓦、中世土器・貿易陶磁器が出土する。層序で時期差は認められるが、遺物はほぼ同時期と考えられ、土坑の埋積と焼土・炭化物層（西壁 7 層）による被覆の間隔は短いとみられる。炭化物層（西壁 7 層）から 16 世紀中頃に製作された白磁の小皿が出土しており、本遺構は 16 世紀中頃にはすでに廃絶されていたとみられる。本遺構は中世瓦が多く出土した土坑でもあり、軒丸瓦、軒平瓦　丸瓦、平瓦、道具瓦が出土している。これらは、軒丸瓦の瓦当の型式、丸瓦や平瓦の粘土塊からの切り出し痕、面取等からみて室町時代のものと考えられる。

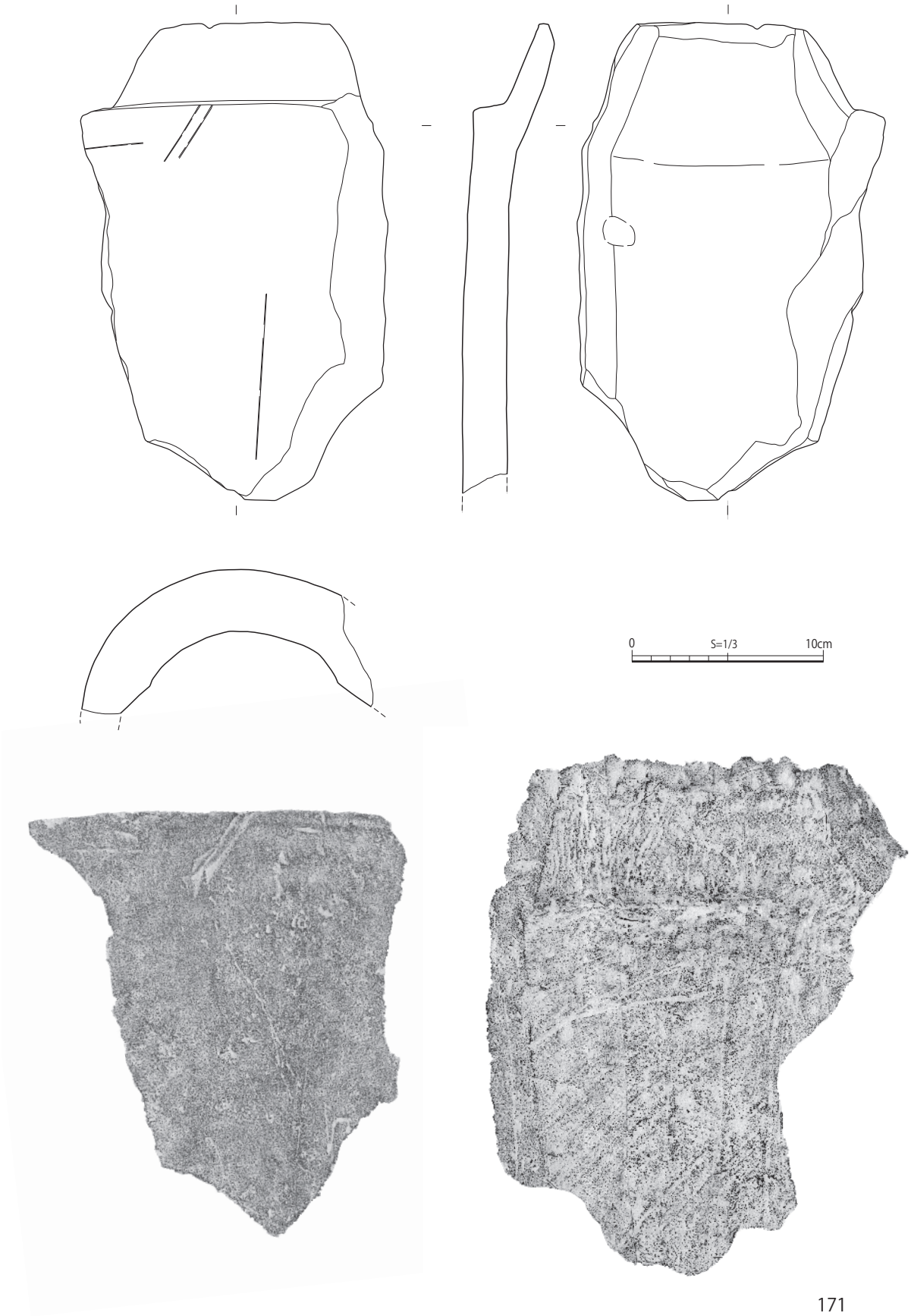



1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR 4/3)
　炭化物を大量に含むため全体として黒褐色に見える。
2. 褐色粘質土 (10YR 4/4) 炭化物をかなり含む。瓦片を含む。
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) 土器片、瓦片を含む。
4. 褐色粘質土 (10YR 4/4) 炭化物は含まない。
5. 灰黄褐色土 (10YR 3/3) 砂質。
6. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4) 石英粒をかなり含む。
7. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4) 粘質が強い。
8. 暗褐色粘質土 (10YR4/3)
　親指大の岱明層橙色粘土ブロック、瓦片を含む。

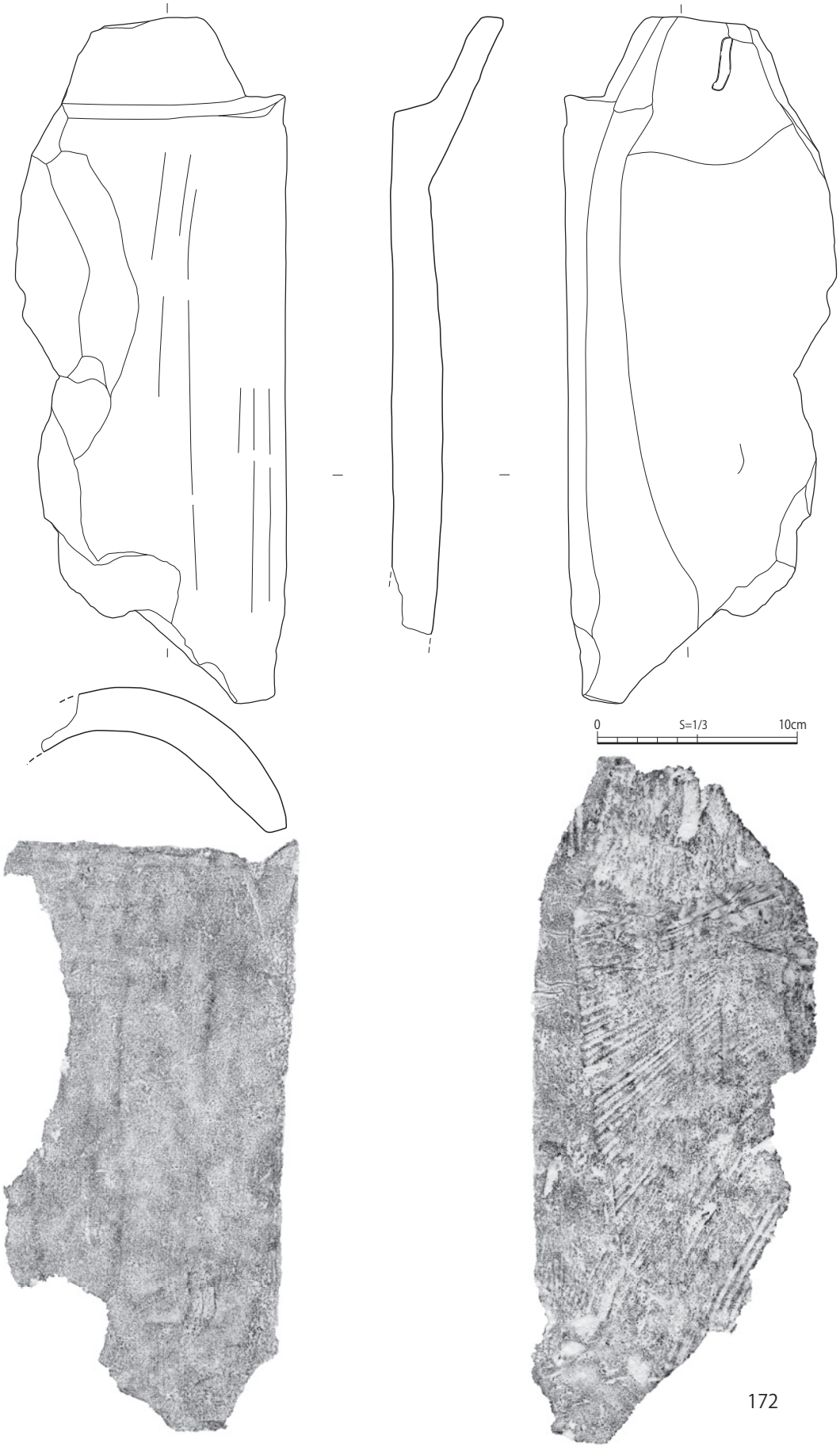
第 30 図　SK29 実測図（S=1/40）

SK29 出土遺物（第 31 図～第 37 図）

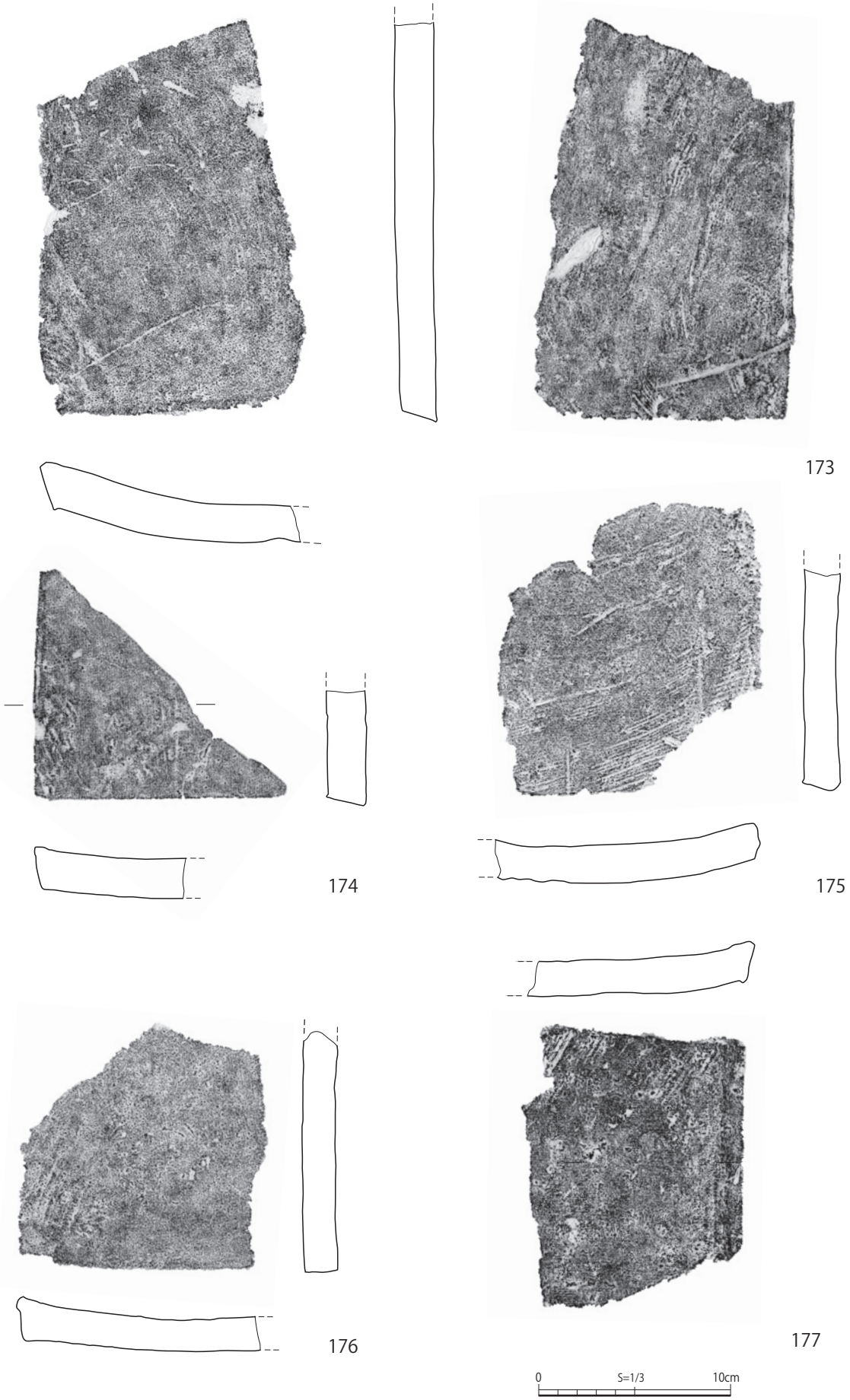
171、172 は丸瓦である。凹面にコビキ A の痕跡が見られる。173 ～ 193 は平瓦である。173 の凸面には凹面台成形時の痕跡が見られる。174 凸面側縁は若干張り出すが側面は丁寧に成形される。175 は凸面にコビキ A の痕跡がみられ、凸面側縁は若干張り出し、凹面側縁は面取りされた箇所も見られる。176 の凹面側縁付近は指頭圧痕が若干見られる。177 の凸面側縁は若干張り出し、凹面には幅 1cm 程度の縁がみられ、凸面台成形による痕跡の可能性がある。178 の凹面にはタタキによる圧痕のような工具痕が見られる。凸面側縁は若干張り出す。179 は凸面側縁に凹面台成形時に粘土がはみ出したような張り出しが見られる。凹面側縁はつまみながらヨコナデを行う。180 は凸面側縁に若干の張り出しが見られる。凹面では約 3cm 幅で緩い凹凸が見られる。181 は凸面側縁が若干張り出す。182 は両面に糸切り痕がみられ、凸面側縁は若干張り出す。凹面広端は深めの面取りが行われる。全体的に燻されておらず赤瓦状の外見を呈す。183 は凸面に糸切り痕とは別の沈線状の工具痕が見られる。凸面側縁は若干張り出す。凹面側縁は面取りを行っている。184 は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面には斜め方向の工具痕（ケズリもしくは工具使用によりナデ）が見られる。凹面側縁は丸くなっており面取りされた可能性が考えられる。185 は凹面側縁までコビキ痕が確認される。破片のため広端か狭端かは不明であるがこの部分に若



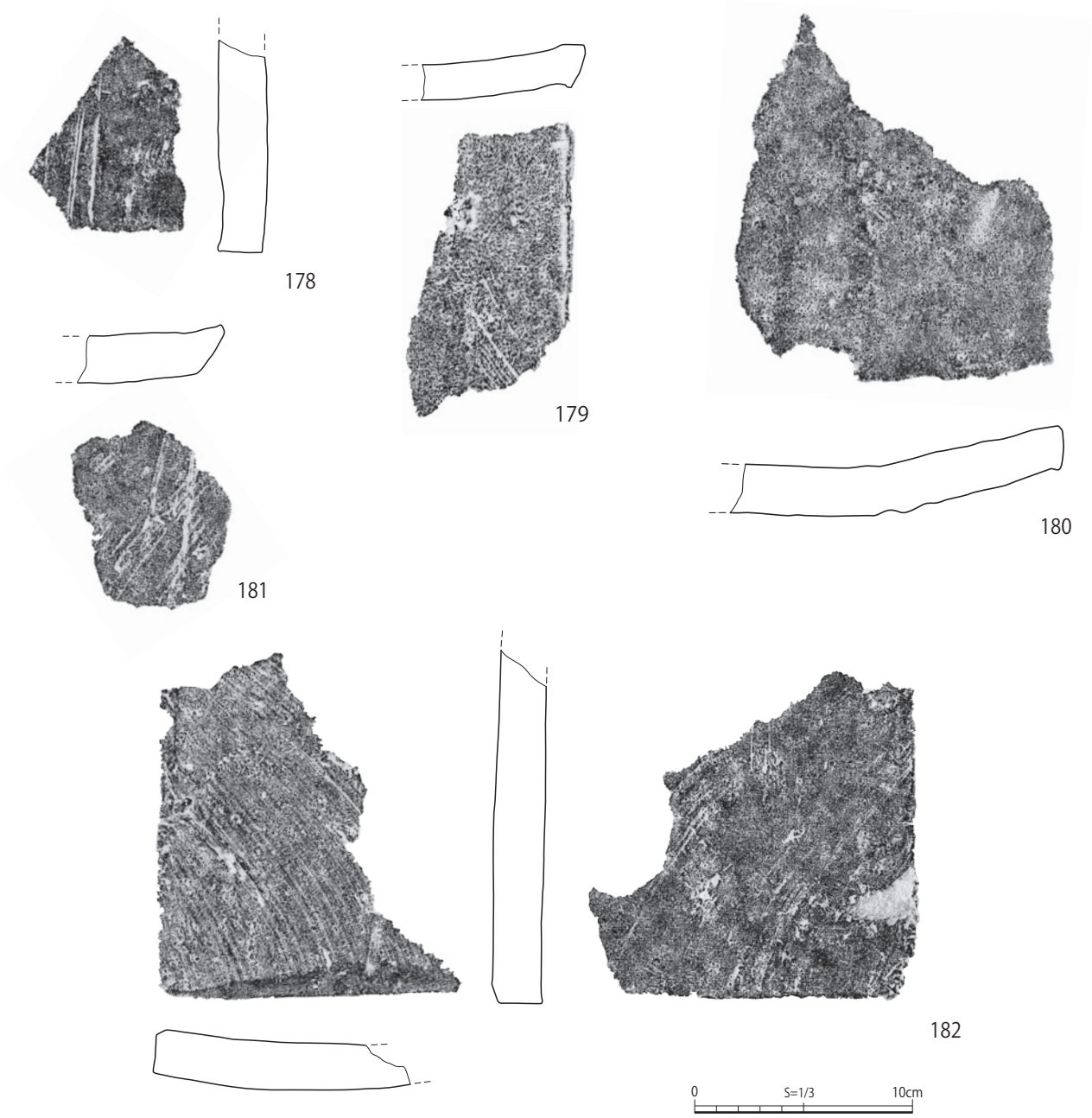

第 31 図　SK29 出土遺物実測図 1




第 32 図　SK29 出土遺物実測図 2

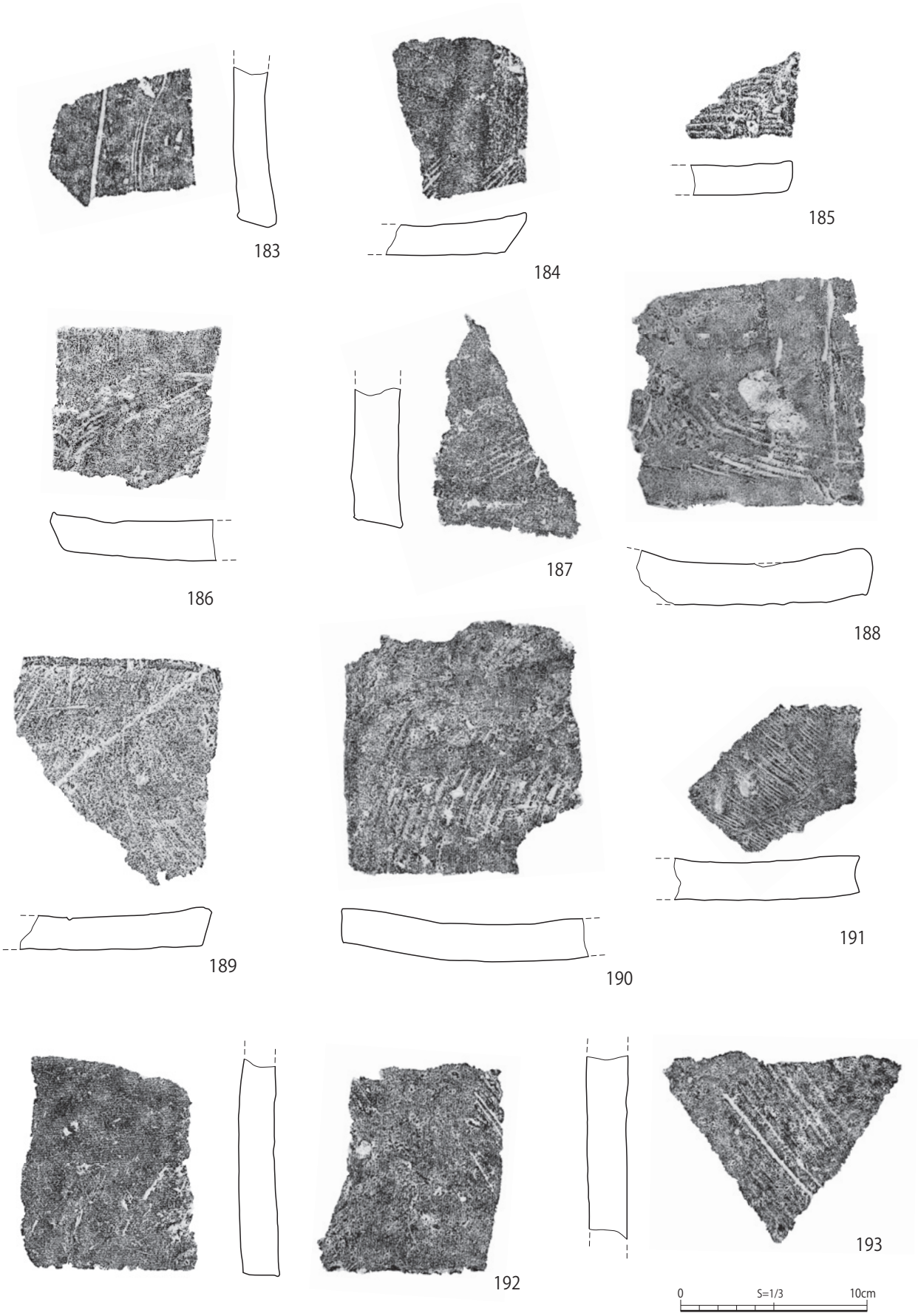



第 33 図　SK29 出土遺物実測図 3

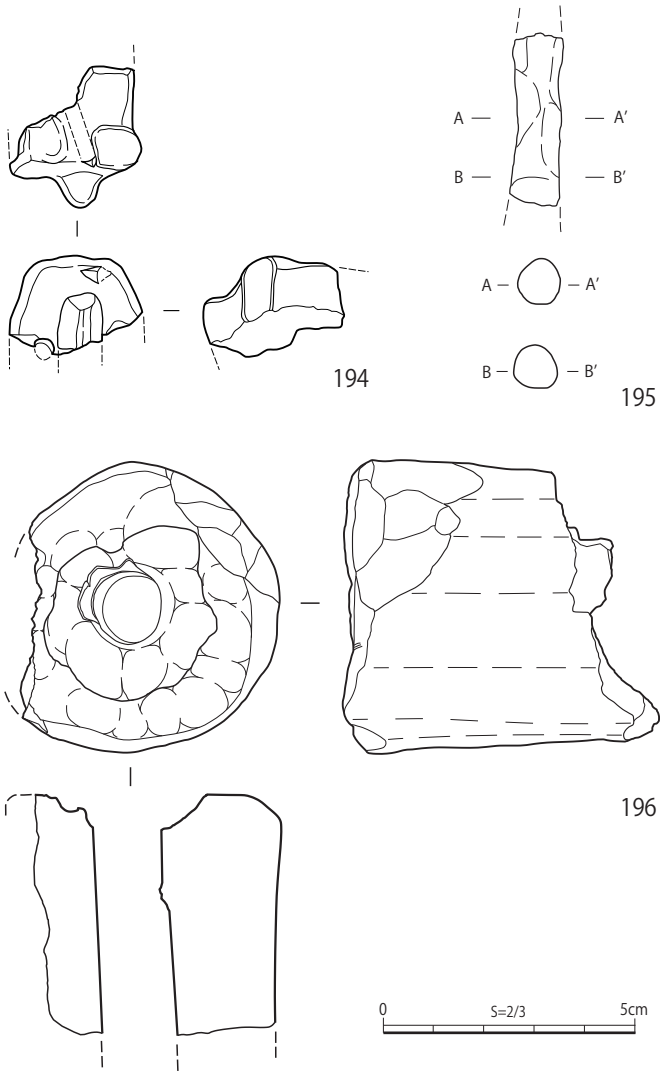



第 34 図　SK29 出土遺物実測図 4

干のくぼみが見られ、明確な面取りは確認されない。両面の側縁は丸くなっている。186 の凹面側縁も丸くなっており面取りをされた可能性がある。広端（狭端の場合もあり、以後は端部とする）には浅い面取りが見られる。187 は凸面端部縁が若干張り出す。凹面端部には浅い面取りが行われる。比較的厚い。188 は凸面には沈線状の工具痕を境界として側縁まで幅 2cm 程度の平滑な面を持つ。凹面では端部に浅い面取りが行われる。凹面にも凸面と同様に沈線状の工具痕を境界として幅 1.5cm 程度の平滑な面が見られる。凹面側縁は丸くなっており面取りされた可能性がある。189 の凹面には斜め方向（対角線状）に沈線が見られる。端部には角に少し面取りが行われる。190 は凸面端部縁が張り出す。凹面端部部には浅い面取りがみられ、凹面側縁は丸く、面取りが行われている可能性がある。191 は凹面には側縁との間に幅 1.5cm 程度の平滑面が見られ、側縁にはユビオサエが行われている。192 は凸面端部が若干張り出し、凹面広端には浅い面取りが見られる。193 は凸面にコビキ状の痕跡が見られる。194、195 は瓦質土製品である。194 は粘土を貼付け、ナデを行い成形している。一見すると犬の顔のようにも見えるがモチーフは不明である。2 箇所で穿孔がみられ、内一つは内側に押しつぶされた三角形状の形状をしている。195 は細い柱状の土製品。全体をユビオサエ（握り）にて成形しているが詳細は不明である。196 は




第 35 図　SK29 出土遺物実測図 5

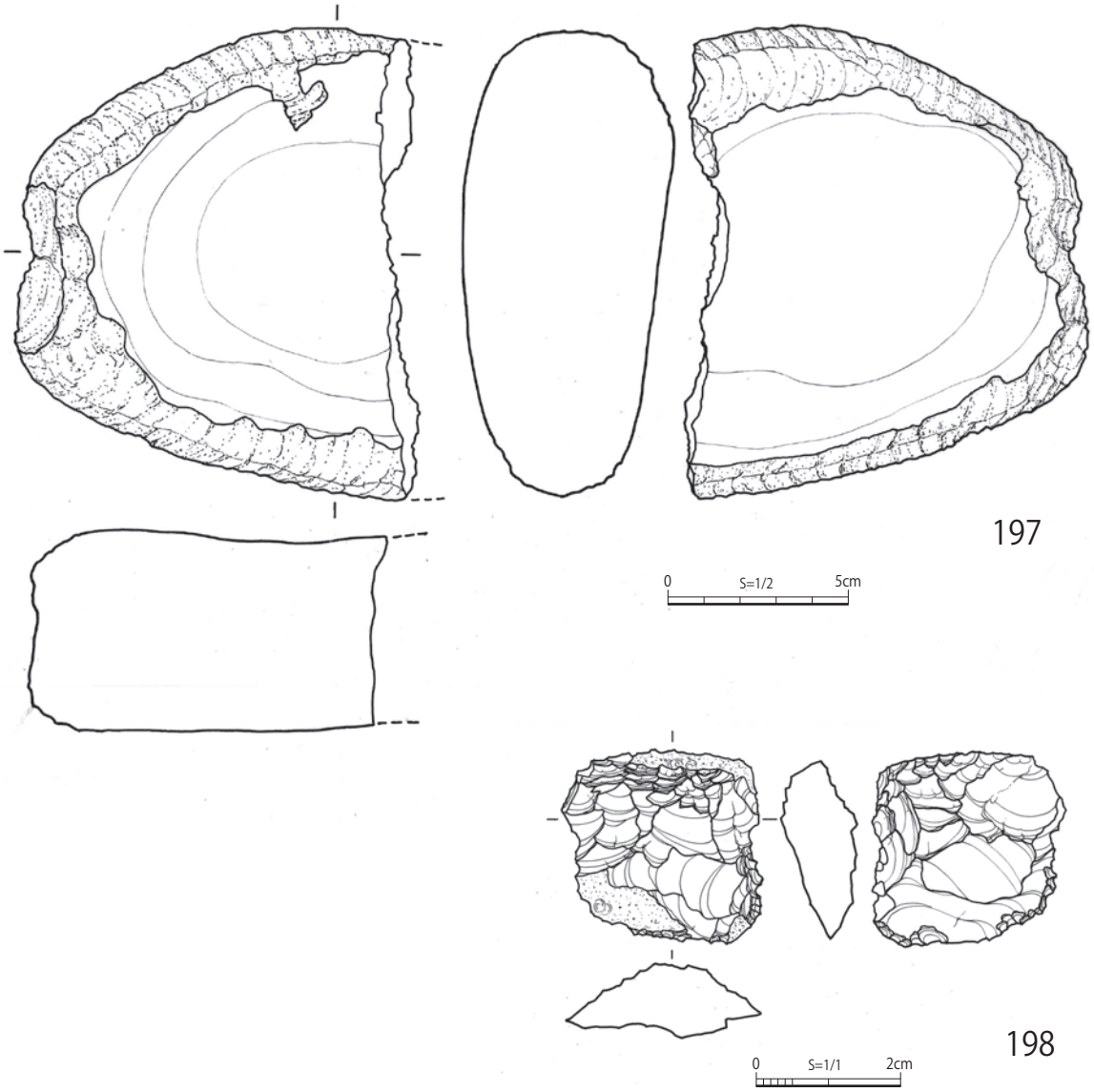



第 36 図　SK29 出土遺物実測図 6

筒状の瓦質土製品である。中央に穿孔があり穿孔の周辺は一段窪む。道具瓦の一部である可能性も考えられるが詳細は不明である。197 は安山岩製の石皿である。約 1/3 が欠損している。a 面、b 面ともその中央部に摺面があり、b 面はほぼ平坦な面となっている。それに比べ、a 面は曲面になっており、磨耗の度合いも高く、つるつるの面となっている。砥石としての機能も考慮しなければならない。198 は漆黒で良質の黒曜石を用いた楔形石器である。石材は西北九州産であろう。a 面左側辺上部と b 面右側辺上部をのぞき両面の縁辺に細かな剥離痕が連続しており、潰れが認められる。また、両面は上下左右方向の剥離痕でほぼ覆われており、楔形石器の典型例とすることができる。

E8 トレンチ出土遺物（第 38 図～第 41 図）

199 ～ 221 は SK29 からの出土遺物ではないが、E8 トレンチ（第 9 図参照）掘削には SK29 の一部が含まれ、（E8 トレンチ掘削の結果、SK29 の検出につながった）SK29 に関連する可能性が高い。そのため SK29 出土遺物に続けて E8 トレンチ出土遺物の報告を行う。199 ～ 202 は丸瓦である。199、200 の玉縁凸面狭端縁は若干張り出す。199 ～ 201 の玉縁凹面狭端は面取りが行われている。玉縁凹面側面は肩部から玉縁狭端部に向けてケズリが行われ、199 はその後胴部広端部から肩部に向けて側面のケズリが行われる。凹面には糸切り痕が見られるが、コビキの可能性もある。203 は軒丸瓦である。残存している瓦当から径は約 17cm 程度で珠紋は 20 個程度あったと想定される。204 は軒平瓦である。瓦当部分は破損しており詳細は不明であるが交差する細い陽線状の紋が見られた。図では陽線が直線で表現しているが曲線の可能性がある。瓦当の外区には粘土が張り付く。205 は凹面端部部に深い面取りが行われるが、面取りの始点は縁に近い。凹面に側面に沿って爪のような痕跡も見られる。206 は凸面側縁が若干張り出す。凹面端部には浅い面取りが行われるが、面取りの始点は縁に近い。凹面側縁は複数回面取りが行われる。207 は丸瓦の玉縁狭端部分の破片である。肩部からの面取りは玉縁狭端部に向けて行われる。208 は凸面側縁には側面の成形に起因すると思われる粘土の張り出しが見られる。これは凹面台に乗せたまま瓦に対し垂直方向に側面を切り落とした可能性が考えられる。凹面端部は面取りがされるが、ケズリではなくナデの可能性がある。209 は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面は胴部から側縁に向けて強いナデが行われ、胴部から動いた粘土が側面に残される。これは凹面側縁の面取り後の調整である。凹面端部には浅い面取り後、更に縁の角を面取りしている。210 は凸面端部に若干の張り出しが見られる。凹面端部は角の部分を面取りしている。211 は凸面端部に若干の張り出しがある。凹面端部には明確な面取りは見られない。212 は凸面端部に若干の張り出しがある（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁は角が緩い。213 は凸面端部に若干の張り出しがある（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁には側面の成形に起因すると思われる粘土の張り出しが見られる。214 は凹面端部に浅い面取り（ケズリでなくナデか）が行われるが、面取りの始点は縁にやや近い。215 は凹面端部に深い面取りが行われる。216 は両面の側縁に面取りか行われている。217 は凸面側




第 37 図　SK29 出土遺物実測図 7

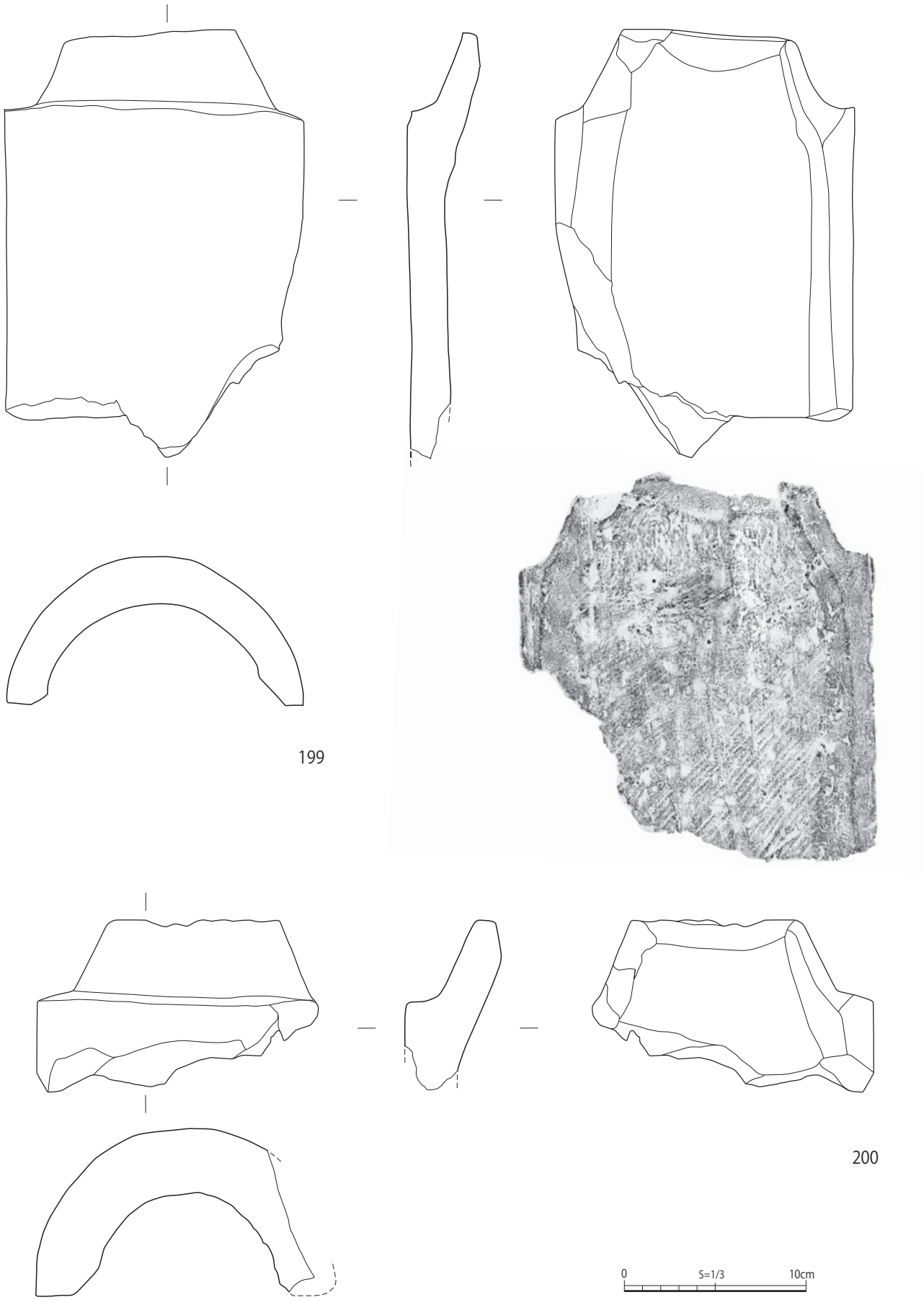
縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁は面取りが行われる。218 は凸面端部が胴部からのユビオサエにより若干張り出す。凹面端部には明確な面取りは見られない。219 は凸面側端は面取りが行われている。220 は側面成形時に押された粘土が凹面側縁に張り付く。凹面端部には面取りが見られない。221 は比較的薄く、凹面側縁がつまみ出され、側面が反る。

SD09（第 42 図）

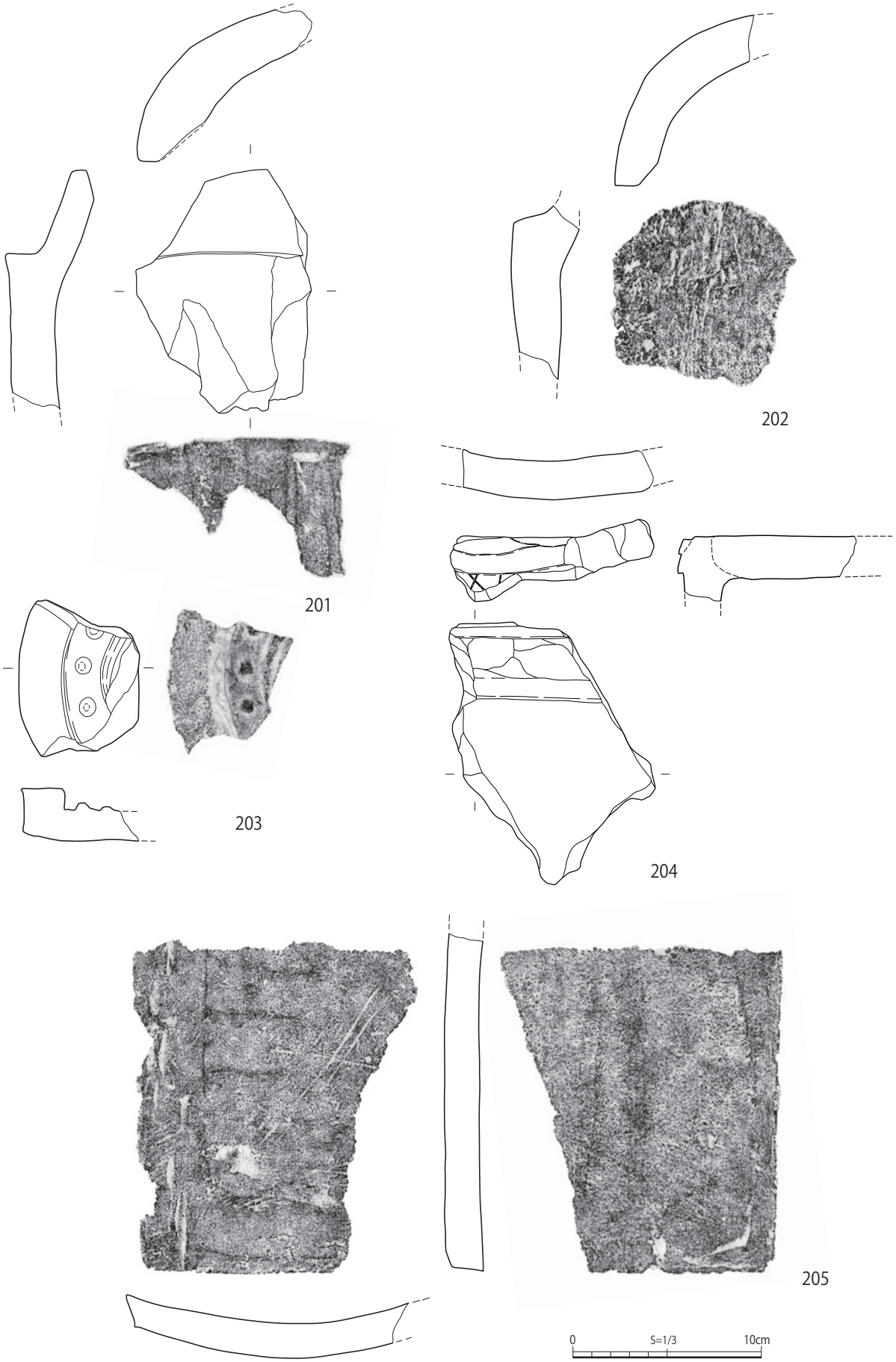
調査区北側の D7、E7、E6、E5 グリッドに位置し、南北に延びる溝状の遺構である。道路状遺構の西側を平行に延びる溝である。SK12 に切られる。検出長 6m、幅 0.7m を測る。長軸は北から西側に 15°振れる。深さは 0.5m を測り、断面形は半円状をなす。遺構埋土は単層で、褐色土である。

SD10（第 42 図）

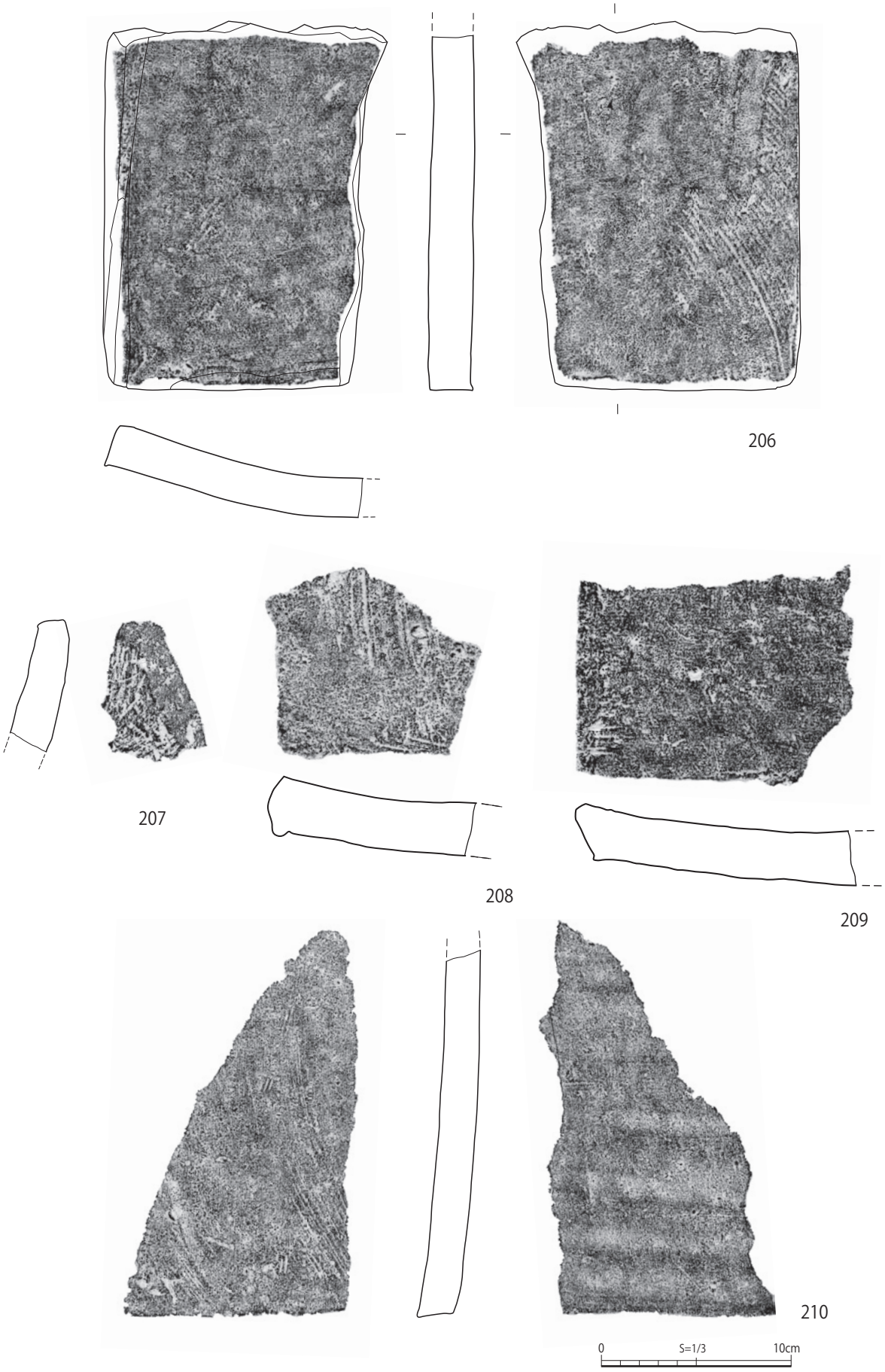
調査区北側の D7、E7、E6 グリッドに位置し、南北に延びる溝状遺構である。SD09 同様に道路状遺構の西側を平行に延びる溝であり、SD09 よりも道路状遺構寄りに位置する。検出長 18.58m、幅 0.9m を測る。長軸は北から西側に 12°振れる。SK11、SK12、SK26 土坑を切る。深さは 0.23 ～ 0.24m を測り、断面形は丸みを帯びた浅い薬研形をなす。遺構埋土は 4 層から構成され、1 層は暗褐色土（表土由来）、2 ～ 4 層は灰黄褐色土（岱明層由来）である。埋土は位置によって単層になることもある。



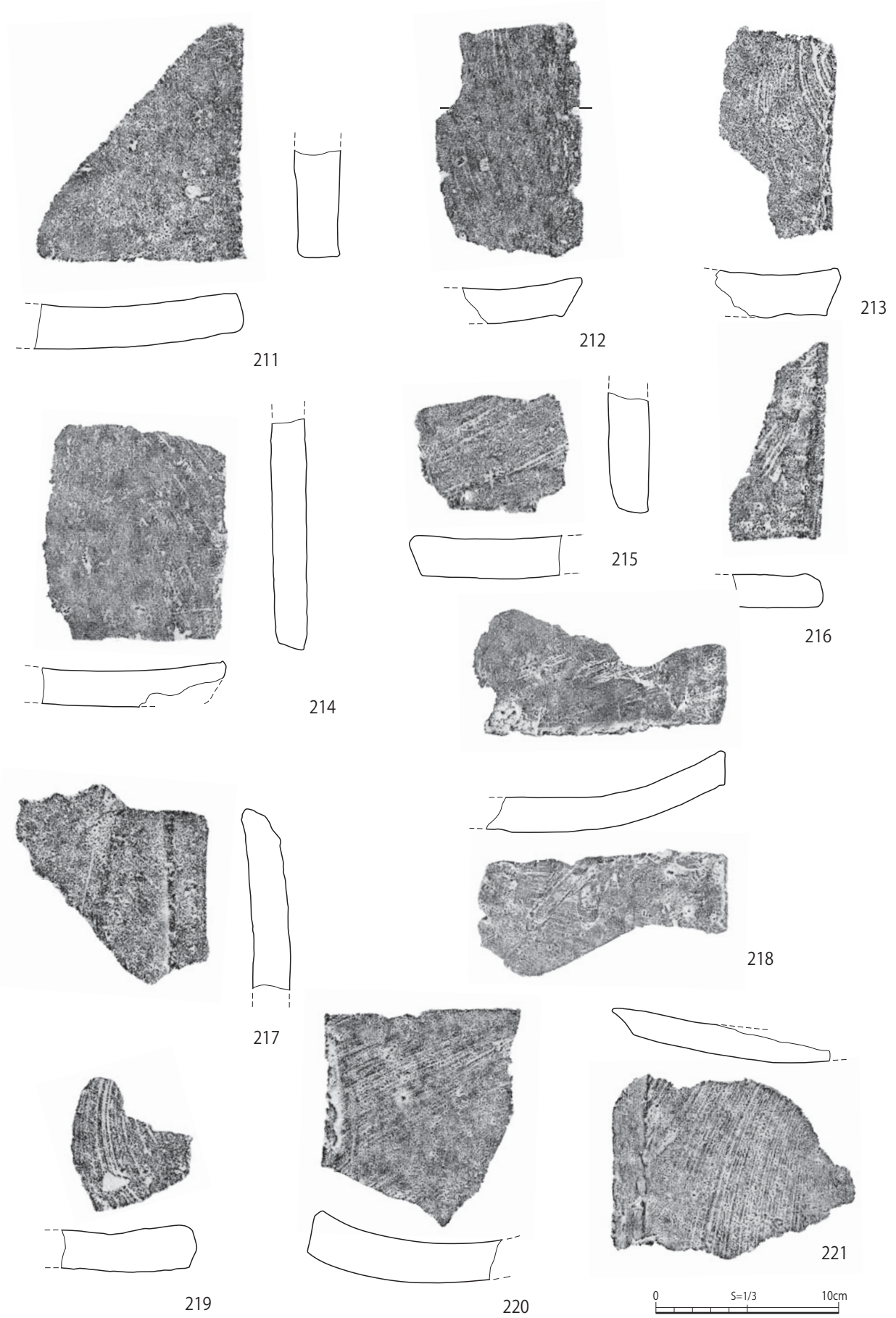

第 38 図　E8 トレンチ出土遺物実測図 1



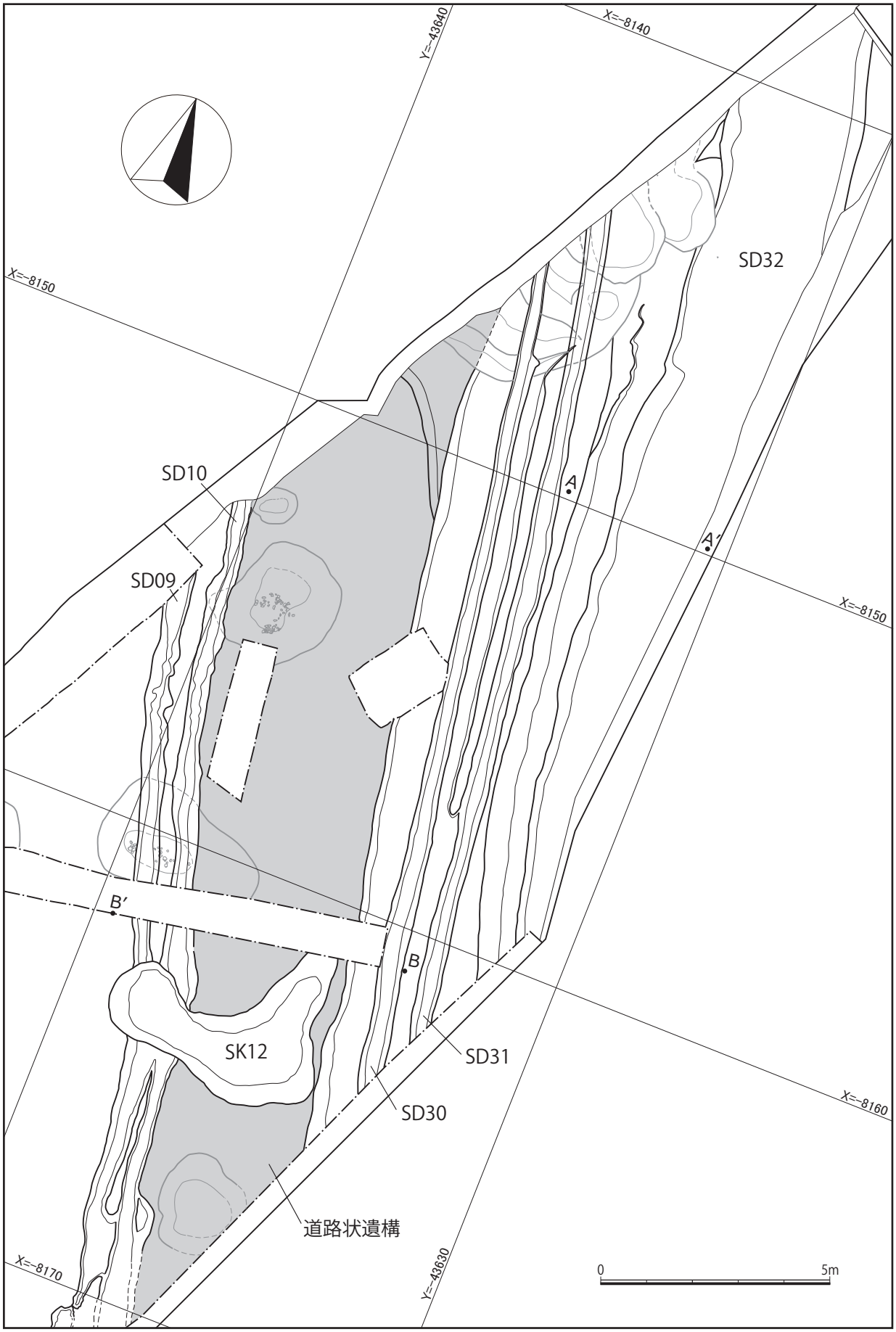

第 39 図　E8 トレンチ出土遺物実測図 2



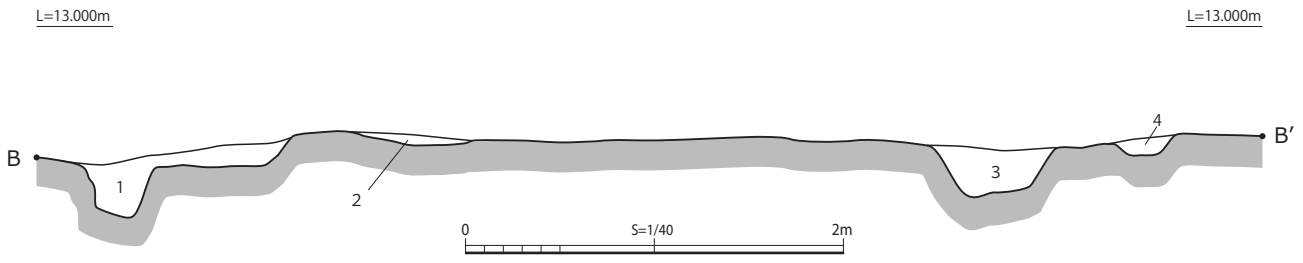

第 40 図　E8 トレンチ出土遺物実測図 3




第 41 図　E8 トレンチ出土遺物実測図 4

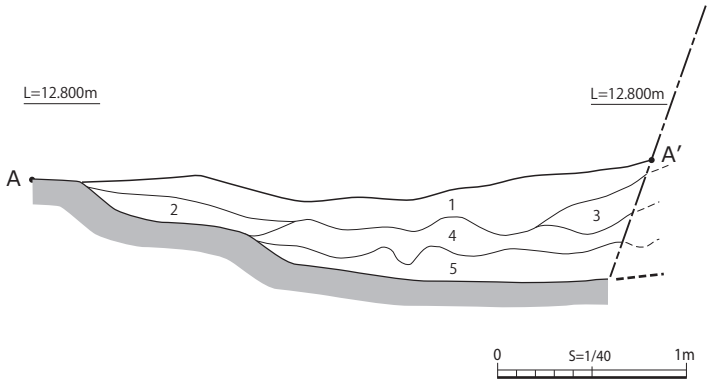



第 42 図　調査区北側道路状遺構周辺実測図（S=1/120）



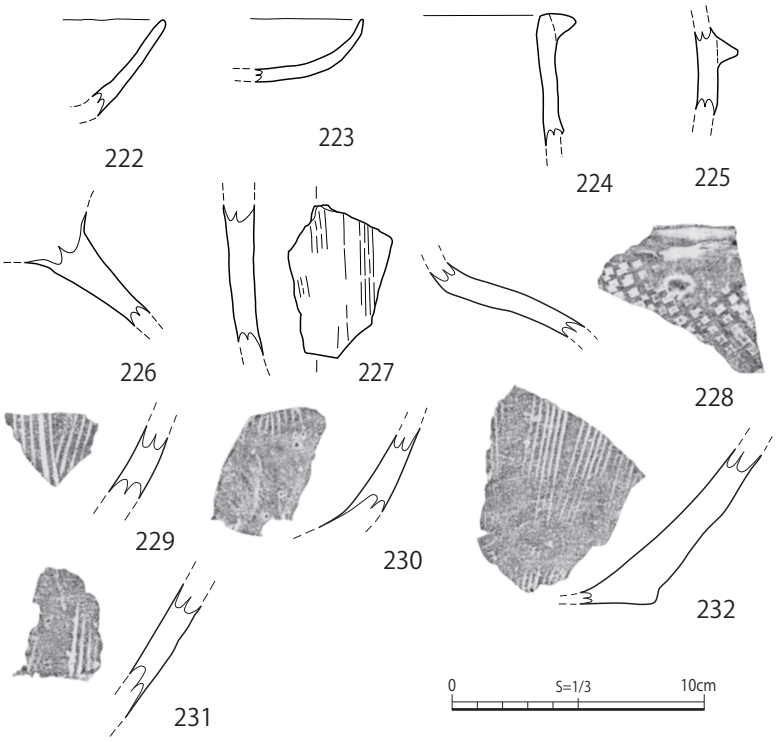

1. 黒褐色粘質土（10YR 3/1）　しまり弱く粘性も弱い。橙色粒子、白色粒子少量含む（極粗粒砂）
2. 暗褐色粘質土（10YR 3/4）　しまり、粘性ともに弱い。白色粒子微量含む。
3. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）　しまり弱く粘性やや強い。橙色粒子、白色粒子少量含む（極粗粒砂）
4. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）　しまり弱く粘性やや弱い。岱明層黄褐色粘土を含む

第 43 図　道路状遺構土層断面図（S=1/40）




1. 黒褐色粘質土（10YR 3/2）　しまり弱く粘性も弱い。橙色粒子、白色粒子少量含む。（極粗粒砂）
2. 暗褐色粘質土（10YR 3/2）　しまり、粘性ともに弱い。白色粒子微量含む。
3. 暗褐色粘質土（10YR 3/3）　しまり弱く粘性やや強い。橙色粒子、白色粒子少量含む。（極粗粒砂）
4. 黄褐色粘質土（10YR 5/6）　しまり弱く粘性やや弱い。白色粒子（粗粒砂）、暗褐色土粒多く含む。
5. 褐色粘質土　（10YR 4/4）　しまり弱く粘性強い。白色粒子（中粒砂）微量含む。

第 44 図　SD32 土層断面図（S=1/40）



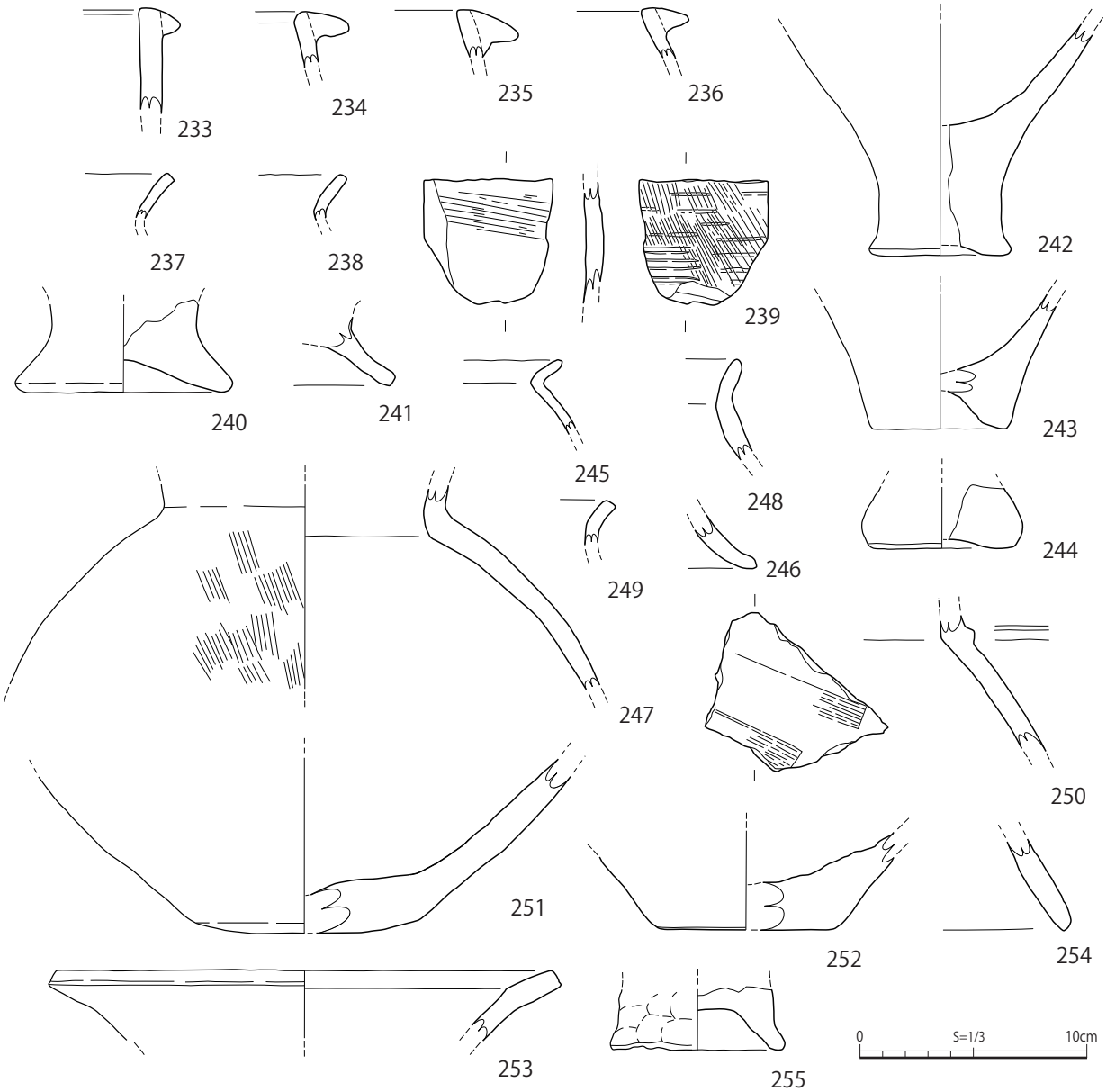

第 45 図　SD10・SD32 出土遺物実測図

SK12（第 42 図）

調査区北側の E6 グリッドの西壁付近に位置するいびつな不定形の土坑である。長軸 4.9m、短軸 3.9m を測る。長軸は北から西に 85°振れる。SD09、SD10 を切る。深さは 0.28m を測り、断面形は浅い擂鉢状をなす。

SD32（第 42 図）

調査区北部の E7、E8、E9、F7、F8 グリッドに渡って位置し、ほぼ南北に延びる溝状の遺構である。道路状遺構の東側に位置する大溝である。方向は道路状遺構と同じである。検出長 27m、幅 2m を測る。長軸は北から西側に 7°振れる。深さは 0.54m を測り、断面形は一段のテラスを持つ浅い逆台形をなす。本遺構は谷底と段丘の境目に設置されており、溝底のレベル高は南北でほとんど変わらず、塚原Ⅱ区における S001 のレベルも高低差は 10cm 以内である。遺構埋土は 5 層から構成される。埋土は 1、2 層が粘性の弱い黒褐色土～暗褐色土であり、3 層が粘性の強い暗褐色土、4 層が粘性の強い黄褐色土、5 層が粘性の強い褐色土である。4、5 層と粘性が高いので水中での堆積物であろう。一度掘りかえてその後、1～2 層が堆積もしくは埋め立てが行われたものとみられる。



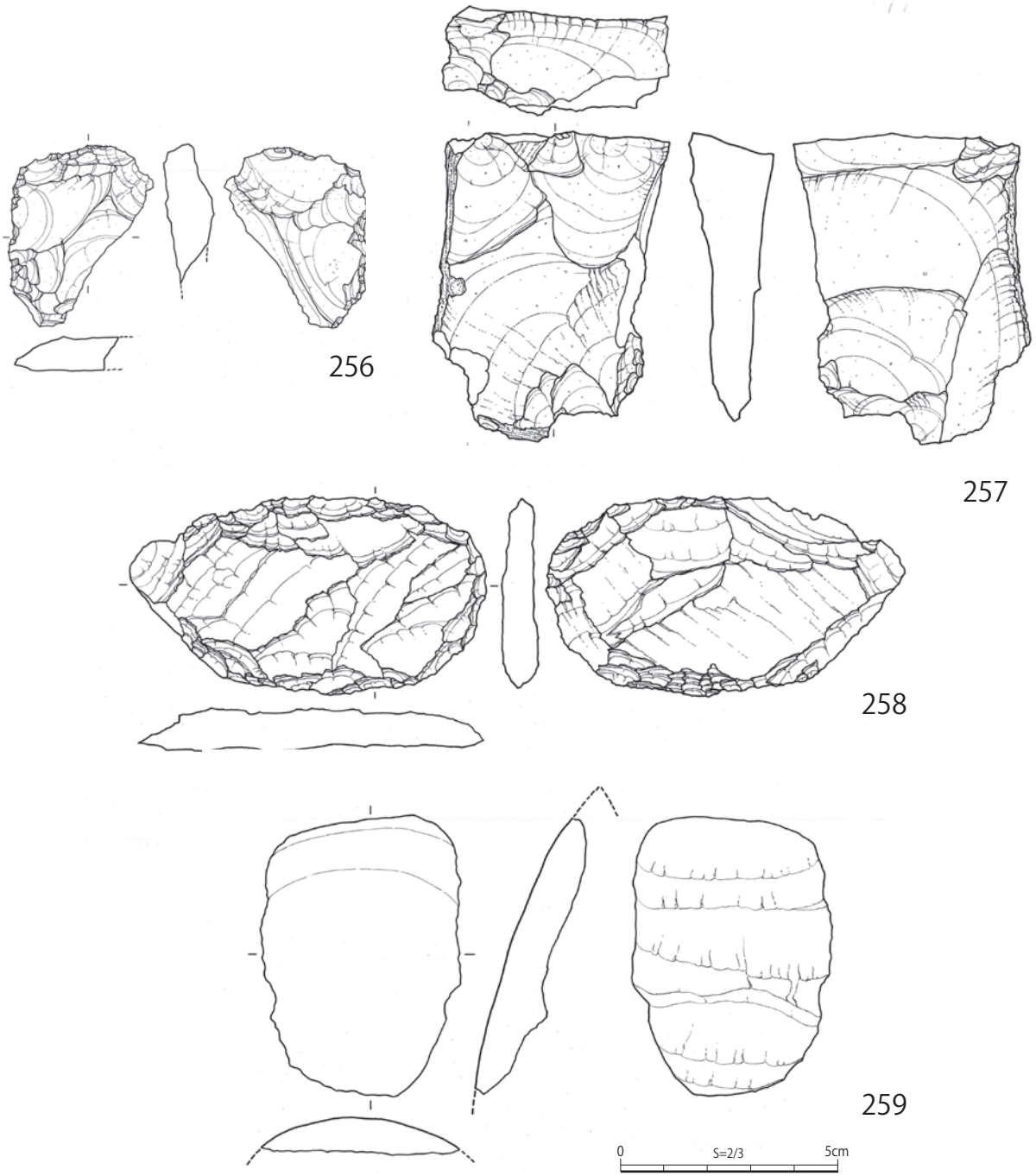

第 46 図　SK12 出土遺物実測図 1

道路状遺構（第 42 図　網掛け部分　第 43 図）

E8、E9 グリッドに南北に伸びる幅約 4m の硬化面が検出された。その硬化面は SD09、SD10、SD32 と同様の方向に伸びる。波板状遺構などは検出されていないが、硬化面が帯状に伸びる状況から道路であると想定される。硬化面東側にある 2 条の溝（SD30、SD31）は道路状遺構の埋没後に掘削されていることから、この遺構の伸びる方角は少なくとも近代まで地割として残っていたと考えられる。

SD10 出土遺物（第 45 図）

222 は弥生土器高坏の坏部である。端部は内湾し丸くおさまる。223 は弥生土器鉢胴部である。口縁部は緩く立ち上がる。224 は弥生土器甕口縁部である。断面三角形の突帯が貼付けられる。225 は弥生土器壺の胴部である。断面三角形の突帯が貼付けられる。突帯上部には指頭圧痕が見られる。226 は弥生土器甕の脚部である。端部が残っていないが「ハ」の字状に開くと思われる。227 は弥生土器器台である。外面にハケメ調整を行う。




第 47 図　SK12 出土遺物実測図２

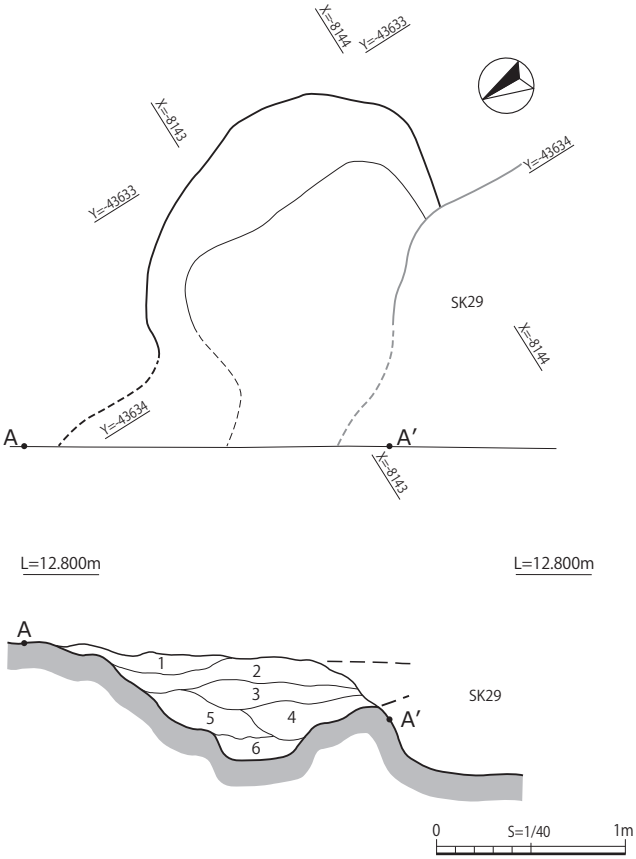
SD32 出土遺物（第 45 図）

228 は瓦質土器甕の頸部である。胴部に格子目タタキのち頸部にヨコナデが行われる。229 ～ 232 は瓦質土器擂鉢である。232 は 6 本 1 単位とした擂目が内面に残る。円盤状の底部を持つ。228、229、232 は焼成が良好であり、硬質である。

SK12 出土遺物（第 46 図）

233 ～ 238 は弥生土器甕口縁である。断面三角形の突帯が貼付けられる。233 は胴部が直立気味である。237、238 は口縁部が外反し、端部はヨコナデにより面を持つ。239 は甕胴部では胴部にタタキのちハケメ調整が行われる。240 ～ 244 は脚部である。240、242 ～ 244 は端部は肥厚し、上底状になる。241 は脚端部が「ハ」の字状に開く。245、247 ～ 252 は弥生土器壺である。245 は全体的に薄く口縁が「く」の字に折れ曲がる。247 は頸部から胴部である。胴部外面にはハケメ調整が行われ、頸部と胴部接合付近にはヨコナデが見られる。248 は口縁で端部は若干上方に

立ち上がる。249 は口縁部で端部はヨコナデにより面を持つ。250 は頸部から胴部である。頸部には断面三角形の突帯を貼付ける。251、252 は底部で、全体的に磨耗しており詳細は不明である。253 は高坏の坏部である。端部は面を持っており、その面もやや凹みがみられる。254 は器台下部で端部は「ハ」の字に広がる。255 は鉢の脚部である。全体に指頭圧痕が見られる。256 はサヌカイト製の楔形石器である。a 面側からの圧力により、a 面右上から左下にかけて斜めに折れ、石器の約半分は欠損している。想定される全体の形状は長方形である。残された長辺と短辺には両面に向けて急角度の細かな剥離が連続しており、楔形石器に特有の縁辺部の潰れが観察できる。257 は良質のサヌカイトを用いた石核である。a 面下半部には石核の素材となった大型剥片の主要剥離面 ( 腹面 ) を残している。a 面下端部と左端部には主要剥離面と平行する原礫 ( 石核の素材となった大型剥片を剥ぎ取った岩石 ) の節理面が残っており、大型剥片の剥離が節理に沿って行われたことを物語っている。剥離作業面 ( 石核から目的とする剥片を剥離する作業面 ) は a･b･c の三面あり、a 面は b 面と c 面、b 面は a 面、c 面は a 面を打面 ( 剥片を剥離する際にハンマーを打ちつける面 ) として利用している。石核に残された剥離痕は 3cm 前後の方形となっている。得られた剥片はおそらく石鏃の素材として利用されたのだろう。258 は結晶片岩製の打製石包丁と思われる。a 面左半部と b 面右下半部に結晶片岩の節理面が残されており、素材が板状であったことがわかる。素材には成形のための比較的大きな剥離が施され、周囲には整形のための細かな剥離が連続している。特に a 面上端部には b 面からの打撃による小さな剥離痕が連続し、ゆるやかな弧状になっている。おそらく片刃の刃部であろう。刃部の先端部は磨耗が進んでいる。また、両面の下半部にも磨耗痕が面として広がっている。これは手による擦れかもしれない。259 は福岡市今山産の玄武岩質安山岩を用いた石斧の刃部砕片である。形状から見ると刃縁直下の部分と考えられる。砕片の傾きから想定すると両刃磨製石斧であろう。




1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR 4/3) 鉄分をかなり含む。
2. 褐色粘質土 (10YR 4/4) 岱明層黄褐色砂質土を大量に含む。硬く締まる。
3. にぶい黄褐色砂質土 暗褐色粘質土 (10YR4/3) 白色石粒をかなり含む。
4. 黄褐色砂質土 (10YR 5/6) 岱明層砂土ブロックを含む。
5. 黄褐色粘質土 (10YR 5/6) 粘質が強い。
6. にぶい黄褐色砂土 (10YR 5/4) 岱明層黄橙色粘土ブロックをわずかに含む。

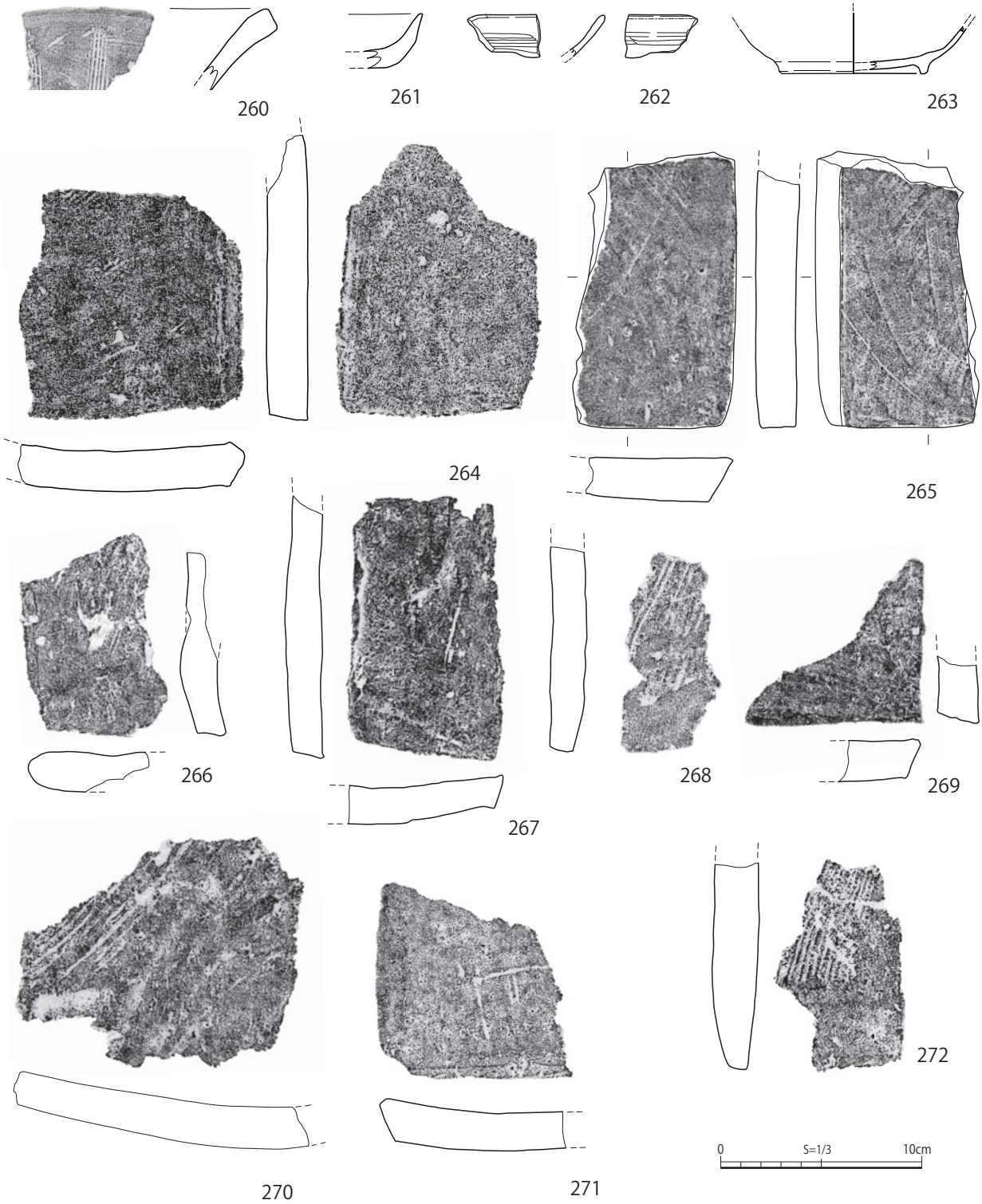
第 48 図　SK33 実測図（S=1/40）

SK33( 第 48 図）

調査区北部の E8 グリッドに位置するやや歪な楕円形の土坑である。SD32 掘削時に見つかったため遺構の一部は破壊してしまったが、SD32 の埋没後に掘削されている。遺構の西側の一部が調査区外になるため、SD27 と同様に溝となる可能性も考えられる。南西側は SK29 にも切られており全体の形状は不明である。検出長軸 1.9m、検出短軸 1.3m を測る。長軸は北から東側に 3°振れる。深さは 61cm を測り、断面形は浅い半円状をなす。遺構埋土は 8 層から構成され、各層とも黄褐色土である。遺物は、弥生土器であり、城ノ越式の甕、壺の破片が出土し、安山岩製の敲石片も出土している。須恵器の甕片も 1 点出ており、遺構時期の詳細は不明であるが遺構の切り合い関係から SD32 より新しく SK29 よりも古いと想定される。

E8 炭化物層（第 42 図 X=-8150 以北）

SD27 が位置する E8 グリッドでは遺構埋土の上に炭化物層が堆積している。炭化物層の厚さは最大で 0.2m 程で SK29 付近を始点とし、北側や東西に広がり、調査区外へ至る。炭化物層から出土した遺物から SK29 とそれほど時期差はないと思われる。窯操業時の灰原の可能性

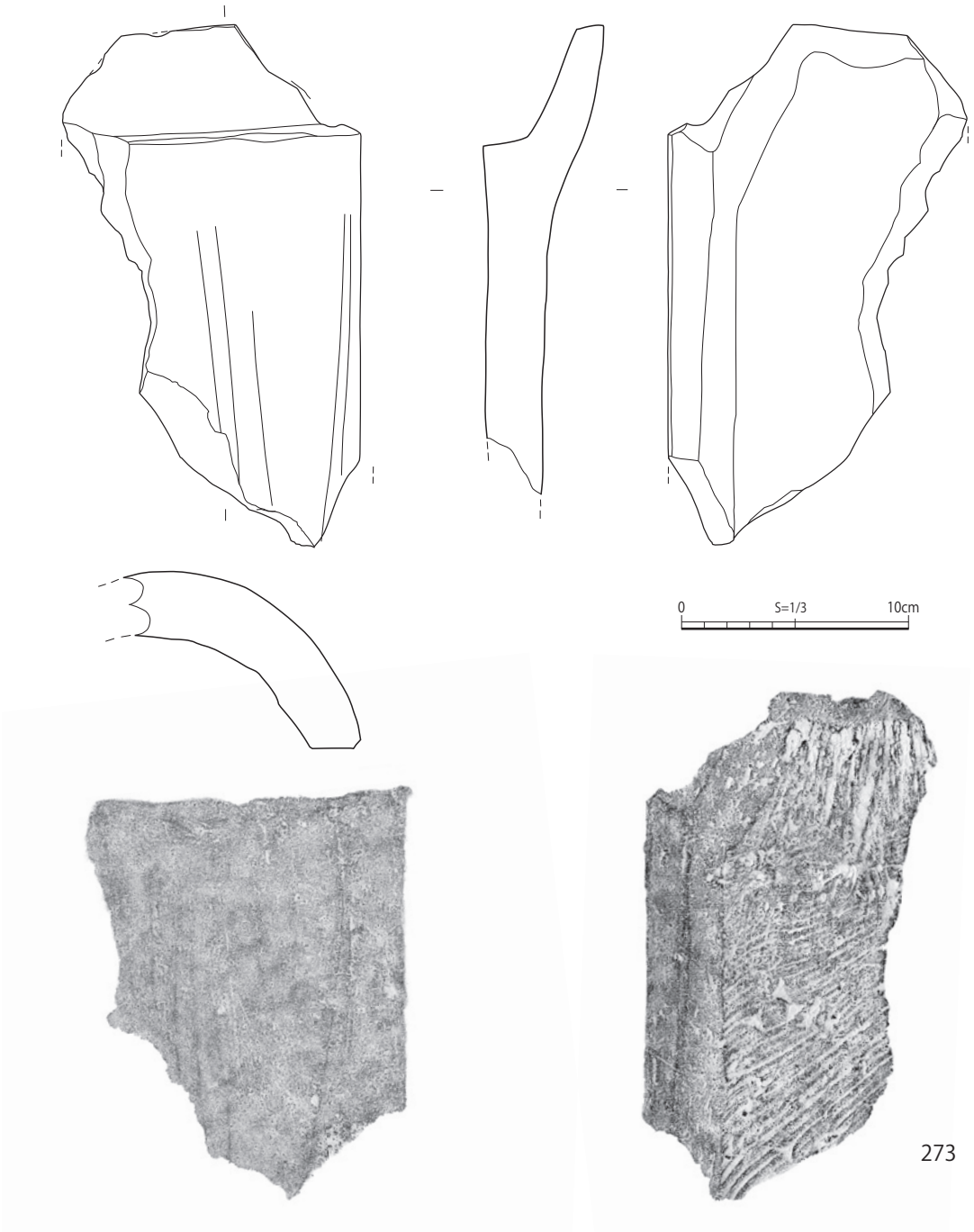



第 49 図　E8 炭化物層出土遺物実測図 1

も十分考えられるが、調査区が狭い範囲であったため詳細は不明である。

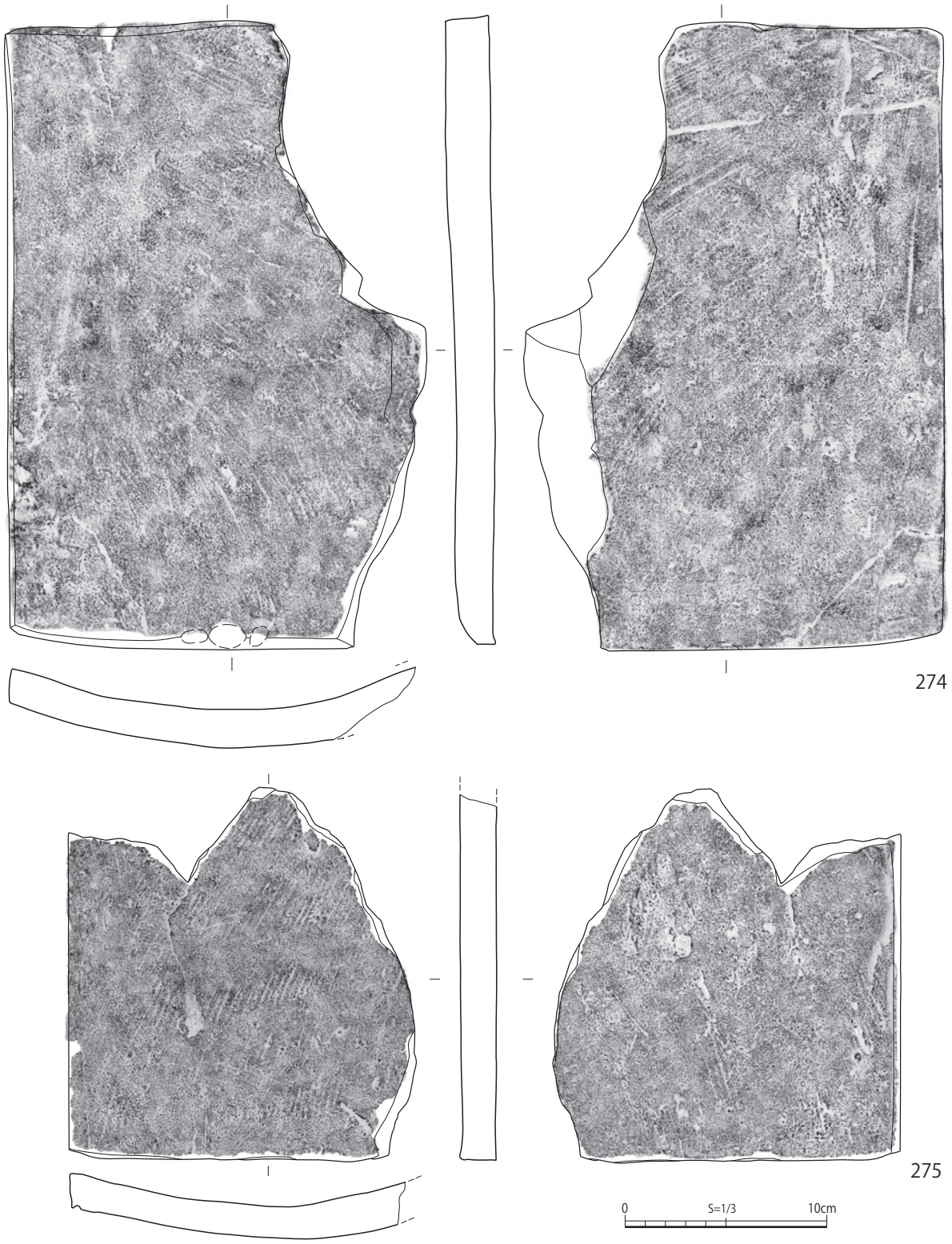
E8 炭化物層出土遺物（第 49 図～第 51 図）

260 は瓦質土器擂鉢である。擂目は 5 本程度を 1 単位としている。焼成は良好で硬質である。261 は土師皿である。体部、口縁部の 2 段階のヨコナデが見られる。262 は瓦器埦である。体部には内外面にミガキが見られ、端部はヨコナデが行われ、帯状に黒化している。硬く焼きしまる。263 は白磁皿である。高台端部は無釉で砂目の砂粒が付着する。264 ～ 272、274、275 は平瓦である。264 は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）が他の同様の痕跡と比較すると明確に観察で




第 50 図　E8 炭化物層出土遺物実測図 2

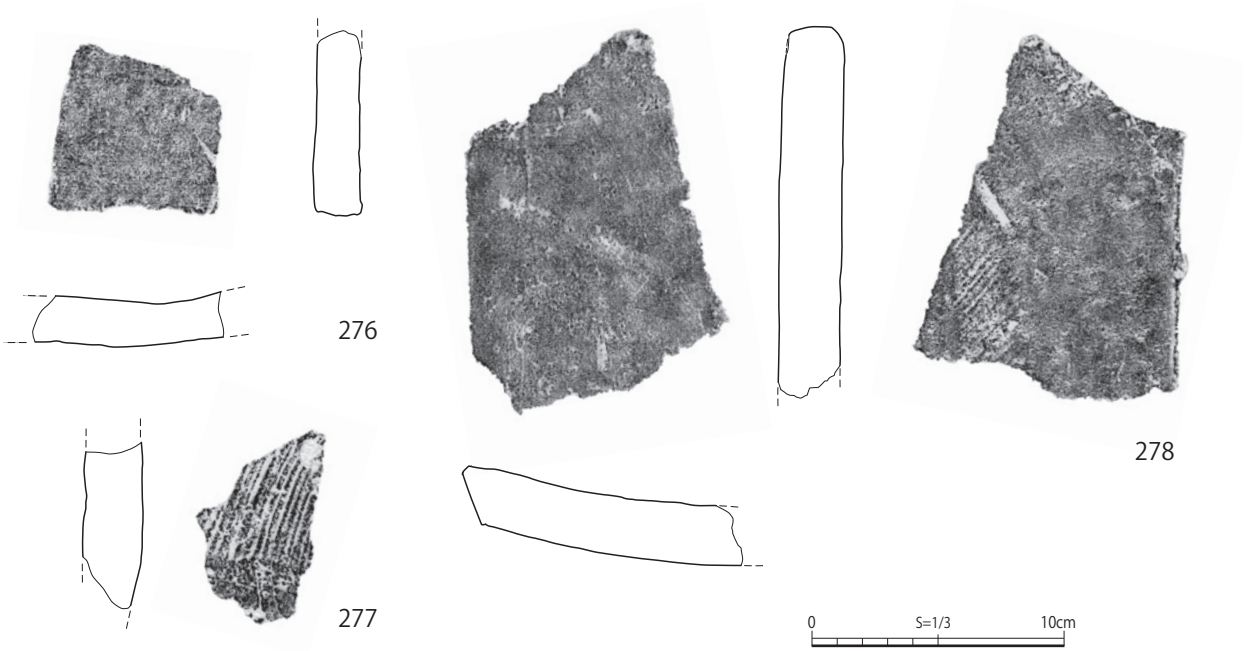
きる。凹面側端は丸く成形されているが、これはナデによる可能性がある。265 は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。266 は凸面端部は若干張り出し、凹面端部は深い面取りが行われる。側面は丸く、指頭圧痕が一部残る。267 の凹面端部はやや深めの面取りが行われる。凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。凹面側縁にも同様の痕跡が見られる。268 は凹面端部に深めの面取りが行われる。269 は凹面端部に浅い面取りがされ、その始点は端部に近い。270 は凹面側縁に面取りが行われる。271 は凹面端部は非常に浅い面取りがされ、その始点は端部に近い。272 は凹面端部にやや深めの面取りが行われる。273 は丸瓦である。凸面胴部にケズリが行われ、凹面胴部にはコビキ痕が見られる。側面は広端から狭端に向けてケズリが行われ、その流れで側縁は玉縁狭端に向かってケズリが行われる。凹面玉縁狭端は浅い面取りが行われる。274 は凸面にコビキ状の痕跡が見られる。凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出したような痕跡）。凹面端部に浅いナデによる傾斜が見られるが、もう一方の端には見られない。275 は凸面側縁が若干張り出す（粘土がはみ出した様な痕跡）。




第 51 図　E8 炭化物層出土遺物実測図 3

E8 炭化物層下面出土遺物（第 52 図）

276 ～ 278 は炭化物層の下から出土した平瓦である。これは SK29 検出面と同一の面である。276 は凸面端部に指頭圧痕が縁に沿って見られる。277 は凹面にはコビキ痕が見られ、凹面端部に深めの面取りが行われる。278 は平瓦の一辺を斜めに切り落として成形していると思われる。これは隅棟に接する場所に葺かれていた瓦の可能性が考えられる。

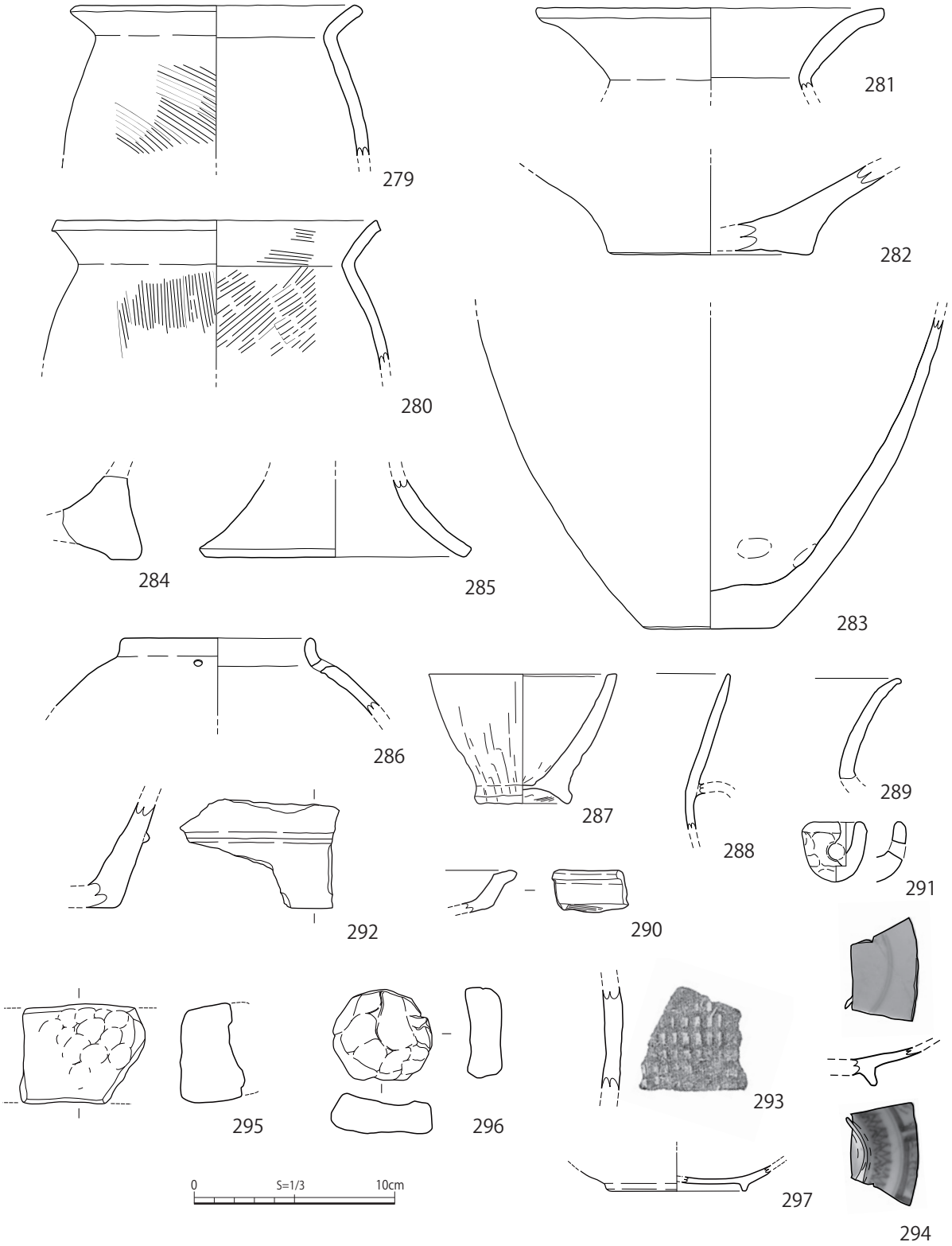



第 52 図　E8 炭化物層下面出土遺物実測図

E8･E9 包含層出土遺物（第 53 図・第 54 図）

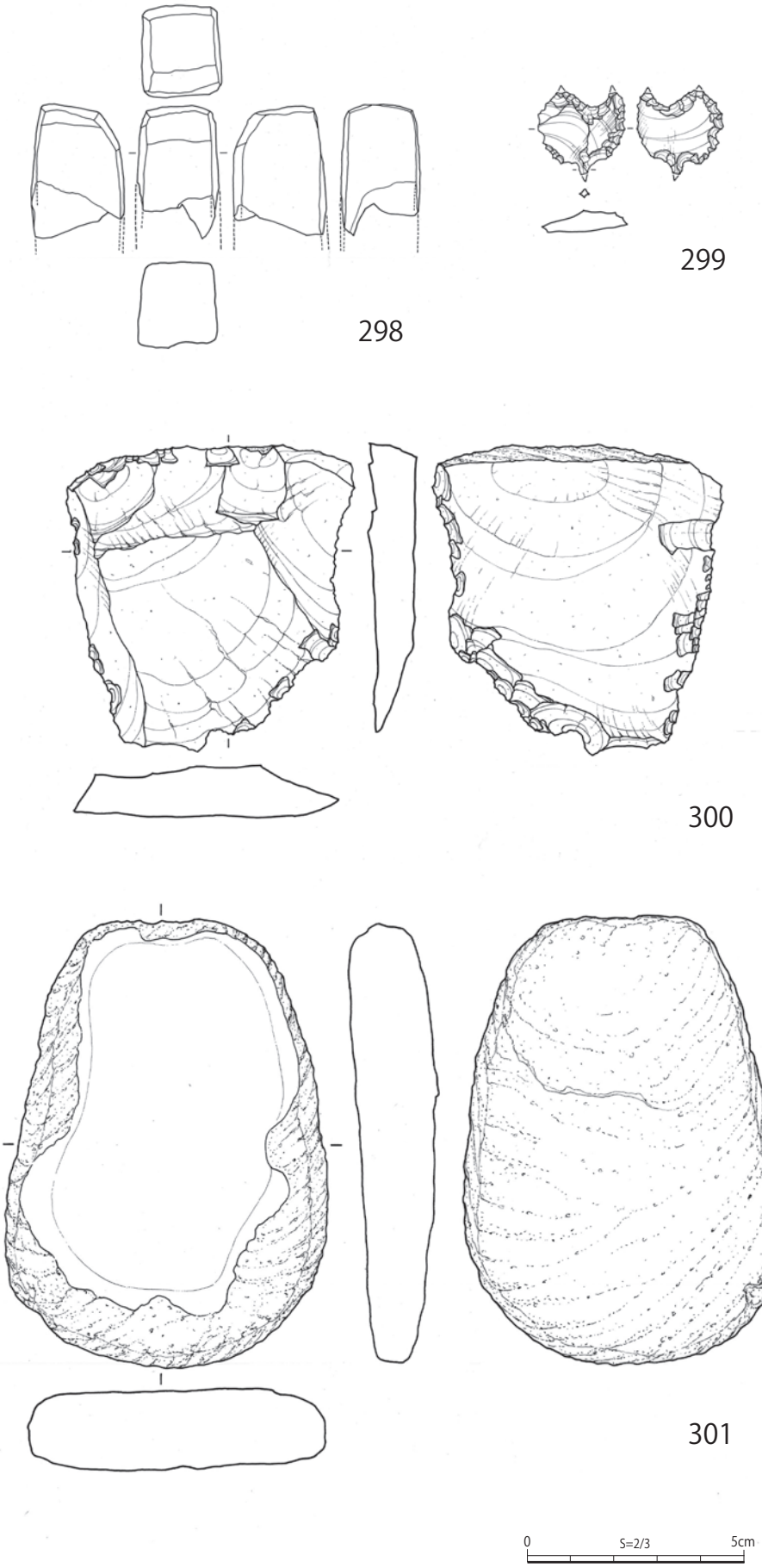
279、280 は弥生土器甕である。いずれも口縁から胴部までの破片である。口縁端部はヨコナデにより面を持つ。279 は口縁部外面に横方向のハケメも若干見られる。280 は口縁端下部はつまみ出され、頸内部の屈曲部には明確な角を持つ。281 ～ 283、289 は弥生土器壺である。281 は口縁部は緩やかに立ち上がり端部を一段更に外側に開く。口縁部には縦方向のハケメ状の調整を行い、口縁端部はヨコナデを行っている。282 は底部と胴部の一部である。胴部は大きく外側に開く。底部はやや上底となり内面も中心部付近は周りと比較して器厚が薄くなる。283 は底部から胴部まで残存している。胴部と底部接合部の内面と底部内面の中心付近には指頭圧痕が見られる。284 は弥生土器甕の底部である。底部は肥厚した円柱状で接地面は平坦で底部外面は上底になっている。285 は弥生土器脚付甕の脚である。端部付近はヨコナデを行い、端部は面をもつ。286 は弥生土器短頸壺である。口縁端部は丸く若干外反する。頸部付近には穿孔が見られる。287 は弥生土器鉢である。底部の器厚は非常に薄い。脚から胴部にかけて縦方向のナデが行われる。288 は弥生のジョッキ形土器である。取っ手部分は破損しているが接合部の観察によりやや上方に立ち上がると想定される。口縁は直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。289 は弥生土器壺の口縁である。口縁は直線的に開き、端部は更に外反させる。全体的に磨耗しており調整は観察できない。290 は弥生土器高坏の坏部である。口縁部中ほどで一旦外方へ折り曲げたのち、更に口縁端部を外反させ、ヨコナデにより成形する。291 は弥生のミニチュア土器の鉢である。胴部には内面から外面へ傾いた穿孔が一つみられ、穿孔の位置は底部内面の高さとほぼ一致している。底部から口縁部にかけて黒斑が残る。292 は瓦質土器火鉢の底部付近の破片である。断面半球状の突帯が貼付けられる。残存している範囲では燻された状況は確認されない。293 は瓦質土器甕の胴部である。外面に格子目タタキが行われている。294 は染付の碗である。高台外面には圏線が 2 条、高台接合部付近の体部には芭蕉葉紋、体部には植物紋、見込み部には圏線が 2 条見られる。259 は窯の部材、もしくは窯道具と思われる。土師質で直方体の形状が想定される。
260 は窯道具と思われる。手づくねで円盤状に成形している。297 は白磁皿の底部である。断面三角形の高台が貼付けられる。高台端部は無釉である。

298 は炭化物層である 7 層 ( 土層図 F) から出土した柱状片刃石斧 ( 石鑿 ( のみ )) の基部である。北九州産の層灰石を用いており、断面にも層理脈が浮き出ている。研磨方向は不明瞭であるが、すべて研磨面で覆われている。幅 1.7cm、厚み 2.2cm である。299 は黒褐色土層 (E-7 区包含層 ) から出土した石錐である。漆黒で良質の黒曜石を用いている。石材は西北九州産であろう。方形をした小型の剥片の 3 カ所に突起部を作り出している。特に下部の突起は抉りも深く鋭い。3 カ

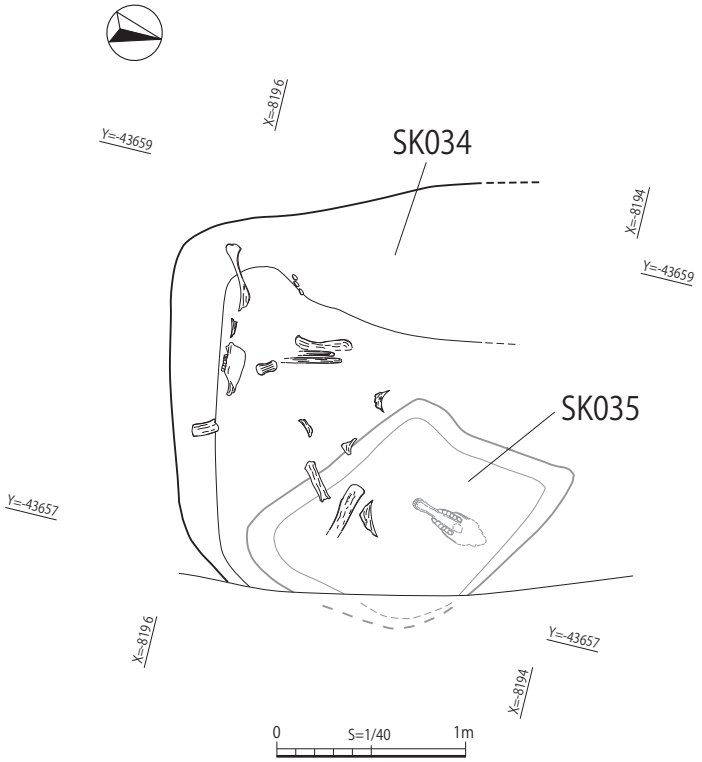



第 53 図　E8･E9 包含層出土遺物実測図

所とも先端部が欠けている。300 は褐色土層 (E-8 区包含層 ) から出土した削器 ( スクレイパー ) である。節理面の発達したサヌカイトの大きな剥片を用いている。b 面 ( 腹面 ) 下端部に a 面側からの連続した加撃により刃部を作り出している。この石器も、44･167 と同様に風化が著しく、旧石器の可能性が高い。301 は褐色土層 (E-8 区包含層 ) から出土した石皿である。扁平な安山岩の転石を用いている。A 面中央部に平坦な磨面が見られる。




第 54 図　包含層出土遺物実測図




第 55 図　SK34・SK35 馬骨出土状況実測図

SK34（第 55 図）

SK34 はC3グリッドの周囲に粘土採掘坑と思われる土坑が複数ある中で検出された土坑である。土坑の形状は隅丸方形と思われるが一部は調査区外に伸びるため形状の詳細は不明。埋土は砂粒混じりの暗褐色土で遺構内には馬骨が散乱した状況で検出された。土坑の大きさは径約２m、土坑の深さは検出面から５cm 程度である。馬骨の散乱してる状況から馬を埋葬した可能性は低いと考える。

SK35（第 55 図）

SK35 は SK34 の完掘後、SK34 の底面でプランを確認した土坑である。SK34 と同様に馬骨の上顎骨が頭部を下にした状況で出土している。埋土は砂粒と黄褐色土ブロック混じりの灰白色粘質土である。土坑の形状は一部が調査区外にのびるが隅丸方形と思われる。土坑の大きさは最大で約 1.7m で、深さは約 0.2m を測る。切り合いとしては SK35 が SK34 に切られる状況であるが、時期的に大きな差はないと思われる。遺構の全体が検出できていない状況で断定することはできないが、特定の部位のみの出土であると想定すると SK35 は祭祀的な埋納遺構の可能性も十分考えることができる。SK34 とあわせて粘土採掘坑の中でもあることから、出土した馬骨は採掘した粘土運搬などの労働力を担っていた馬の可能性も考えてよいだろう。

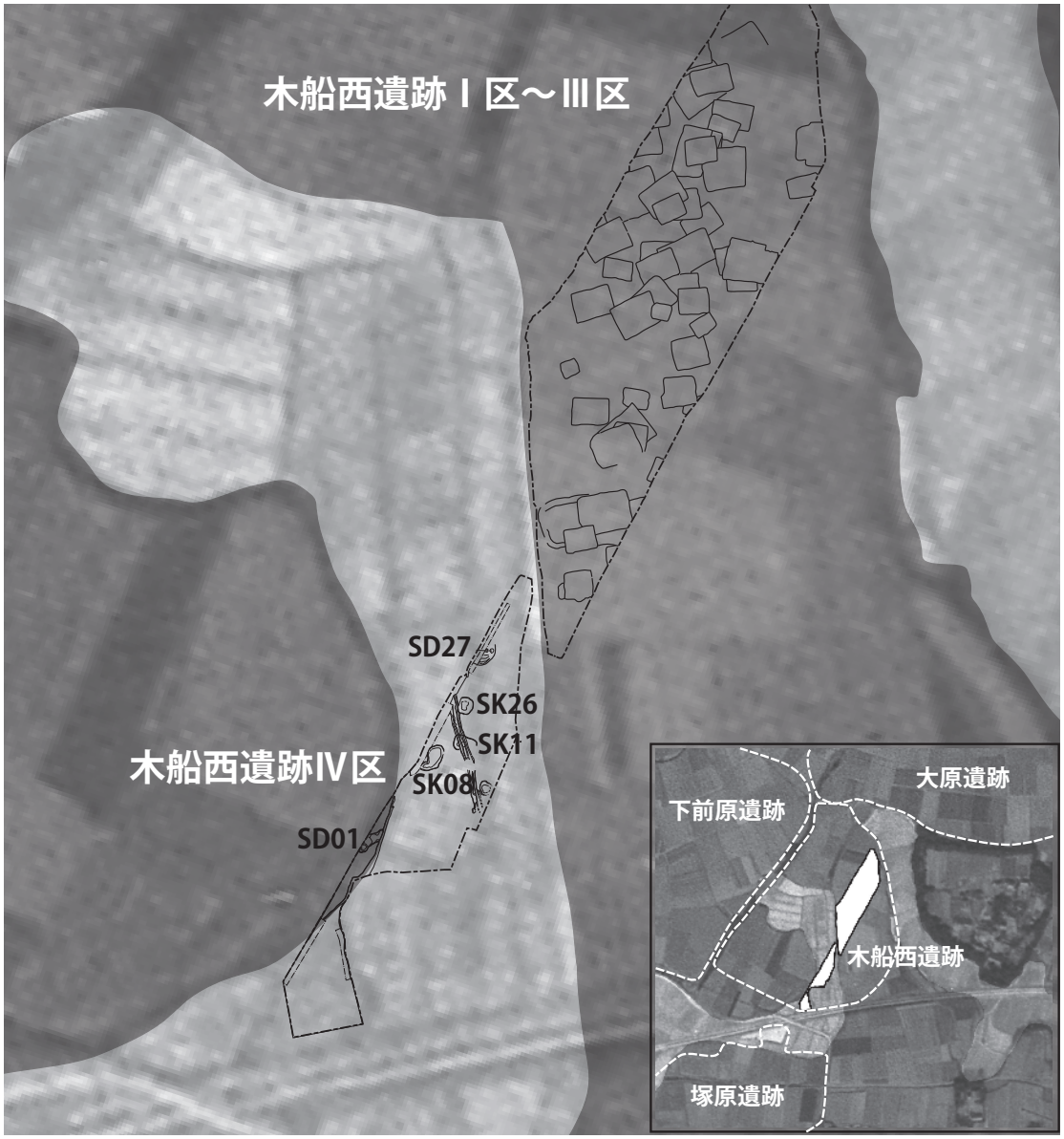
# 第Ⅴ章　総括

## 第１節　はじめに

木船西遺跡Ⅳ区では弥生時代から近代までの遺構が検出されている。調査範囲が狭いため遺構密度自体は高くないが、弥生時代後期の土器が一括して多量に出土したSD27、底部穿孔のミニチュア土器が出土したSK11、破片であるが遺物が出土しているSD01、その他SK08、SK26などの同時期の遺物が出土している遺構や、中・近世瓦が一括して出土したSK29、中・近世瓦を含む炭化物層の下から検出されたSD32・道路状遺構（中・近世期）、近代の土地改変時に設置された石垣とその裏込めの下から検出された道路状遺構（近代）な　どいろいろな遺構が検出されている。このことは、この地が弥生時代から近代・現代にわたって長い間、何らかの形で利用されていたことを意味する。ここでは木船西遺跡が位置するこの場所がどのように利用され現在に至るのかを木船西遺跡Ⅳ区で検出した遺構の時期である弥生時代後期、中世、近代を中心にまとめる。

## 第２節　弥生時代の木船西遺跡

第56図は木船西遺跡周辺の1947年米軍撮影空中写真の地割を参考にしながら、現在の土地の高低差から想定できる段丘面の範囲を網掛けで図示した中に木船西遺跡Ⅰ区からⅣ区の弥生時代後期の遺構を重ねたものである。これを見ると木船西遺跡Ⅳ区でSD01が検出されている遺構面の段差が1947年の空中写真で見られる地割の形状とほぼ一致し、木船西遺跡Ⅳ区で検出された段差はこの段丘の東端の形状を踏襲したものであり、木船西遺跡Ⅳ区の調査区全体が細長く南北に伸びる谷の中に設定されていることがよくわかる。一方で木船西遺跡Ⅰ区からⅢ区は調査区全体がⅣ区に隣接しているものの谷の中ではなく、段丘面上に位置しており、この状況が検出された遺構種別の差異を生じる要因となっている。一旦ここで地形的にも断絶があり、検出される遺構もこの状況に合致していることを考慮すると、同段丘上に位置する木船西遺跡北隣の大原遺跡と西隣の下前原遺跡を含めた遺跡群が弥生時代後期に一つの集落群を構成し、木船西遺跡が属するこの集落群は木船西遺跡Ⅲ区を南限とすると考えることができる。今回の調査で検出したSD01、SD27の溝がこの集落域の境界をさらに明確にしている。SD27は木船西遺跡Ⅲ区の南側に位置しており、内側の溝と考えることができる。SD27は今回の調査区内で一旦収束していることから、土橋状の空間を挟んで東側にも同様の溝が埋没していることが想像されるが、現状では弥生時代後期に土橋状の空間から東側へ溝が更に掘削されていたとしても、調査区内ではSD32が掘削された時点でその痕跡を確認することができなくなっている。SD01は調査区内で一段高くなった場所で検出された溝で、この一段高い範囲は復元した段丘面の形状と一致する。SD01は段丘面上に掘削した溝を谷と接続することで境界としての役割をさらに明確化させている。このことから木船西遺跡が属する集落はこられらの二つの溝が集落全体を巡れば２重の環濠を持つこととなる。遺構の時期は出土している遺物からどちらも津袋Ⅰ期からⅡ期までの段階と想定される。同時期の環濠を持つ遺跡としては蒲生・上の原遺跡、うてな遺跡などが挙げられる。蒲生・上の原遺跡では濠Ⅰから濠Ⅵまでの６本の環濠が想定され、それぞれ濠Ⅳ、濠Ⅰ・Ⅴ、濠Ⅱ・Ⅲ・Ⅵと埋没時期の違いから３つの時期に分けられる。その中でも濠Ⅰと濠Ⅳは台地の端部を切るように伸びていることが調査により明らかとなっている。濠Ⅰは土橋状の空間も見られ濠の内側に住居址が広がっている状況は木船西遺跡とよく似ている。うてな遺跡では10号溝（A溝、B溝）が70mにわたって緩斜面上で検出されている。溝内には多数の遺物が廃棄されており、この状況は木船西遺跡Ⅳ区SD27と同様である。方保田東原遺跡では幅7.4mの３号溝が検出されている。この３号溝のなかに幅1.1 m～1.8 mの小溝もあり、その小溝（3号溝の西端）では大量の土器廃棄が見られる。土器は溝内の中位から上位で出土して




第 56 図　木船西遺跡弥生時代後期遺構配置図

おり、SD27 の遺物出土状況とよく似ている。近隣の遺跡では築地館跡、東南大門遺跡、下前原遺跡が溝を検出された遺跡として挙げられる。築地館跡では最大幅約 8 m、深さ約 1.2m の東西に伸びる一条の溝が検出され、その北側で住居址が検出されている。木船西遺跡から約 0.8km 北上した場所にある東南大門遺跡では溝 SD-08 が検出されている。この溝の北側では石棺墓、土坑墓に加え甕棺墓が多数見つかっており、その北側でも調査区にわずかに溝状の遺構が見られる。この溝状の遺構が集落域と墓域を分けていた可能性が考えられる。木船西遺跡の友田川を挟んで西に位置する下前原遺跡では昭和 32 年に緊急調査が行われた際に 31 基の住居址が検出されているが、その周辺をめぐるように溝がみられることから、環濠を伴う可能性が指摘されている。しかし、この溝は調査時に発見されたものはなく、当時から現況で確認できるものであったため、住居址に伴うものかは言及を避けている。以上のように熊本県北部でも弥生時代後期になると環濠をもつ集落の出現がみられるが、木船西遺跡においてもその一連の流れで出現した集落の可能性は十分考えられる。

ただ、現段階で木船西遺跡が属する集落が 2 重の環濠をもち、木船西遺跡Ⅲ区を集落範囲の南限として考えるにはいくつかの問題点がある。それはまず根本的な問題であるが、SD01 や SD27 が環濠となるかどうかである。上記で述べたように今回の調査では環濠と認識するほど遺構のプラン

は検出できておらず、これを明らかにするためには隣地の調査を待たなければならない。また２つの遺構が環濠であったとしてもそれが即、集落の境界の環濠としてなりえるのかどうかは更なる調査と検証が必要となる。地形的断絶は木船西遺跡Ⅲ区南側ではみられるが、東側では現状では見られず、木船西遺跡Ⅲ区の住居址も更に南側に広がることは想像に難くない。地形的にも木船西遺跡Ⅲ区の東側で谷が埋められているような痕跡も見られず、復元した段丘面の範囲は木船西遺跡Ⅳ区の東側を進み、更に塚原遺跡が立地する南側まで広がる。この木船西遺跡と塚原遺跡との間に境界を設けるとするならば SD01、SD27 に対応する溝が木船西遺跡Ⅳ区東側でも検出される必要がある。また弥生時代中期であるが塚原遺跡においても環濠の可能性を考えることができる区画溝が確認されており、塚原遺跡との関係性も注目しておかなければならない。

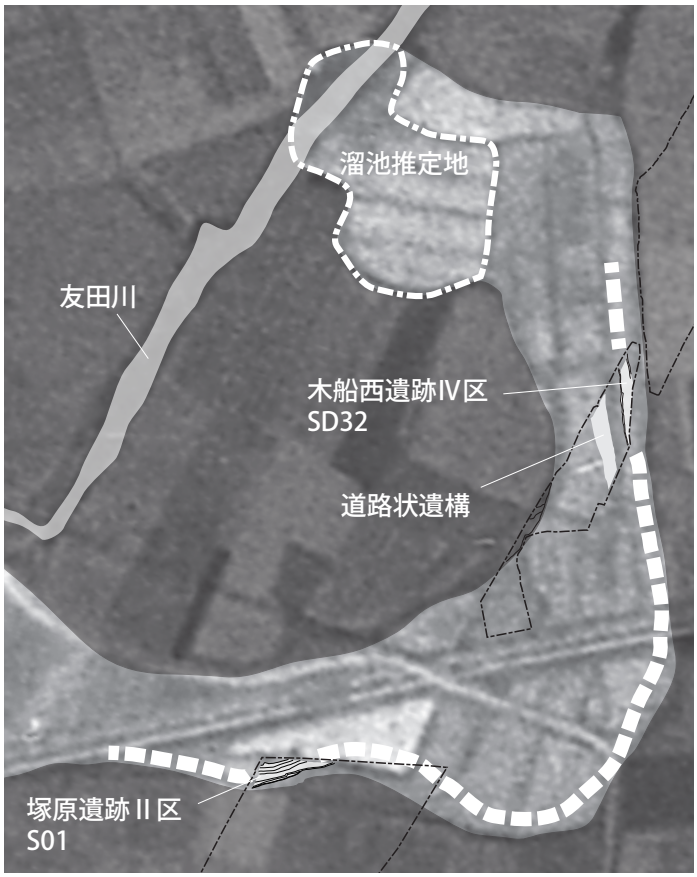
### 第３節　中・近世の木船西遺跡

今回の調査で検出した遺構で中世期の可能性があるものは SK29、SK33、SD32 である。SK29 は瓦の廃棄土坑であると考えられる。この廃棄土坑の上面には炭化物層が広がっており、瓦窯の存在を意識せざるを得ない。包含層内ではあるが SK29 が検出された付近には窯道具や窯体と思われる遺物も出土している。SD32 は少なくとも 16 世紀中には埋められており、SD32 は中世期の遺構であると判断している。SD32 は復元した段丘面の縁辺に沿って検出されているため、木船西遺跡Ⅳ区で調査した谷部の中を段丘面の縁辺に沿って西に流れている可能性が考えられる。段丘面の縁辺に沿う溝は塚原遺跡Ⅱ区でも検出されている。塚原遺跡Ⅱ区の S01 がそれにあたるが、S01 は上部が削平されているものの幅約 6m、深さ約 1.5m を測り、遺構の時期は不明となっているが、埋土に近世の磁器類が含まれていることから埋没時期を近世以前に求めることができる。そのため SD32 と同時期に存在し、SD32 と接続していた可能性がある。

この溝は谷の奥から下流域の谷底平野へ水をもたらすための水路としての役割が考えられるが、その水の供給源としては谷からの湧水、溜池、友田川との接続の３つの経路を考えることができる。

旧玉名郡岱明町付近では溜池が多く、全国的に見てもその比率が高い地域となっている。この地域は灌漑用水として使用できる河川が少なく、旱魃被害が顕著な地域である。そのため小谷であっても溜池を築造したり、谷の上下に分かれて複数の溜池を築造する場合もある。この地域の溜池は谷を堰き止める形で谷奥からの湧水を溜める構造のものがほとんどであり、木船西遺跡の北側には同構造の溜池が現在も残っている。木船西遺跡Ⅳ区の調査区が内包される谷は一旦狭まったのち奥が広がるプランが想定される。これは溜池を作るのに適した地形であり、谷の中では岱明層付近まで掘削をすることで湧水が得られるため地表面からの自然の湧水に頼ることなく溜池を築造することも十分可能であったであろう。玉名の溜池は多くが明治以前に築造されたと考えられているが、遺跡から 1.6km 北上した場所にある四十九池では大野氏の関係者が入水したという伝承も残っており、一部の溜池に関しては中世後期まで遡るものもあったと考えられている。そのため木船西遺跡Ⅳ区で検出した谷では中世段階に溜池があり、そこから SD32 や塚原遺跡Ⅱ区 S01 の溝を通じて水を下流域に供給していた可能性は十分にありえる。

谷の西側に流れる友田川もこの SD32 や溜池とともに遺跡周辺の水利に関して注目すべき点が多い。友田川は小岱山山腹から端を発し、四十九池の南をかすめ築地集落がある段丘上を南進し、さらに国道 208 号線を越え、木船西遺跡まで至る。この友田川は以前から人工的に掘削された水路と考えられているが、復元した谷を横切ることを踏まえると友田川の現流路になる以前は谷内の SD32 と接続し、現在とは違う流路を経て下流域に流れていたと考えることは十分可能であろう。友田川掘削以前（溜池と SD32 )、旧友田川（SD32 経由)、現友田川の３つの水利経路は木船西遺



第 57 図　木船西遺跡 SD32 流路と溜池復元図

跡周辺の水利が湧水を利用した溜池から始まり、周囲の環境の変化（耕作地の増加など）により溜池ではなく水路を谷の中の SD32 に接続することで状況を改善させるに至る。その後さらに水路（友田川）を南に伸ばし、水利経路の再々編が行われ現在の状況となるという一連の水利系統の変遷として捉えることができる。

友田川の掘削時期は資料が乏しいこともあり、不明となっている。第 57 図の様に復元した谷を友田川が横切ると仮定すれば、溜池を含めた水利系統の廃絶後に掘削されたと見ることができる。そのため SD32 の埋没時期である 16 世紀中頃前後に友田川の掘削時期を求めることができよう。

SD32 の埋没後は木船西遺跡では生産地としての一面が強くなる。SD32 が埋没後の埋土上面には炭化物層が広がり、その範囲は E8、E9 グリッドに及んでいる。E8 グリッドの炭化物層下では SK29 が検出されており、廃棄された状態で多数の瓦が見つかっている。SK29 や E8 炭化物層中から出土した瓦と類似するものは玉名市春出の中村館跡からも出土している。出土した瓦と共に多くの炭化物、還元焔焼成で面取りされた焼土塊もみられ、SK29 は瓦窯に関わる廃棄土坑であると考えられる。遺構埋土は暗褐色土であるが、出土した瓦片には赤褐色土が付着したものがしばしば見られ、また、瓦の断面が燻されたり、窯糞が付着するなど瓦窯の窯体に築き込まれたと思われる瓦片が出土しているのも特徴である。加えて、本遺構を覆う焼土・炭化物層（西壁 7 層）からも同様の瓦窯に関わる遺物に加えて窯道具とみられる土製品も出土しており、焼土・炭化物層は瓦窯の物原の一部である可能性が高い。一方で木船西遺跡Ⅰ区～Ⅲ区では窯やそれに関連するような遺物は出土しておらず、谷の中では湧水や雨水が集まりやすく窯の立地には不向きであることを考慮すると窯が操業されていた場所は木船西遺跡の西側段丘上に求めることができよう。瓦は平瓦が多く、1 枚作りに見られる端部粘土の盛上がりがみられ、凹面の調整はコビキ A の痕跡がみられる。丸瓦の凹面コビキ A の痕跡は見られるが吊り紐痕がほとんど見られない。（1 点破片で観察できるのみ）軒丸瓦、軒平瓦も各 1 点づつ出土しているがいずれも破片であり、瓦当の文様構成などはつかみきれていない。軒丸瓦では径が 17cm 程度、珠紋は小柄で 20 個前後配置され、巴が比較的細長くめぐる巴紋の瓦と想定される。軒平瓦は更に紋がはっきりしない。わずかに残る状態から文様の上部に「×」状の細い線を持つものであると想定がされる。軒平瓦の瓦当接合に際しては瓦当貼付け技法と呼ばれる接合方法をとっている。出土瓦にはコビキ A が見られ、コビキ B は確認することができないことから瓦の時期は中世末期が上限となることが想定される。天正 19 年（1591）に加藤清正が領内において名護屋城の御唐物蔵の瓦を焼かせ高瀬廻りで運送することを命じたことが記録に残っている。瓦窯の場所は明確ではないが高瀬周辺で造瓦していたと考えられ、瓦窯操業時期を中世末期としても矛盾は

ない。同記録内では桐紋や巴紋、唐草紋の瓦当の瓦を作らせたことをうかがわせる表現や、鬼瓦に大黒天と恵比須を指定するなどの具体的な記述が見られ、SK29 で出土している 196 などはそのような鬼瓦の一部である可能性も否定できない。瓦の供給先が短期間で築城された名護屋城であると仮定するならば、複数の窯の存在も容易に想像できる。また、木船西遺跡Ⅳ区で出土している小型窯道具の存在を考慮すると瓦専用窯ではなく、陶瓦兼用の窯があったことも想定される。中世期の瓦窯としては九州では荒尾樺番城窯跡が挙げられるが、木船西遺跡で瓦窯操業がなされたのであれば、何らかの形で関与していた可能性も考慮すべきであろう。いずれにしても九州全体でも中世末期段階の窯跡は非常に少なく、今回は窯自体の発見ではないにしろ重要な意味をもつといえる。

SD32 に沿うように伸びる道路状遺構に関しては時期を想定するには物証が乏しいが、SD32 、SK29 を覆う炭化物層と標高が同じである点からこれも中世末期から近世であり、窯操業に関連していたと考えてもおかしくはない。木船西遺跡Ⅳ区 B2、B3 、C2、C3 グリッドでは造瓦に使用した粘土採掘坑と思われるものが見られる。ここでは主に岱明層と呼ばれる砂粒が混入した灰黄色粘土を採取していたと考えられる。ここで採取した粘土の運搬は検出された道路を利用していたと考えることもできる。またこの採掘坑の中には馬の骨が複数見つかっており、馬自体も粘土採取・運搬になんらかの関与をした可能性が考えれる。

近代になると木船西遺跡Ⅳ区の谷は耕地化が進められる。その状況を段階的に示していると思われるのが石垣の存在である。D5、D6 グリッドでは段丘の縁辺に沿うように石垣が築かれているが、調査区東側壁面では石垣は確認されておらず、そのまま段丘に沿って築かれているわけではない。石垣に使われたのは安山岩質で四角錐の形状をしている。石垣の面は東を向き、地山面に直接置かれているが、四角錐の頂点部分の下には栗石を置き石垣面の角度を調整している。石垣の裏込めからは新しい陶磁器類が見られたためこの石垣は近代以降のものと判断している。石垣が築かれる以前には道路状遺構が段丘に沿うように検出されている。この道路状遺構も石垣と同様に B3､4 グリッド、C3、4 グリッドで検出されず段丘に沿うことなく南側に伸びる可能性が考えられる。石垣は E8 グリッド（第 6 図参照）でも確認された。こちらの石垣は面が南側を向いて東西に設置されているが調査区東壁面には見られないため調査区の中で収束していたと考えられる。いずれの石垣も現地表面とほぼ同じ高さまで伸びているが東西方向の石垣に関しては 1947 年段階の写真にそれに対応するような土地改変が見られないため戦後しばらくしてから築かれたのものと考えられる。

1960 年代の航空写真では谷は完全に埋められ、工場が建っている様子が写されており、この時期あたりをもって現在の景観となったといえる。余談であるが 1960 年代の航空写真で見られる工場は玉名製作所である。玉名製作所は終戦間際の 1944 年に島津製作所四条工場の一部を現在の玉名高校の講堂に工場疎開させたことが発端であり、終戦後、玉名市亀甲の乾絹工場跡に移転した際に新たに結成された会社である。これは高度な航空兵器技術が戦時中に玉名に入ってきたことを意味しており、戦時中、玉名に大浜飛行場があったことを考えると無関係ではないであろう。

今回調査区で検出できた遺構は、旧地形も含めごく一部でしかない。そのため総括で述べた内容は仮説の域をでない。しかしながら、今回の調査区周辺には今回検出した遺構の本体が眠っているのは疑う余地もなく、今後この周辺が開発される際は、全国レベルで貴重な遺跡が包蔵されていることを念頭に注意しておかなければならない。

【謝 辞】
　弥生土器の遺物所見・図版作成に当たり塚原遺跡発掘調査の担当者であった田中康夫課長補佐、古閑敬士氏にはいろいろと御教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

『玉名市史　資料編５ 古文書』 1993　玉名市史編集委員会
西住欣一郎　1992 『うてな遺跡』 熊本県文化財報告 第 121 集　熊本県教育委員会
木崎康弘・宮崎敬士　1996 『蒲生・上の原遺跡』 熊本県文化財調査報告 第 158 集　熊本県教育委員会
宮崎敬士　2013 『築地館跡』 熊本県文化財報告 第 283 集　熊本県教育委員会
中村幸史郎ほか　1984 『方保田東原遺跡（2)』 山鹿市立博物館
田中康雄ほか　2000 『東南大門遺跡』 玉名市文化財調査報告 第８集　玉名市教育委員会
末永　崇ほか　2004 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ』 玉名市文化財調査報告 第 13 集　玉名市教育委員会
末永　崇ほか　2011 『南大門遺跡』 玉名市文化財調査報告 第 28 集　玉名市教育委員会
中村安宏ほか　2017 『木船西遺跡』 玉名市文化財調査報告 第 34 集　玉名市教育委員会
田中康雄ほか　2017 『塚原遺跡Ⅰ』 玉名市文化財調査報告 第 36 集　玉名市教育委員会
田中康雄ほか　2018 『塚原遺跡Ⅱ』 玉名市文化財調査報告 第 40 集　玉名市教育委員会
田辺哲夫・田添夏喜 1957 「日本考古学協会第十九回総合研究発表要旨ベッドを有する弥生末期の方型竪穴住居阯群－肥後下前原遺跡－」『玉名高校考古学部考古学部報』19 号
門岡　久　1969 『明治百年記念　岱明町地方史』 岱明町
『熊本藩年表稿』 1974　細川藩政史研究会
高木正文　1979 「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会
田辺哲夫　1990 「玉名の歴史　第三回　－縄文（二）・弥生時代－」『歴史玉名 』第３号 玉名歴史研究会
大倉千寿　2011 「玉名市内に残る農業用ため池について」『歴史玉名』第 55 号　玉名歴史研究会
廣瀬岳志　2017 「瓦製作技法痕跡の再整理」『織豊期城郭瓦研究の新視点』 織豊期城郭研究会
美濃口紀子　2018 「九州地方の城郭瓦の様相」『続　織豊期城郭瓦研究の新視点』　織豊期城郭研究会
松田麻里・桃﨑裕輔　2019 「筑前・筑後・豊前・肥前」『中世瓦の考古学』 中世瓦研究会
小林康幸　2019 「中世瓦生産の諸相」『中世瓦の考古学』 中世瓦研究会
上原真人　2019 「中世瓦研究の到達点と展望」『中世瓦の考古学』 中世瓦研究会

※第 56 図・第 57 図は国土地理院で公開されている米軍撮影の空中写真 (1947 年撮影）を加工し作成したものである。

# 附編

## 木船西遺跡第Ⅳ調査区出土の弥生時代石器群について

［木船西遺跡Ⅳ区出土の石器］

木船西遺跡Ⅳ区で出土した石器は29点である。内訳は、石核1点、剥片7点、石鏃4点、楔形石器4点、削器4点、石皿2点、掻器1点、打製石包丁1点、石包丁素材1点、柱状片刃磨製石斧1点、両刃磨製石斧砕片1点、石錐1点、磨石1点となる。このうち、掻器1点と削器2点は石器器種と風化度から見て旧石器時代の石器と思われる。

これらの石器はE6･7･8調査区内の遺構SK11･SK12･SK26･SD27･SK29とそれらの直上に堆積する黒褐色炭化物層（土層図F 7層）やその上層のにぶい黄褐色土層（土層図F 6層）から出土している。6･7層は弥生時代の遺跡を何らかの理由で削平した後に堆積した層であり、それらの層から出土した石器は本来遺構に存在したものと考えられる。

遺構出土の石器は、ともに出土した土器が弥生時代中期初頭と後期中ごろの形式を示していることから、これらの石器の時期がおおよそ推察される。なお、木船西遺跡Ⅰ～Ⅳ区およびその周辺において、縄文土器は表面採集を含めて確認されていない。

［石器の出土状況と製作時期］

SD27では9点とまとまった数の石器が出土しており、しかもそれらの使用時期や使用場所が特定できる良好な出土状況であった。

SD27は溝跡と考えられるが、その断面がV字形をしており、遺跡が削平される以前は、SD01とともに、弥生時代によく見られる集落を取り巻く環濠の一部と見ることもできる。出土した土器類は溝の底部から少し上の位置で検出され、隙間もないほど重なり合って堆積していた。これは土器類を一括して溝の底部に廃棄したとみることができる。石器類はその一括廃棄土器の中に含まれていたもので、集落で使用され、土器と一緒に廃棄されたと見ることができる。土器類の形式は弥生時代後期の中ごろであり、集落は溝の北側に広がる木船西遺跡Ⅰ～Ⅲ調査区（報告書既刊）の可能性が高く、木船西遺跡の中心部分にあたる。つまり、SD27出土の石器群は弥生後期中ごろに木船西遺跡内で確実に使用された石器と言える。

他の遺構も削平されてはいるものの、後期中ごろの土器が中心であり、一部中期初頭の土器が混入している状況であった。ただ、石器も土器と同様に混入の可能性があり、石器だけを後期中ごろの製作・使用とするには無理がある。したがって、石器群は弥生時代中期から後期の年代幅で捉えておく必要がある。

［Ⅳ区石器群の観察から見える課題］

Ⅳ区石器群の観察から二つの課題が浮かび上がった。一つは弥生時代の石器の流通がどのように行われていたのかという課題である。というのもⅣ区石器群には西北九州から北部九州に原産地を推定できる石材を使用しているものが確認できるからだ。石器259は福岡県福岡市西区の今山産の玄武岩質安山岩の両刃磨製石斧砕片であり、石器298は福岡県北九州市産とされる層灰岩の柱状片刃磨製石斧であろう。また、黒曜石とした各種剥片石器の原産地は佐賀県伊万里市腰岳をはじめとする西北九州産の特徴を備え、サヌカイトとした安山岩は明らかに佐賀県多久市鬼の鼻山産のものである。また、Ⅳ区での出土はなかったが、Ⅰ区出土の石包丁には福岡県飯塚市立岩産とされる輝緑凝灰岩（赤紫色泥岩）の石包丁が確認されている。

今山産の両刃磨製石斧や層灰岩製の片刃磨製石斧、それに輝緑凝灰岩製の石包丁などの磨製石器に

ついては先行研究が多々ある。それらの研究は石斧や石包丁の生産・流通・消費を焦点としたものであるが、それらのほとんどが石材の原産地近くに工房を構え、石斧や石包丁を製作する専業集団を想定しており、製作された製品の流通に生産地が所属する「国」の首長層の「差配」を捉えようとするものである ( 下條 1975a･1975b など多数 )。

ところが、弥生時代の剥片石器についての研究はほとんどなく、遺跡における基本的な情報の提示もままならない状況にあると考えられる。近畿地方の弥生時代遺跡は前期から後期までサヌカイト製打製石鏃を中心とした剥片石器がまとまって発見され、特に中期から後期にかけての数量は目を見張るものがある。実は九州地方の弥生時代遺跡からもまとまった数量の剥片石器が検出される。しかも遺跡内で複数の器種の石器が製作されるため、剥片等の数量が多くなる。また、調査者の任意により設定された「遺構検出面」より上位の「包含層」と呼ばれる土層で出土した場合、二次資料として扱われることが多いようだ。

しかし、遺構出土の石器も数多くあり、分析対象として取り上げられる価値は十分に持っている。また、石材もほぼ西北九州産黒曜石や多久産サヌカイトに限定されるようであり、原産地と消費地の関係を捉えることも十分に可能であろう。このため、Ⅳ区石器群の母体ともいえるⅠ・Ⅲ区の剥片石器群を検討し、それらの分類と数量確認により、石器群の持つ大まかな属性を抽出し、当時の剥片石器石材の流通の一端に触れる試みを行った。

二つ目の課題は SD27 出土石鏃の使用目的である。２点の石鏃は凹基三角打製石鏃と有茎菱形打製石鏃である。解説でも述べたように、有茎菱形石鏃はおそらく鉄鏃を模倣したものであり、狩猟具というよりは武具としての使用が考えられる。また、伝統的形態の凹基三角打製石鏃はより大型となり、武具としての機能を意識しているようだ。このような鉄鏃の模倣や石鏃の大型化が SD27 の一括廃棄土器の時期である弥生時代後期中ごろに見られることになる。打製石鏃の武具化という課題は広範囲に点在する遺跡での分析や統計処理が必要であり、今後の課題としておく。

［サヌカイト製の石核］

Ⅰ・Ⅲ区の剥片石器群を検討するきっかけとなったのは、Ⅳ区 SK12 と SD27 から出土したサヌカイト製の石核 (257、169) である。サヌカイトは明らかに佐賀県多久市産のものである。これらの資料からは二つの事実が指摘できる。一つは、石核の存在から木船西遺跡内で剥片の生産が行われたことがわかること。二つ目の事実は 257 の石核が a 面下半部に主要剥離面 ( 腹面 ) を残していることから、石核の素材として大型剥片が使用されていたことである。また、このことに関連して、調査終了後に遺跡の掘削土集積地から採集された石核もその素材となった大型剥片の主要剥離面 ( 腹面 ) が大きく残されたものだった。複数存在することの意味は大きい。

通常、剥片生産は原礫から剥片を順次剥ぎ取っていく過程を想像する。なぜ大型剥片を素材として用いたのであろうか。169 は石核転用の削器だが石核の際の剥離面を数多く残している。しかし、それらから素材を想定することはできない。ただ、もし大型剥片を素材として用いていたとすれば、おそらく小さい拳大ほどの大きさであろう。257 と採集品も 169 とほぼ同じ大きさであり、素材の際は小さな拳大の大きさになるようだ。大きさの上で流通上の制約があったのだろうか。石核素材の問題をきっかけとして、豊富な石器数を持つⅠ・Ⅲ区剥片石器群の検討を行い、木船西遺跡の剥片石器群に伴う大まかな属性を抽出し、一つ目の課題の解決に迫ることにした。

［Ⅰ・Ⅲ区剥片石器群の検討］

石器の内訳

Ⅰ区とⅢ区の剥片石器群は報告書 ( 中村 2017) 掲載分を含めて合計 1345 点である。その内訳は別

表に示した。Ⅰ区は 793 点 ( 包含層出土 287、遺構出土 506)、Ⅲ区は 552 点 ( 包含層出土 239、遺構出土 313)、Ⅱ区からの出土はなかった。

今回の器種分類では、剥片の中で次の特徴を持つ剥片を分離した。両面とも主要剥離面からなる a「両面ポジ剥片」、黒曜石製の縦長剥片のうち平行する長側辺を持つ b「石刃状剥片」。また、方形をした剥片で相対する側辺に連続する細かな剥離痕があり、縁辺が潰れた状態を示す c 楔形石器を器種として加えた。

目的として、a は石核の素材になったと思われる大型剥片から剥片を剥ぎ取る際の初期段階の剥片であり、石核の素材として大型剥片が安定的に供給されているかを見るためである。b は縄文時代に黒曜石の原産地である腰岳中腹で量産され、北部九州を中心として縄文時代に流通した鈴桶型石刃技法 ( 小畑 2002) で生産された石刃が弥生時代の当遺跡にも搬入されているかを確認するためである。c は旧石器時代や縄文時代には定着している楔形石器が弥生時代にも使用されているかどうかを調べるためである。

石器群の出土地点

石器には包含層出土のものと遺構出土のものがあった。包含層は遺構検出面の上に堆積した層で、総石器数の約 40％を占めていた。グリッド (10 × 10m) ごとの包含層出土石器数の粗密を調べたところ、それは遺構ごとの粗密とほぼ同じ傾向を示していた。つまり、包含層出土の石器は、本来、出土地に近い遺構内にあったものと見なすことができる。ただ、Ⅰ区 S68 周辺では包含層出土の石器は皆無であった。おそらく、北に向けて低くなる地形の影響を受けていることが考えられる。

石器の石材

当遺跡で剥片石器の素材となった石材は、サヌカイトと黒曜石に限定される。しかも、そのほとんどが佐賀県多久産のサヌカイトと佐賀県腰岳産の黒曜石である。Ⅰ区ではサヌカイト 66％、黒曜石 34％であり、Ⅲ区ではサヌカイト 58％、黒曜石 42％となっている。つまり、Ⅲ区では黒曜石とサヌカイトがほぼ併用されるが、Ⅰ区ではサヌカイトの多用が目立つ。

石器出土遺構の時期

石器をより多く出土した遺構と報告書掲載の土器形式から判断したその時期を示すと以下のようになる。

Ⅰ区：S68(134 点 住居跡 中期前半 )、S34(53 点 住居跡 後期後半 )、S12(27 点 住居跡 後期後半 )、S05(24 点 住居跡 後期前半 )、S62･84(18 点 住居跡 後期後半 )

Ⅲ区：S35(35 点 土坑 中期前半 )、S39(24 点 土坑 中期前半 )、S32･26(31 点 土坑 中期前半 )、S17(23 点 住居跡 中期前半・後期後半 )、S27(20 点 住居跡 後期前半 )、S29(19 点 土坑 中期前半 )、S38(19 点 土坑 中 期前半 )、S45(19 点 住居跡 後期前半 )、S09(18 点 住居跡 中期前半・後期前半 )

これらのことから、Ⅰ区は、中期前半の S68( 住居跡 ) に約 17％の石器が集中するものの、中心となる後期後半の住居跡からも安定した数の石器が出土する。また、Ⅲ区は中期前半の土坑からの出土が多数を占めていることがわかる。

Ⅰ区とⅢ区の石器保有率

Ⅲ区出土の石器数はⅠ区の約 2/3 であるが、遺構数はⅠ区の 1/4 ほどである。このことはⅢ区の遺構の方がより多くの石器を保有していることになる。飛躍した論理とはなるが、弥生時代後期後半 ( Ⅰ区 ) より中期前半の方が石器に対する依存度が高かった可能性がある。

黒曜石原石

原石として分類した石材は黒曜石に限られ、サヌカイトの原石は皆無であった。また黒曜石の原石はⅢ区の２点を除けばすべて径１～2cm 大の円礫である。円礫は阿蘇火砕流堆積物の中に含まれるものに酷似している。石核にこの円礫を用いたものは数点あるが、いずれも１回の打撃で半割の状態であり、石核としての役割は感じられない。ただ、阿蘇火砕流堆積物は当遺跡周辺の地下には堆積しておらず、当時、住居などの建築に際して地下から掘り出されたものでもなく、遺跡に持ち込まれたものであることは確かなようだ。

Ⅲ区 S09・17 から発見された２点の黒曜石原石は明らかに腰岳産の角礫である。小拳大の大きさであり、どのような経路をたどったかは別として、原産地から原石として確実に搬入されていたことになる。出土地点はいずれも中期前半と後期前半の遺構が重なり合った部分になっている。前に述べたようにⅢ区は中期前半の土坑からの石器出土が多数を占め、しかも黒曜石の占める比率が高い傾向にある。これらの黒曜石原石も中期前半の可能性が高い。

両面ポジ剥片

総数 38 点のうち、黒曜石製は１点で、他はすべてサヌカイト製であった。サヌカイト製石核は総数 35 点であり、剥片数が石核数を上回る。また、Ⅰ区で３点、Ⅲ区で３点の小拳大のサヌカイト製大型剥片が見つかっている。Ⅰ区では C-3 と E-4・5 グリッドの包含層と S68 から、Ⅲ区では S06・21・32 の土坑からで、両地区とも高い石器密集度を示している地点である。

これらのことから、中期から後期にかけて、サヌカイト製の大型剥片を石核の素材とする剥片生産体制は遺跡内の中心となっていたと思われる。

石刃状剥片

石刃状剥片を剥片から分離して分類した目的は、小畑弘己が技法の見直しと再定義を行った鈴桶型石刃技法 (小畑 2002a ほか) で生産された石刃が弥生時代にも流通しているかを確認するためであった。

小畑やその研究を継承し、消費地遺跡における分析を行った神川めぐみ ( 神川 2008) によれば、鈴桶型石刃技法は、黒曜石の原産地である佐賀県伊万里市腰岳の中腹 ( 生産地 ) で端整で長身の石刃を大量に生産し、九州北部を中心とした消費地遺跡に流通させる際の石刃生産技法である。主に縄文時代後期から晩期にかけて盛行したとしている。そして、消費地遺跡内でその技法による石刃と判断するためには２つの要素が必要であるという。一つは石刃の打面にスリガラス状の擦痕が残されていること。もう一つは打面が石刃幅より小さく、丸みをおびていることである。

観察の結果、当遺跡では、鈴桶型石刃技法から生産される石刃は見当たらないことがわかった。ただ、自然面打面を持ち打面幅も石刃幅とほぼ同じで、２つの長側辺が平行した幅約 1cm ほどで、長さも鈴桶型石刃のように長くはない縦長剥片はまとまって検出された。これらを石刃状剥片とした。

石刃状剥片はⅠ区 21 点、Ⅲ区 12 点、合計 33 点出土している。いずれも黒曜石製である。Ⅰ区では石器があまり出土しない遺構やグリッドから発見される傾向にあり、Ⅲ区は石器が集中する土坑からの出土が多い。

33 点のうち９点は、長側辺全体に微細な剥離痕が連続する使用痕が認められ、また、他の石刃状剥片の長側辺にも微細な剥離痕が部分的に認められる。これは、この石器が素材としての剥片ではなく、それ自体が一つの石器器種として機能していたと考えてもいいのではなかろうか。

また、石刃状剥片の背面に残された剥離痕を観察すると、打面側からの連続した剥離痕が認められ、下方向からの剥離痕はなかった。つまり、一つの打面から連続して縦に長い剥片を剥ぎ取ったことになる。おそらく、打面は自然面のままであろう。このような剥片を剥ぎ取る技術は、鈴桶型石刃技法

のような厳密さはないものの、広義の石刃技法とすることができる。このことに関して、小南裕一は縄文時代晩期になると一方向からの剥離が増加し、石刃の長さも短くなるという (小南 2006)。あるいは晩期以降弥生時代までこのような石刃が継続して製作された可能性はあるだろう。

このような石刃状剥片を剥ぎ取ったと思われる石核を探したが、皆無であった。出土した石核からは主に正方形に近い剥片が剥ぎ取られていた。はたして、石刃状剥片は遺跡内で生産されたのだろうか。原産地で生産され、遺跡に剥片のかたちで持ち込まれた可能性も否定できない。

なお、1点のみではあるが、石刃状剥片の腹面に打面部直下から末端部までスリガラス状の擦痕が続く資料が出土している。スリガラス状の擦痕を付けるという技術は保持されていたのかもしれない。

打製石鏃

報告書掲載分を含めて、Ⅰ区20点、Ⅲ区25点、合計45点出土している。サヌカイト製が約76%を占める。これらの打製石鏃には明らかな特徴が見られた。すなわち、中期前半の遺構からは、凹基三角石鏃や平基三角石鏃がほとんどであるが、後期の遺構からは、それらに有茎三角石鏃や有茎菱形石鏃が加わっている。また、後期の凹基三角石鏃や平基三角石鏃は長大化していることもわかった。Ⅳ区S27から出土した2点の打製石鏃はこの現象に当てはまる。

サヌカイトが圧倒的多数を占め、既存の石鏃が長大化し、有茎石鏃が新たに加わるという現象は当遺跡だけのことであり普遍化できないものなのだろうか。隣接する玉名市塚原遺跡 (田中・古閑・江見 2017) では中期の遺構からも出土しており、詳細な分析が必要であろう。また、北部九州の他の遺跡でもそうなのか検討が必要である。

楔形石器

Ⅰ区9点、Ⅲ区7点、合計16点出土している。石材による数量の違いはない。この石器はよく打製石鏃の未成品と間違われる。しかしよくよく観察すると、相対する縁辺に連続する細かな剥離痕とともに縁辺の潰れが認められる。したがって、全体の形状は四角形であり、三角形ではない。当遺跡では、少ないながらも10点を超えており、器種として認定できる。

未成品

連続する剥離痕が剥片側辺の一部に見られるものである。通常は2次加工のある剥片とすべきであるが、形状、大きさ、厚みからみて、ほとんどが打製石鏃の未成品と考えてよい。

未成品は原石と石核、および剥片を除いた製品のうち64%を占める。打製石鏃は製品のうち21%を占めることから、打製石鏃とそれを意図した未成品を合わせた割合は85%と圧倒的に高いことがわかる。つまり、当遺跡では打製石鏃の生産を目的として石器製作を行ったといえる。なお、未成品における黒曜石とサヌカイトの比率はほぼ半々である。

[木船西遺跡Ⅰ・Ⅲ区剥片石器群の属性]

石器群の検討は、すべての石器の観察、器種分類とその数量把握、出土層・出土遺構ごとの数量把握、遺構年代の検討など基本的な検討だけではあったが、それらの結果をもとにした石器群の属性を提示する。もちろん、それは時間的制約のため、石器組成表の提示のみであり、統計処理や細かい分析、資料の図示はなく大まかで粗いものになったことはご容赦願いたい。

① 遺構から出土する石器数量の粗密は、遺構が所在するグリッドの包含層から出土する石器数量の粗密と同調している。つまり、包含層出土の石器は、包含層下の遺構に本来の位置があったと考えられる。

② 剥片石器に使用された石材は黒曜石とサヌカイトに限定される。黒曜石は佐賀県伊万里市腰岳産がほとんどであり、他の黒曜石も西北九州産と思われる。サヌカイトは佐賀県多久市鬼の鼻山産である。

③ 当遺跡への石材供給は黒曜石とサヌカイトで形態が異なっている。黒曜石は原石のままであり、サヌカイトは厚みのある大型剥片で供給されている。ただ、大きさは両石材とも拳大の大きさである。
④ 石核と剥片の観察から推定すると、黒曜石はほぼ方形、サヌカイトはやや横に長い剥片の量産を目的としている。
⑤ 未成品や剥片の形状から判断すれば、当遺跡の剥片石器生産は打製石鏃の生産を最大の目的としている。
⑥ 黒曜石製の剥片で、鈴桶型石刃技法による石刃は検出されなかった。ただ、広義の石刃技法によると思われる石刃 ( 石刃状剥片 ) は、おそらく石材原産地周辺で作られており、剥片のまま搬入されている。
⑦ 打製石鏃は後期になり、長大化した凹基・平基三角石鏃が見られるようになり、有茎三角石鏃や有茎菱形石鏃などが新たに加わるという変化が見られる。
⑧ 剥片石器を製作するための石材は、黒曜石とサヌカイトの併用からサヌカイト中心へ変化する。

［総括］

今回報告した木船西遺跡Ⅳ区は遺跡の南端部と考えられる。したがってⅣ区石器群は、その本体であるⅠ～Ⅲ区石器群と同様に中期前半の石器類と後期前半・後半の石器類とに分けられるだろう。先行研究を参考にすれば、大陸系磨製石器類はおそらく前期から中期を中心とした時期と考えてよいであろうから両刃磨製石斧砕片と柱状片刃磨製石斧は中期前半に位置づけられるだろう。そして、SD27出土の剥片石器類は出土状況からみて明らかに後期に属している。しかも打製石鏃はⅠ～Ⅲ区石器群の属性⑦に当てはまっている。

属性⑦は打製石鏃の武具化と考えられるが、属性⑤・⑧から判断すると鉄鏃とほぼ同等の威力を発揮するサヌカイトを用い、鉄鏃に匹敵する打製石鏃を大量に生産する時代状況が後期に発生していたことになろう。

サヌカイトは安山岩の中でも緻密で重く、また固くて耐久性も高い。鉄に代わる素材としては最良のものであろう。したがって、原産地からの石材搬出に際しては在地権力によるさまざまな規制がかかることは容易に想像できる。属性③のように小拳大の大型剥片にして搬出されているのは、商品性の向上のためなのだろうか。あるいは量的規制をかけやすくするためなのだろうか。

属性⑥の黒曜石製の石刃は出土点数も少なく多言は避けなければならないが、石刃を剥ぎ取った石核が存在しないことは原産地生産・剥片搬出の重要な根拠である。また、小南が指摘した石刃の形状は当遺跡例にも当てはまる。縄文晩期を経て弥生時代まで石刃生産が続いていたとすることも可能であろう。

熊本県菊池川流域では、中期前半の城ノ越式土器や中期後半の黒髪式土器とともに黒曜石製の石刃が発見される例が多いが、当遺跡例では後期に属する可能性もある。玉名地域でもこの時期の遺跡が多く、剥片石器類の分析が進めば、このような石刃の属性の解明が進むことになるだろう。

弥生時代の遺跡発掘で剥片石器類が出土した場合、真摯に向き合う調査員は少ないのではないだろうか。遺構内出土の石器類であっても、大陸系磨製石器類や完形の石鏃などは報告書に掲載されるが、石核・剥片類は観察の対象外にあるようだ。

鈴桶型石刃技法も当初は旧石器時代だけの技術とされた。そのため、縄文時代の集落遺跡の包含層や遺構から石刃が出土しても、それらを鈴桶型石刃技法と関連づけて分析することは長い間なかったと言える。しかし、縄文人が旧石器人の DNA を受け継いでいるのであれば、旧石器人が保持した技術が継承されるのはごく自然である。

弥生時代の剥片石器類についても同じことが言えるのではないか。課題は剥片石器を使用する文化が、時代や地域によってどのように変容しているかを分析することであろう。それがとりもなおさず、稲作文化・大陸系磨製石器文化・青銅器文化・鉄器文化などがどのように受容されたかを知ることにつながるだろう。

近年、熊本市八ノ坪遺跡 ( 林田・宮崎 2005･2006) では、黒曜石やサヌカイトを用いた多くの製品・未成品が出土した住居跡 (SI077･085) やサヌカイト製剥片石器類の一括資料が詰まった小穴 (SP340) が発見されている。弥生時代前期から中期中心の遺跡であり剥片石器類が遺構に伴っているのは明らかである。今後、弥生時代の剥片石器類の分析が進むことを期待したい。

参考文献

下條信行 1975a「石器の製作と技術」『稲作の始まり』( 古代史発掘 4) 講談社
下條信行 1975b「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第 22 巻　第 1 号 考古学研究会
小畑弘己 2002a「縄文時代の石刃一鈴桶型石刃技法について」『青丘学術論集』20　韓国文化研究振興財団
小畑弘己 2002b「鈴桶遺跡と鈴桶技法について」『Stone Sources』1 石器原産地研究会
小畑弘己 2003「九州腰岳原産地と鈴桶遺跡を巡る諸問題」『黒耀石文化研究』2　明治大学人文科学研究所
小南裕一 2006「鈴桶技法の終焉 - 九州北半地域を中心として -」『陶填』l9　山口県埋蔵文化財センター
林田和人 2005「Ⅳ調査の成果 2D11A 小区 C 検出遺構と出土遺物 SP340」
『八ノ坪遺跡Ⅰ - 本文編 -』熊本市教育委員会
宮崎　拓 2006「Ⅵ考察 4 石器組成」『八ノ坪遺跡Ⅰ - 分析・考察・図版編 -』熊本市教育委員会
神川めぐみ 2008「九州の縄文時代後晩期における石刃流通 - 鈴桶型石刃技法について -」
『熊本大学社会文化研究』6 熊本大学
田中康雄・古閑敬士・江見恵留 2017「第Ⅲ章調査成果 第 4 節弥生時代の遺構遺物」
『塚原遺跡Ⅰ』玉名市教育委員会
中村安宏 ( 編 ) 2017『木船西遺跡』玉名市教育委員会

# 木船西遺跡Ⅰ・Ⅲ区出土剥片石器組成表

| 調査区 | 器種 | 出土地 | 石材 | 出土調査区・出土遺構 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ(793) | 原石(56) | 包含層(28) | 黒曜石(28) | A-1(1) A-2・3(2) B-2(5) B-3(2) C-3(12) C-4(2) D-3(1) E-4・5(3) | すべて径約1～2cm大の円礫 |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(28) | 黒曜石(28) | S06(2) S09(1) S12(5) S28(4) S34(5) S45(1) S46(2) S59(1) S62・84(2) S64(1) S65(2) S68(2) S69(1) S70(2) S82(2) S85(5) S109(1) | すべて径約1～2cm大の円礫 |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 石核(49) | 包含層(25) | 黒曜石(13) | A-1(1) B-1(1) B-2(1) C-1(2) C-3(3) D-2(3) Ⅰ区全体(2) | |
| | | | サヌカイト(12) | A-1(1) B-1(1) B-2(2) D-2(2) D-3(1) E-4・5(4) Ⅰ区全体(1) | |
| | | 遺構(24) | 黒曜石(12) | S09(1) S16(1) S22(1) S34(1) S35(1) S42(1) S62・84(1) S65(1) S66(1) S68(1) S83(1) S86(1) | |
| | | | サヌカイト(12) | S13(2) S22(1) S34(1) S38(1) S42(2) S68(3) S82(1) S83(1) | |
| | 剥片(548) | 包含層(193) | 黒曜石(69) | A-1(3) A-2(3) B-1(2) B-2(5) B-4(1) B-6(1) C-1(10) C-2(10) C-3(3) C-4(3) D-4(2) D-5(2) D-6(1) Ⅰ区全体(6) | |
| | | | サヌカイト(124) | A-1(2) A-2(2) A-3(1) B-1(10) B-2(6) B-3(6) B-4(3) B-5(2) C-1(12)C-2(11) C-3(33) D-2(14) D-3(3) D-4(1) D-5(1) D-6(1) E-4・5(11) Ⅰ区全体(5) | C-3(1) E-4・5(1)は大型剥片 |
| | | 遺構(355) | 黒曜石(117) | S05(3) S06(2) S09(4) S10(1) S12(9) S13(5) S21(1) S26(3) S28(4) S34(9) S35(2) S38(1) S41(2) S42(4) S43(2) S44(1) S45(3) S47(1) S52(1) S59(1) S62・84(8) S63(1) S64(2) S65(1) S68(32) S70(4) S74(1) S82(2) S85(2) S86(3) S90(1) A-4P3(1) | |
| | | | サヌカイト(238) | S05(9) S06(1) S07(1) S09(4) S10(1) S11(3) S12(11) S13(6) S22(3) S26(1) S28(2) S34(30) S35(4) S38(5) S39(1) S40(5) S41(5) S42(4) S43(7) S44(2) S45(1) S46(2) S47(1) S50(1) S52(4) S62・84(5)S63(1) S64(2) S65(1) S66(6) S67(1) S68(69) S70(8) S73(4) S80(1) S82(5) S83(3) S85(4) S86(14) S109(3) A-2P3(1) A-2P17(1) A-3P2(1) A-5P1(1) C-2P31(1) E-6P22(1) | S68(1)は大型剥片 |
| | 両面ポジ剥片(25) | 包含層(11) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(11) | A-1(1) B-1(1) B-4(1) C-1(1) C-2(1) C-3(4) C・D-5(1) D-3(1) | |
| | | 遺構(14) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(14) | S06(1) S09(1) S13(1) S22(1) S34(2) S38(1) S63(1) S68(3) S86(2) S109(1) | |
| | 石刃状剥片(21) | 包含層(6) | 黒曜石(6) | B-3(1) C-1(2) D-2(1) D-4(1) D-6(1) | うち使用痕のあるもの(1) |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(15) | 黒曜石(15) | S10(1) S22(2) S28(1) S34(2) S39(1) S42(1) S52(2) S69(1) S80(1) S85(1) S90(1) A2P11(1) | うち使用痕のあるもの(6) |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 打製石鏃(20) | 包含層(3) | 黒曜石(1) | D-2(1) | |
| | | | サヌカイト(2) | B-3(1) 1区全体(1) | |
| | | 遺構(17) | 黒曜石(3) | S12(1) S68(1) S82(1) | |
| | | | サヌカイト(14) | S12(3) S13(1) S28(3) S34(2) S40(1) S68(2) S83(1) S85(1) S86(1) | S13(1)は局部磨製石鏃 |
| | 楔形石器(9) | 包含層(7) | 黒曜石(5) | C-3(1) C-4(1) D-2(1) D-3(1) E-4・5(1) | |
| | | | サヌカイト(2) | C-1(1) C-2(1) | |
| | | 遺構(2) | 黒曜石(1) | S68(1) | |
| | | | サヌカイト(1) | S22(1) | |
| | 削器(スクレイパー)(4) | 包含層(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(4) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(4) | S35(1) S45(1) S72(1) S82(1) | すべて大型剥片利用 |
| | 石錐(2) | 包含層(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(2) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(2) | S40(1) S42(1) | |
| | 使用痕ある剥片(4) | 包含層(1) | 黒曜石(1) | B-2(1) | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(3) | 黒曜石(2) | S62・84(1) S68(1) | |
| | | | サヌカイト(1) | S68(1) | |
| | 未製品(55) | 包含層(13) | 黒曜石(8) | A-1(2) B-2(1) B-3(3) C-3(1) D-2(1) | |
| | | | サヌカイト(5) | A-3(1) B-3(2) C-3(1) E-4・5(1) | |
| | | 遺構(42) | 黒曜石(20) | S09(1) S12(1) S215(1) S16(1) S22(2) S39・42(2) S43(1) S62・84(1) S63(1) S64(1) S65(1) S66(1) S68(10) S82(1) S86(1) | |
| | | | サヌカイト(22) | S06(1) S15(1) S28(1) S34(3) S40・70(2) S43(2) S47(1) S50(1) S68(8) S82(1) S85(1) | |

| 調査区 | 器種 | 出土地 | 石材 | 出土調査区・出土遺構 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅲ(552) | 原石(5) | 包含層(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(5) | 黒曜石(5) | S05(2) S09(1) S17(1) S35(1) | S09(1)、S17(1)は西北九州腰岳産黒曜石の拳大角礫原石 |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 石核(52) | 包含層(15) | 黒曜石(6) | B-1(1) B-2(2) Ⅲ区全体(3) | |
| | | | サヌカイト(9) | A-1(1) A-2(1) A-4(1) B-1(1) B-2(1) B-3(2) C-1(1) C-2(1) | |
| | | 遺構(37) | 黒曜石(14) | S01(1) S09(3) S14(1) S17(1) S21(1) S22(1) S23(1) S27(1) S32(1) S35(2) S48(1) | |
| | | | サヌカイト(23) | S04(1) S05(1) S06(1) S17(1) S21(1) S22(1) S27(1) S29(4) S30(1) S35(3) S38(2) S39(3) S46(1) S51(1) | |
| | 剥片(350) | 包含層(152) | 黒曜石(61) | A-1(1) A-2(10) A-3(5) A-4(3) B-1(1) B-2(12) B-2(12) B-3(17) C-1(1) C-2(2) Ⅲ区全体(9) | |
| | | | サヌカイト(91) | A-1(5) A-2(8) A-3(6) A-4(3) A-5(2) B-1(3) B-2(22) B-3(18) B-4(1) C-1(1) C-2(2) Ⅲ区全体(19) | |
| | | 遺構(198) | 黒曜石(58) | S02(2) S05(1) S06(1) S09(2) S14(1) S16(1) S17(8) S20・21(1) S21(5) S22(1) S27(5) S29(1) S30(4) S32(3) S35(3) S37(1) S38(1) S38・39(6) S39(4) S40(1) S41(1) S42・44・45(1) S44・45・52(2) S46(1) S48(1) | |
| | | | サヌカイト(140) | S01(1) S05(1) S06(3) S09(7) S14(1) S16(4) S17(9) S20・21(1) S21(7) S21・45・49・52(1) S22(1) S27(9) S28(1) S29(12) S30(3) S31(1) S32(18) S33(1) S34(1) S35(17) S37(7) S38・39(7) S39(16) S40(2) S41(4) S42(2) S42・44・45(1) S51(2) | S06、S21、S32の各１点は大型剥片 |
| | 両面ポジ剥片(13) | 包含層(6) | 黒曜石(1) | Ⅲ区全体(1) | |
| | | | サヌカイト(5) | A-3(4) B-2(1) | |
| | | 遺構(7) | 黒曜石(1) | S32(1) | |
| | | | サヌカイト(6) | S21(1) S27(1) S32(1) S37(1) S38・39(2) | |
| | 石刃状剥片(12) | 包含層(8) | 黒曜石(8) | A-2(1) A-4(1) B-1(1) B-2(1) B-3(2) C-2(1) Ⅲ区全体(1) | うち使用痕のあるもの(3) |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(4) | 黒曜石(4) | S09(1) S22(1) S29(1) S32(1) | S32(1)の腹面にスリガラス状の擦痕 |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 打製石鏃(25) | 包含層(5) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(5) | A-2(1) B-1(1) B-3(1) Ⅲ区全体(2) | B-3(1)は局部磨製石鏃 |
| | | 遺構(20) | 黒曜石(7) | S17(1) S22(1) S29(1) S32(1) S37(1) S38・39(1) S39(1) | |
| | | | サヌカイト(13) | S05(1) S09(2) S17(1) S27(1) S29(1) S35(1) S37(1) S39(1) S41(1) S42(1) S43(1) S45(1) | |
| | 楔形石器(7) | 包含層(4) | 黒曜石(1) | B-1(1) | |
| | | | サヌカイト(3) | B-3(1) C-2(1) Ⅲ区全体(1) | |
| | | 遺構(3) | 黒曜石(1) | S42(1) | |
| | | | サヌカイト(2) | S09(1) S27(1) | |
| | 削器(スクレイパー)(1) | 包含層(1) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(1) | B-2・3(1) | |
| | | 遺構(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 石錐(5) | 包含層(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(5) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(5) | S16(1) S35(2) S37(1) S39(1) | |
| | 使用痕ある剥片(0) | 包含層(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | | 遺構(0) | 黒曜石(0) | | |
| | | | サヌカイト(0) | | |
| | 未製品(82) | 包含層(48) | 黒曜石(24) | A-1(1) A-2(1) A-3(3) A-4(1) B-1(3) B-2(5) B-3(5) B-4(1) Ⅲ区全体(4) | |
| | | | サヌカイト(24) | A-1(1) A-2(2) A-3(1) A-4(1) C-2(1) B-1(2) B-2(3) B-3(7) B-4(1) Ⅲ区全体(5) | |
| | | 遺構(34) | 黒曜石(18) | S09(2) S17(3) S21・45・52(2) S22(2) S27(1) S29(1) S30(1) S32(2) S35(1) S38(2) S39(1) | |
| | | | サヌカイト(16) | S01(2) S14(1) S21(1) S29(2) S35(4) S39(4) S41(1) S45(1) | |

# 木船西遺跡Ⅳ区土器観察表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 11 | 1 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 3.0+ | ナデ | ナデ | 褐灰色10YR5/1 | にぶい黄橙色10YR7/4 | 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 11 | 2 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.8+ | ナデ | ナデ | にぶい褐色10YR6/4 | にぶい褐色10YR6/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 3 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.1+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR6/3 | にぶい黄橙色10YR6/4 | 1mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 4 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.1+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/3 | 明黄褐色10YR7/6 | 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 11 | 5 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.0+ | ナデ | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 6 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 2.3+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/4 | 浅黄橙色10YR8/4 | 1mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 7 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/3 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石、赤褐色粒を含む | 良好 | |
| 11 | 8 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 鉢 | − | − | 1.9+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/3 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 2mm以下の石英、長石、雲母、赤褐色粒を含む | 良好 | |
| 11 | 9 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | 7.0 | 4.9+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色5YR7/4 | にぶい黄橙色10YR7/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 10 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 鉢 | − | − | 2.4+ | − | − | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 11 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.0 | 4.8+ | − | − | にぶい黄橙色10YR7/4 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 12 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.4 | 6.9+ | − | ナデ | 明黄橙色10YR7/6 | にぶい黄橙色10YR7/4 | 6mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 11 | 13 | C5 | SD01 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 16.8+ | ハケメ | ハケメ | にぶい橙色7.5YR6/4 | にぶい黄橙色10YR6/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 胴部最大径16.0cm |
| 13 | 14 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 5.0+ | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、ナデ | 明赤褐色5YR5/6 | 明赤褐色5YR5/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 13 | 15 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.9+ | ナデ | ナデ | 赤褐色5YR4/8 | 赤褐色5YR4/8 | 4mm以下の石英長石を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 13 | 16 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR8/4 | にぶい黄橙色10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 13 | 17 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 5.1+ | − | ナデ | 浅橙色5YR8/4 | 浅黄橙色10YR8/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 13 | 18 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.7+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/2 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石、赤褐色粒を含む | 良好 | |
| 13 | 19 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 1.1+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、赤褐色粒を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 13 | 20 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | 8.2 | 5.7+ | ナデ | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 13 | 21 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.0 | 9.4+ | ヨコナデ、ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/2 | 黄橙色10YR8/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 13 | 22 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.6 | 16.9+ | − | − | 浅黄橙色10YR8/3 | にぶい橙色2.5YR6/4 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 13 | 23 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.7+ | ヘラミガキ沈線 | ナデ | 明褐色7.5YR5/6 | にぶい橙色7.5YR6/4 | 4mm以下の石英、雲母を含む | 良好 | |
| 13 | 24 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 3.4+ | ヨコナデ、ナデ、突帯 | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | にぶい橙色7.5YR7/4 | 2mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 13 | 25 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 長頸壺 | − | − | 4.2+ | − | − | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 13 | 27 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.0+ | ナデ、突帯 | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 13 | 28 | D6 | SK08 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 4.0+ | − | ナデ | 浅黄橙色10YR8/4 | 褐灰色10YR6/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 15 | 29 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 0.9+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 15 | 30 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.2+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/3 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 15 | 31 | E6・E7 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.0 | 8.9+ | ヨコナデ、ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/4 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤褐色粒を含む | 良好 | |
| 15 | 32 | E6・E7 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.8 | 4.3+ | − | − | 橙色5YR6/6 | 浅黄橙色10YR8/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃、石雲母を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 15 | 33 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.4 | 5.4+ | ヨコナデ、ナデツケ | ヨコナデ、ナデ | 橙色2.5YR6/6 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 15 | 34 | E6 | SK11 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 10.3+ | ナデ、ハケメ | ナデ | にぶい黄橙色10YR6/3 | 明黄橙色10YR6/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃、石雲母を含む | 良好 | 外器面口縁部下にスス付着 |
| 15 | 35 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.6+ | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 15 | 36 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 6.4+ | ナデ、突帯 | − | にぶい橙色7.5YR7/4 | にぶい橙色7.5YR7/4 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 15 | 37 | E6・E7 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.4+ | ナデ、二重突帯 | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 15 | 38 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 鉢 | − | − | 4.0+ | ナデ | ナデ | 灰白色7.5Y8/2 | にぶい橙色7.5YR7/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 15 | 39 | E6・E7 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.9+ | − | − | にぶい橙色7.5YR6/4 | にぶい橙色5YR6/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃を含む | 良好 | |
| 15 | 40 | E7 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 2.9+ | − | − | にぶい黄橙色10YR7/3 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | |
| 15 | 41 | E6 | SK11 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 4.5+ | ナデ、刻目突帯 | ナデ | 灰褐色7.5YR4/1 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 15 | 42 | E6 | SK11 | ミニチュア土器 | 壺 | 1.8 | 1.7 | 4.6 | 指頭圧痕、ナデ | 指頭圧痕か | 浅黄橙色10YR8/3 | 灰黄褐色10YR6/2 | 2mm以下の石英、白色砂粒を含む | 良好 | 重さ46g、底部に穿孔 |
| 19 | 46 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 1.7+ | ナデ | ナデ | 橙色7.5YR6/6 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 19 | 47 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 1.5+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/4 | 浅黄橙色10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 19 | 48 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色7.5YR7/3 | 橙色2.5YR7/6 | 1mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 19 | 49 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 3.2+ | ナデ | ナデ | 橙色7.5YR7/6 | 浅黄橙色7.5YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 19 | 50 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 脚付鉢？ | − | − | 5.2+ | ナデ | ナデ | 橙色2.5YR7/6 | 灰褐色7.5YR6/2 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 19 | 51 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 1.2+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色7.5YR8/6 | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 52 | E7 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 3.1+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色7.5YR6/4 | 橙色5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 19 | 53 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.9+ | ナデ | ナデ | 橙色5YR7/6 | 浅黄橙色7.5YR8/3 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 54 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 2.2+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 19 | 55 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.9+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色7.5YR7/4 | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 56 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.6+ | ヨコナデ | − | 橙色5YR6/6 | にぶい橙色7.5YR7/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 19 | 57 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.8+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 浅黄橙色7.5YR8/3 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 58 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.1+ | ヨコナデ | ヨコナデ | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR6/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 19 | 59 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.6+ | ナデ、突帯 | ナデ | にぶい黄褐色10YR5/4 | 灰黄褐色10YR5/2 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 19 | 60 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 2.3+ | ナデ | ナデ | 橙色2.5YR7/6 | 淡赤橙色2.5YR7/3 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 61 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.3+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色7.5YR7/6 | 橙色5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 62 | E7 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.0 | 4.9+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | サヌカイト小片あり |
| 19 | 63 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.7+ | ナデ | ナデ、沈線 | 灰黄褐色10YR5/2 | にぶい黄褐色10YR5/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 19 | 64 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 4.8+ | ナデ、突帯 | ナデ | 灰黄褐色10YR5/2 | にぶい黄褐色10YR4/3 | 6mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 19 | 65 | E7 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | 7.9 | 3.8+ | ナデ | ナデ | 橙色7.5YR6/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 66 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | 8.2 | 5.4+ | ナデ、指頭圧痕 | 工具痕、ナデ | にぶい橙色7.5YR7/4 | 橙色5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 67 | E8 | SK26 | 弥生土器 | 脚付鉢 | − | − | 7.7+ | ナデ | − | 橙色7.5YR6/6 | にぶい橙色7.5YR7/4 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 19 | 68 | E7 | SK26 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.5 | 8.5+ | − | ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒曜石小片多く含む |
| 19 | 69 | E7 | SK26 | 弥生土器 | 壺 | − | 10.0 | 8.2+ | ナデ | − | 橙色7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 圧痕あり |
| 21 | 71 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 17.2 | − | 4.7+ | ヨコナデ、ナデ | ナデ、ヨコナデ | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 明赤褐色5YR5/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 21 | 72 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 15.4 | − | 5.4+ | ハケメ | − | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色7.5YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 不良 | |
| 21 | 73 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 14.2 | − | 6.8+ | ナデ、ハケメ | ハケメ | 橙色7.5YR6/6 | 橙色7.5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 34 | 74 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 18.0 | − | 4.5+ | ヨコナデ、ハケメのちナデ | ヨコナデ、ナデ | 浅黄橙色10YR8/3 | 浅黄橙色10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 21 | 75 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 5.5+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/4 | にぶい橙色7.5YR7/4 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒斑 |
| 21 | 76 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 20.4 | − | 7.7+ | ヨコナデ、ハケメ | ハケメのちナデ、ハケメ | 橙色5YR6/6 | 橙色5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 21 | 77 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 20.0 | − | 6.0+ | − | − | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 浅黄橙色7.5YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 普通 | 外面一部に黒斑、口縁面取り |
| 21 | 78 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 21.8 | − | 11+ | ナデ、ヨコハケメ、ナナメハケメ | ナナメハケメ | 橙色5YR6/8 | にぶい橙色5YR6/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 胴部最大径20.2cm外面に黒斑 |
| 21 | 79 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 23.2+ | タタキのちハケメ、ケズリ | ハケメ | 橙色2.5YR7/6 | 褐灰色10YR5/1 | 6mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 胴部最大径17.6cm黒斑あり |
| 21 | 80 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 25.0 | − | 22.1+ | ヨコナデ、タタキのちハケメ | ハケメのちナデ | 褐色7.5YR4/6 | にぶい黄橙色10YR7/3 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 外面一部に黒斑あり |
| 22 | 81 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 19.0 | − | 11.0+ | − | − | にぶい赤褐色5YR5/4 | 褐灰色5YR4/1 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 22 | 82 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 21.5 | − | 9.3+ | − | 指圧痕 | 橙色5YR6/8 | 浅黄橙色7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 口縁面取り |
| 22 | 83 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | 15.8 | − | 16.8+ | ナデ、ハケメ | ハケメのちナデ | 橙色5YR6/6 | 橙色5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 黒斑あり |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 23 | 84 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.6 | 5.1+ | ナデ | − | 橙色5YR6/6 | 灰白色 7.5YR8/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 一部に黒斑あり城ノ越式？ |
| 23 | 85 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 7.0 | 7.3+ | − | − | 明黄橙色 10YR7/6 | 明黄橙色 10YR7/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 城ノ越式 底付近に穿孔、一部に黒斑 |
| 23 | 86 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 8.4 | 5.8+ | ハケメのちナデ | ナデ | 灰白色 10YR8/2 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 23 | 87 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 7.4 | 4.7+ | ナデ | ナデ | 橙色 2.5YR7/6 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 23 | 88 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 7.4 | 7.6+ | ナデ | ナデ、ケズリ | 明赤褐色 5YR5/6 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 23 | 89 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 11.2 | 5.4+ | − | 脚台内部：一部にヨコハケメ残存 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 橙色5YR7/8 | 3mm以下の石英、長石、雲母を含む | やや不良 | |
| 23 | 90 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.4 | 5.3+ | ナデ | 内底：タタキ？<br>脚内：ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 橙色 2.5YR6/8、<br>脚内：<br>明赤褐色 7.5YR5/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | やや不良 | |
| 23 | 91 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.7 | 4.6+ | − | 工具痕 | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 23 | 92 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.6 | 4.2+ | − | ハケメ、ナデ、しぼり | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 橙色 7.5YR6/6、<br>脚内：<br>浅黄橙色 7.5YR8/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | |
| 23 | 93 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.0 | 6.2+ | − | − | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | |
| 23 | 94 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.2 | 5.3+ | ナデ | ナデ、<br>脚内：ナデ | にぶい橙色 5YR7/4 | 淡橙色 5YR8/4、<br>脚内：<br>浅黄橙色 7.5YR8/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | 脚と底部の接合部にサヌカイト剥片（4mm） |
| 23 | 95 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 11.4 | 5.8+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 脚縁玉縁、内外に黒斑あり |
| 23 | 96 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.4 | 8.0+ | ハケメ、<br>ナデ | 脚内：ナデ | 浅黄橙色 10YR8/3 | 浅黄橙色 10YR8/3、<br>脚内：<br>浅黄橙色 10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 普通 | |
| 23 | 97 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.1 | 7.8+ | − | − | 橙色5YR6/6 | 極暗褐色 7.5YR3/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | やや不良 | 内面に黒斑、脚縁面取り |
| 23 | 98 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 11.1 | 9.5+ | ヨコナデ | 脚内：ヨコナデ | にぶい褐色 5YR6/4 | 褐色 7.5YR4/3、<br>脚内：<br>にぶい橙色 7.5YR6/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 内底部に圧痕あり |
| 23 | 99 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 8.0 | 5.5+ | タテハケメ | 底部に指頭圧痕 | 淡橙色 5YR8/2 | にぶい橙色 10YR7/3 | 2mm以下の石英、長石,角閃石を含む混和物多く、胎土砂質 | 普通 | 脚縁面取り、弥生後期前半 |
| 23 | 100 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.0 | 6.0+ | − | 脚台内部：<br>ヨコハケメ | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 浅黄橙色 7.5YR8/3<br>浅黄橙色 7.5YR7/6 | 1mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 脚台は楕円形で径は長軸 |
| 23 | 101 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.2 | 6.0+ | − | ハケメ、<br>脚内：ナデ、<br>ハケメ | 浅黄橙色 7.5YR8/3 | 浅黄橙色 7.5YR8/3<br>脚内：<br>浅黄橙色 7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | 一部に黒斑あり |
| 24 | 102 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.2 | 7.1+ | ナデ、圧痕 | ハケメ、<br>脚内：指圧痕、<br>ヨコナデ | 橙色5YR7/6 | にぶい褐色 7.5YR6/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | |
| 24 | 103 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.2 | 7.8+ | 一部に<br>ヨコハケメ | 内部：ハケメ、<br>脚内：ヨコナデ、<br>ハケメ | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/3<br>脚内：<br>にぶい橙色 7.5YR7/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | |
| 24 | 104 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.8 | 9.0+ | ナデ | 脚内：ナデ、<br>ヨコハケメ | 灰白色 7.5YR8/2 | にぶい橙色 7.5YR7/3<br>脚内：<br>橙色5YR6/8 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、黒雲母を含む | やや不良 | |
| 24 | 105 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.8 | 6.9+ | ナデ | ナデ、ハケメ | 橙色 2.5YR6/8 | 橙色2.5YR6/8 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 24 | 106 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.5 | 7.5+ | ヨコナデ、<br>ナデ | 脚内：ヨコナデ | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/6<br>脚内：<br>浅黄橙色 7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母をむ | 普通 | 一部に黒斑あり脚の端部黒斑 |
| 24 | 107 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 11.0 | 4.3+ | − | ヨコナデ、ハケメ | 灰白色 7.5YR8/2 | 灰白色 7.5YR8/2 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、黒雲母を含む | やや不良 | |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 24 | 108 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.3 | 4.9+ | − | 脚内:ヨコナデ | 灰白色 10YR8/2 | 橙色7.5YR7/6 脚内:灰白色 7.5YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 脚縁面取り |
| 24 | 109 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.6 | 6.2+ | − | 脚内:ヨコナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 灰白色 7.5YR8/2 脚内: 橙色5YR7/8 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | |
| 24 | 110 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.6 | 6.1+ | ナデ | ナデ、 脚内:ヨコナデ | にぶい橙色 7.5YR7/3 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 脚内: 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | やや不良 | 脚端部面取り |
| 24 | 111 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 8.8 | 6.8+ | − | − | 褐灰色 10YR4/1 | 褐灰色 10YR4/1 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 24 | 112 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.6 | 8.0+ | − | 内底:工具痕、指頭圧痕、脚内:ナデツケ、ヨコナデ | 橙色5YR6/6 | 橙色5YR6/6 脚内: 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母含む | やや不良 | |
| 24 | 113 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 7.8 | 7.0+ | タテナデ、ヨコナデ | ナデ、ハケメ | 橙色5YR6/6 | 明褐色 7.5YR5/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良 | 外面一部に黒斑、脚縁面取り |
| 24 | 114 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.1 | 13.0+ | ハケメのちナデ、ナデ | ハケメのちナデ、ナデ | 明赤褐色 5YR5/6 | 褐灰色 10YR5/1 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 24 | 115 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.0 | 9.0+ | − | − | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 24 | 116 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 10.9 | 11.5+ | ハケメのちナデ | ハケメのち ナデ、ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/3 | にぶい橙色 7.5YR6/4 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 黒斑あり |
| 24 | 117 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.2 | 15.5+ | ヨコナデ、ナデ | − | にぶい黄橙色10YR7/3 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 脚縁面取り,一部被熱? |
| 25 | 118 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 15.6 | − | 4.3+ | − | 指頭圧痕 | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 25 | 119 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 11.6 | − | 7.2+ | タテハケメ | ヨコハケメ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石含む | 普通 | |
| 25 | 120 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 15.0 | − | 5.1+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 口縁面取り |
| 25 | 121 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 15.0 | − | 5.3+ | ヨコナデ、ハケメのちナデ | ヨコナデ、ハケメのちナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 25 | 122 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 11.2 | − | 6.4+ | ナデ、ハケメのちナデ | ナデ、ヨコナデ | にぶい橙色 7.5YR6/4 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 一部に黒斑あり |
| 25 | 123 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 16.0 | − | 7.3+ | − | − | 橙色 7.5YR6/6 | 橙色7.5YR6/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 25 | 124 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 4.6+ | ナデ、突帯、刺突文、ハケメ | ナデ、ハケメ、指頭圧痕 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 25 | 125 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | 21.9 | − | 15.8+ | 口縁刻目、ハケメのちナデ、刺突文 | ハケメのちナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 25 | 126 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 長頸壺 | − | − | 6.4+ | ナデ | − | 橙色 7.5YR7/6 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 頸部最小径9.0cm |
| 25 | 127 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 長頸壺 | − | − | 10.0+ | − | − | 橙色 7.5YR7/6 | 黄灰色 2.5Y6/1 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 25 | 128 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 長頸壺 | − | − | 14.5+ | ナデ、ミガキ | ナデ | 橙色5YR6/6 | 橙色5YR6/6 | 1mm以下の、石英、長石、赤褐色粒を含む | 良好 | 胴部最大径13.4cm、一部に黒斑 |
| 26 | 129 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 7.6 | 6.2+ | − | ハケメ、指圧痕 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 橙色7.5YR7/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石含む | やや不良 | 底部黒斑、内面一部に黒斑 |
| 26 | 130 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 7.4 | 9.9+ | − | − | にぶい黄橙色10YR6/4 | にぶい黄橙色 10YR6/4 | 7mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 一部に黒斑 |
| 26 | 131 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 7.2 | 5.8+ | ナデ、ハケメのちナデ | ハケメ | 浅黄橙色 10YR8/3 | 褐灰色 10YR6/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 26 | 132 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 9.2+ | ケズリ | ナデ、指圧痕 | にぶい赤褐色5YR5/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 26 | 133 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 6.8 | 2.8+ | ナデ | ハケメ | 黒斑 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石含む | 不良 | |
| 26 | 134 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.3+ | − | 内底 指頭圧痕 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 底部やや丸底 |
| 26 | 135 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 9.0 | 10.5+ | ハケメのちナデ | ハケメのちナデ | 橙色 7.5YR7/6 | にぶい黄橙色 10YR7/2 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 一部に黒斑 |
| 26 | 136 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 11.9+ | ハケメのちナデ | ハケメ | 橙色 7.5YR7/6 | 褐灰色 7.5YR5/1 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 26 | 137 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 壺 | − | 5.2 | 14.4+ | ハケメ、ナデ | ハケメ、ナデ | 橙色5YR6/6 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 138 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 鉢 | 14.0 | − | 5.7+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR6/4 | 灰黄褐色 10YR5/2 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 139 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 鉢 | 16.0 | − | 7.2+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 140 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 鉢 | 14.4 | − | 5.9+ | ナデ、ケズリ | ヨコナデ | 橙色5YR7/6 | 橙色5YR6/6 脚内: 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 27 | 141 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 鉢 | 17.0 | − | 7.6+ | ヨコナデ | ヨコナデ、ハケメのちナデ | にぶい橙色 5YR7/4 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 27 | 142 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 甕 | − | 12.2 | 13.7+ | ハケメのちナデ、ナデ | ハケメのちナデ | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 143 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | 31.4 | − | 4.1+ | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、ナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 外面一部に黒斑あり |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 27 | 144 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | 30.0 | − | 2.9+ | ヨコナデ | ヨコナデ、ナデ | 灰黄色 2.5Y7/6 | 灰白色 7.5YR8/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | |
| 27 | 145 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | 30.0 | − | 3.1+ | − | ヨコナデ、タテナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 灰白色 7.5YR8/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | |
| 27 | 146 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | 29.0 | − | 3.8+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 147 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | 29.6 | − | 2.9+ | ナデ、ヨコナデ | ナデ、ヨコナデ | 橙色5YR7/6 | にぶい橙色 5YR6/4 | 1.5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 27 | 148 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 8.3+ | − | 脚内部:しぼり | 赤橙色 10R6/6 | 橙色5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | 脚部外面に黒斑あり |
| 27 | 149 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | − | 13.6 | 8.5+ | ナデ | ハケメのちナデ、しぼり痕 | 橙色 2.5YR6/6 | 橙色2.5YR6/6 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 27 | 150 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 14.2+ | ナデ | しぼり痕 | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 黄橙色 7.5YR7/8 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 焼成前穿孔1カ所 |
| 27 | 151 | E7,E8 | SD27 | 弥生土器 | 高坏 | − | 17.0 | 17.2+ | ナデ | ナデ、工具痕 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、赤褐色粒を含む | 良好 | 穿孔2カ所 |
| 28 | 152 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | − | 12.4 | 6.7+ | ナデ、ハケメ | − | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 28 | 153 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | − | 12.2 | 6.7+ | − | 指頭圧痕、しぼり痕 | にぶい橙色 5YR7/3 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 普通 | |
| 28 | 154 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 14.0 | 13.2 | 16.6 | − | しぼり痕 | 明褐色 7.5YR5/6 | 明褐色 7.5YR5/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 一部被熱？ |
| 28 | 155 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 12.4 | 12.8 | 16.2 | − | − | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | やや不良 | |
| 28 | 156 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 11.8 | − | 15.6+ | − | しぼり、指頭圧痕、工具痕 | 浅黄橙色 7.5YR8/3 | 明赤褐色 5YR5/6 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 普通 | |
| 28 | 157 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 11.7 | − | 14.9 | ヨコナデ | ヨコナデ、ナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR6/6 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 28 | 158 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 13.9 | 14.4 | 17.3 | ハケメのちナデ | ハケメ、しぼり痕、工具痕 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 6mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 28 | 159 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 8.6 | 11.6 | 16.2 | タタキ、ナデ | ナデ、ハケメ、しぼり痕 | 明赤褐色 5YR5/8 | 明赤褐色 5YR5/8 | 4mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 28 | 160 | E8 | SD27 | 弥生土器 | 器台 | 11.3 | 12.5 | 16.3 | 刺突文、ハケメ、工具痕、ハケメのちナデ | ハケメ、しぼり痕ハケメのちナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR6/6 | 5mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 47 | 222 | E7 | SD10 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 3.9+ | − | − | 橙色5YR6/6 | にぶい黄橙色 10YR7/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 47 | 223 | E7 | SD10 | 弥生土器 | 鉢 | − | − | 2.5+ | − | − | にぶい黄橙色10YR6/3 | にぶい黄橙色 10YR7/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 47 | 224 | E7 | SD10 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 5.3+ | − | − | 浅黄橙色 10YR8/3 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 4mm以下の石英長石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 47 | 225 | E7 | SD10 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.5+ | ナデ、突帯 | ナデ | 浅黄橙色 10YR8/3 | 灰白色 10YR7/1 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 47 | 226 | E6 | SD10 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.6+ | − | − | 橙色5YR6/6 | にぶい黄橙色 10YR7/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 47 | 227 | E6 | SD10 | 弥生土器 | 器台 | − | − | 5.9+ | ハケメ | − | 灰黄褐色 10YR5/2 | 灰黄褐色 10YR6/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 47 | 228 | E7 | SD32 | 瓦質土器 | 甕 | − | − | 3.0+ | 格子目タタキ | ヨコナデ | 灰色N5/0 | 灰色N6/0 | 3mmの石英,長石を含む | 良好 | 樺番城産か |
| 47 | 229 | E7 | SD32 | 瓦質土器 | 擂鉢 | − | − | 3.0+ | 指頭圧痕 | 擂り目 | 灰色N6/0 | 灰色N6/0 | 5mm以下の白色粒、黒色粒を含む | 良好 | |
| 47 | 230 | E7 | SD32 | 瓦質土器 | 擂鉢 | − | − | 4.1+ | 指頭圧痕、ヨコナデ | 擂り目 | 灰黄色 2.5Y5/1 | 灰黄色 2.5Y7/2 | 2mm以下の角閃石、雲母、長石を微量に含む | 良好 | |
| 47 | 231 | E7 | SD32 | 瓦質土器 | 擂鉢 | − | − | 5.4+ | − | 擂り目 | 灰色N7/0 | 灰色N7/0 | 4mm以下の石英、長石を微量含む | 良好 | |
| 47 | 232 | E7 | SD32 | 瓦質土器 | 擂鉢 | − | − | 6.3+ | ヨコナデ | 擂り目 | 灰色N6/0 | 灰色N5/0 | 3mm以下の石英、長石、白色、黒色粒を微量含む | 良好 | |
| 48 | 233 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.7+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 橙色5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石を多く含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 48 | 234 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.5+ | ナデ | ナデ | 灰白色 7.5YR8/2 | 浅黄橙色 7.5YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 48 | 235 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.0+ | − | − | 浅黄橙色 10YR8/3 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 48 | 236 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.3+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR7/2 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | 城ノ越式 |
| 48 | 237 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | 橙色 7.5YR6/6 | 橙色7.5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | |
| 48 | 238 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | にぶい黄橙色10YR6/4 | にぶい黄橙色 10YR6/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 239 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 5.5+ | タタキのちハケメ | ハケメ、ナデ | 褐灰色 10YR4/1 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 48 | 240 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | 9.6 | 3.9+ | − | − | にぶい黄橙色10YR6/4 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 48 | 241 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 3.0+ | − | − | 明赤褐色 2.5YR5/6 | 橙色2.5YR6/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 48 | 242 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.4 | 10.3+ | − | ナデ | 橙色 2.5YR6/8 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒髪式 |
| 48 | 243 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.0 | 5.8+ | − | − | 橙色 2.5YR6/8 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 3mm以下の石英、長石を含む | 良好 | 城ノ越式、黒曜石小片あり |
| 48 | 244 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 甕 | − | 6.6 | 2.7+ | − | ナデ | 黄橙色 10YR8/6 | 黄橙色 10YR8/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | 城ノ越式 |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 口径(cm | 底径(cm | 器高(cm | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 48 | 245 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 3.3+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色 10YR8/3 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 246 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 脚付鉢 | − | − | 2.4+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/3 | 浅黄橙色 7.5YR8/3 | 2mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 247 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 9.1+ | ナデ、ハケメ | − | 橙色 7.5YR7/6 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 頸部最小径12.4cm |
| 48 | 248 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 4.5+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR7/3 | 浅黄橙色 7.5YR8/3 | 3m以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 48 | 249 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺か | − | − | 2.0+ | ナデ | ナデ | 橙色5YR6/6 | 明赤褐色 5YR5/6 | 3mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 250 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 6.0+ | 突帯 | ナデ、ハケメ | にぶい橙色 5YR7/4 | にぶい橙色 5YR6/4 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | |
| 48 | 251 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | 10.0 | 7.8+ | − | − | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 252 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 壺 | − | 8.0 | 4.4+ | ナデ | − | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 橙色7.5YR6/6 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | サヌカイト小片含む |
| 48 | 253 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 高坏 | 22.6 | − | 3.1+ | ナデ | ナデ | 橙色 7.5YR6/6 | 橙色7.5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 48 | 254 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 器台 | − | − | 4.0+ | − | − | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色5YR7/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | |
| 48 | 255 | E6 | SK12 | 弥生土器 | 鉢 | − | 7.7 | 2.7+ | 指頭圧痕 | ナデ | 橙色5YR6/6 | にぶい橙色 5YR6/4 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む | 良好 | |
| 50 | 260 | E8 | 炭化物層 | 瓦質土器 | 擂鉢 | − | − | 4.5+ | ナデ | 擂り目 | 褐灰色 10YR5/1 | 褐灰色 10YR5/1 | 1mm以下の白色粒を含む | 良好 | |
| 50 | 261 | E8 | 炭化物層 | 土師器 | 土師皿 | − | − | 2.7 | ヨコナデ、底部糸切り | ナデ | 橙色 7.5YR7/6 | 橙色7.5YR7/6 | 2mm以下の石英を含む | 良好 | |
| 50 | 262 | E8 | 炭化物層 | 瓦器 | 椀 | − | − | 1.4+ | ケズリ、ヨコミガキ，口縁のみ黒化 | ヨコナデ、ケズリ | 露胎：灰白色N8/ | 燻部：灰色N5/ | 精良細粒 | 良好 | |
| 50 | 263 | E8 | 炭化物層 | 白磁 | 皿 | − | 7.2 | 2.4+ | 施釉 | 施釉 | 釉色：灰色N8/0 | 胎土：灰白色N6/0 | 磁胎、混入物なし | 良好 | 16C中頃 |
| 54 | 279 | E8 | − | 弥生土器 | 甕 | 14.6 | − | 7.5+ | ヨコナデ、ハケメ | − | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 浅黄橙色 10YR8/3 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 圧痕あり |
| 54 | 280 | E8 | − | 弥生土器 | 甕 | 16.4 | − | 7.5+ | ナデ、ハケメのちナデ | ハケメのちナデ、ハケメ | にぶい橙色 7.5YR5/3 | にぶい橙色 7.5YR6/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 54 | 281 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 壺 | 17.4 | − | 4.1+ | ナデ | ナデ | にぶい橙色 7.5YR6/4 | にぶい橙色 7.5YR6/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 54 | 282 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 壺 | − | 10.2 | 4.5+ | ナデ 底面ケズリか | ナデ | 浅黄橙色 10YR8/3 | 浅黄橙色 10YR8/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | サヌカイト小片あり |
| 54 | 283 | E8 | − | 弥生土器 | 壺 | − | 6.7 | 15.6+ | ナデ | ナデ、指頭圧痕 | にぶい橙色 2.5YR6/4 | 淡赤橙色 2.5YR7/3 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 54 | 284 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 甕 | − | − | 4.2+ | − | − | 橙色5YR6/6 | 褐灰色5YR4/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 54 | 285 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 脚付鉢 | − | 13.6 | 3.9+ | ナデ | ナデ | 橙色5YR7/6 | にぶい橙色 7.5YR7/4 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、赤色粒を含む | 良好 | |
| 54 | 286 | E9 | 包含層 | 弥生土器 | 短頸壺 | 9.8 | − | 3.9+ | ナデ | ナデ | 浅黄橙色 10YR8/3 | にぶい黄橙色 10YR7/2 | 2mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒曜石小片あり |
| 54 | 292 | E8 | 包含層 | 瓦質土器 | 火鉢 | − | − | 5.3+ | ナデ、突帯 | ナデ | にぶい褐色 7.5YR6/3 | にぶい褐色 7.5YR5/3 | 2mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む | 良好 | |
| 54 | 287 | D7 | 包含層 | 弥生土器 | 鉢 | 9.4 | 4.9 | 6.5 | ケズリ、ナデ | ナデ、工具痕 | 橙色 7.5YR6/6 | にぶい褐色 7.5YR5/4 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | |
| 54 | 288 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | ジョッキ | − | − | 7.8+ | ナデ | ナデ | 明褐色 7.5YR5/6 | 浅黄橙色 7.5YR8/3 | 2mm以下の石英、長石を含む | 良好 | |
| 54 | 289 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 壺 | − | − | 5.0+ | ナデ | − | 橙色 7.5YR6/6 | 橙色5YR7/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む | 良好 | 黒曜石片あり |
| 54 | 290 | E8 | 包含層 | 弥生土器 | 高坏 | − | − | 2.1+ | ナデ、ハケメ | ナデ | 灰白色 7.5RY8/2 | 浅黄橙色 7.5YR8/4 | 2mm以下の石英、長石、雲母を含む | 良好 | |
| 54 | 291 | E8 | 包含層 | ミニチュア土器 | 鉢 | 2.5 | − | 3.05 | 指頭圧痕、ナデ | 指頭圧痕、ナデ | 灰黄色 10YR8/2 黄灰色 | 浅黄色 2.5Y7/3 | 2mm以下の石英、長石、褐色粒を含む | 良好 | 重さ20g 胴部に穿孔 |
| 54 | 293 | E8 | 包含層 | 瓦質土器 | 甕 | − | − | 5.2+ | 格子目タタキ | ナデ | 褐灰色 10YR5/1 | 褐灰色 10YR5/1 | 1mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、白色・黒色粒を含む | 良好 | 樺番城産 |
| 54 | 294 | E8 | 包含層 | 染付 | 碗 | − | − | 1.5+ | 回転ケズリ | 回転ナデ | 呉須絵 | 呉須2重圏線 | 精良細粒・磁胎 | 良好 | |
| 54 | 297 | E9 | 包含層 | 白磁 | 皿 | − | 6.6 | 2.0+ | 回転ケズリ | 回転ナデ | 呉須絵 | 呉須3重圏線 | 精良細粒・磁胎 | 良好 | |

## 木船西遺跡Ⅳ区土製品観察表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 種別 | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | 色調 | | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | | | |
| 13 | 26 | D6 | SK08 | 土製品 | ミニチュア器台 | 4.9 | 2.3 | − | ナデ？工具痕 | − | にぶい黄色 2.5Y6/3 | 黄灰色 2.5Y4/1 | 2.5mm以下の石英、白色砂粒を含む | 良好 | 重さ40g |
| 37 | 194 | E8 | SK29 | 土製品 | 瓦質土製品 | 2.7 | 3.6 | 3.7 | 指頭圧痕、ナデ | − | 灰色5Y4/1 | − | 微細～1.5mm大の石英と白色砂粒を含む。 | 良好 | 重さ17g 2ヶ所の焼成前穿孔 |
| 37 | 195 | E8 | SK29 | 土製品 | 棒状瓦質土製品 | 4.6+ | 1.3 | − | 指頭圧痕 | − | 燻部：褐灰色 10YR4/1 | 露胎部：灰白色 10YR8/2 | 0.5～2mmの石英、長石、雲母を少量含む | 良好 | 瓦質土器と同じ胎土 |
| 37 | 196 | E8 | SK29 | 土製品 | 筒形土製品 | 8.3+ | − | 7.8+ | 指頭圧痕、ナデ | − | 灰白色5Y7/1 | 褐灰色 7.5YR4/1 | 微細～5mmの石英、0.5～2mmの長石を含む | 良好 | 破断面は燻されている。 |
| 54 | 296 | E8 | 褐色土 | 土製品 | 窯道具 | 4.9 | 6.0+ | 3.2+ | 指頭圧痕 | − | 橙色5YR7/6 | − | 1mmの石英を多く含む | 良好 | 重さ104g |
| 54 | 297 | E8 | 造成土 | 土製品 | 窯道具（焼台） | 直径 4.8 | − | 1.7 | 指頭圧痕 | − | 明褐色 7.5YR5/6 | − | 石英、雲母を含む | 良好 | 重さ44g |

# 木船西遺跡Ⅳ区瓦観察表

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 凸面 | 凹面 | 側縁 | | | | |
| 32 | 171 | E8 | SK29 | 丸瓦 | 24.5+ | 15.4+ | 2.4 | タテナデ、玉縁ヨコナデ | コビキA痕、玉縁しぼり痕 | 面取り、工具痕 | 灰色2.5Y7/1<br>灰色N6/ | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。を含む。胎土マーブル。 | やや不良 | |
| 33 | 172 | E8 | SK29 | 丸瓦 | 31 | 13 | 2.3 | タテナデ、玉縁ヨコナデ | コビキA痕、玉縁しぼり痕 | 面取り、工具痕 | 浅黄色2.5Y7/3<br>灰色N6/ | 7mm以下の石英、長石、雲母を含む。、胎土マーブル。 | やや不良 | |
| 34 | 173 | E8 | SK29 | 平瓦 | 20.8+ | 14.3+ | 2.1 | 糸切痕、ナデ、工具痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰白色7.5Y7/1<br>灰色N4/ | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 34 | 174 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.1+ | 5.5+ | 2.2 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ、工具痕 | ― | 褐灰色10YR6/1<br>灰白色10YR8/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 不良 | 還元土付着 |
| 34 | 175 | E8 | SK29 | 平瓦 | 13.5+ | 11.1+ | 1.8 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 黒褐色7.5YR2/1<br>明褐色7.5YR7/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | 赤土付着 |
| 34 | 176 | E8 | SK29 | 平瓦 | 12.5+ | 12.0+ | 1.7 | ナデ、工具痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰白色10YR7/1<br>褐灰色10YR6/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 34 | 177 | E8 | SK29 | 平瓦 | 14.2+ | 11.2+ | 1.9 | ナデ、工具痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰褐色7.5YR6/2<br>褐灰色7.5YR5/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 35 | 178 | E8 | SK29 | 平瓦 | 6.2+ | 9.1+ | 2.3 | 糸切痕、ナデ | ナデ、工具痕 | ― | 褐色7.5YR4/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | 土師質 |
| 35 | 179 | E8 | SK29 | 平瓦 | 7.5+ | 11.8+ | 1.8 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | ナデ | ― | 灰色5Y6/1<br>灰色5Y5/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | 須恵質、溶けた黒曜石か |
| 35 | 180 | E8 | SK29 | 平瓦 | 13.8+ | 16.4+ | 2.2 | ナデ、工具痕 | ナデ | ― | 明褐灰色7.5YR7/1<br>褐灰色7.5YR5/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 35 | 181 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.7+ | 6.2+ | 2.2 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 褐灰色10YR4/1 | 8mm以下の石英、長石、雲母を含む。 | 普通 | 土師質 |
| 35 | 182 | E8 | SK29 | 平瓦 | 16.9+ | 15.2+ | 2.2 | 糸切り痕、ナデ | 糸切痕 | 端部面取 | にぶい黄橙色10YR7/4<br>浅黄橙色10YR8/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | 土師質 |
| 36 | 183 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.3+ | 7.7+ | 1.8 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 明褐灰色7.5YR7/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 36 | 184 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.8+ | 6.7+ | 1.8 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 褐灰色7.5YR6/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 良好 | 断面赤土付着 |
| 36 | 185 | E8 | SK29 | 平瓦 | 5.3+ | 3.7+ | 1.6 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | にぶい黄橙色10YR7/3<br>黒褐色10YR3/1 | 8mm以下の石英、長石、角閃石、安山岩片を含む。 | やや不良 | |
| 36 | 186 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.6+ | 8.7+ | 2.1 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ、工具痕 | ― | 灰白色N7/ 灰色N6/ | 4mm以下の石英、長石、雲母を含む。胎土マーブル。 | やや不良 | |
| 36 | 187 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.1+ | 6.9+ | 2.4 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | 端部面取 | 褐灰色5YR6/1<br>褐灰色5YR5/1 | 10mm以下の石英、長石、安山岩片を含む。 | 普通 | |
| 36 | 188 | E8 | SK29 | 平瓦 | 12.3+ | 12.5+ | 2.4 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ、工具痕 | 端部面取 | 灰褐色7.5YR6/2<br>褐灰色10YR5/1 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | 破断面燻し、還元土付着 |
| 36 | 189 | E8 | SK29 | 平瓦 | 9.1+ | 12.1+ | 1.9 | ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 褐灰色10YR4/1 | 5mm以下の石英、長石を含む。 | 良好 | |
| 36 | 190 | E8 | SK29 | 平瓦 | 12.8+ | 13.6+ | 2.1 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 褐灰色7.5YR5/1 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | |
| 36 | 191 | E8 | SK29 | 平瓦 | 8.2+ | 8.9+ | 2.4 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 黒褐色10YR3/1<br>にぶい黄褐色10YR5/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | やや不良 | |
| 36 | 192 | E8 | SK29 | 平瓦 | 11.5+ | 9.3+ | 2.0 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 黒褐色10YR3/1<br>黄褐色10YR5/6 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 良好 | 断面黒化、赤土付着 |
| 36 | 193 | E8 | SK29 | 平瓦 | 10.8+ | 13.2+ | 2.3 | 糸切痕、ナデ | ナデ | ― | 褐灰色10YR6/1<br>灰白色10YR7/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 39 | 199 | E8 | トレンチ一括 | 丸瓦 | 23.4+ | 16 | 2.3 | ナデ | 端部面取、糸切痕、布目痕 | ― | 灰白色5Y8/1<br>暗灰色N5/ | 6mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 39 | 200 | E8 | トレンチ一括 | 丸瓦 | 9.2+ | 15.2+ | 2.1 | ナデ | 端部面取、糸切痕、布目痕 | ― | 灰色5Y6/ 灰色5Y4/ | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 普通 | |
| 40 | 201 | E8 | トレンチ一括 | 丸瓦 | 12.7+ | 9.3+ | 2.3 | ナデ | 端部面取、糸切痕、布目痕 | ― | にぶい黄橙色10YR7/4<br>浅黄橙色10YR8/3 | 6mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 良好 | |
| 40 | 202 | E8 | トレンチ一括 | 丸瓦 | 7.0+ | 10.1+ | 2.1 | ナデ | 端部面取、糸切痕、布目痕 | ― | 黄灰色2.5Y4/1<br>灰黄色2.5Y7/2 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 40 | 203 | E8 | トレンチ一括 | 軒丸瓦 | 6.0+ | 6.6+ | 2.6 | ― | ナデ、赤土付着 | ― | 灰色N4/<br>黄灰色2.5Y4/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | 珠紋、巴紋 |
| 40 | 204 | E8 | トレンチ一括 | 軒平瓦 | 13.4+ | 10.0+ | 2.1 | ナデ | ナデ | ― | 灰白色10YR8/2 | 3mm以下の長石、雲母を含む。 | 良好 | ×字または剣頭文か |
| 40 | 205 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 17.4+ | 14.5+ | 1.9 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ、工具痕 | 端部面取 | 灰白色7.5Y7/1<br>灰色N4/ | 5mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 良好 | |
| 41 | 206 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 17.5+ | 13.7+ | 2.2 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | 端部面取 | 灰色N5/<br>褐灰色10YR4/1<br>にぶい橙色7.5YR7/4 | 7mm以下の石英、長石、角閃石、黒曜石を含む。 | 良好 | 断面燻し |
| 41 | 207 | E8 | SK29 2層 | 丸瓦 | 7.1+ | 5.4+ | 2.3 | 面取、ナデ | 布目痕 | ― | 褐色7.5YR4/4<br>褐灰色10YR4/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | 土師質 |
| 41 | 208 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 8.0+ | 7.6+ | 2.3 | 糸切痕、凹台圧痕 | 糸切痕 | ― | にぶい褐色7.5YR6/3<br>褐灰色7.5YR5/1 | 3mm以下の石英、長石、雲母を含む。 | 良好 | 土師質、球面つくる？道具瓦？ |
| 41 | 209 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 10.8+ | 8.2+ | 2.2 | 糸切痕、ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | 端部面取 | 黒褐色10YR3/1<br>灰黄褐色10YR6/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 不良 | |
| 41 | 210 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 19.3+ | 10.5+ | 1.9 | 糸切痕、ナデ | ナデ | ― | 灰白色7.5Y7/1<br>灰白色7.5Y6/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 普通 | |
| 42 | 211 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 10.8+ | 5.6+ | 2.5 | 糸切痕、ナデ | ナデ | ― | 黒褐色10YR3/1<br>褐灰色10YR5/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 普通 | |
| 42 | 212 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 10.4+ | 6.6+ | 2 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 明褐灰色7.5YR7/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | やや不良 | |
| 42 | 213 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 11.2+ | 6.4+ | 2.5 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | 端部面取 | 黒褐色10YR3/1 | 4mm以下の石英、長石を含む。 | 良好 | 須恵質 |
| 42 | 214 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 9.9+ | 11.9+ | 2.1 | ヘラ痕 | ナデ | 端部面取 | 明褐灰色7.5YR7/1<br>褐灰色7.5YR5/1 | 4mm以下の石英、長石、黒色粒を含む。 | やや不良 | |
| 42 | 215 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 6.2+ | 6.3+ | 2.2 | ナデ | 糸切痕 | 端部面取 | 灰白色10YR8/1<br>灰白色10YR/8/2 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 不良 | 断面赤土付着 |
| 42 | 216 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 10.8+ | 4.9+ | 1.9 | 糸切痕 | 糸切痕 | ― | 灰黄橙色10YR6/2<br>褐灰色10YR5/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |

| 挿図番号 | 遺物番号 | 出土地点 | | 器種 | 法量 | | | 器面調整 | | | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | グリッド | 遺構番号 | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 凸面 | 凹面 | 側縁 | | | | |
| 42 | 217 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 8.9+ | 7.5+ | 2.0 | 凹台圧痕 | ナデ | ― | 灰白色10YR8/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 不良 | |
| 42 | 218 | E8 | トレンチ内一括炭化物層 | 平瓦 | 6.4+ | 6.1+ | 2.3 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰色5Y6/1<br>灰色5Y/5/1 | 5mm以下の石英、長石、白色粒を微量含む。 | 特に良好 | 須恵質 |
| 42 | 219 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 7.4+ | 6.8+. | 2.2 | ナデ | 糸切痕、工具痕 | ― | にぶい黄橙色10YR7/4<br>浅黄橙色10YR8/3 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 42 | 220 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 12.0+ | 9.8+ | 2.2 | 糸切痕 | 糸切痕 | ― | 灰色5Y6/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 42 | 221 | E8 | トレンチ一括 | 平瓦 | 10.5+ | 12.1+ | 1.7 | 糸切痕、ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 灰白色5Y7/1<br>灰色N5/ | 10mm以下の石英、長石、雲母、赤色粒を含む。 | やや不良 | |
| 50 | 264 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 14.2+ | 11.3+ | 2.0 | ヘラ痕、凹台圧痕 | 糸切痕、ヘラ痕 | ― | 灰色N5/<br>褐灰色10YR6/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 50 | 265 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 13.7+ | 7.4+ | 2.2 | ナデ、工具痕、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | 端部面取 | 褐灰色10YR6/1<br>灰白色10YR8/2 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | 端部面取 |
| 50 | 266 | E8 | 炭化物層 | 丸瓦 | 13.7+ | 7.4+ | 2.2 | ナデ | 糸切痕 | 端部面取 | 褐灰色10YR5/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 50 | 267 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 7.5+ | 12.6+ | 1.9 | 糸切痕、ナデ | ナデ | ― | 褐灰色10YR5/1 | 4mm以下の石英、長石、黒色粒を含む。 | 良好 | |
| 50 | 268 | E8 | 炭化物層 | 丸瓦 | 9.8+ | 4.2+ | 1.8 | ― | 糸切痕 | 端部面取 | 褐色7.5YR4/6<br>灰褐色7.5YR4/6 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母、赤色粒を含む。 | 普通 | 土師質 |
| 50 | 269 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 3.5+ | 2.9+ | 2.1 | ナデ | ナデ | 端部面取 | 灰白色10YR7/1<br>褐灰色10YR5/1 | 2mm以下の石英、長石を含む。 | やや不良 | 端部面取 |
| 50 | 270 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 13.0+ | 15.0+ | 2.1 | ナデ | 糸切痕、ナデ | ― | 灰色N5/<br>灰白色5Y8/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 50 | 271 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 9.3+ | 9.1+ | 2.0 | ナデ | ナデ | 端部面取 | 黒褐色10YR3/1 | 8mm以下の石英、長石、雲母、黒色粒を含む。 | 不良 | 端部面取 |
| 50 | 272 | E8 | 炭化物層 | 丸瓦 | 10.0+ | 6.0+ | 2.2 | ナデ | 糸切痕 | 端部面取 | 灰白色5Y8/1<br>灰色N4/ | 5mm以下の石英、長石、雲母を含む。 | 良好 | 端部面取 |
| 51 | 273 | E8 | 炭化物層 | 丸瓦 | 20.6+ | 11.4+ | 2.6 | ナデ、玉縁ヨコナデ | コビキA痕、玉縁しぼり痕 | 面取り、工具痕 | 浅黄色2.5Y7/3<br>黄灰色2.5Y5/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 52 | 274 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 31.2+ | 28.5+ | 2.1 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰色N5/<br>にぶい黄褐色10YR5/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | やや不良 | |
| 52 | 275 | E8 | 炭化物層 | 平瓦 | 18.5+ | 17.4+ | 2.1 | ナデ、凹台圧痕 | 糸切痕、ナデ | ― | 灰色N4/<br>黄褐色2.5Y5/3 | 5mm以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 | 普通 | |
| 53 | 276 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 6.6+ | 6.7+ | 1.9 | ナデ | ナデ | ― | 灰褐色7.5YR6/2<br>褐灰色7.5YR6/1 | 4mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | やや不良 | |
| 53 | 277 | E8 | トレンチ内 | 丸瓦 | 4.4+ | 1.8+ | 2.2 | 糸切痕 | ― | 端部面取 | 褐灰色10YR5/1 | 4mm以下の石英、長石を含む。 | 良好 | |
| 53 | 278 | E8 | トレンチ内 | 平瓦 | 10.4+ | 6.6+ | 1.9 | ヘラ痕、凹台圧痕 | 糸切痕、ヘラ痕 | ― | 褐灰色10YR5/1 | 3mm以下の石英、長石、角閃石を含む。 | 普通 | |

## 木船西遺跡Ⅳ区石器観察表

| 挿図番号 | 報告書番号 | グリッド | 出土地点 | 層位 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石材 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 43 | E6.7 | SK11 | 最下層 | 石皿 | 8.2 | 6.5 | 2.5 | 193.00 | 安山岩 | |
| 16 | 44 | E6 | トレンチ | | 削器 | 5.5 | 4.8 | 1.9 | 23.71 | サヌカイト | 旧石器か |
| 16 | 45 | E6 | SK11 | | 石鏃 | 2.6+ | 2.1+ | 0.5 | 2.18 | サヌカイト | 有茎柳葉形鏃 トレンチ内一括 |
| 19 | 70 | E8 | SK26 | 褐色土 | 石鏃 | 1.8 | 1.6 | 0.3 | 0.61 | サヌカイト | 凹基三角鏃 |
| 29 | 161 | E8 | SD27 | 褐色土 | 楔形石器 | 2.1 | 2.8 | 1.1 | 7.04 | 黒曜石 | 不純物多い 遺物集中部より下 |
| 29 | 162 | E8 | SD27 | 褐色土 | 内湾削器 | 3.2+ | 3.5+ | 1.0 | 11.73 | サヌカイト | ベルト内出土 |
| 29 | 163 | E8 | SD27 | | 剥片 | 2.65 | 3.0 | 0.5 | 3.16 | 黒曜石 | 不純物多い |
| 29 | 164 | E8 | SD27 | 褐色土ベルト内 | 楔形石器 | 3.1 | 2.2 | 1.2 | 10.93 | 黒曜石 | 西北九州産か。 |
| 29 | 165 | E8 | SD27 | 褐色土 | 楔形石器 | 3.0 | 2.6 | 0.8 | 5.00 | サヌカイト | 遺物集中部より下 |
| 29 | 166 | E8 | SD27 | 暗褐色土 | 石鏃 | 3.1+ | 2.3+ | 0.54+ | 2.1 | サヌカイト | 凹基三角鏃 |
| 29 | 167 | E8 | SD27 | | 掻器 | 4.5+ | 5.0 | 1.5 | 28.86 | サヌカイト | 旧石器か |
| 29 | 168 | E8 | SD27 | 褐色土 | 石鏃 | 4.9+ | 2.5+ | 1.2+ | 11.17 | サヌカイト | 有茎菱形鏃 |
| 29 | 169 | E8 | SD27 | 褐色土 | 石核 | 6.6 | 6.0 | 2.58 | 87.43 | サヌカイト | 斑晶が多い |
| 30 | 170 | E8 | SD27 | 第2層 | 磨石 | 10.3 | 8.7 | 5.1 | 641.00 | 安山岩 | |
| 38 | 197 | E8 | SK29 | 炭化物層 | 砥石 | 12.7 | 10.7+ | 5.5 | 1210.00 | 安山岩 | 両面に磨痕 |
| 38 | 198 | E8 | SK29 | | 楔形石器 | 2.7 | 2.7 | 1.0 | 6.81 | 黒曜石 | 西北九州産か |
| 48 | 256 | E6 | SK12 | 赤褐色土(1層) | 楔形石器 | 4.1 | 3.3+ | 1.1 | 11.42 | サヌカイト | 下辺は折れ面 |
| 48 | 257 | E6 | SK12 | 暗褐色土(1層) | 石核 | 7.1 | 5.1 | 2.0 | 70.82 | サヌカイト | 大型剥片利用 |
| 48 | 258 | E6 | SK12 | 赤褐色土(1層) | 打製石包丁 | 4.5 | 8.2 | 1.0 | 52.99 | 緑色変岩 | |
| 48 | 259 | E6 | SK12 | 暗褐色土 | 石斧砕片 | 6.6+ | 4.5+ | 0.9+ | 37 | 玄武岩質安山岩 | 福岡市今山産か |
| 55 | 298 | E8 | 包含層 | 炭化物層 | 柱状片刃石斧 | 3.0+ | 1.8 | 2.2 | 17.98 | 層灰岩 | 基部のみ |
| 55 | 299 | E7 | 包含層 | 黒褐色土 | 石錐 | 1.82 | 1.97 | 0.36 | 1.13 | 黒曜石 | 西北九州産 |
| 55 | 300 | E8 | 包含層 | 褐色土 | 削器 | 7.1 | 6.7 | 1.1 | 58.54 | サヌカイト | 風化が著しい。旧石器か。 |
| 55 | 301 | E8 | 包含層 | 褐色土 | 石皿 | 10.3 | 7.5 | 1.9 | 241.00 | 安山岩 | 磨面は片面のみ |

# 写真図版

木船西遺跡上空からみた有明海と雲仙

木船西遺跡上空からみた玉名市街地と玉名平野

# 図版 2

木船西遺跡上空からみた菊池川と金峰山

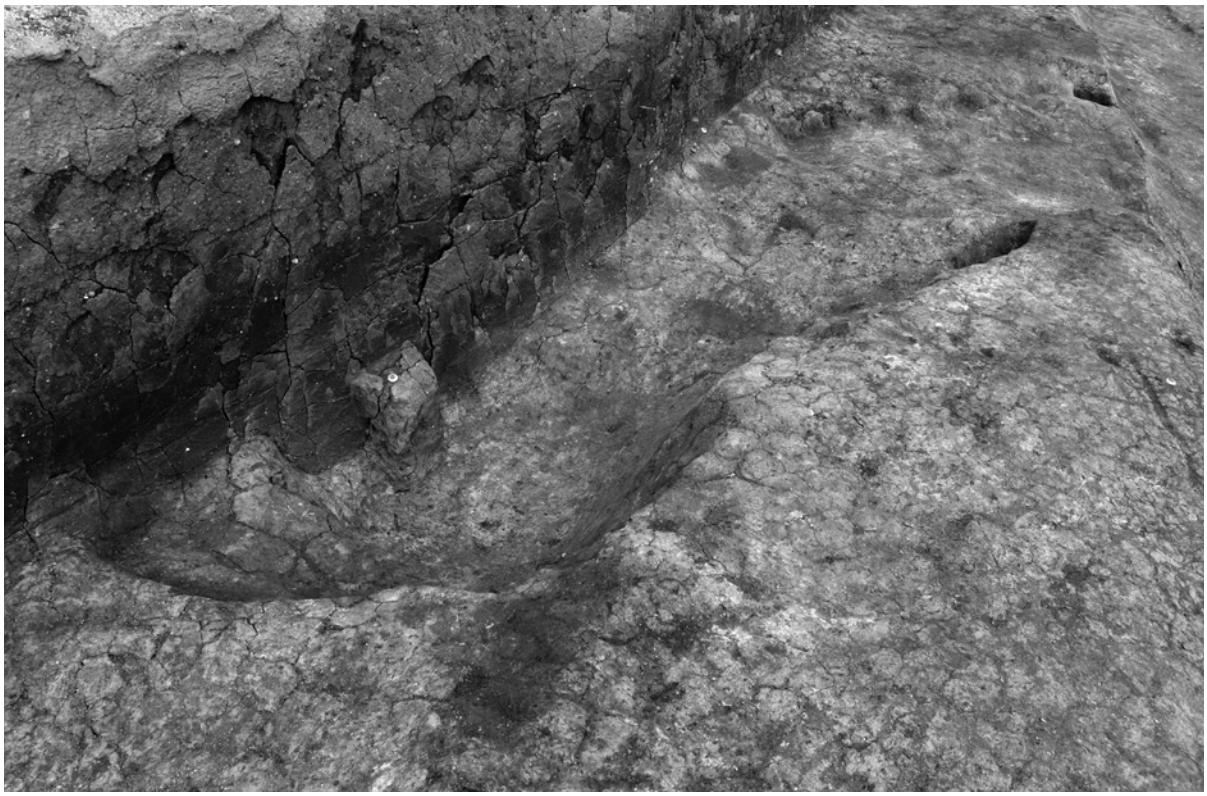
木船西遺跡上空からみた玉名市街地と小岱山

木船西遺跡Ⅳ区全景

木船西遺跡全景（Ⅰ区～Ⅳ区）

# 図版 4

SD01 遺物出土状況（東から）



SD01 完掘状況（南東から）

SK08 遺物出土状況・土層断面（北東から）

SK08 完掘状況（北から）

# 図版 6

SK11 土層断面（北から）

SK11 遺物出土状況（ 南東から）

SK11 遺物出土状況 近景（東から）

SK13 土層断面 (西から)

# 図版 8

SK26 土層断面（南東から）

SK26 遺物出土状況（南東から）

SK26 完掘状況（南東から）

SD27・SK29 遺物出土状況（南西から）

# 図版 10

SD27・SK29 遺物出土状況（北東より）

SD27 完掘状況（東から）

SK29 遺物出土状況（ 東から）

SK29 完掘状況（東から）

# 図版 12

SD32 土層断面（南から）

SD32 完掘状況（北東から）

SK29・SD32・SK33 完掘状況遠景（南から）

SK33 完掘状況（東から）

# 図版 14

石垣検出状況（南東から）

石垣検出状況（ 南から）

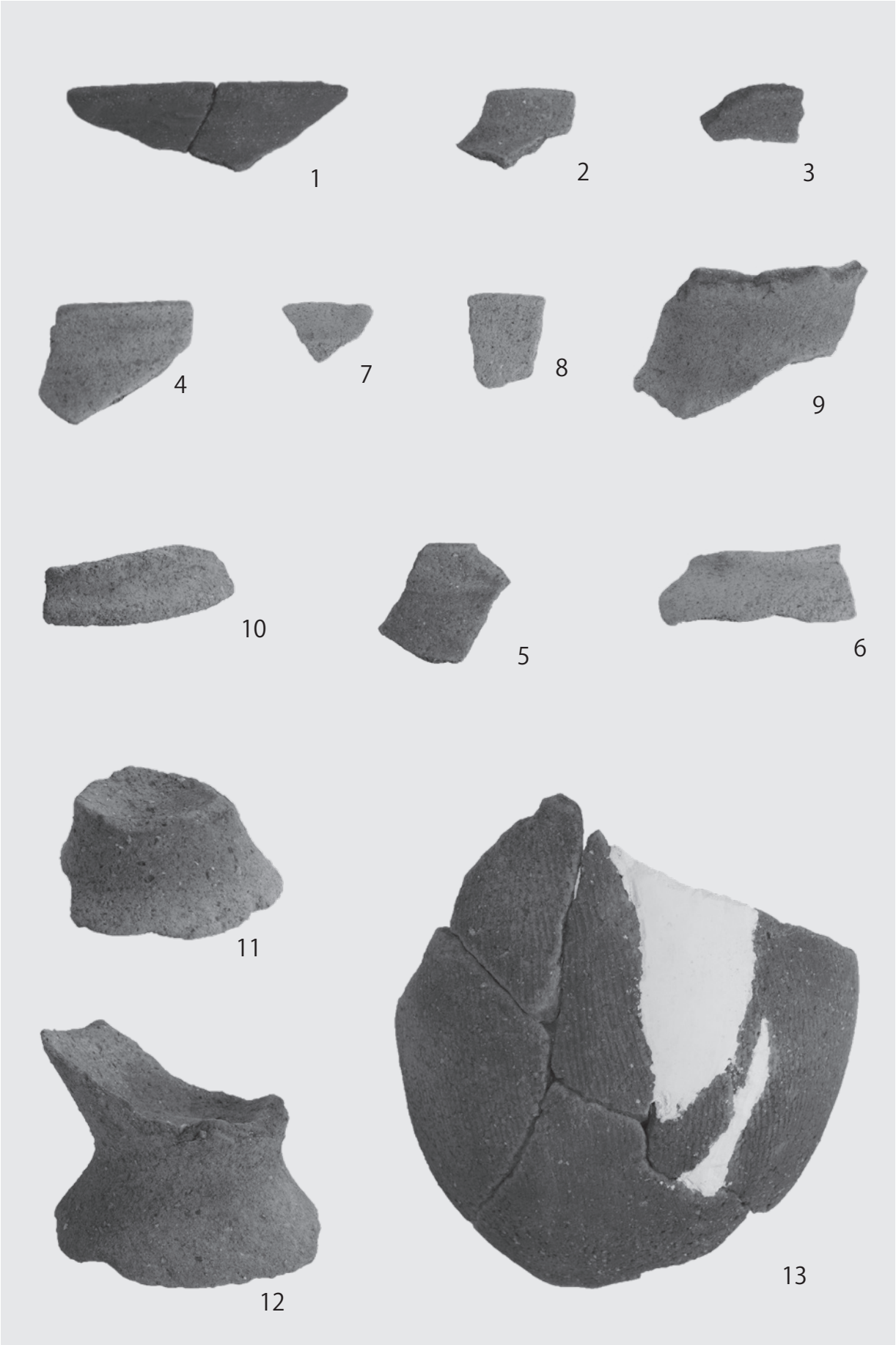
調査区北側道路状遺検出状況（北西から）

調査区北側道路状遺構断ち割り断面（北西から）

# 図版 16

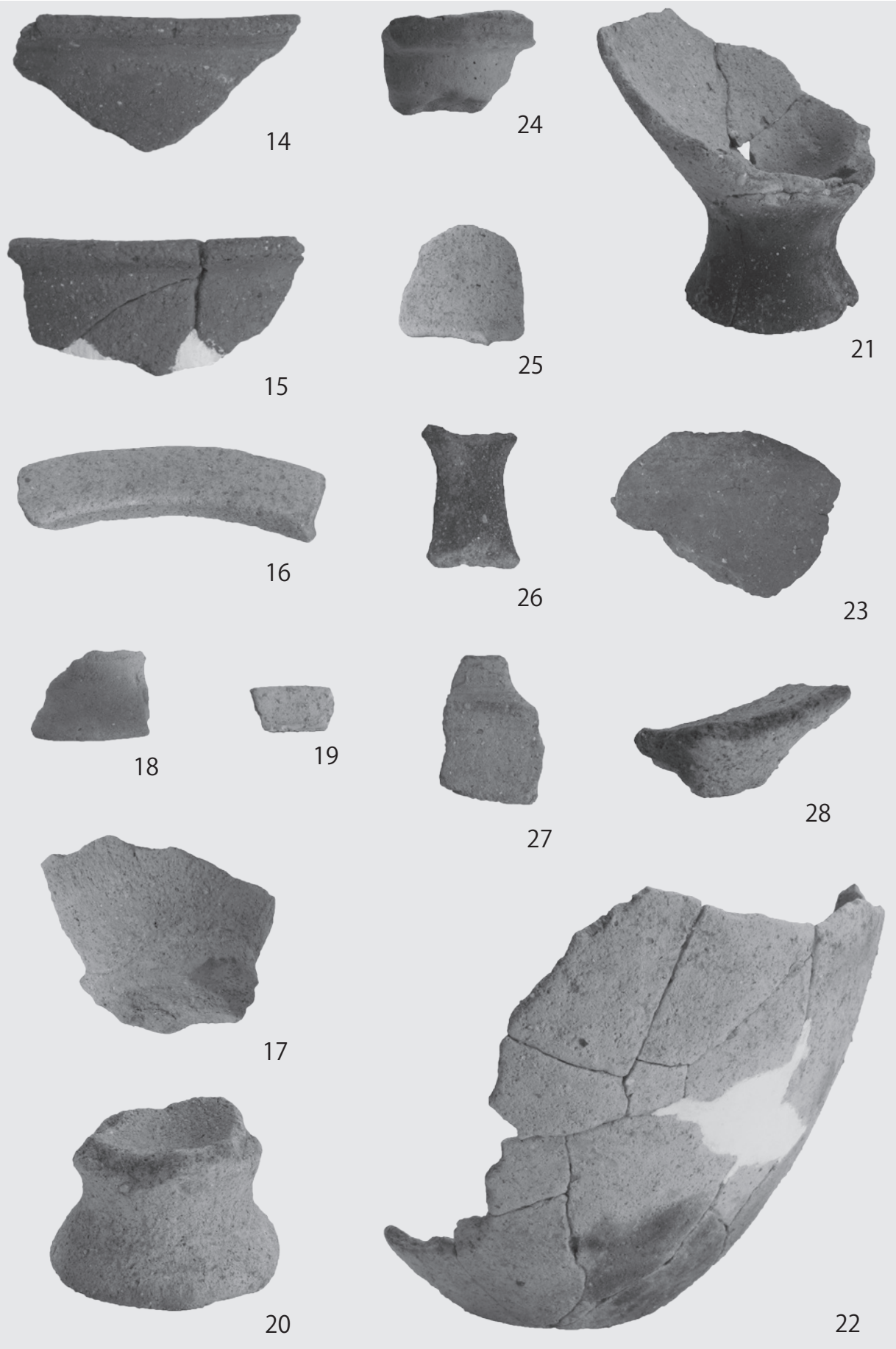
調査区南側粘土抜き取り土坑完掘状況（北から）

C5･D5･6 グリッド検出道路状遺構検出状況（南から）

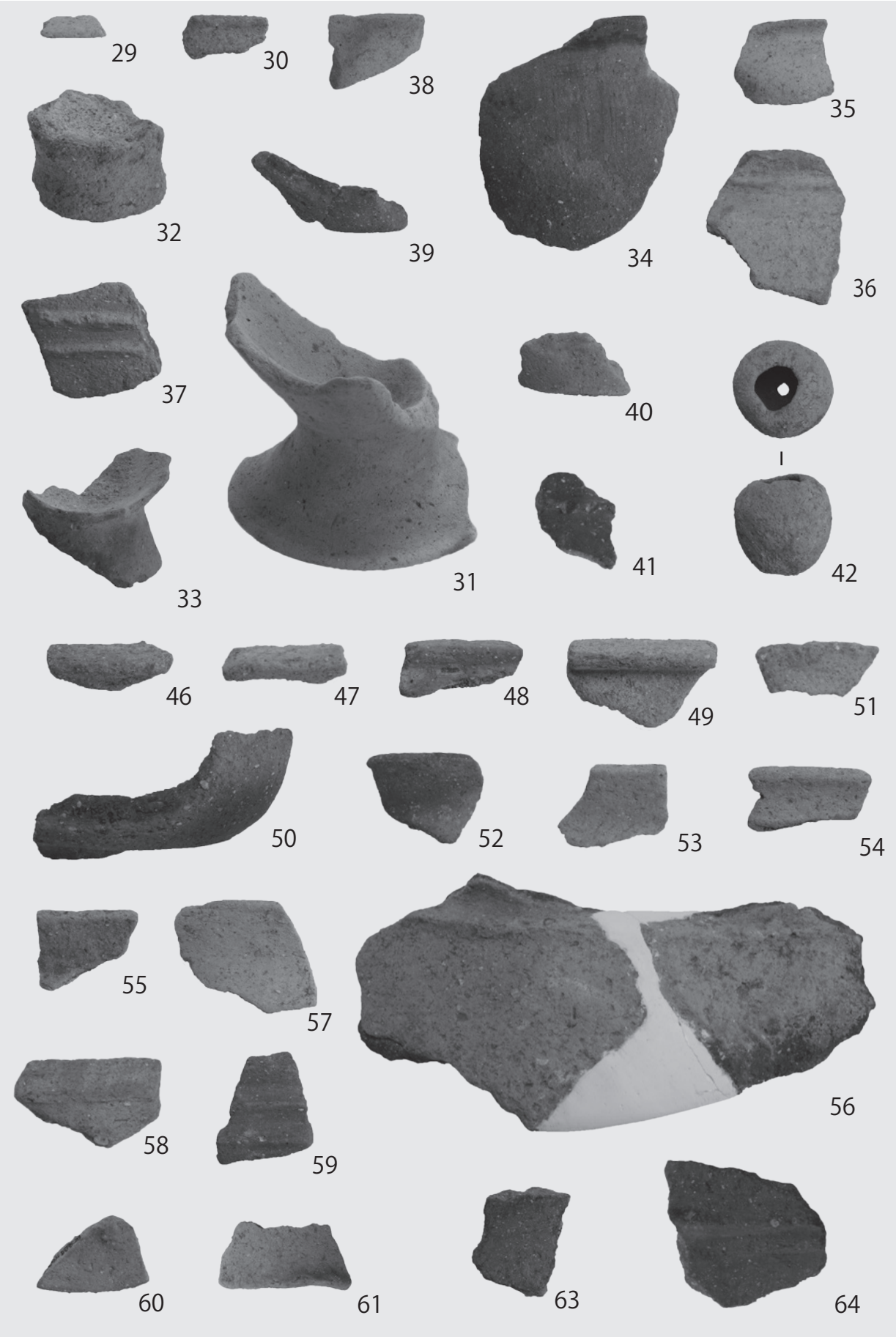



SD01 出土遺物

# 図版 18

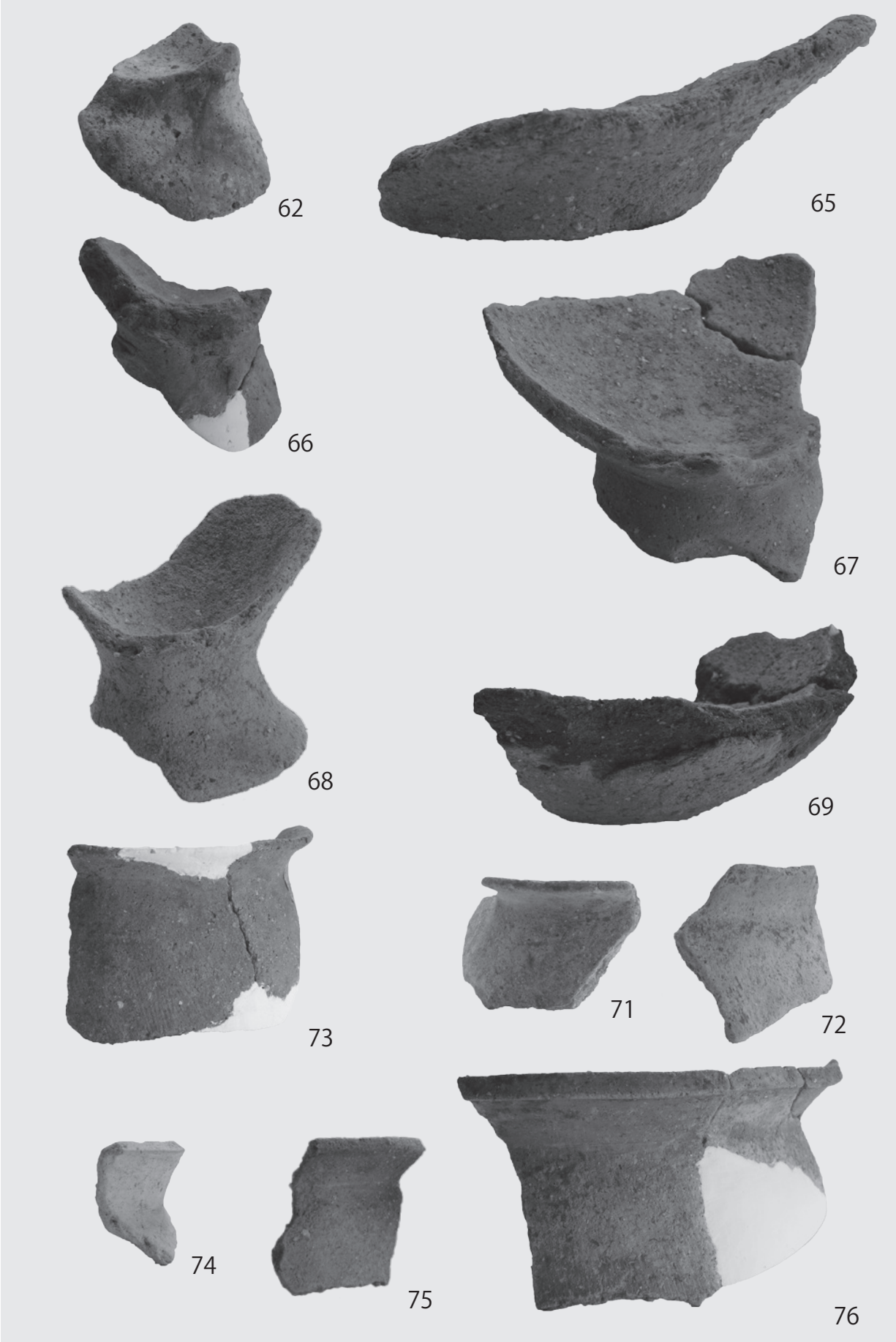



SK08 出土遺物

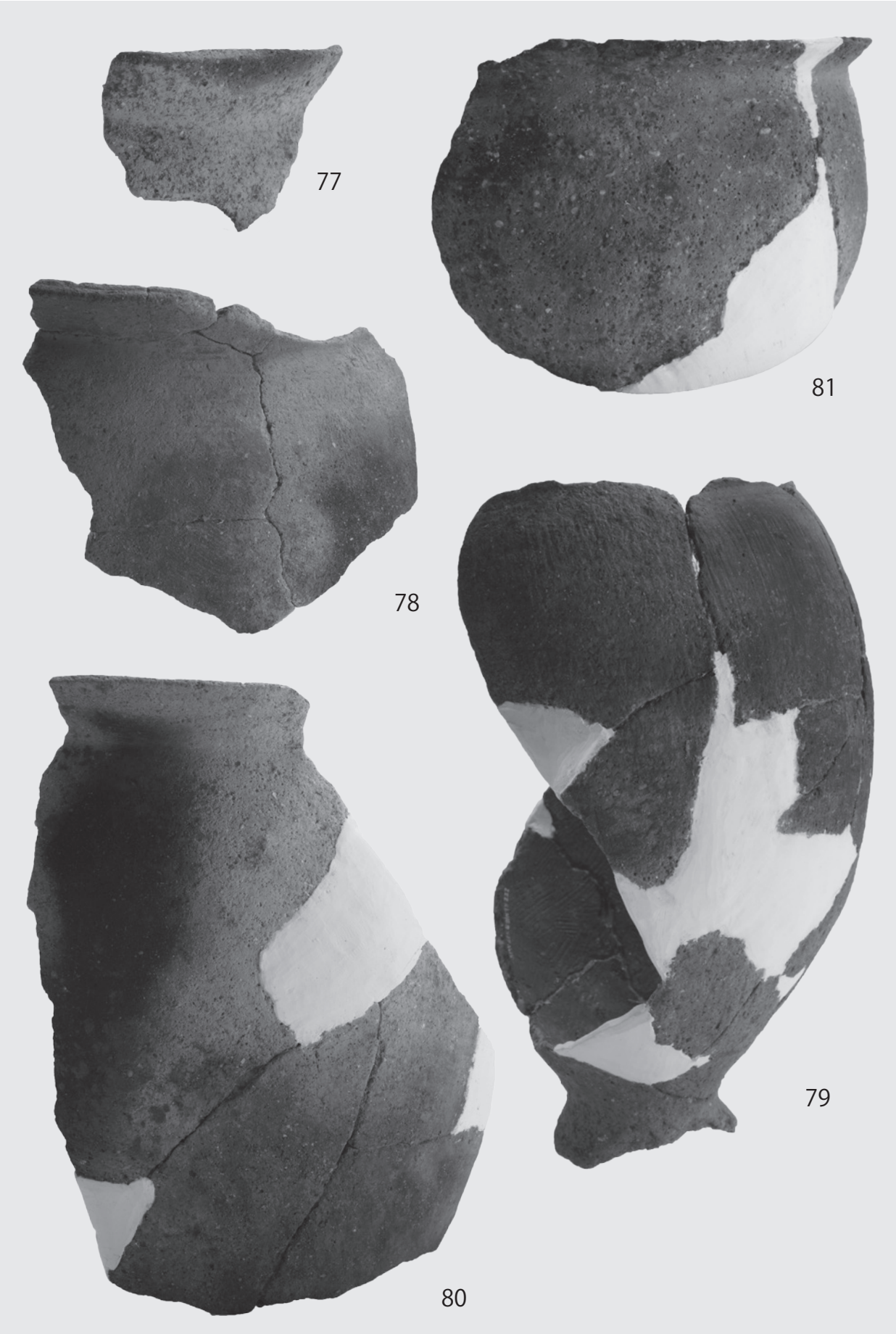



SK11 出土遺物・SK26 出土遺物 1

# 図版 20

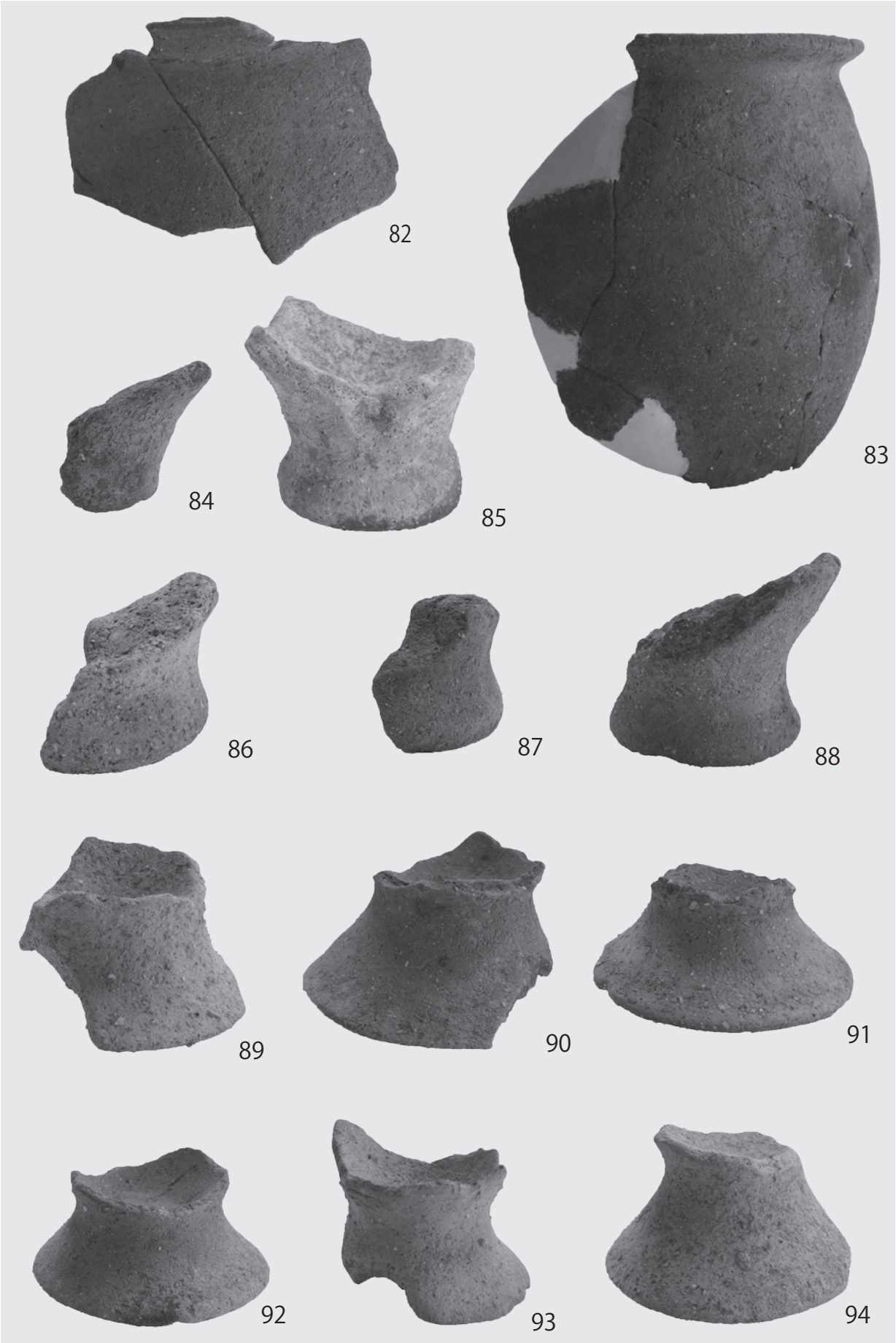



SK26 出土遺物 2・SD27 出土遺物 1



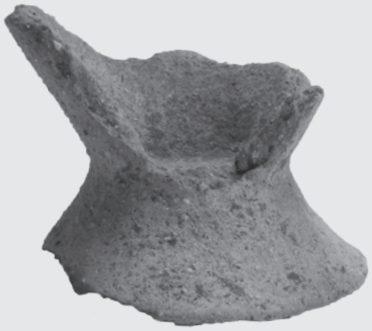

SD27 出土遺物 2

# 図版 22




SD27 出土遺物 3

95


96

97

98

99

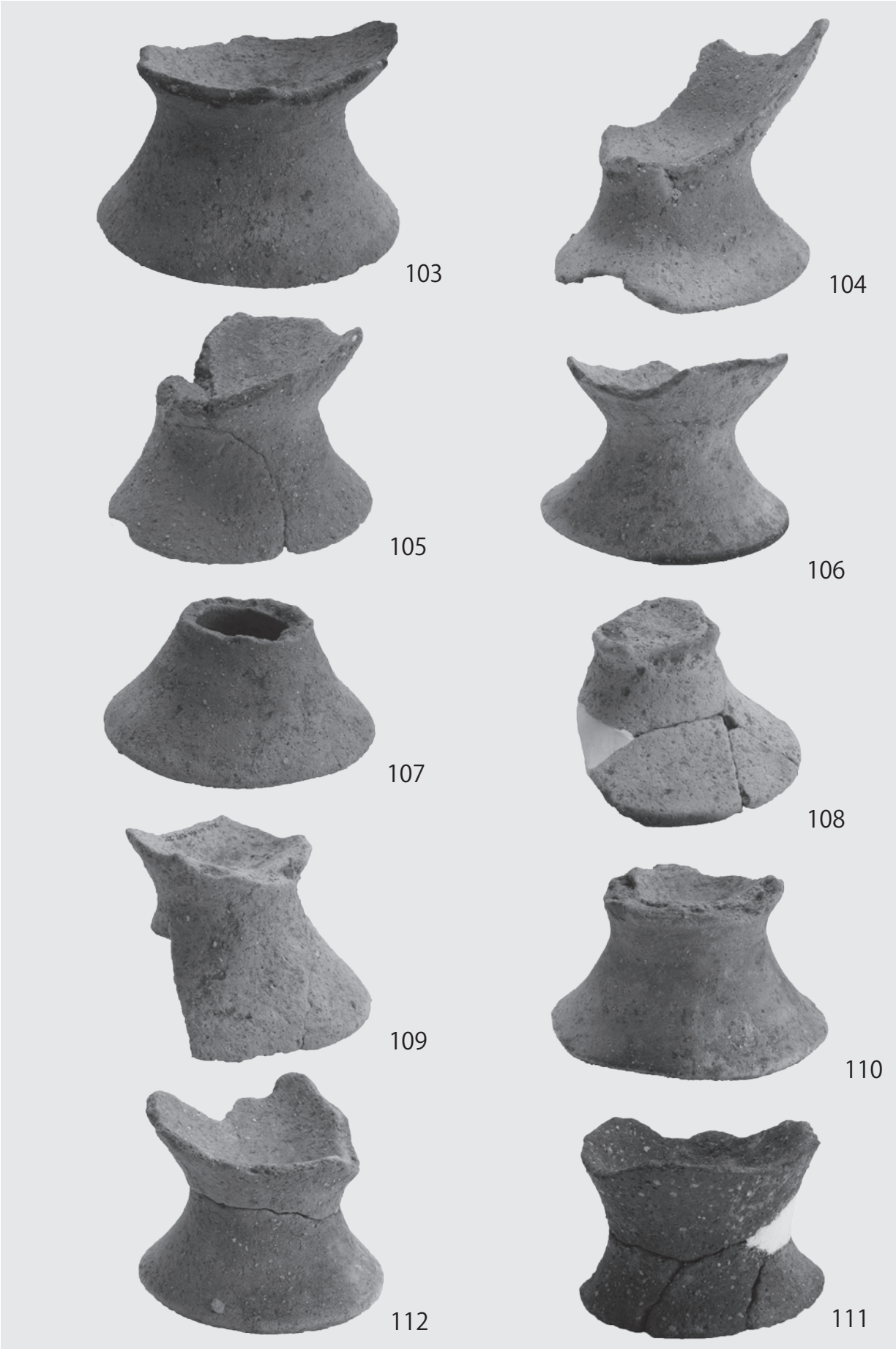
100

101

102

SD27 出土遺物 4

# 図版 24




SD27 出土遺物 5

113

115

114

116

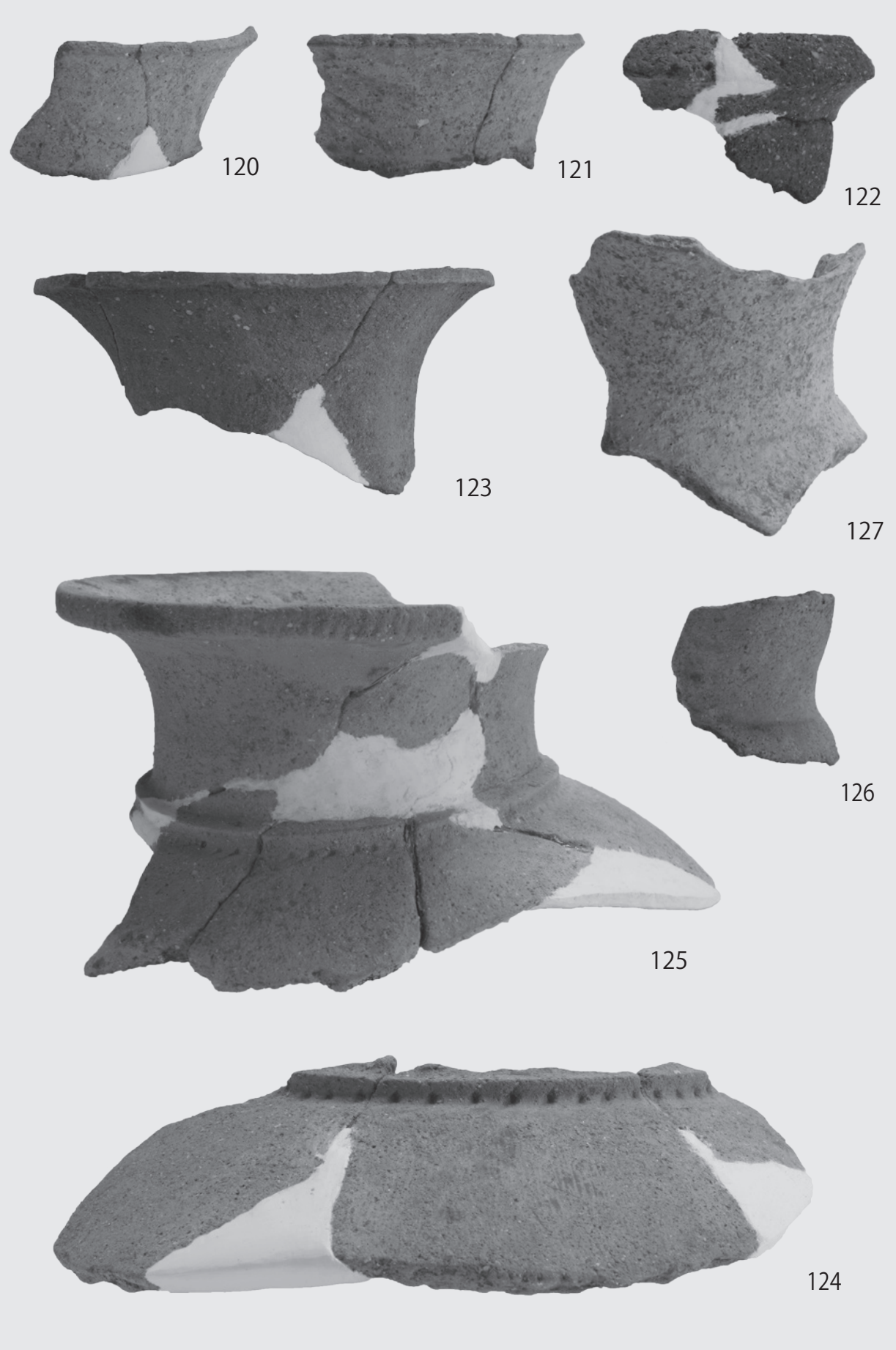
117

118

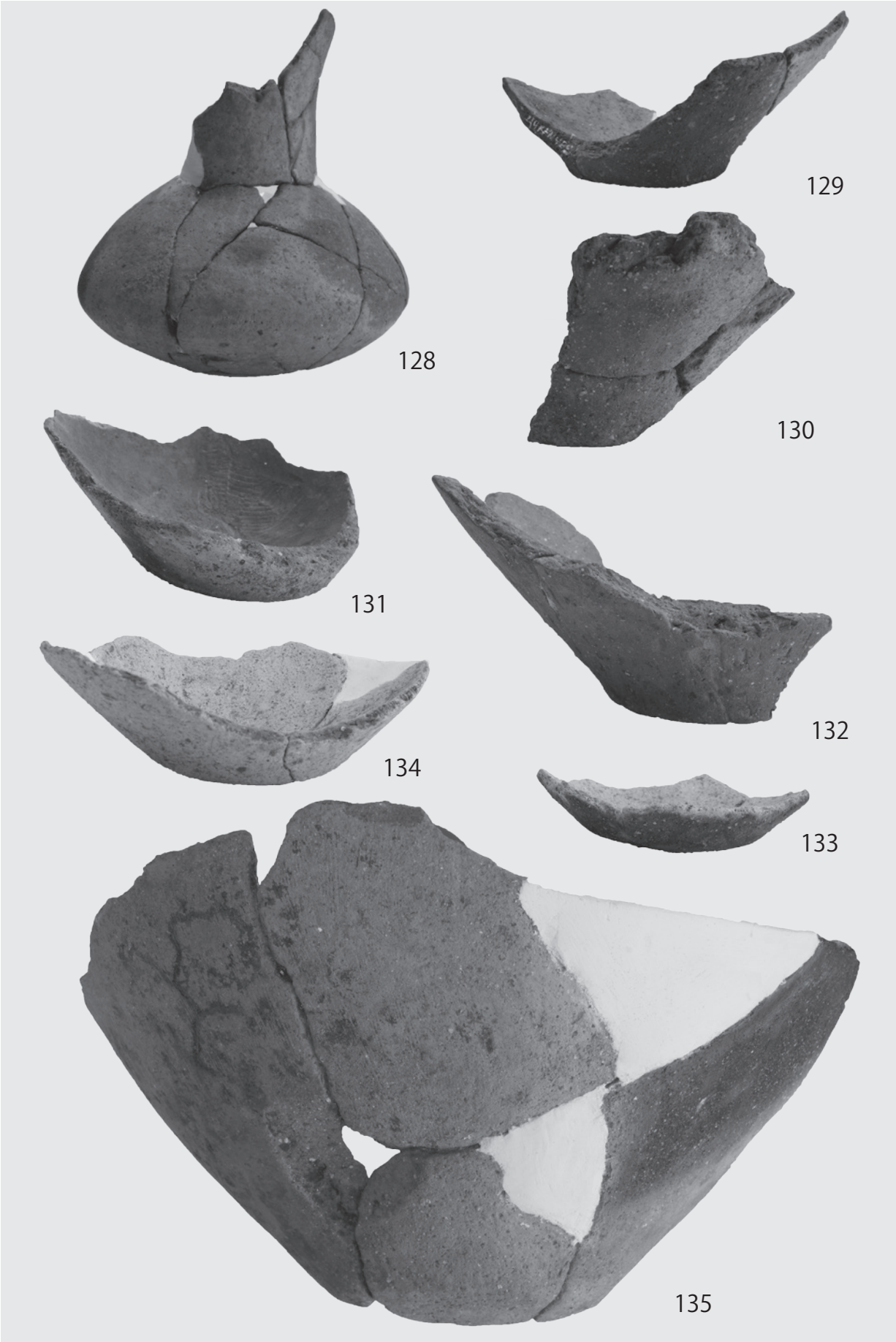
119

SD27 出土遺物 6

# 図版 26

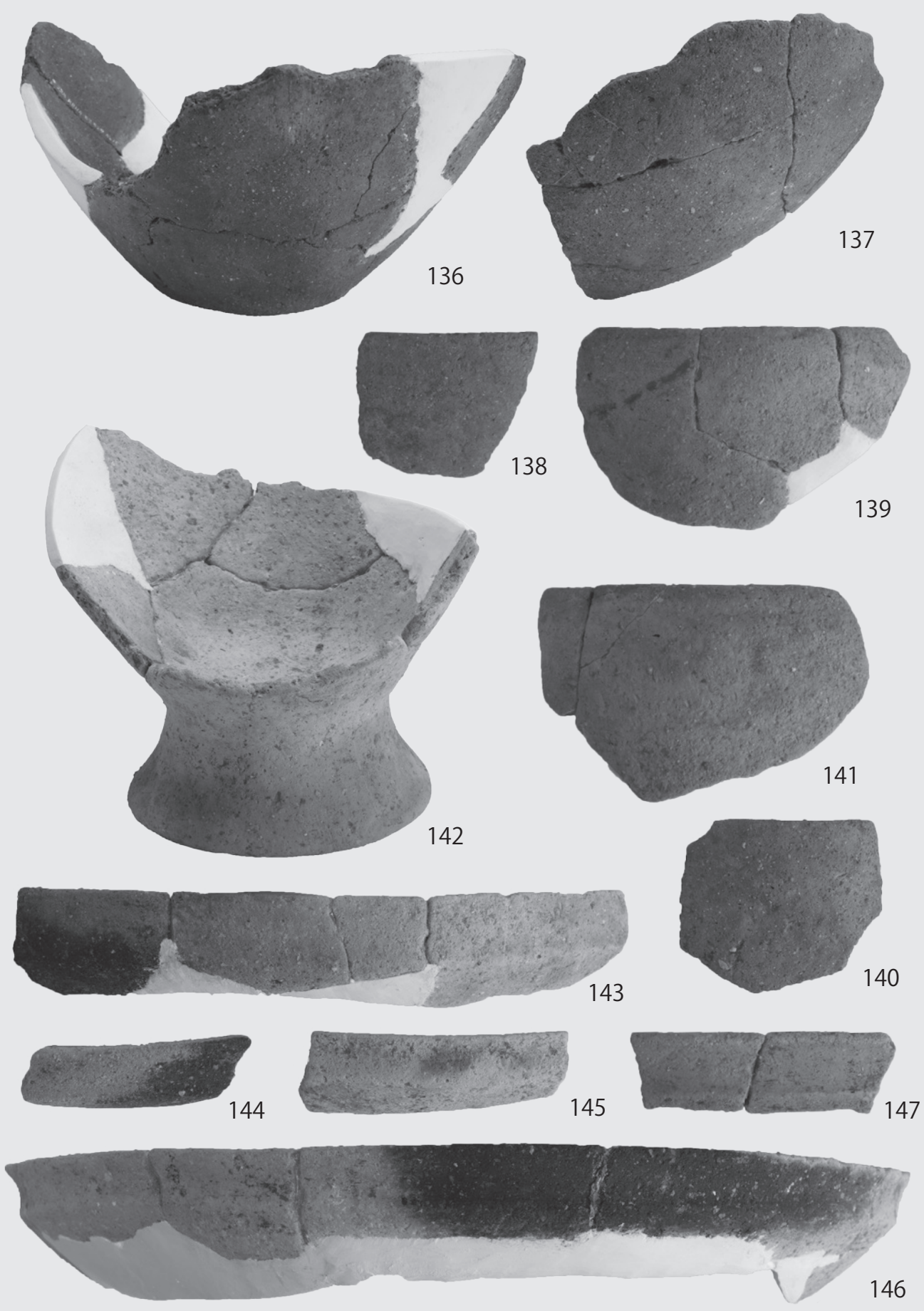



SD27 出土遺物 7

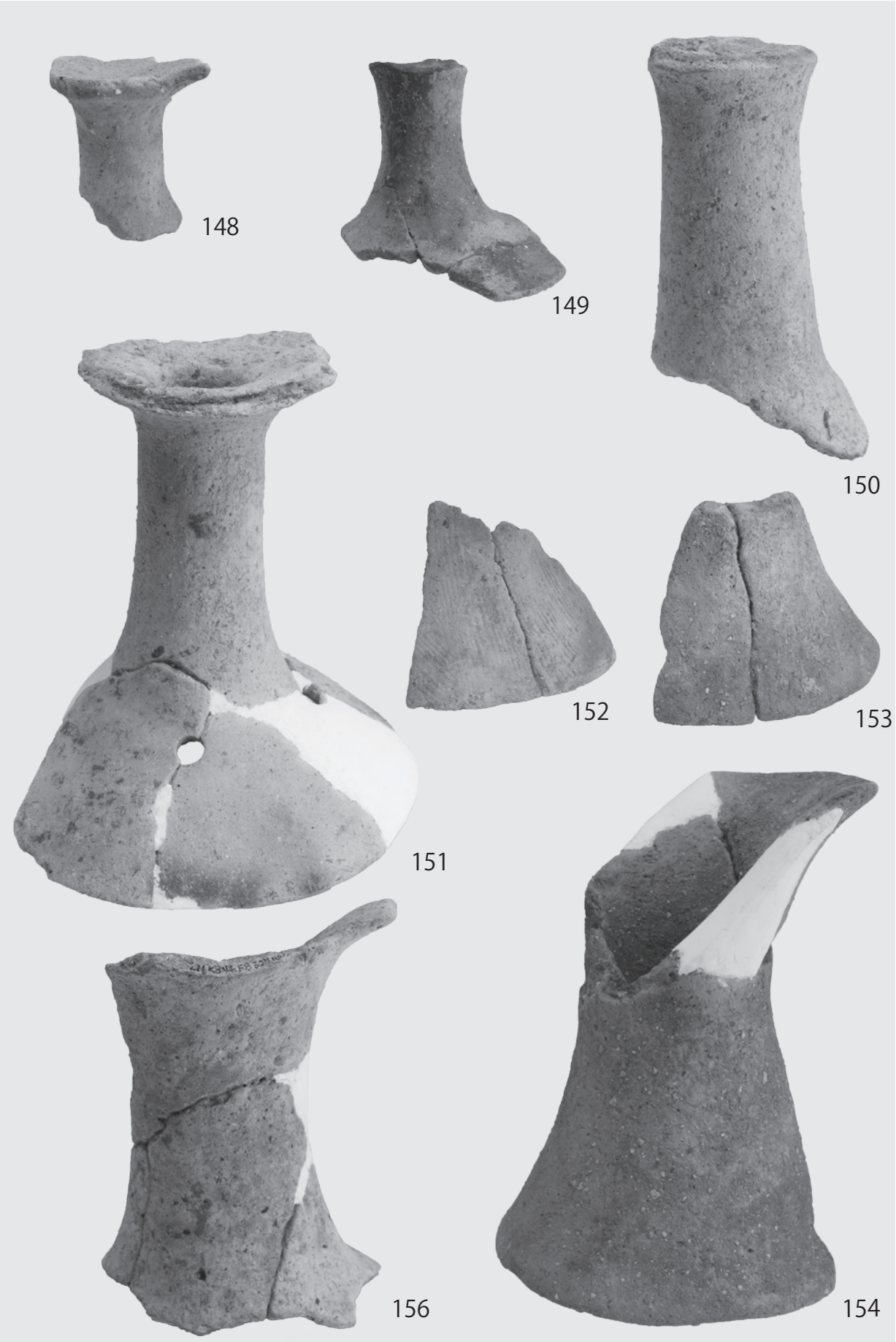



SD27 出土遺物 8

# 図版 28



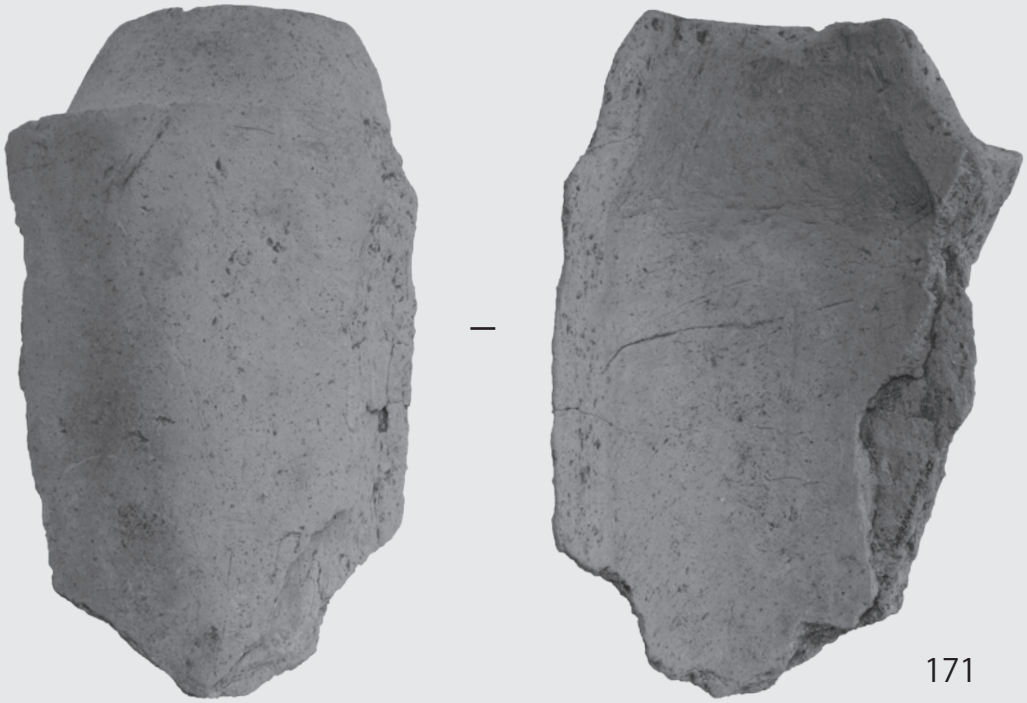

SD27 出土遺物 9




SD27 出土遺物 10

# 図版 30

SD27 出土遺物 11

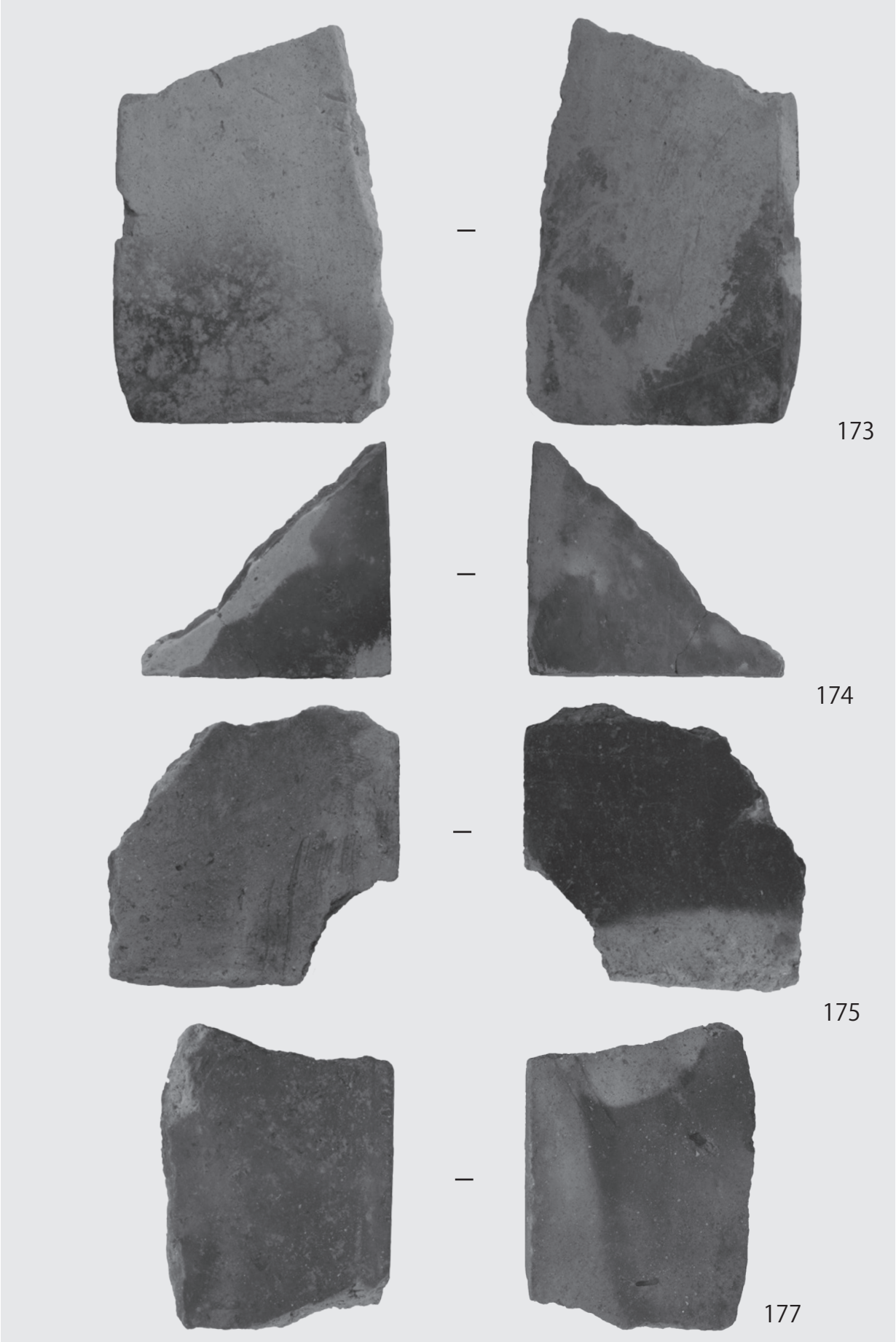


171

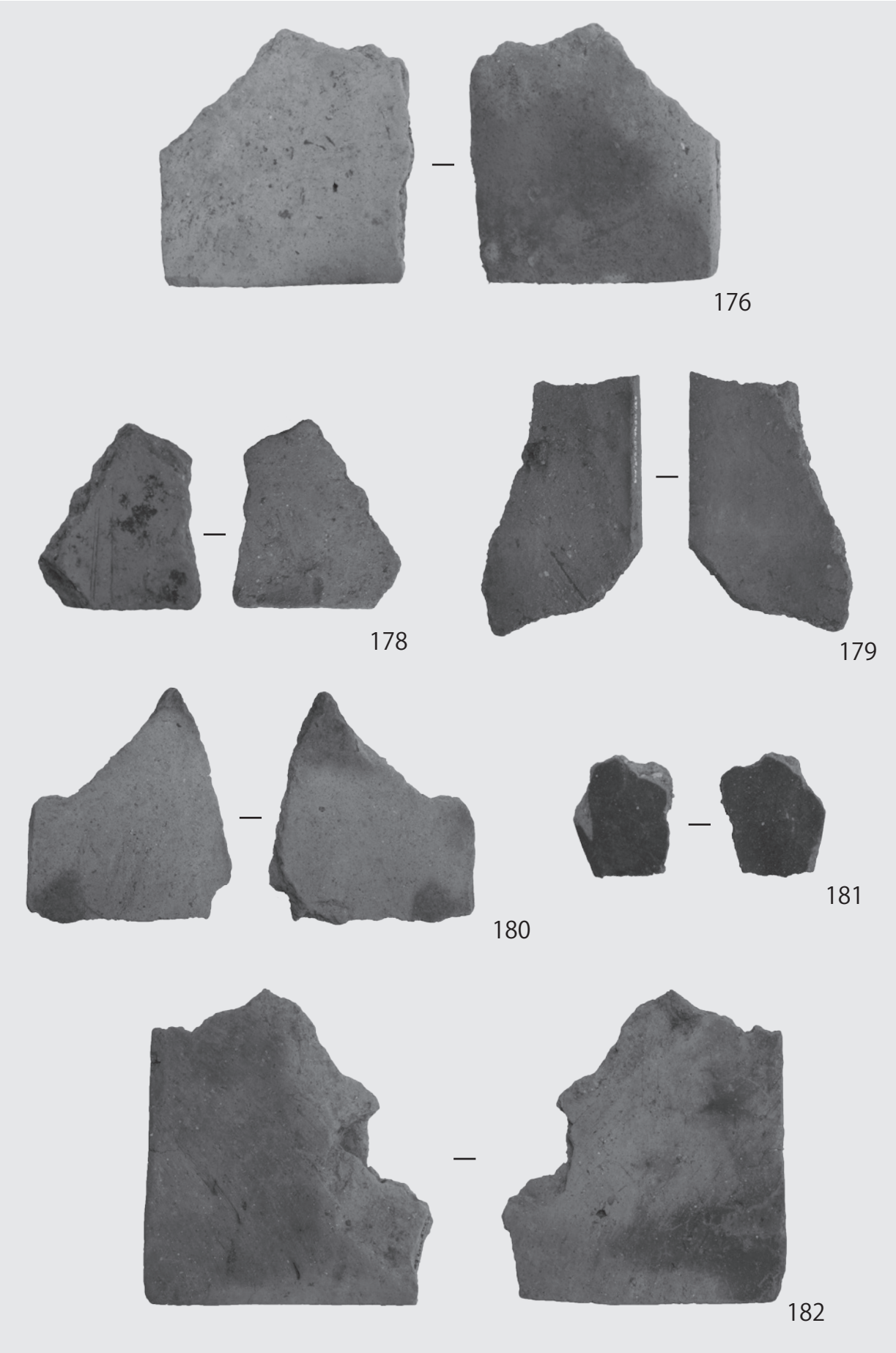
172

SK29 出土遺物 1

# 図版 32

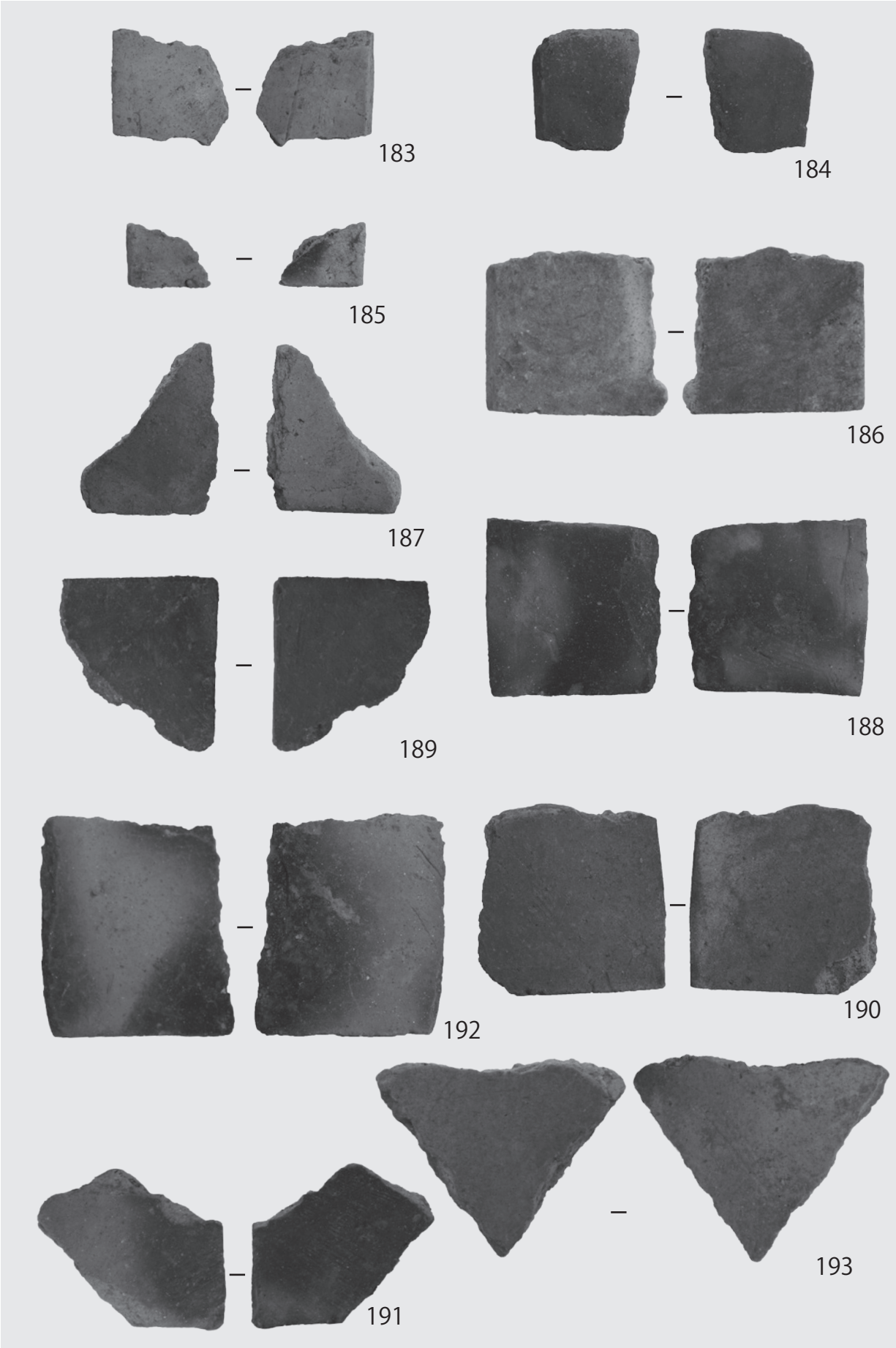



SK29 出土遺物 2

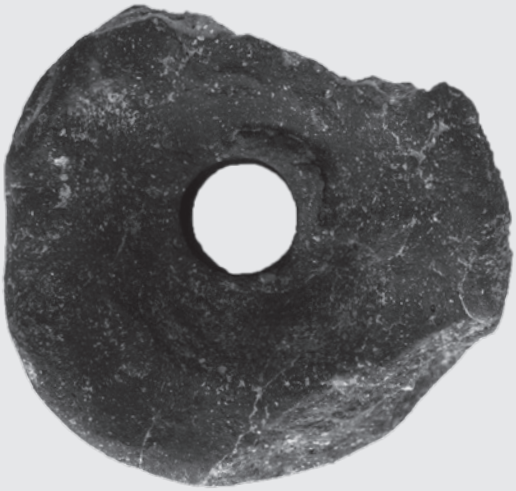


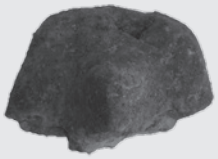

SK29 出土遺物 3

# 図版 34




SK29 出土遺物 4





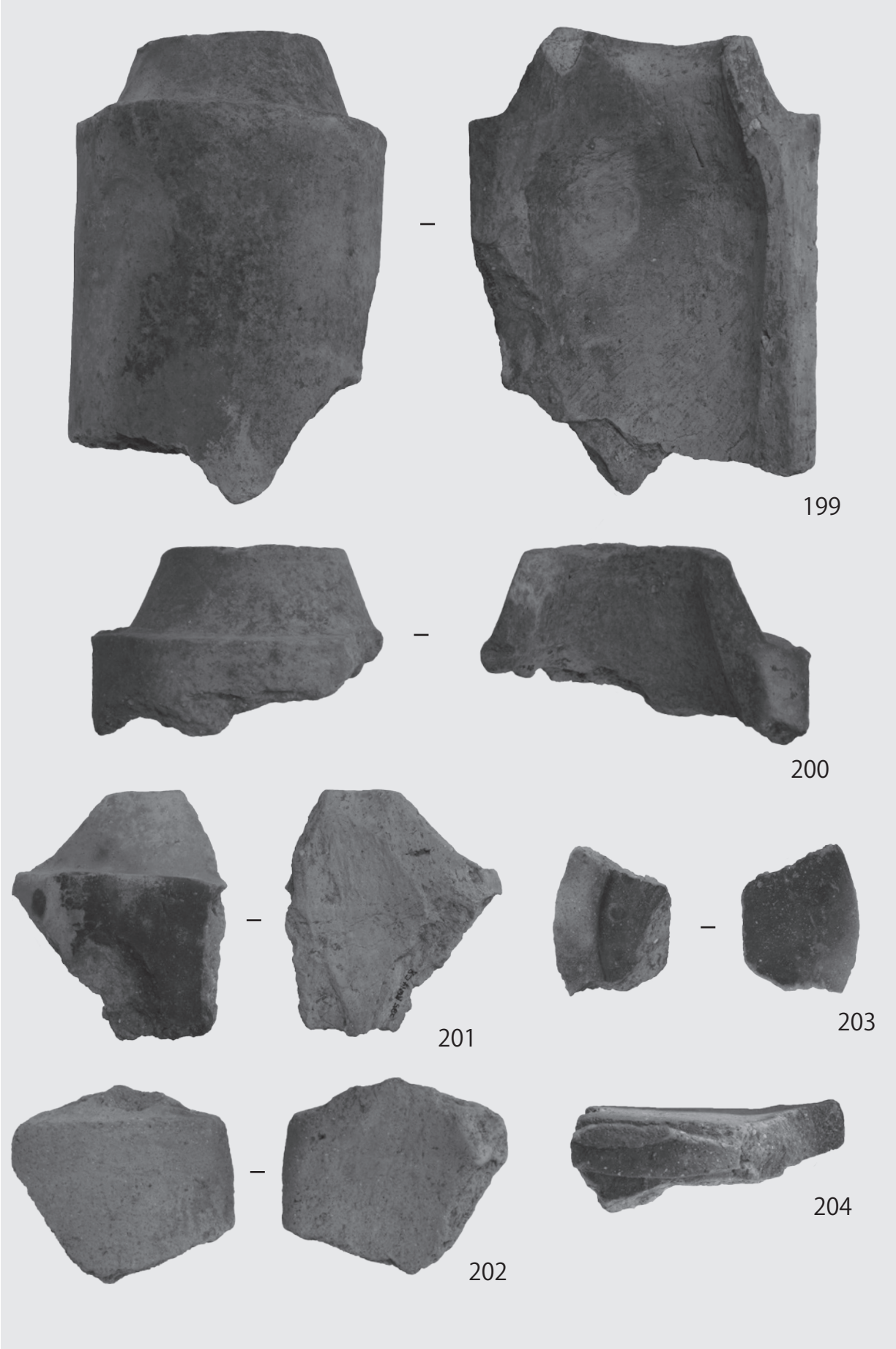
194

196

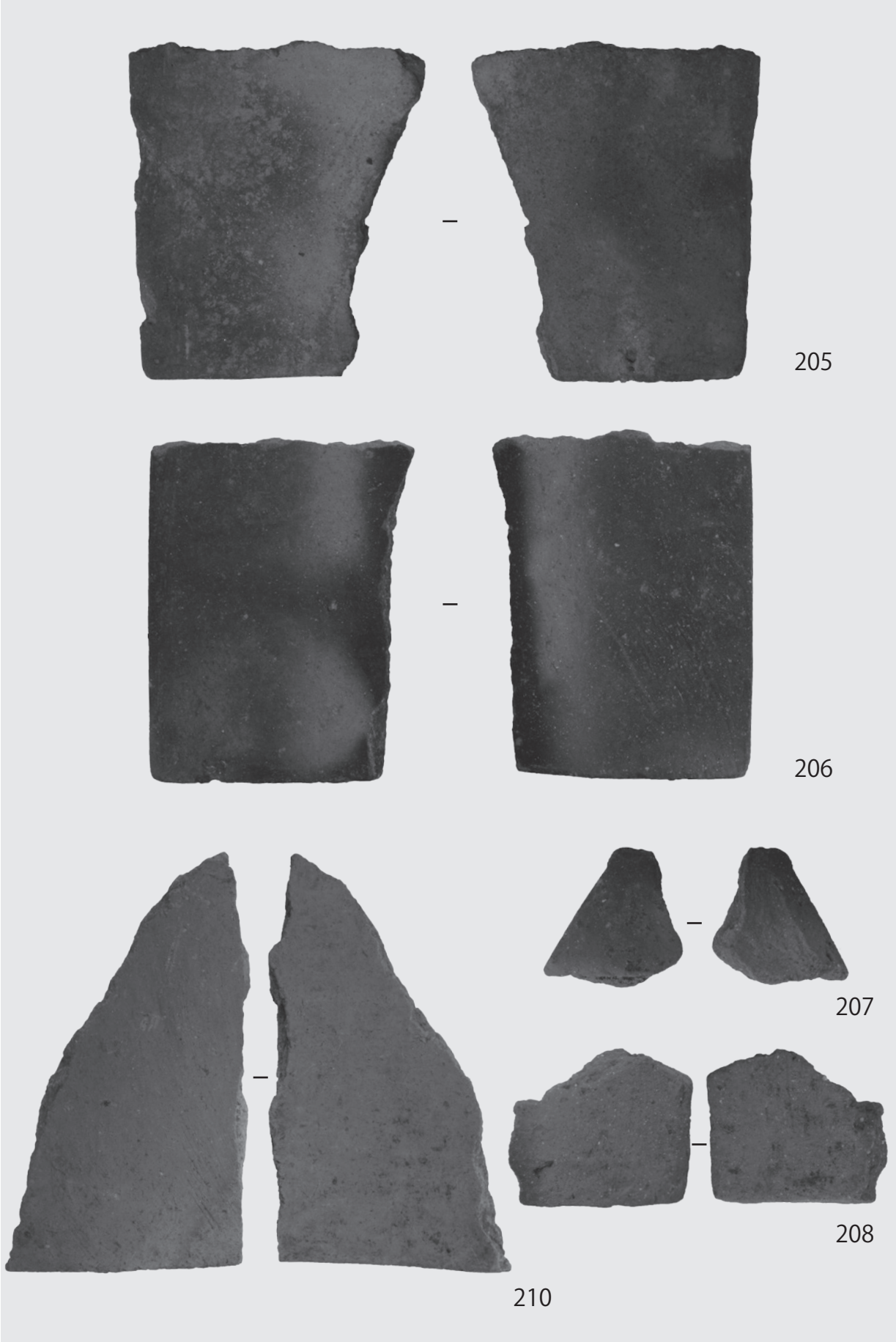
195

SK29 出土遺物 5

# 図版 36

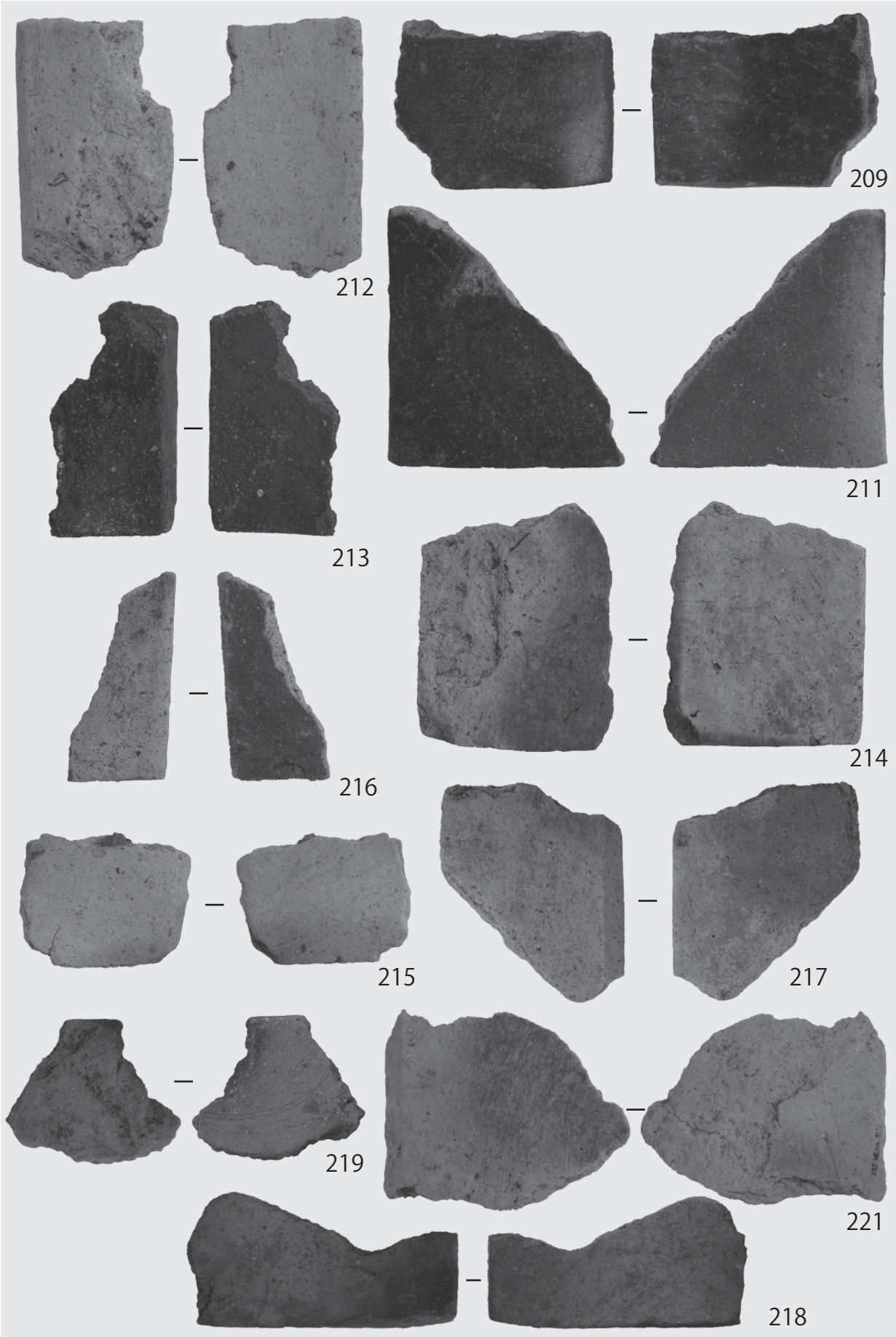



E8 トレンチ出土遺物 1

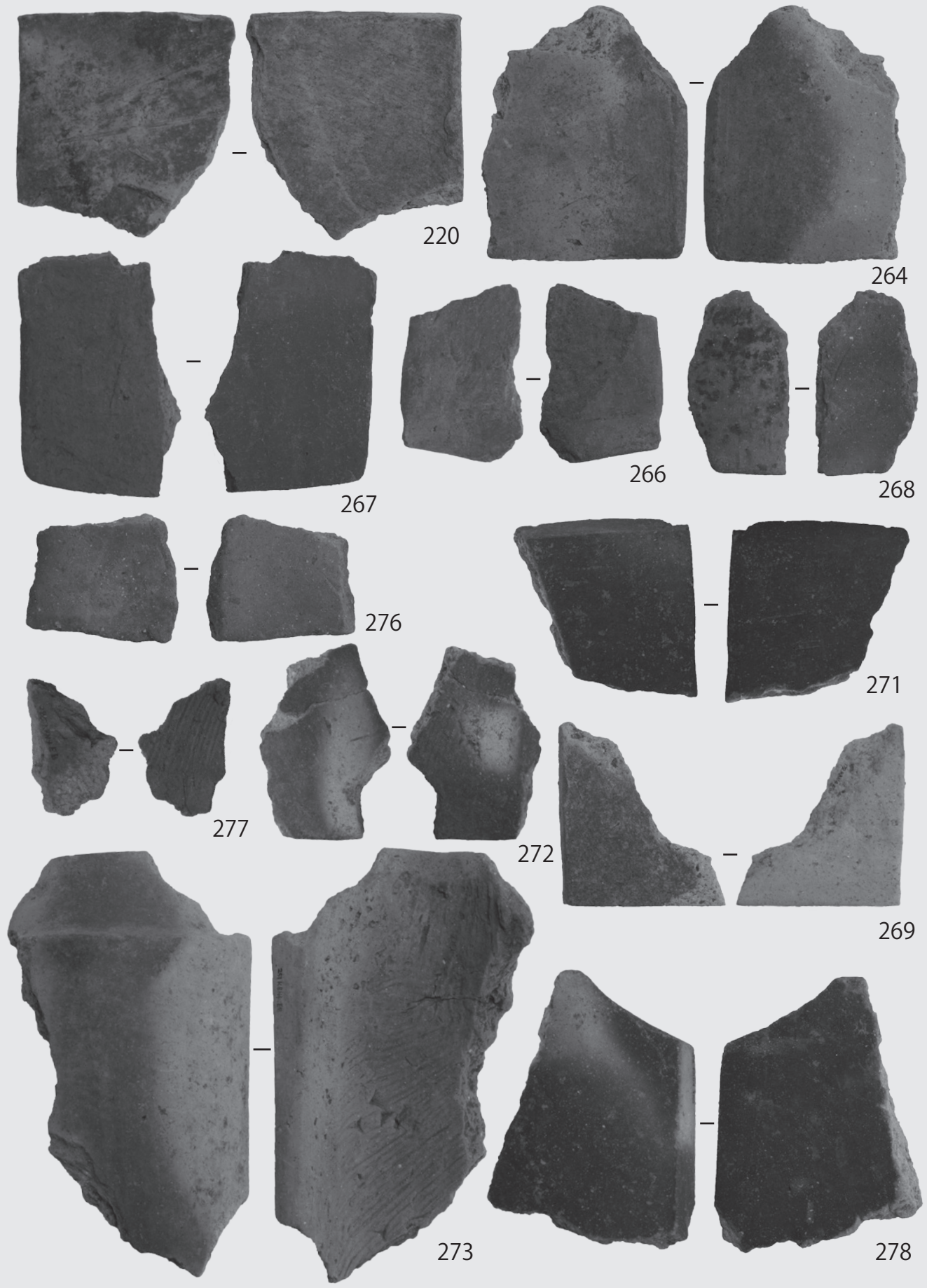



E8 トレンチ出土遺物 2

# 図版 38

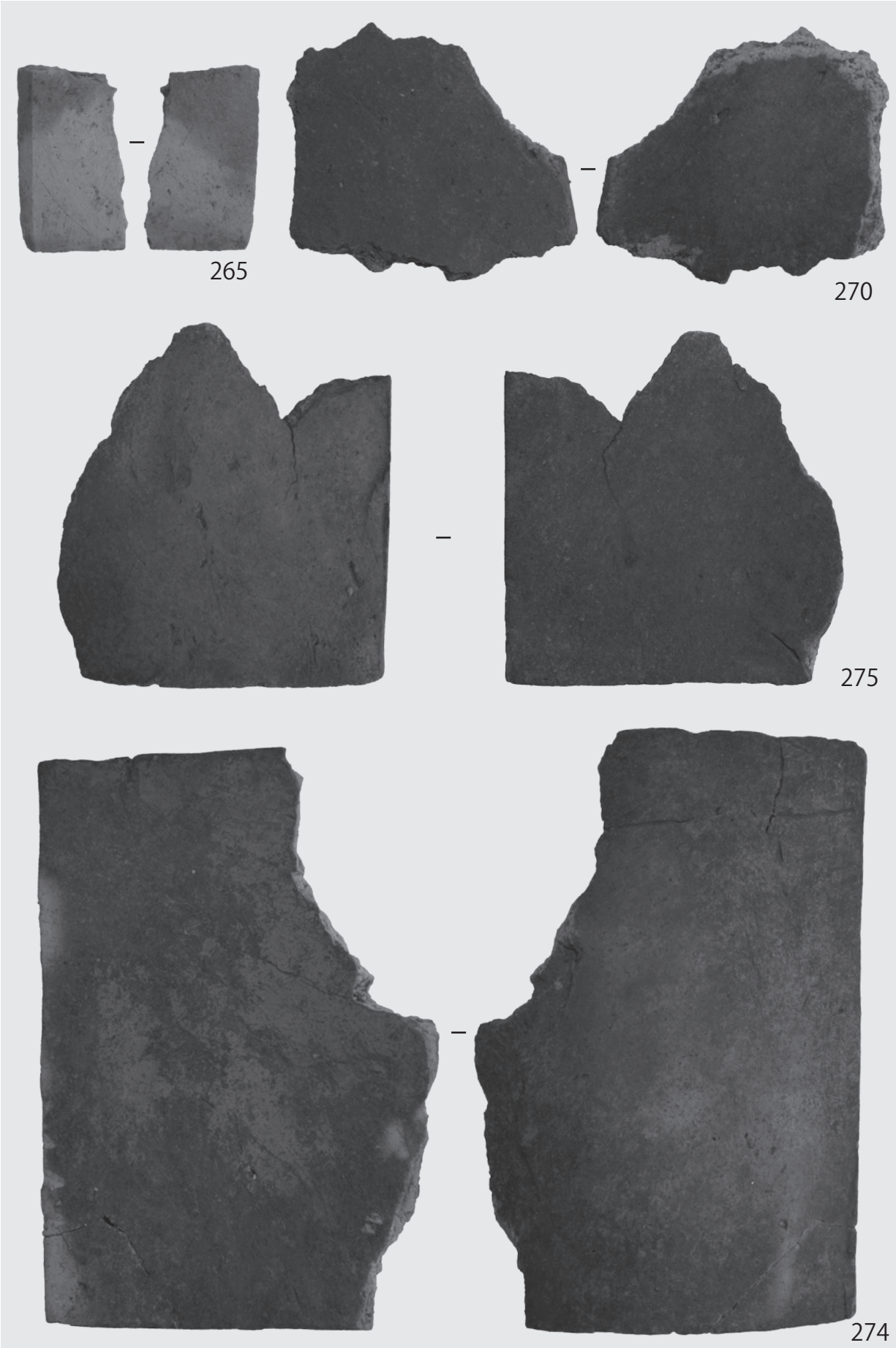



E8 トレンチ出土遺物 3

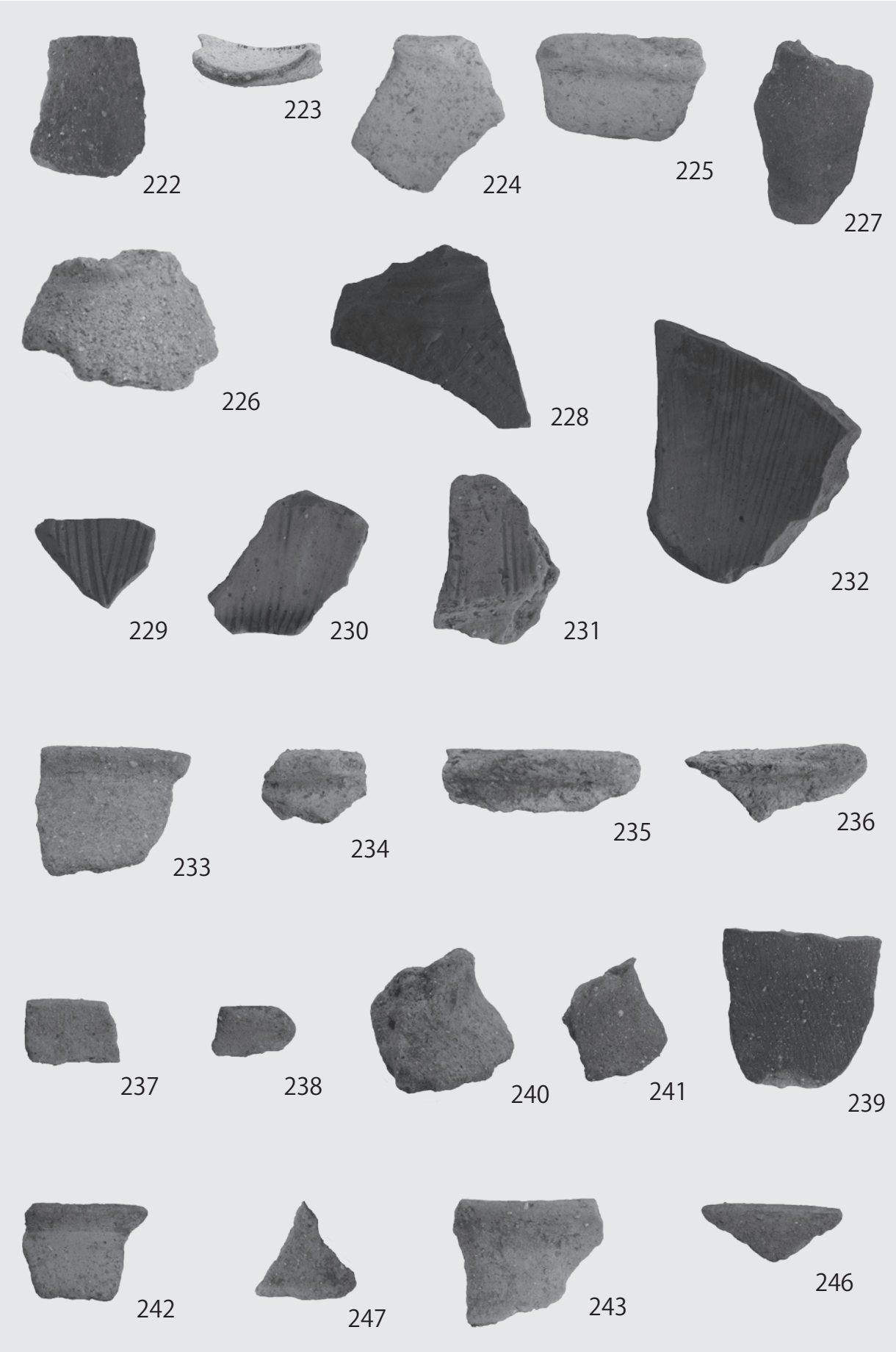



E8 トレンチ出土遺物 4・E8 炭化物層出土遺物 1・E8 炭化物層下出土遺物

# 図版 40

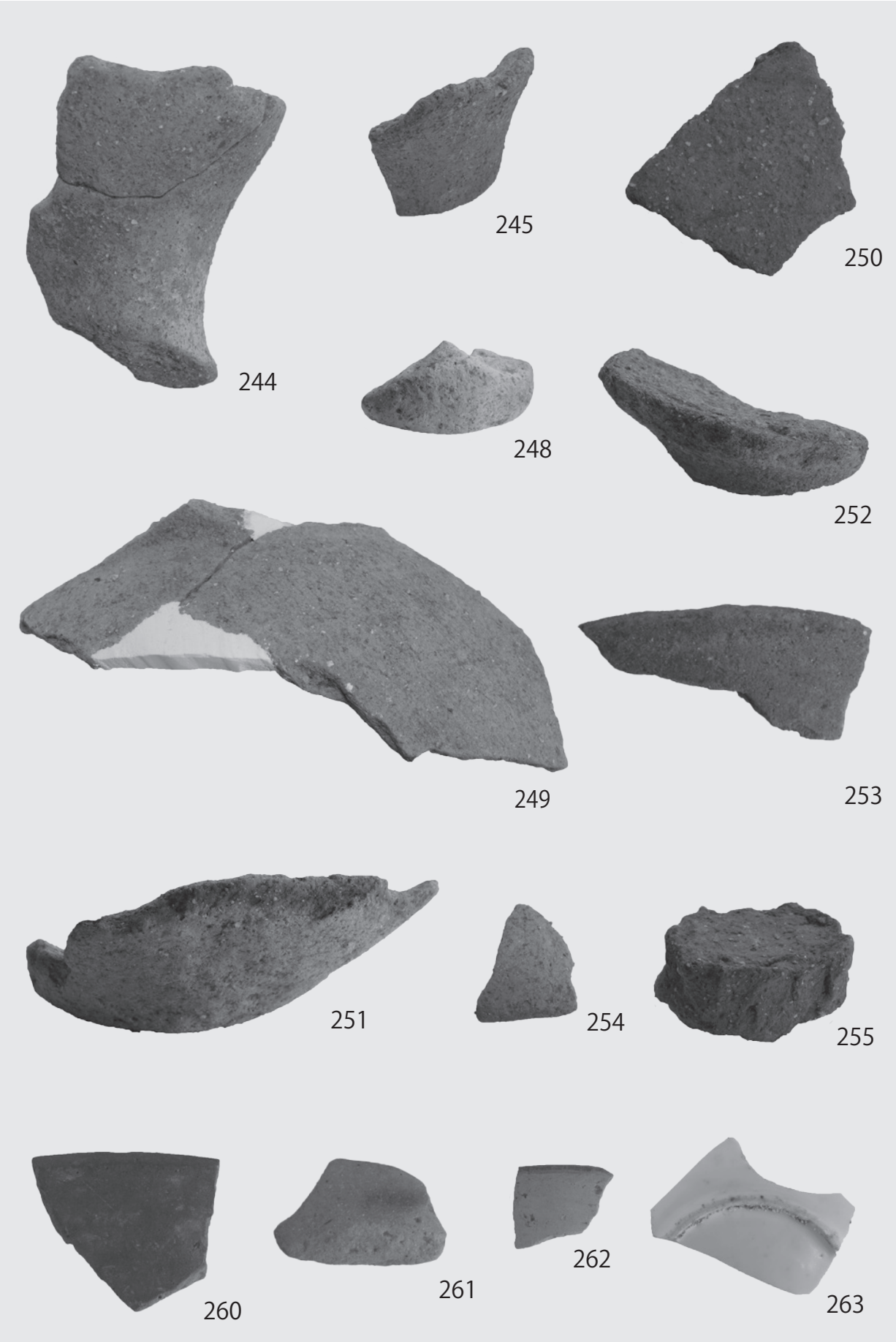



E8 炭化物層出土遺物 2

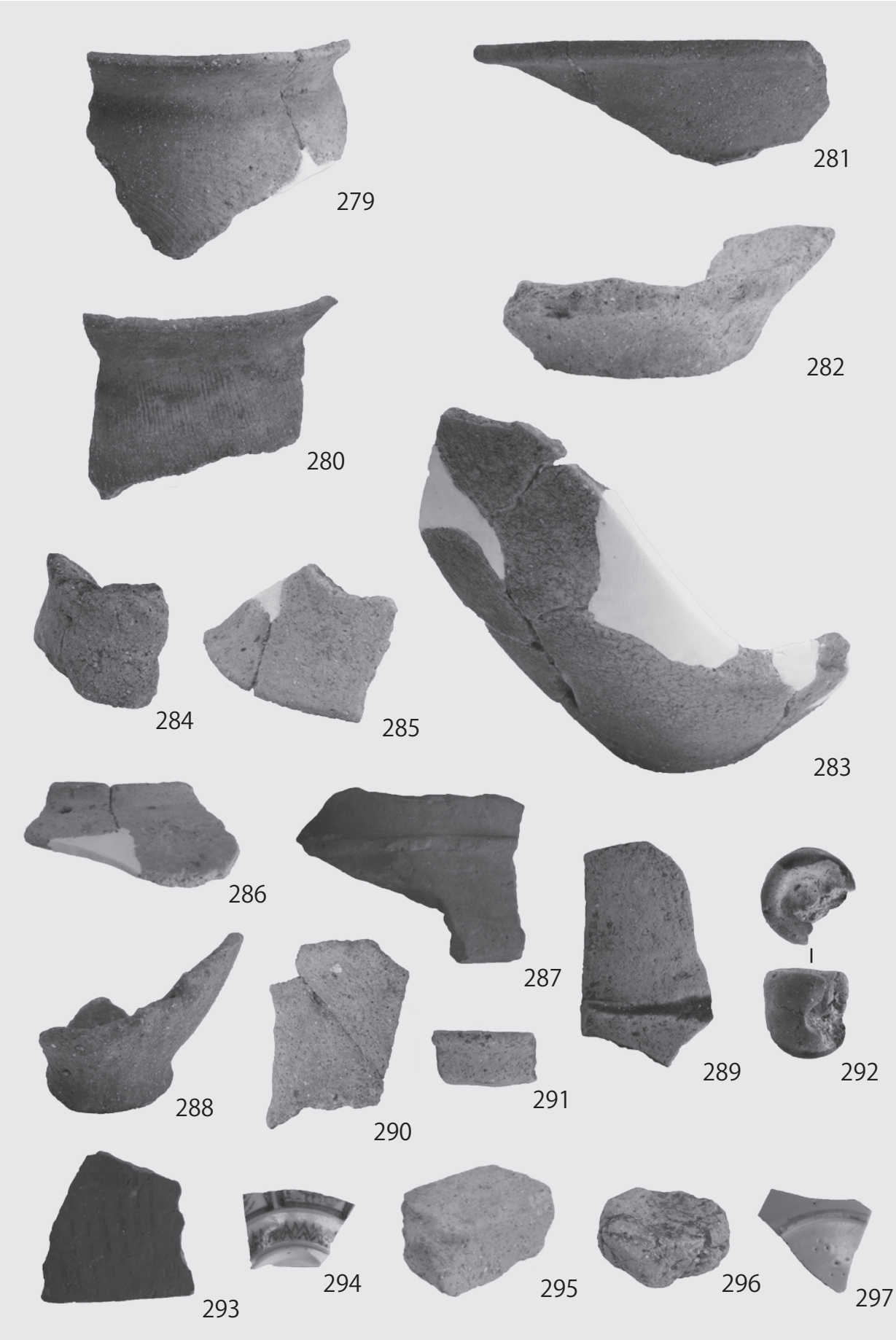



SD10 出土遺物・SD32 出土遺物・SK12 出土遺物

# 図版 42

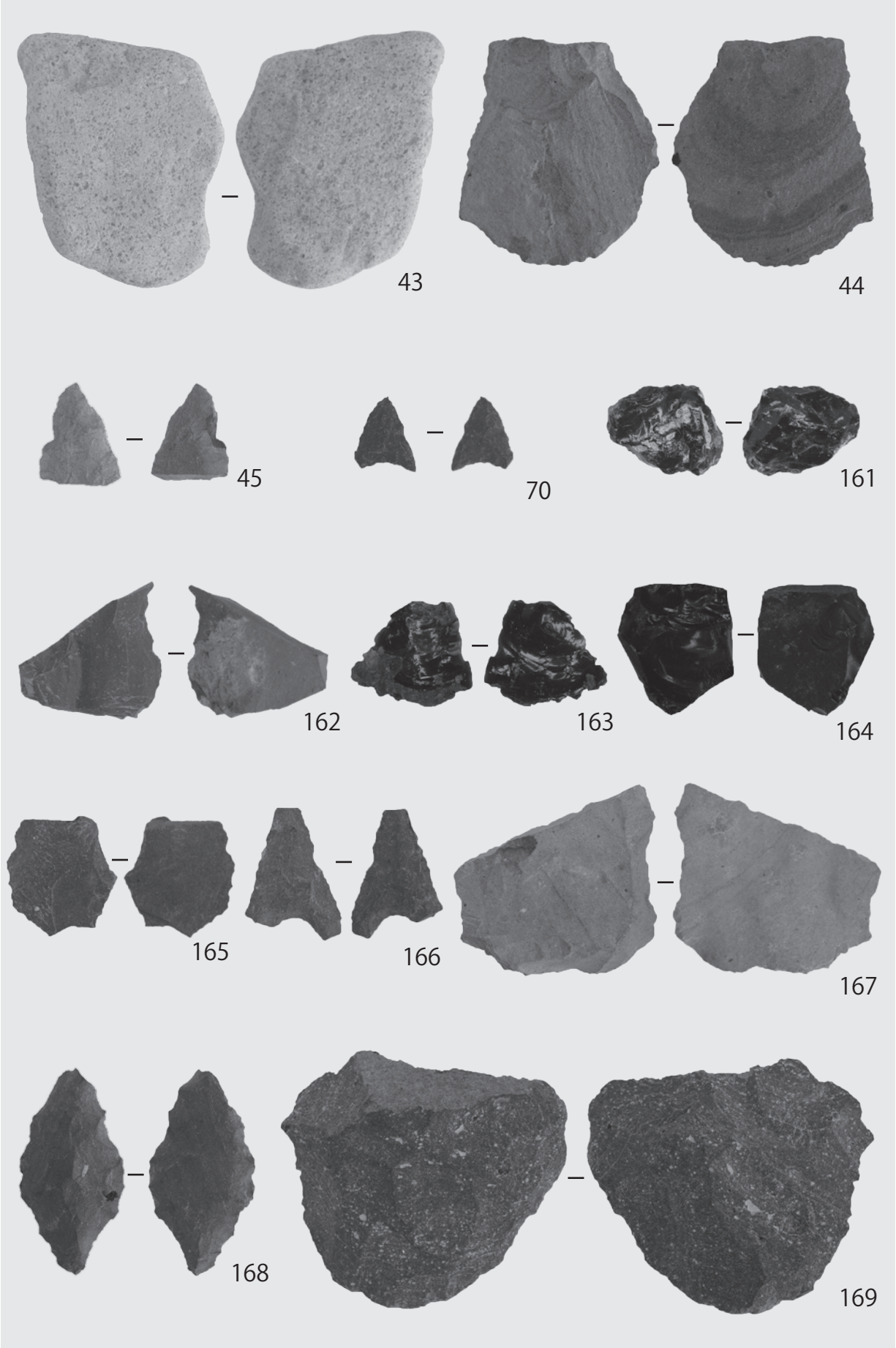



SK12 出土遺物・炭化物層出土遺物 1

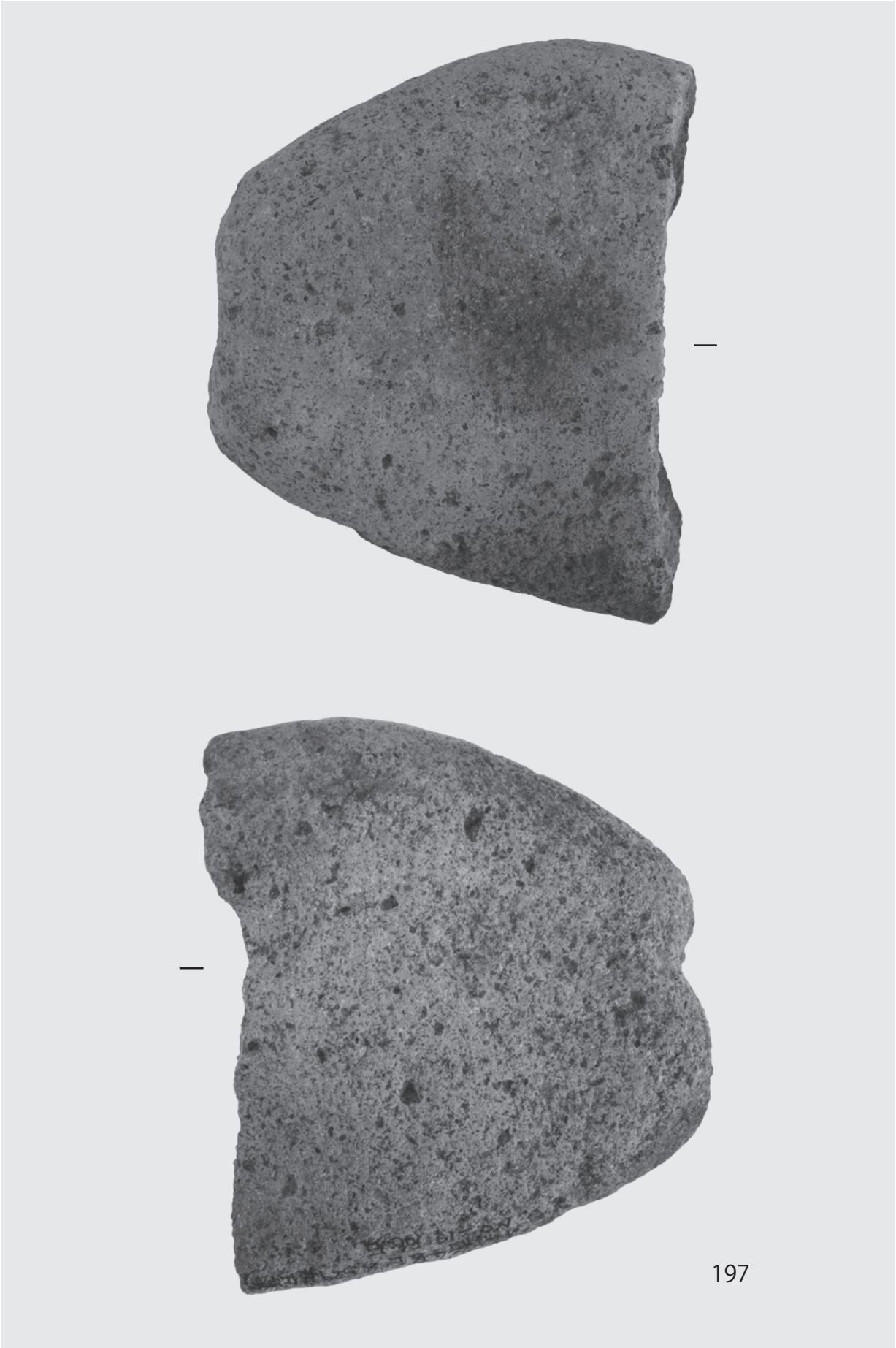



炭化物層出土遺物 2・包含層出土遺物

# 図版 44

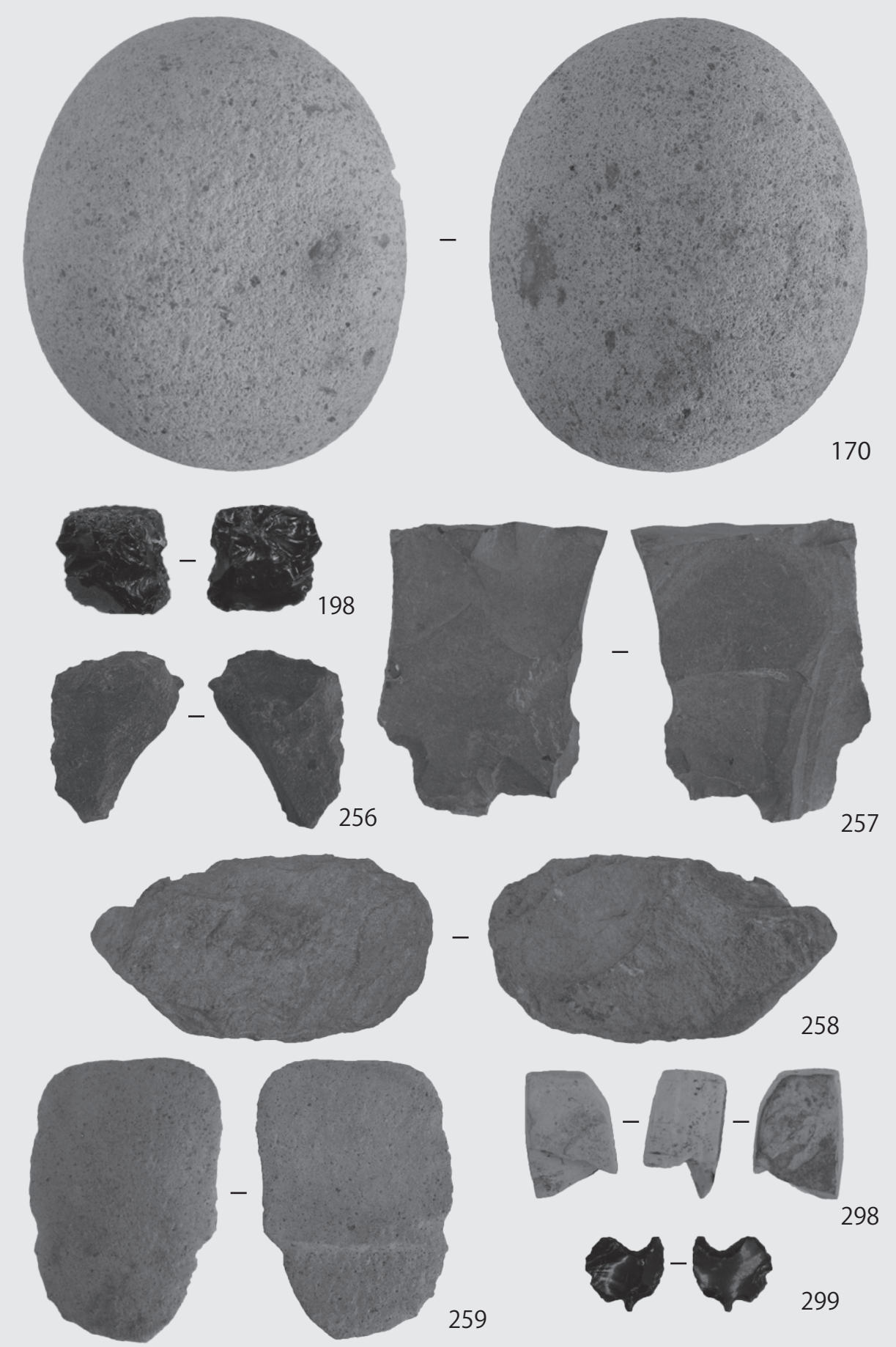



SK11 出土遺物（石器）・SK26 出土遺物（石器）・SD27 出土遺物（石器） 1

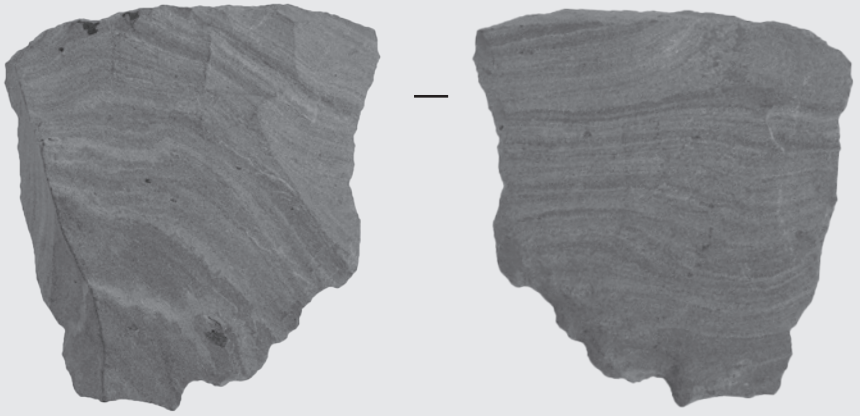



SK29 出土遺物（石器）

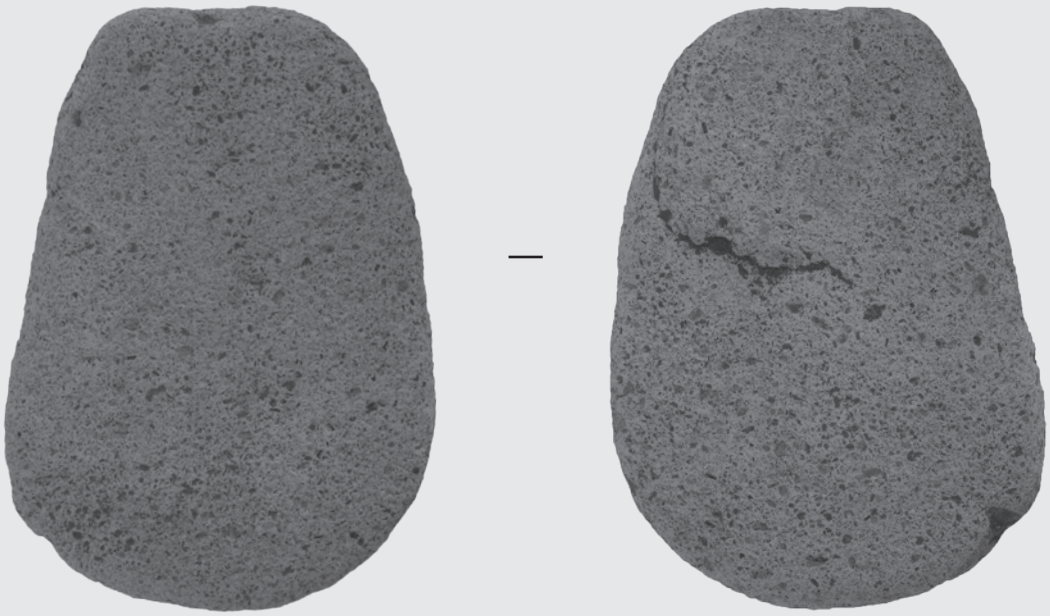
# 図版 46




SD27 出土遺物（石器）2　・SK12 出土遺物（石器）・包含層出土遺物（石器）1



300



301

包含層出土遺物（石器）2

Ⅳ区出土窯焼成関連遺物

SK35 出土馬骨

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | きぶねにしいせきⅡ |
| 書　　名 | 木船西遺跡Ⅱ |
| 副　書　名 | 一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| シ リ ー ズ 名 | 玉名市文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 第45集 |
| 編 著 者 名 | 宇田員将　菊池直樹　古森政次 |
| 編 集 機 関 | 玉名市教育委員会 |
| 所　在　地 | 〒865-8501　熊本県玉名市岩崎163 |
| 発 行 年 月 日 | 2020年2月28日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | ° ′ ″ | ° ′ ″ | | ㎡ | |
| きぶねにしいせき<br>木船西遺跡 | たまなし<br>玉名市<br>たいめいまち<br>岱明町<br>しもまえはら<br>下前原 | 43206 | 461 | 32° 55′ 32″ | 130° 32′ 00″ | 平成29年9月1日<br>～<br>平成30年1月31日 | 900㎡ | 市道改良 |

| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 木船西遺跡 | 包蔵地 | 弥生（後期）<br>中世<br>近代 | 土坑・溝<br>土坑・溝<br>・道路状遺構<br>土坑・溝・石垣<br>・道路状遺構 | 弥生土器・石器<br>土師器・青磁・白磁・瓦質土器<br>・瓦<br>陶器・染付 | |

| | |
|---|---|
| 要　約 | 木船西遺跡は貴船集落の西側の浸食谷と人工水路である友田川に挟まれた段丘平坦地に位置する。木船西遺跡の東側の浸食谷は大原遺跡との境であり、また、友田川は下前原遺跡との境である。木船西遺跡のⅠ～Ⅲ区はこの細長い段丘平坦地上にあたり、弥生時代中期初頭から弥生時代後期後半にかけての集落が存在していたことが発掘調査から明らかとなった。今回調査したⅣ区は木船西遺跡の西側を境とする浸食谷が検出され、木船西遺跡の集落が東西の浸食谷に囲まれた段丘平坦上に存在していたことが判明した。 |

玉名市文化財調査報告　第 45 集

# 木船西遺跡 Ⅱ

一級市道岱明玉名線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査

令和2年 2 月 6 日印刷
令和2年 2 月 28 日発行

編集発行　玉名市教育委員会
〒 865-8501　熊本県玉名市岩崎 163
TEL 0968-75-1136　FAX 0968-75-1138

印　　刷　有限会社 玉名民報印刷
〒 865-0015　熊本県玉名市亀甲 261
TEL 0968-72-2535　FAX 0968-72-4648